

辻田遺跡

緊急発掘報告書 1995



長野県東部町教育委員会

TSUJITA SITE

A report of excavations at Tazawa rice field improvement area.

1995

Tobu Town, Nagano Prefecture

例　　言

1. 本書は、長野県小県郡東部町大字和字辻田所在の辻田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は県営圃場整備事業東部和地区的実施に先立ち、上小地方事務所の委託を受け、東部町教育委員会が国庫補助事業として実施した。
3. 本発掘調査の概要については、第一章及び巻末の報告書抄録に記載した。
4. 発掘調査及び整理作業における分担は次のとおりである。

○総　　括　　塙入秀敏

○遺物実測　坂井美嗣

打製石斧・磨製石斧・大形刃器は(有)写真測図研究所に委託。

石鐵・石匙・石錐・搔器・削器は(株)東京航業研究所に委託。

○遺物復原　若林勝子・塙川美代子

○遺物拓本　若林勝子・塙川美代子

○トレス　塙沢むつき・池田育子・荻原貴子・川瀬まつ子

○遺構写真　西沢 浩(平成4年度)・坂井美嗣(平成5年度)

○遺物写真　坂井美嗣

○遺物観察表作成　坂井美嗣・塙沢むつき・荻原貴子

○遺構観察表作成　坂井美嗣・塙沢むつき・池田育子・荻原貴子・川瀬まつ子

○版　　組　坂井美嗣・塙沢むつき・池田育子・荻原貴子・川瀬まつ子

5. 本書の執筆分担は、第一章第5節が塙沢むつき、第二章第1・2節が塙入秀敏、これ以外を坂井美嗣が担当した。

6. 石材の鑑定は赤塙一巳氏にお願いした。

7. 本書に使用した航空写真は、(有)写真測図研究所が撮影したものである。

8. 本調査における出土遺物、実測図、諸記録等全ての資料は東部町教育委員会が保管している。

9. 本書が上梓されるまでには、非常に多くの方々や諸機関のご理解・ご協力を賜った。以下ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

丸山敬一郎・児玉卓文・西沢寿晃・尾見智志・翠川泰弘・広瀬昭弘・川崎 保

都築恵美子・内堀一貴・長野県上小地方事務所土地改良課・長野県教育委員会文化課

地元圃場整備委員・和地区々民・東部町農政課

凡 例

1. 遺構等の略称は次のとおりである。なお住居址は遺跡全体の通し番号とし、その他の遺構は各地点ごとの通し番号とした。

S B ……住居址 S K ……土壤 S X ……配石遺構 Pit ……ピット

P ……ピット（B地点のみ） P ……土器 S ……石

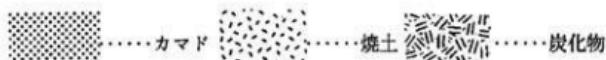
2. 遺構及び遺物の縮尺は概ね次のとおりである。

住居址 …… 1 / 80 カマド …… 1 / 40 土壌 …… 1 / 60

土器 …… 1 / 3 • 1 / 6 石器 …… 1 / 3 • 1 / 6

3. 掘図中のスクリーントーンは以下のものを表す。

（1）遺構



（2）遺物 黒色処理を網点で表す。

4. 遺構等の層序の説明は住居址・配石遺構が本文中、その他が一覧表を用いた。色調は極めて主観的であるが、黒色と黄色を基準とし、黄色はロームの黄褐色と思っていただきたい。

5. 掘図中の北は磁北を示し、各水系レベルの海拔高度は各遺構図に記載した。0地点について不手際でペンマークを失い、各水系レベルの海拔高度は不明となった。

6. 遺構・遺物写真の縮尺は統一されていない。

7. 本文中の遺物の図版番号の次にくる（ ）内は出土地点を示し、まず頭に0～Dの地点、次に遺構番号乃至グリッド番号を記載した。その他の遺物一覧表の出土地点についても同様の記載方法を用いた。

8. 遺物の説明で縄文（ ）の括弧内は施文原体を示す。

9. 整理期間が限られ、原稿執筆も短期に行ったため、基本的事項についてできる限り統一を計ったが、表現方法に多少の差異が生じた点は了解されたい。

目 次

例 言

凡 例

目 次

第一章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過	3
第2節 試掘調査の結果	3
第3節 発掘調査の概要	4
第4節 発掘調査団の構成	7
第5節 調査日誌	9

第二章 環 境

第1節 自然的環境	13
第2節 歴史的環境	15
第3節 遺跡の位置と環境	20

第三章 調査の結果

第1節 O 地点の調査

1 土壌	27
2 ピット	27

第2節 A 地点の調査

1 住居址	28
2 土壌	32
3 配石土壌・配石造構	32
4 ピット	36
5 埋設土器	36

第3節 B 地点の調査

1 住居址	37
2 上壌	41

3 ピット	43
4 埋設土器	43
第4節 C地点の調査	
1 住居址	43
2 土壌	44
第5節 D地点の調査	
1 住居址	44
2 土壌	47
3 配石土壌	47
4 ピット	48
第6節 造構外出土遺物	
1 土器	62
2 石器	62
3 土製品・石製品	65
第四章まとめ	
	81
参考引用文献	
実測図版	87
辻田遺跡出土の骨類について	236
写真図版	
報告書抄録	
おわりに	



第一章 調査の経過

第一章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

長野県上小地方事務所土地改良課は、東部和地区的農業の近代化を図るために、平成元年度から圃場整備事業を開始した。事業工区内には多くの遺跡が存在し、その破壊を余儀なくされた。そこで記録保存を図るべく、東部町教育委員会は上小地方事務所の依頼を受け以下の調査を実施した。平成2年度は曾根南・曾根第1・曾根第2・中原・たたら堂第1・たたら堂第2・西田沢の7工区内に存在する、下曾利・王三田・上曾利・大川・山根・たたら堂・中原の7遺跡の発掘調査を実施した。平成3年度は、田沢第1・2工区内に存在する、南田・堀込・中井・松ノ木の4遺跡の発掘調査を実施した。それぞれ翌年度には整理作業を行い報告書を刊行した。

平成5年度は田沢第3・4工区に存在する辻田遺跡が記録保存の対象となっていたが、平成3年度に範囲確認のための試掘調査を実施した結果、遺跡範囲が広いため単年度では調査が困難であると予想され、平成4年度から調査を実施することになった。幸いにも和5825-1番地の水田が休耕していたため、地主の快諾を受け調査に入ることができた。この平成4年度の調査地点を便宜上辻田遺跡0地点（略号はTJT）とした。平成3年度の試掘調査の詳細については次の節で述べるが、地主の承諾を受け、 $3 \times 3\text{ m}$ を基準としたテストピットを設定して実施し、この結果に基づき、遺跡の範囲を確定し、平成4・5年度の調査を実施した。平成5年度は残りの全地区を対象とし、広範囲に及ぶため、便宜的にA・B・C・Dの4地点に分け調査を実施した。以上概略を述べて来たが、必要に応じて、その都度事業主体者である長野県上小地方事務所土地改良課及び長野県文化課、東部町農政課、同教育委員会の4者による保護協議を行い、円滑に事業を進めてきた。

第2節 試掘調査の結果

$3 \times 3\text{ m}$ のテストピットを70箇所設定して試掘を行った。番号はTP-〇〇とした。遺跡の南側の畠地に設定したTP-1～4は、遺物や遺構の存在が予想されたが、結果は遺物量も少なく遺構も検出できなかった。TP-6～8も同様の状態であった。しかしTP-5・9は遺物の出土量が多く、ここが遺跡の南側の縁辺にあたると思われる。TP-34～42も同様の状況と思われ、

遺物の状態も流れ込みの感じを受けた。TP-43はかなり出土量が多いが、砂礫層のなかに含まれており流れ込みと思われる。遺跡の西側TP-14~28のうちTP-14・18が出土量が多く、ここが遺跡の西側の縁辺部と思われる。TP-65~70の出土量は大変少なくなる。遺跡の北側TP-59~64は出土量がほとんどなく、遺跡範囲から外れると思われる。TP-51~57も同様である。出土量100を越えるTP-10・30・31・45・46・49・50・58が遺跡の中心と考えられた。試掘を実施できなかった和5838・5839番地については平成5年度の本調査の際、トレンチを設定して確認した。また、和5477・5479-1番地の畠地は面工事を実施しない旨、農政課から計画の提示があったので、発掘調査は実施していないが、以前から薬用人参が栽培されており、かなり深耕され、遺物遺構の残存状態は良くないと思われる。和5470番地は工区から外れ、同様に発掘調査は実施していないが、試掘の結果では遺物の量も多く遺構の保存状態は良好と思われる。(第6図・第1表)

第3節 発掘調査の概要

辻田遺跡の遺跡略号はTJTとし、平成4年度の調査は遺跡略号のみで、遺物及び実測図等にはTJTと記載し、報告書内では他の地点と区別するため便宜的に0地点とした。平成5年度の調査は便宜的にA・B・C・Dの4地点に分けて実施した為、略号に続けて地点を示した。例えば辻田遺跡A地点はTJT-Aとなる。各地点は磁北を基準とした任意の座標軸を設け、グリッド配置に整合性を持たせた。

発掘方法は重機で表土を除去し、グリッド法にトレンチ法を併用して、0地点・D地点・C地点・A地点・B地点の順に実施した。遺構の検出状況は、ローム層を掘り込んだものについては良好な状態で検出できたが、黒色土中に存在するものについては検出困難であった。A地点は地下水位が高く調査に支障を來したため、排水用の溝を回しこれに対処した。全体で検出された遺構は住居址15軒(縄文10・弥生1・平安4)・土壙70基・ピット122基・埋設土器4基である。遺物は縄文時代中期末から後期前葉の土器を中心に石器類は石鎌・打製石斧・磨製石斧・石匙・石錐・刃器・磨石・凹石・敲石・丸石・石皿・砥石・石棒・石剣・輕石製石器などである。土製品類はミニチュア土器・匙形土製品・土偶・土器片円盤である。その他に玉類が出土している。総数はコンテナ200箱程になる。

0地点から検出された遺構は土壙3基・ピット5基である。遺物は縄文時代中期末から後期前葉の土器を中心に石鎌・打製石斧・磨製石斧・凹石・石棒・箱清水式系土器・土師器・須恵器・近世陶磁器などコンテナ30箱程が出土した。

A地点から検出された遺構は縄文時代後期の住居址4軒(内敷石を伴うもの3軒)・平安時代

第1表 テストピット一覧表

番号	規 模			地目	出 土 遺 物						備 考	
	縦(m)	横(m)	深さ(m)		陶文土器	黒曜石	煮生土器	土師器	須恵器	灰陶陶器	時期不明	
TP-1	3	3	72	畠地	2							
TP-2	3	3	140	"	1							
TP-3	6	3	120	"	12		1				4	4+石器1
TP-4	6	3	95	"	17			2				4
TP-5	3	3	100	"	33	1	9					2
TP-6	3	3	55	水田	10		3					2
TP-7	3	3	90	"	5		2					
TP-8	3	3	85	"	18	1						2
TP-9	3	3	100	"	44	1	4					
TP-10	3	3	78	"	334	3	5				1	2+打製石斧片1
TP-11	3	3	55	"	35							2
TP-12	3	3	43	"	31	1	11					
TP-13	3	3	79	"	89	3						石器1
TP-14	3	3	40	"	43		3					打製石斧片1
TP-15	3	3	65	"	3							
TP-16	3	3	65	"	5							1
TP-17	3	3	50	"	3							
TP-18	3	3	110	"	74		1					
TP-19	3	3	105	"	15					1		
TP-20	3	3	35	"	2							
TP-21	3	3	100	"								
TP-22	3	3	80	"	13							
TP-23	3	3	55	"	1							3
TP-24	3	3	85	"	15	1		1				1
TP-25	3	3	70	"	7		1					石礫1
TP-26	3	3	87	"	11							
TP-27	3	3	100	"	4							
TP-28	3	3	55	"	1							
TP-29	3	3	60	"	82	2						1+石礫1
TP-30	6	3	50	"	494	6						
TP-31	6	3	25	"	1784	5	11					2+打製石斧片2+石器1 未工事区
TP-32	3	1.5	60	"	89	1	1					3 未工事区
TP-33	3	3	45	"	406	2	3	7				2
TP-34	3	3	68	"	15							2+打製石斧1
TP-35	3	3	85	"	23		1	1				4
TP-36	3	3	45	"	11							

番号	規 模			地図	出 土 遺 物						備 考	
	綫(m)	横(m)	深さ(m)		青文土器	黒曜石	有生土器	土師器	須恵器	灰陶器	時期不明	
TP-37	3	3	50	水田								
TP-38	3	3	45	"	7							
TP-39	3	3	85	"	41	1					3	
TP-40	3	3	90	"	50	1		3				
TP-41	3	3	55	"	11						1	
TP-42	3	3	73	"	1							
TP-43	3	3	60	"	278	3	2	3			3・石器4	
TP-44	1.5	1.5	58	"	3							
TP-45	3	3	90	"	387	9					打製石斧片1	
TP-46	6	3	55	"	380	5		1	1			
TP-47	6	3	15	"	64							
TP-48												欠番
TP-49	3	3	60	水田	475	24	1	1			2・石器1	
TP-50	6	3	30	"	206	5					2・石器1	
TP-51	3	3	50	"	9			1			1	
TP-52	6	3	35	"	1		1				古銭1	
TP-53	6	3	45	"			1				1・打製石斧1	
TP-54	6	3	120	"	5							
TP-55	3	3	90	畑地	1						1	
TP-56	3	3	80	水田	3							
TP-57	3	3	80	"	3						3	
TP-58	3	3	100	"	432	6					1	
TP-59	3	3	70	"	5						1	
TP-60	3	3	110	"	7	1						
TP-61	3	3	70	"	4			2				
TP-62	3	3	160	"	8						3	
TP-63	3	3	70	"	1						1	
TP-64	3	3	80	"	6						2	
TP-65	3	3	76	"	1	2					古銭1	
TP-66	3	3	145	"	4				1			
TP-67	3	3	65	"	1							
TP-68	3	3	100	"								
TP-69	3	3	135	"	4							
TP-70	3	3	53	"								
TP-71	3	3	90	"								

の住居址 1 軒・土壙13基・ピット10基・配石墓群・埋設土器3基などである。その他に、土器捨場的な縄文土器の集中出土区があったが遺構としては捉らえなかった。遺物は縄文時代中期末から後期前葉の土器を中心に石鐵・打製石斧・磨製石斧・凹石・石皿・石棒・石匙・土偶・箱清水式系土器・土師器・須恵器・近世陶磁器などである。

B 地点から検出された遺構は縄文時代の住居址 5 軒（うち敷石を伴うもの 4 軒）・平安時代の住居址 2 軒・土壙51基・ピット107基・埋設土器 1 基である。遺物は縄文時代中期末から後期前葉の土器を中心に石鐵・打製石斧・磨製石斧・凹石・石皿・石棒・石匙・軽石製石器・土偶・箱清水式系土器・土師器・須恵器などである。

C 地点から検出された遺構は弥生時代の住居址 1 軒・土壙 1 基である。遺物は縄文土器・弥生土器・石鐵などが出土している。

D 地点から検出された遺構は敷石住居 1 軒・平安時代の住居址 1 軒・土壙 2 基である。縄文時代後期の土器を中心に打製石斧・石鐵・磨製石斧・石匙・凹石などである。

第4節 発掘調査団の構成

平成4年度

調査団長 長岡克衛（東部町教育長）

副団長 塩入秀敏（日本考古学協会員）

調査担当者 西沢 浩

調査参加者 若林勝子 池田育子 萩原貴子 岩下公雄 塚田清徳 富岡信夫 横山隆行
佐藤金世 星合たけ 楠原節子 松沢政利 間下優治 寺島三利 飯高徳保
小林光男 山内利夫 小林辰夫 野口太郎 井出重人 宮坂倫次 小林貫三
塙田茂由 田中増次 橋本寅吉 秋山美弥 城田若江 中島ひで 中村順子
諸山和子 高藤雪枝 山崎妙子 西川美紀 船田 豊 原 平 西嶋洋子
塙川美代子 塩沢むつき 川瀬まつ子 花岡いとし 松下喜久子 高藤きの江
小宮山国子 井戸田三郎 井戸田五郎 柳橋きよく 若林けい子 鈴木けい子
高藤きくみ 高藤きくい 坂口武男 小野沢さち子

事務局 長岡克衛（東部町教育長）

桜井明雄（教育課長）

柳沢慶一（教育課文化財係長）

西沢 浩（教育課文化財係）

堀田雄二 (教育課文化財係)

坂井美嗣 (教育課文化財係)

平成 5 年度

調査団長 長岡克衛 (東部町教育長)

副団長 塩入秀敏 (日本考古学協会員)

調査担当者 坂井美嗣

調査参加者 若林勝子 池田育子 萩原貴子 塚田清徳 佐藤金世 星合たけ 楠原節子
松沢政利 小林光男 井出重人 宮坂倫次 塚田茂由 田中増次 橋本寅吉
中村順子 山崎妙子 西川美紀 船田 豊 原 平 西崎洋子 滝沢増夫
田中隆二 森まり子 山越隆博 宮原賢一 林 真
塩川美代子 塩沢むつき 川瀬まつ子 高藤きの江 井戸田三郎
井戸田五郎 若林けい子 高藤きくい 高藤きくみ 小野沢さち子

事務局 長岡克衛 (東部町教育長)

桜井明雄 (教育課長)

麻見明利 (教育課文化財係長)

堀田雄二 (教育課文化財係)

坂井美嗣 (教育課文化財係)

平成 6 年度

調査団長 長岡克衛 (東部町教育長)

副団長 塩入秀敏 (日本考古学協会員)

調査担当者 坂井美嗣

整理参加者 若林勝子 塩川美代子 塩沢むつき 池田育子 萩原貴子 川瀬まつ子
中村順子 篠原やよい 小野沢友子 高藤雪枝 山崎妙子 若林けい子
西川美紀 小川原きよ

事務局 長岡克衛 (東部町教育長)

桜井明雄 (教育課長)

麻見明利 (教育課文化財係長)

堀田雄二 (教育課文化財係)

坂井美嗣 (教育課文化財係)

第5節 調査日誌

平成4年度（0地点）

- 8月16日 重機による表土削除を行う。（～27日）
8月24日 発掘機材、道具の搬入。テント設営を行い、調査予定地の草刈り作業を開始する。
8月26日 グリッド設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
8月29日 重機による表土削除を行う。（～9月2日）
9月17日 基準グリッドの杭打を行う。グリッド掘り上げ作業続く。
9月22日 グリッド掘り上げ作業終了。
9月24日 造構検出及び造構掘り作業を開始する。
9月28日 造構実測・全体測量を行う。
10月1日 全体写真撮影を行う。発掘機材を撤収し、平成4年度の現場作業を終了する。

平成5年度（A～D地点）

- 4月22日 D地点 重機による表土削除を行う。（～24日）
4月23日 発掘機材、道具類の搬入。テント設営を行う。
4月26日 D地点 グリッド設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
4月27日 C地点 重機による表土削除を行う。（～5月1日）
5月13日 C地点 グリッドの設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
5月17日 B地点 トレンチの設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
5月24日 A地点 トレンチの設定を行う。
5月25日 C地点 グリッド掘り上げ作業終了。
A地点 トレンチ掘り上げ作業を開始する。
5月31日 A地点 重機による表土削除を行う。（～6月19日）
6月1日 A地点 テストピット掘り上げ作業を開始する。
6月7日 A地点 グリッドの設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
7月14日 B地点 重機による表土削除を行う。（～8月4日）
7月29日 A地点 実測を開始する。グリッド掘り上げ作業続く。
8月2日 B地点下段 グリッドの設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
8月18日 B地点下段 造構掘り作業を開始する。
8月23日 B地点下段 実測を開始する。

- 8月24日 B地点上段 重機による表土削除を行う。(～25日)
- 8月26日 B地点下段 写真撮影の為準備作業を行う。
- 8月28日 B地点下段 ローリングタワーを設営し全体写真撮影を行う。
- 9月3日 A地点 グリッド掘り上げ作業続く。
B地点上段 グリッドの設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
- 9月6日 B地点下段 全体測量を行う。
- 9月13日 A地点 配石群の実測を開始する。
B地点上段 グリッド掘り上げ作業続く。
- 9月29日 C地点 遺構検出及び掘り上げ作業を開始する。
- 10月4日 B地点上段 実測を開始する。
- 10月6日 C地点 実測を開始し、全体測量を行う。
- 10月9日 A地点 配石検出作業続く。
- 10月20日 A地点 グリッド掘り上げ作業、実測続く。
B地点上段 遺構掘り作業、実測続く。
- 11月2日 A地点 写真撮影の為周辺の草刈り及び、清掃作業を開始する。
- 11月4日 D地点上段 トレンチの設定を行い、掘り上げ作業を開始する。
- 11月6日 D地点下段 SB-13の実測を開始する。
- 11月16日 全体航空写真撮影を行う。
- 11月22日 D地点下段 SB-13炉の掘り上げ作業、実測を行う。
B地点上段 グリッド一部深掘り作業を開始する。
- 11月26日 D地点上段 トレンチ拡張掘り上げ作業を開始する。
D地点下段 SB-13完掘写真撮影を行う。
- 11月27日 D地点下段 SB-13敷石の除去作業を開始する。
- 11月28日 D地点下段 SB-13敷石下にサブトレを入れる。
- 12月1日 D地点下段 SB-13敷石下ピット掘り上げ作業を開始する。
- 12月2日 D地点上段 実測を行う。
- 12月3日 D地点下段 SB-13掘り方の平面実測を行う。
- 12月4日 発掘機材を撤収し、辻田遺跡発掘調査の現場作業を終了する。
- 平成6年度
- 4月1日 遺物水洗作業、注記作業等の整理作業及び遺物実測等の報告書作成作業を開始する。
- 3月24日 報告書を刊行し整理作業を終了する。

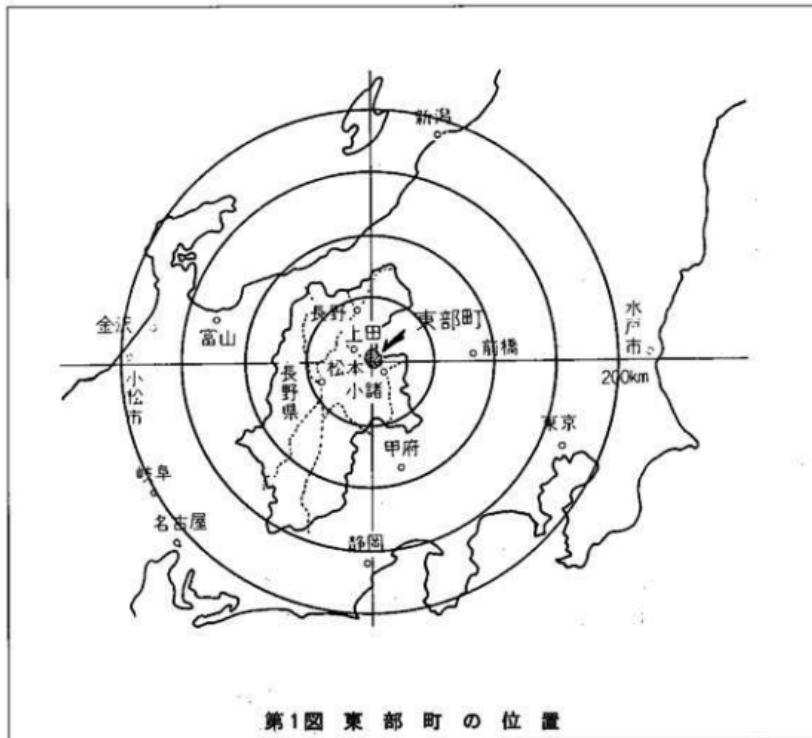


第二章 環 境

第二章 環 境

第1節 自然的環境

長野県の東部に位置する小県郡東部町は、北方に連なる高峰山(2,092m)・東籠ノ登山(2,227m)・西籠ノ登山(2,212m)・三方ヶ峰(2,040m)・湯の丸山(2,105m)・烏帽子岳(2,066m)などの東信火山群に属する山々の稜線を以って群馬県吾妻郡嬬恋村・小県郡真田町に、また西流する千曲川を南の境として北佐久郡北御牧村・小県郡丸子町に接し、東の小諸市・西の上田市によつて挟まれた略菱形を呈する約90km²の町である。



第1図 東部町の位置

北に高く南に低い南面傾斜の地形は、上記東信火山群の雄大な裾野地形の一部であり、それは大きく三つに分けることが出来る。一つは山体部であり、二つはその山体部を深く刻み浸食して流下する河川の形成した押出扇状地であり、三つは千曲川がつくった河岸段丘台地および沖積氾濫原である。田中橋付近の千曲川河床が海拔500m弱、上田市染屋台地から連続する第一段丘が町役場で533m、山麓線は祢津東町・西宮で700mあり、町の東端と西端とではそれぞれに50~100mの差があり、また第一段丘を認められない部分があるものの、概ねこの傾向で三つの地形が連続する。

山体を浸食して放射状に流れ下る河川は、東から深沢川・大石沢川・西沢川・所沢川・求女沢川・三分川・金原川・成沢川・笠石川・瀬在川などがあり、すべて千曲川に注ぐ。このうち、深沢川は下流地域が、大石沢川は中流地域が小諸市に属する。また、瀬在川は中流地域と下流地域が上田市に属する。深沢川の形成する大規模な押出扇状地は殆どが小諸市にはいるので別として、所沢川と金原川・成沢川のつくる扇状地も大規模なもので、東部町の可耕地の殆ど大部分がこの二つの扇状地の上にあると言つてよい程である。特に、鳥帽子岳・三方ヶ峰の裾合を流下する所沢川の土砂運搬量は大きく、東部町最大の扇状地をつくり、扇端は田中から大石におよび、所々で第一段丘を覆い尽くしている。この川はしばしば氾濫して被害の記録も多く残しているが、中でも寛保2(1742)年の大洪水(いわゆる「寛保戌の満水」)はいくつもの集落を壊滅させる大惨事となつた。また金原川・成沢川は双子川で、共に田沢の奥深くから扇状地を形成して大きな合成扇状地をつくって、下方では第一段丘を破壊している。この両河川も寛保2年の大洪水で大被害を与えた。

この大規模な押出扇状地は、下部は巨大な礫をもつ砂礫層で、地表部は火山灰・火山砂からなり、有機物を含んで黒灰色を呈する。これは、俗に「黒ボク」と呼ばれ、軽く且つ粗いため保水力が弱い。その上河川が短水で水量も少ないので、水田面積は広くない。水田の2倍の面積を有する広い畑地帯は全国一のクルミの栽培地帯である。しかし最近は、巨峰・りんごの栽培面積が急増している。

集落は、山麓線沿いに東から原口・新張・出場・祢津・釜村田・東上田・大川・栗林と連なり、典型的な山麓集落の形をなし、これを祢津街道が結んでいる。また千曲川に沿って河岸段丘上あるいは氾濫原を北国街道が走り、その宿場や街村集落として赤岩新田・片羽・牧家・加沢・常田・田中・本海野・西海野が連続している。そしてこの二者の中間である扇央・扇端部に、東の中屋敷・別府・金子・大石から西の曾根・東深井・西深井に至るまで多くの集落が立地している。上記の他に、奈良原・姫子沢・東入・西入の谷頭集落、横堰・田沢の谷平野集落がある。

上記の如く、最高所の東籠ノ登山(2,227m)から最低の西海野千曲川河床(485m)まで約1,740

mの比高差をもち、火山から大河川まで有する東部町の地形は、全体的には雄大な火山裾野地形をなす。しかし、微細にみると多くの変化に富んだ地形によってなり、遺跡もこれら小地形の制約を少なからず受けて立地していることは言うまでもない。

1998年には長野市を中心にして冬期オリンピックが開催される。それに向けて交通網の整備や周辺開発の様音が日増しに高くなっている。東部町においては、上信越自動車道が町を東西に横断することになっており、またインターチェンジとサービスエリアが建設される。浅間山麓広域農道（浅間サンライン）も東部町分は全て共用されており、周辺の開発が始まっている。さらに、長野県土地開発公社による住宅団地の造成なども行われ、土地利用が大きく変貌しつつある。

このような状況の中で、遺跡を取り巻く環境・景観もまた変わらざるをえない。遺跡は周辺の景観と相まって歴史的風土をつくり、文化財としての価値をもつものだが、本来の価値は望むべくもないのが現状である。記録保存を目的とする発掘調査である以上、遺跡の自然的環境・景観を常に考慮しつつ、遺跡のもつ意味を考えるものである。

第2節 歴史的環境

ここ10年ばかりにわたって実施されている圃場整備事業に先立つ発掘調査により、東部町の原始古代史は年々書き替えの必要に迫られている。それらの新しい成果も踏まえながら歴史的環境についてみてみよう。

(1) 旧石器時代

昭和59～61年度の3年間にわたった大字出場の上の原遺跡および上前橋遺跡から旧石器時代の遺物が出土している。すなわち、上の原遺跡C地点からはグレイバーファシットを有する剥片石器・石核の剥離面再生剥片・石刃状剥片など、E地点からは安山岩製ナイフ形石器および剥片、上前橋遺跡C地点からは小石核・御子柴型尖頭器がそれぞれ出土している。いずれも旧石器人が生活活動を営んでいた根拠にはならないが、上前橋Cのローム層中炭化物の存在が見られたことから、彼らの活動の場であったことは確実視できる。現在までのところ、これらが東部町で発見された最古の遺物で、今から1万数千年ないし2万年ほど遡れるものである。このほかにも、和の田沢地区や、赤津の奈良原、滋野の聖などは、地形的に見てもこの期の遺跡が存在する可能性が高いと言える。

(2) 繩文時代

旧石器時代に続く縄文時代幕開けの草創期については全く分かっていない。ただ、奈良原や滝ノ沢からかつて有舌尖頭器が出土したというので、それが事実ならばこの期に所属させてよい可能性がある。現物の行方が不明で実見していないので、いろいろ言うのは危険だが、いずれもこの期の遺物が出土しておかしくない場所である。

早期の遺物としては、昭和53年に発掘調査した海善寺の大門田遺跡出土の撫糸文系土器や押型文土器が知られていたが、その後の調査で、滋野の塚穴遺跡・天神遺跡、祢津の古屋敷遺跡A・B・C地点・上の原遺跡A地点・和の中尾遺跡・大川遺跡・井高遺跡などから押型文系土器・表裏縄文系土器や絡状体圧痕・貝殻腹縁圧痕をもつ土器が出土している。また、東海地方に分布の中心をもつ木鳥系土器の出土も見られる。このように、よく分かっていない草創期に比べ、早期の遺物を出土する遺跡が増えていることが分かる。そして、その多くが山麓台地上に立地しており、それが一つの特徴でもあるようだ。

前期に至るとわに遺跡数が増加し、山麓地帯から扇状地上そして河岸段丘上まで、選地にも幅がみられる。かなりの数の遺跡が数えられる中で発掘調査された遺跡としては、花積下層式併行の尖底ないし丸底の土器をもつ住居址が検出された祢津真行寺遺跡、諸磯C式併行土器を出土した和の大門田遺跡があげられる。その後の圃場整備事業に先立つ一連の発掘調査では、滋野の塚穴遺跡、陣場遺跡、祢津の久保在家遺跡、清水尻遺跡、上の原遺跡C・D・E地点、古屋敷遺跡A・B地点、田中の高呂添遺跡、伊勢原遺跡、新屋の石原田遺跡、和の大川遺跡B地点などがあり、上信越自動車道建設予定地で長野県埋文センターが調査した和の中原遺跡からもこの時期の住居址が4軒まとまって検出されている。中でも、久保在家遺跡、清水尻遺跡、古屋敷遺跡は近接した遺跡であり、神ノ木・関山・黒浜・諸磯など前期各期の土器がみられる。また上の原遺跡E地点からは羽状縄文系の土器がまとまって出土しており、塚穴遺跡の土器などとともに良好な資料と言える。今までのところ住居址の検出はごく少なく、集落としてはとらえにくいが、真行寺遺跡・中原遺跡の例などから数軒の住居址により構成される集落が、東部町の各地に存在していたようである。

1万年にも及ぶ縄文時代の中で最盛期である中期は、八ヶ岳南麓から山梨県にかけての一帯を中心いて中部高地にその華が咲いた。しかし、東部町における中期の特徴としては、中頃の最盛期よりはむしろ中葉すぎの爛熟期から末葉の退變期に属するものが多い点があげられる。この現象が何を意味するのかその理由については様々に考えられているが、ともかくこの期の大きな遺跡が東信火山群山麓の海拔700~800mの地帯にベルト状に集中する傾向があり、輕井沢町・御代田町・小諸市・東部町・真田町と連なる。戌立・不動坂・古屋敷・真行寺・油田・桜畠・中原・鍶輪堂・辻田の各遺跡は東部町を代表する中期の大遺跡である。中でも戌立遺跡は大石沢川扇状地

扇頂部近くに営まれた遺跡で、昭和15年に敷石住居址が発見され、全国でも最も早い指定に入る国指定史跡となった。昭和58・59年の範囲確認調査でも、2軒の敷石住居址、3軒の竪穴式住居址およびそれに伴う大量の遺物が検出され、面積60,000m²にも及ぶ広大な遺跡であることが確認された。また、昭和62年の道路工事に先立つ調査では、中期の竪穴式住居址32軒と後期の敷石住居址1軒が発見されて頗る大きな遺物が出土し、改めて母村的集落で且つ保存状態が良好であることが確認されている。現在、その保存と活用について他方面から検討されている。

後期遺跡も町内各地に存在する。その中で代表的なものは戸立遺跡と和の中原遺跡・滋野の桜井戸遺跡である。戸立遺跡からは堀之内式期から加曾利B式期に至る良好な資料が出土しているし、中原遺跡では敷石住居址とそれに伴う掘之内式併行と考えられる土器が検出されている。また、桜井戸遺跡は信越線複線化工事に先立つ発掘調査により、後期前葉の敷石住居址と土器が出土した。古屋敷遺跡もこの期の大遺跡で、A地点では加曾利B式期の石棺墓が3基が並んで検出され、C地点では堀之内式期に属する柄鏡式の敷石住居址が検出されている。B地点からも称名寺式期・堀之内式期・加曾利B式期の土器が大量にそして満遍なく出土している。和の大川遺跡、井高遺跡、祢洋の清水尻遺跡、上の原遺跡などからもこの時期の土器が出土している。しかし、中期中葉から後葉にかけての様相に比して遺跡数は減少の傾向をみせる。

晩期の遺跡は他地方と同様に激減して、町内では今までのところ、末葉の浮線網状文が施された氷式土器の破片1点を出土した塹穴遺跡を含め5遺跡が知られているにすぎない。

(3) 弥生時代

弥生時代遺跡はすべて後期後半の箱清水式期に属するもので、当時の生活がそれまでの狩猟・採集が中心だったものから稻作などの栽培中心に変わったので、遺跡の立地も縄文時代とは対照的である。すなわち、押山扇状地の扇端部からの湧水を活用しした河岸段丘上に圧倒的多数が存在しており、城の前遺跡・長繩手遺跡・大門田遺跡・三分南遺跡・次郎渕遺跡などが知られていた。井高から海善寺にかけての凹地は山を背にしており洪水に際して安全地帯であったため、小遺跡が集中する傾向がみられる。大門田遺跡の溝址は、その凹地の湧水を引いた灌漑用水路だったと考えられる。その後、天神遺跡・高呂添遺跡・石原田遺跡・鍬輪堂遺跡・東五町遺跡・西五町遺跡などが調査され、この時期の造構や遺物が検出されている。その中で高呂添遺跡で検出された住居址は良好な土器セットをもつ。

大川・栗林の山麓線集落下方の金原川・成沢川扇状地上に点々と遺跡が存在するのは、良好な湧水が得られたからであろう。しかし、いずれも規模は小さく、次郎渕遺跡は例外的にやや規模が大きい。遺物の包蔵地あるいは散布地として登録されている遺跡の数は決して少なくないが、

散発的な遺物出土の小遺跡が多く大遺跡が見られないのは、河岸段丘上の後背湿地の面積が狭いこと、扇状地上は滯水性が悪く当時の技術をもってしても水田化が困難だったことなどから、開発の後進地であったためと考えられている。

(4) 古墳時代

古墳時代に入っても開発の急激な進展はなかったらしく、初めのうちは遺跡の急増・拡大・進出は認められず、多くは弥生時代遺跡と重なっている。

古墳は町内各地に約50基が点在しているが、和地区に過半数の32基が集中している。その中で県指定史跡の中曾根親王塚古墳は一辺約40m、高さ約10mの東信地方最大の規模をもつ方墳で、方墳としては県内最大である。明確ではないが周溝をめぐらしていたらしく、葺石と埴輪の存在も知られている。内部主体は不明であるものの、詳細な実測調査と埴輪の特徴から5世紀後半の築造と考えられている。二子塚古墳は埴丘・石室とも略完存しており、人物埴輪・朝顔型円筒埴輪など多くの埴輪が出土して注目された。王塚古墳は上面の封土を失い天井石が露呈してはいるが、石室は完全に残っている。東上田の児玉山古墳群は7基の小円墳より成り、完存するものはないが、山腹に営まれた群集墳として町内唯一の例である。

赤津の塙原古墳群は5基ほどにより構成される古墳群だが、そのうちの2基は明確に方墳で、周溝の四隅が切れる形態をもち、4世紀末ないし5世紀初頭の土器が出上している。この2基といい、5世紀初頭と考えられている上田の八幡大藏京古墳、5世紀後半とされる中曾根親王塚古墳といい、上田小県地方の古い古墳はすべて方墳であるという特徴が知られるようになった。

赤津・滋野地区は稻作適地が狭隘で、古墳築造のための経済的基盤が小さいので古墳も少なく、塙穴古墳以外に知られているものは10基ばかりにすぎない。その中で、昭和59年に発掘調査された狐山古墳は、土地改良事業対象地区内に存在しながら保存されることになった古墳で、埋蔵文化財保護の貴重な先例となったものであるが、水稻栽培に主眼をおいて考えた場合、不毛の地に近い地帯における古墳として、その経済的基盤や被葬者の正確など解明すべき多くの問題を内蔵している。

高呂添遺跡からは古墳時代全期を通じての土器が、セットとしてとらえ得る良好な状態で出土しており、編年試案が試みられた。また、伊勢原遺跡・東五町遺跡・大川遺跡からも前期および後期の住居址と土器が出土している。

ともあれ、古墳集中地帯は弥生時代遺跡が集中する地帯とほとんど一致し、新たな進出が乏しいことは、稻以外の栽培、たとえば麻の栽培などが想定されはしても、扇状地面の開発の進歩状況が決して順調なものではなかったことを物語っている。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代のこととして文献資料が登場する。正倉院御物麻袋の「信濃国小県郡海野郷 爪工部君調」という墨書銘と、『日本靈異記』に見られる宝亀5年(774)の頃の「信濃国小県郡蟻里人大伴連忍勝」がそれである。前者は、貴人にさしかける「蓋(きぬがさ)」などの製作に携わっていた伴部の姓をもつが、実際の工人であったか否かは別にして、麻布を「調」として貢進していたことが分かる史料である。また、後者は地方において氏寺ではあっても私寺を建立することができた財力豊かな豪族の存在を示すものであり、大族「大伴氏」の地方進出の一例でもある。さらに伴造的氏族の存在は、この地方の政治的状況について考える上で、大切な史料である。『日本靈異記』の説話中、信濃国に関するものは二話あり、いずれも小県郡を舞台としている。このことは、東山道を経由して中央の文物が移入せられた結果であり、文化水準が高かったことを物語っているとされている。「海野郷」「蟻里」は『倭名類聚抄』所載の「童女郷」と同じものであり、弥生時代・古墳時代を通じて遺跡が最も集中した和地区から田中地区にかけて郷が成立し、ここを中心的に本格的な開発が始められたのである。

平安時代には、山麓や扇状地面は信濃十六牧(官牧)の一つ「新張牧」として牧場に関わる開発が行われる一方、畑作も行われ麻の栽培も広く行われていたものと考えられる。その結果、平安時代の遺跡は町内至るところに所在するようになるのである。

奈良・平安時代の遺跡は多いが、比較的まとまった遺物を出土している遺跡としては、塚穴遺跡、陣場遺跡、高呂添遺跡、石原田遺跡、七ツ石遺跡、東五町遺跡があげられる。中でも、高呂添遺跡では奈良時代の、陣場遺跡では平安時代の土器セットが見られる。

(6) 中世以降

中世およびそれ以降の遺物を出土した遺跡としては、まず古屋敷遺跡をあげなければならない。15世紀に所属させられる舶載青磁・青白磁と各時期の国内産の陶器類・土師系土器(かわらけ)および古錢が出上している。隣接する不動坂遺跡からは中世に属する集石造構・配石造構が検出され、この種の造構は加沢の善福寺遺跡・祢洋の桜烟遺跡等で検出され、廃寺に関連する墓址とされていることから、同様に中性的墓址群と理解される。また、久保在家遺跡で検出された上塙からは、歯・人骨・鉄製品が出土しており、歯は30~40代と思われる一個体分であり、造構は墓址と考えられた。鉄製品は綱に包まれていたと思われる刀子であり、葬送および埋葬について好個の資料を提供している。土師系土器や内耳土器を出土する遺跡はこのほかにも多いが、現在の集落に重なっている部分もかなりあると思われる。

第3節 遺跡の位置と環境

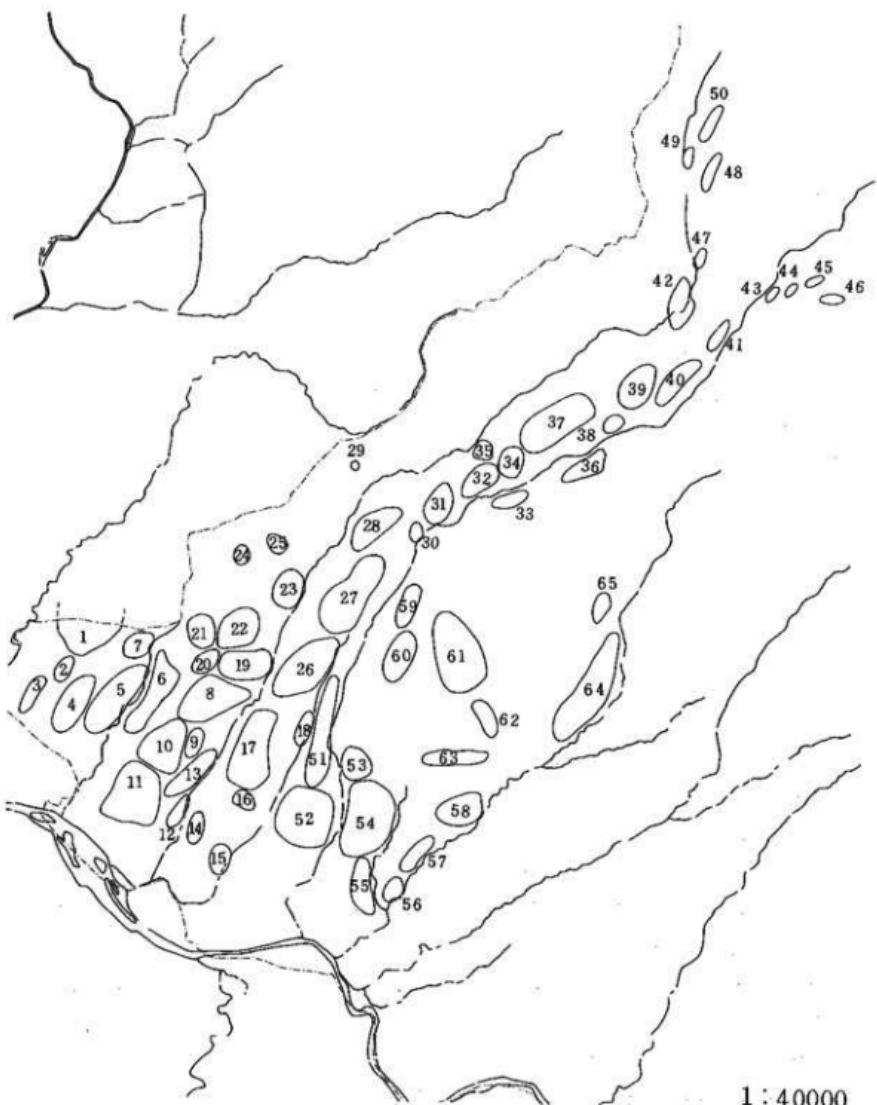
辻田遺跡は東部町役場の北方3.7kmに位置し、海拔高度840mを測る。遺跡の総面積は10,000m²を越えるものと思われる。田沢集落の北方に近接するこの一帯は、調査地点の地目が主に水田で、一部畠地が見られた。水田は耕作を放棄したものが見られた。遺跡は鳥帽子丘を背景に、東を大室山、西を殿城山に抱かれた、広大な金原川扇状地のほぼ中央に位置し、谷は南西に大きく開け、西に北アルプス、南に蓼科山、八ヶ岳等の山々を眺望することができる。河川は東の山際を金原川、西の山際を成沢川が南北方向に流れ、千曲川に至る。遺跡は二つの河川に挟まれた、斜度10~15°とかなりの急傾斜の微高地に位置する。

金原川扇状地には大川遺跡や中原遺跡群などの遺跡が展開する。これらの遺跡は平成2年の圃場整備事業に伴い発掘調査が実施され、縄文中期から後期・奈良平安時代の遺構と遺物を出土させた。平成6年度に実施された深井地区の若宮遺跡の発掘調査においても多大な成果を上げている。

辻田遺跡と周辺の遺跡

37: 辻田遺跡	1: 次郎淵遺跡	2: 墓敷遺跡	3: 十代遺跡	4: 店沢遺跡
5: 前田遺跡	6: 若宮遺跡	7: 宮西遺跡	8: 王墳遺跡	9: 西曾根遺跡
10: 臣村遺跡	11: 月夜平遺跡	12: 王田遺跡	13: 西成沢遺跡	14: 西田遺跡
15: 赤石遺跡	16: 下曾利遺跡	17: 王三田遺跡	18: 上曾利遺跡	19: 成沢遺跡
20: 原前遺跡	21: 下平遺跡	22: 西原遺跡	23: 山根遺跡	24: 上の山二遺跡
25: 上の山三遺跡	26: 大川遺跡	27: 中原遺跡群	28: たら堂遺跡	29: 箕輪遺跡
30: 中原遺跡	31: 南田遺跡	32: 堀込遺跡	33: 上砂川遺跡	34: 中井遺跡
35: 松ノ木遺跡	36: 矢原田遺跡	38: 大平石遺跡	39: 山之神遺跡	40: 新田A遺跡
41: 新田B遺跡	42: 中尾遺跡群	43: 東入A遺跡	44: 東入B遺跡	45: 東入C遺跡
46: 東入D遺跡	47: 西入A遺跡	48: 西入B遺跡	49: 西入C遺跡	50: 西入D遺跡
51: 上椎田遺跡	52: 西原遺跡	53: 砂原遺跡	54: 焼畠遺跡	55: 大門田遺跡
56: 浅間田遺跡	57: 中島遺跡	58: 鐵冶屋遺跡	59: 野行田遺跡	60: 蛇川原遺跡
61: 宮廬遺跡	62: 中通遺跡	63: 井高遺跡	64: 釜村田遺跡	65: 姪子沢遺跡

第3・4図にA地点及びC地点の層序柱状図（サンプリング場所は各遺構配置図に「■NOO」と位置を示した）を、第12・13図にA地点トレンチTR-A~Dの東面断面実測図を、第14図に



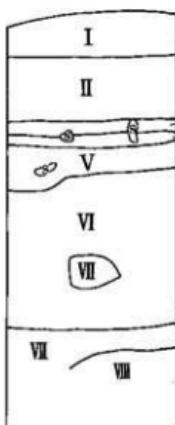
第2図　辻田遺跡と周辺の遺跡

N-22～N-26グリッド（東面）及びR-25～O-25（北面）の断面実測図を示した。第3図N O-5が基本的な層序といえる。基本は表土・黒色土・黄褐色土（ローム）の堆積順であるが、所々流れ込みによる砂礫層が介在する。第12・13図TR-A～CはA地点の南北断面図で、層序は砂礫層が複雑に介在する。とくにTR-C北端は局部的な押し出しによるものと思われる、砂礫の互層がレンズ状に堆積する。A地点に関しては大小の押し出しが堆積した上に造構が造られ、さらに大小の押し出しが発生し造構や遺物を覆い、あるいは押し流した状態が読み取れる。全体的には黒色土中に造構が構築され、非常に検出困難な状況であった。

辻田遺跡に関する最古の文献は昭和34年に出版された和村誌歴史編である。ここでは「杏形」という遺跡名で記載されており、これは「杏形遺跡はそこにある二つの杏形石より呼ぶことにした……」（13頁上段11行）ことによる。遺跡の性格については「この土器破片には厚手なものと薄手なものとがあり、厚手で比較的大型な縄目文様をつけてあるのが縄文式土器中期のものである。この結果杏形遺跡は中期のものである。」（9頁上段3～5行）と「……試掘したが、そこから出土した土器をしらべた結果、中期の土器と後期の土器がほど同数であった……」（10頁下段13～15行）という矛盾した見解が見られるが、概ね縄文中期から後期の遺跡として捕らえている。また尖石遺跡と尖石の関係を例に取り、「杏形石」も共同作業場であったと考えることも可能になるのではないかろうか。」（14頁3～4行）としている。当時の採集品は和記念館に展示されている。昭和36年に地元の歴史愛好家の集まり、田沢史談会によって「杏形遺跡 毒摺り石」の碑が、杏形石の傍らに立てられた。この毒摺り石の命名は前文献の執筆者五十嵐幹雄先生によるものと思われる。昭和40年代に分布調査に入った丸山敏一郎先生は「多量の土器破片を表面探集し、これは大変な遺跡だと思った。」と当時の感想を述べられている。昭和58年の東部町教育委員会の実施した遺跡分布調査に於いて、杏形遺跡はより広範囲の辻田遺跡群の中に包括された。今回の発掘調査では主に辻田遺跡群の名称を用いた。調査の結果から遺跡の範囲は辻田と杏形の両地籍にまたがるが、その中心は辻田地籍にあると思われる事。一帯は一連の遺跡であり、敢えて辻田遺跡と杏形遺跡を区別する必要はない事を考え合わせると、調査者自身も無意識のまま杏形遺跡・辻田遺跡・辻田遺跡群3者の名称を用いて来たが、調査を終了してここで遺跡名を辻田遺跡と名称を統一したいと考える。

和地区の人々が、未だ埋蔵文化財の保存など意識にない、昭和30年代に碑を建て辻田遺跡の存在を知らしめたことは、地方史の中には意義の深いことである。それはこの地が和教育という言葉に代表されるような教育に熱心な土地柄であることと無縁の事ではない。また上田小県地方の考古学の草分け五十嵐幹雄先生がこの地の出身であることも忘れてはならない。

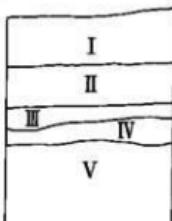
NO1



- I : 耕作土
- II : 黒色土
灰色上混じり
- III : 溶脱層 橙色
- IV : 溶脱層 黄色
- V : 黒色土
茶色上混じり
- VI : 黒色土
- VII : 黒色掛かった茶色土
- VIII : 明茶色土 (砂質)

水系レベルは844.66m

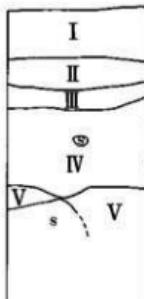
NO2



- I : 耕作土
- II : 黒色土
灰色土混じり
- III : 溶脱層 黄色
- IV : 黒色土
茶色上混じり
- V : 黒色土

水系レベルは843.76m

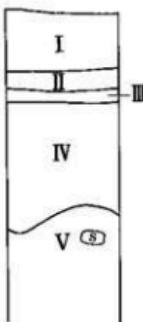
NO4



- I : 耕作土
- II : 黒色土
灰色土混じり
- III : 溶脱層 橙色
- IV : 黒色土
- V : 黒色土
茶色土混じり

水系レベルは843.06m

NO3



- I : 耕作土
- II : 溶脱層 橙色
- III : 黒色土
黄色上少量混じり
- IV : 黒色土
- V : 茶色土
細礫混じり (砂質)

水系レベルは841.76m

サンプリング地点は第11図に記した

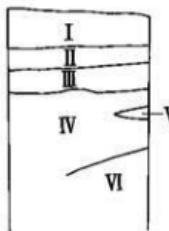
0

50cm

水系レベルは841.46m

第3図 A地点柱状断面図 (1 : 20)

NO1

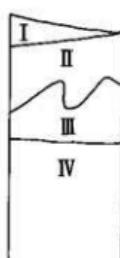


水系レベルは834.90m

0

50cm

NO2



水系レベルは834.90m

I : 括作土
II : 油脱層 橙色
III : 茶色土
黑色土混じり
IV : 黑色土
茶色土少量混じり
V : 砂礫層
VI : 黒色土

I : 括作土
II : 茶色土
黑色土混じり
III : 黒色土
IV : 黑色土
茶色土混じり (砂質)

サンプリング地点は第59図に記した

第4図 C地点柱状断面図 (1 : 20)



第三章 調査の結果

第三章 調査の結果

第1節 0 地点の調査

平成4年度約3,000m²の水田を調査対象とし、重機を使用し表土を剥ぎ取った後、グリッド法によって発掘調査を実施した。グリッドは磁北を基準に南北軸を設定し、南からエ・オ・カ・キ・ク……とし、それに直交させた東西軸を5・6・7・8・9……とした。なお一辺は6mである。

遺構は土壤とピットが調査区の南側でまとまって検出されたほかは、残存状態は良くない。北側は砂疊の堆積土中から縄文上器を中心としたかなりの遺物が出土した。全体的に縄文時代中期末から後期前葉の土器を中心に打製石斧・石鏃・箱清水式系土器・土師器・須恵器・近世陶磁器などコンテナ30箱程が出土した。これらの遺物については第6節遺構外出土遺物の項で述べる。

1 土 壤 (第10図)

3基が検出された。SK-01は157×122cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。断面形は浅い鍋底状である。第67図は本址出土で、口縁部は波状を呈し、把手部は欠損する。縄文(無節のR)は不明瞭で不規則である。乱れた逆U字状の沈線を施す。SK-02は118×97cmの楕円形を呈し、深さ60cmを測る。断面形は一部が深い二段落ちとなる。SK-03は100×100cmのはば円形を呈し、深さ15cmを測る。断面形は浅い鍋底状となる。覆土上部から縄文土器片が検出された。

2 ピット (第10図)

5基が検出された。いずれも直径50cm前後の円形を呈し、深さ30cm前後を測る。遺物の出土はない。

第2節 A地点の調査

平成4年度調査の0地点の東の水田を調査対象とし、便宜的にA地点とした。重機を使用し表土を剥ぎ取った後、グリッド法によって発掘調査を実施した。グリッドは0地点のグリッド設定に整合性を持たせ、磁北を基準に南北軸を設定し、南から11・12・13・14・15……とし、それ

に直交させて東西軸をH・I・J・K・L……とした。なお一辺は3mである。

検出された遺構は縄文時代後期の住居址4軒（うち敷石の伴うもの2軒）・平安時代の住居址1軒・土壙13基・ピット10基・配石墓10基・埋設土器3基である。調査区南隅に10数基からなる配石墓群が検出された。その東に3軒の縄文時代の住居址と土壙・ピット群が検出された。調査区中央部から北側は広範囲に砂礫層の広がりが見られ、遺構も余り検出されず、中央部東側に平安時代の住居址、西側に縄文時代の住居址1軒が検出された。遺物の出土状況は南側の住居址周辺に多く、土壙・ピット群の北側に土器捨場的な、ある程度のまとまりを持った縄文土器等の出土を見た。更に北側は砂礫層となり、北に行くほど遺物量は少なくなる。

1 住居址

SB-01

遺構（第15図）

位置：P-23グリッドにおいて検出された。

検出状況：明確なプランをもって検出されず、石囲い炉が検出されたので、その存在が明らかとなった。石囲い炉と本址の柱穴と思われるピット数基が残るだけで、壁の立ち上がりは検出できなかった。

規模と形態：壁が失われている為ピットの配置で推定すると、直径6m程度の円形の帯穴住居と考えられる。

覆土：上部層が小砾の混入する粘質の黒色土、下部層は砂礫の混入する黄褐色土で覆われていた。下部はとくに押し出しによる土砂の堆積層と思われる。

床面：明確な貼り床等は認められない。

炉：縁辺に石を配した石囲い炉で、一部はぬきとられたと思われるが一辺70cmの方形のものと思われ、深さ20cmを測る。

柱穴：北西から南東方向にかけてピットあるいは土壙が22基検出されているが、その内の幾つかが本址に伴うものと考えられる。Pit-02・04・05・07・09がそれと思われるが、推定の域はでない。

遺物（第69図）

本址は明確なプランが検出されなかったので、石囲い炉の内部から出土した土器破片がこれに伴う遺物と思われる。1は半截竹管による条線を地文とするもので諸磯C式系であろう。2は沈線間に縄文（LR）を施すもので加曾利E式系であろう。3は隆線に円形の刺突を施すもので堀之内式系のものである。4は平行沈線を施す加曾利B式系の注口土器と思われる。

SB-02

遺構(第15・16図)

位 置: O-20グリッドにおいて検出された。SX-01に切られている。

検出状況: SX-01の配石を除去したところ石開い炉が検出され、本址の存在が明らかとなつた。覆土の違いによって平面プランを明確にできなかつたので、石開いが周辺を徐々に拡張してプランを検出した。その結果敷石が検出されたのでそのレベルを床面とした。壁の立ち上がりは地山がやや黄色味があつた黒色土と微妙な色の違いで判断した。更に敷石を除去し掘り方を検出した。

規模と形態: 南西方向の壁が削平されているので不明な点もあるが、一辺4m程度の隅丸方形に近いものと思われる。張り出し部は存在しないと思われる。

覆 土: 地山との違いが微妙であったが、覆土は黒色の砂質があつた粘質土であった。

床 面: 炉から出入り口部と思われる方向に敷石が認められるほか、所々に鉄平石の破片がみられる。この敷石を除去すると拳大の礫が検出された。これらは敷石の水平を保つために支われたものであろう。床面は出入り口部と思われる方向に向かってやや傾斜し、比較的堅くしまつている。

炉 : 本址中央やや奥壁寄りに位置し、長辺58cm、短辺50cm、深さ19cmを測る方形の石開い炉である。縁辺に平石を方形に組み、その間に礫を置いたもので、炉石はひび割れているものがある。炉の底面からやや浮いた状態で、深鉢形土器の胴部下半が出土している。

柱 穴: 内部に5基、壁外縁辺部に5基のピットが検出されているが、本址に伴うものか不明である。

遺物(第69~73図)

1は沈線が施される称名寺式系と思われる。2は幅びろの隆線に沈線が伴うもの。3は充填繩文(無節L)が成される掘り之内式系の土器と思われる。4は小突起に円孔を穿ち、沈線・円形刺突を施す。5は充填繩文(L R)。6は隆線に斜め刻み日、充填繩文(L R)、内面口唇部に沿って沈線を施す。7は波状口縁で、波頂部を内側に折り込む。押圧痕のある隆線が口縁部に沿って巡り、波頂部から垂下する。波頂部内面に沈線による渦巻文及び長方形の区画が加飾される。8は隆線に刺突が施される。9は口縁部内面に沈線により加飾する。10は隆線に刺突と8の字状の貼付文、波頂部に沈線による渦巻文、胴部文様は磨消繩文と思われる。波頂部内面にも沈線による渦巻文と区画が見られる。11は充填繩文(L R)。12は沈線による菱形の幾何学的文様。13は充填繩文(L R)。14は平行沈線及び充填繩文(R L)。15(Pit-5出土)・16は充填繩文(L R)。

以上は堀之内式系の特徴を有する。17は磨消繩文（R L）。18は沈線を基調とし、口唇部に鋸歯状の刻み目、内面に庇状の張り出しがもつ。加曾利B式系と思われる。19は平行する沈線間に斜線を交互に施すもの。20は粗製土器である。21は鎖状の隆線が2条巡るもの。22は刺突文を地文とし、鎖状の隆線を施す、三十稻場式系のものである。23は圧痕隆帶のもの。24は炉内出土で、繩文（R L）を地文に連続刺突文を施す。25～29は集合沈線を基調とする加曾利B式系のものである。25は口縁部に8の字状の小突起を有する。28は口縁部に8の字状の小突起と口唇部に斜め刻み目を有する。30は網代痕を有するミニチュア上器。31は注口土器の注口部で、付け根に沈線で文様を施す。32は炉内に埋設されていた土器である。33は台付鉢で台部と鉢部の接合部に、斜め刻み目を施す隆帶を巡らす。34は口縁部に桃の種状の突起を有し、口唇部に斜めの押圧を施す、カップ状の小形の土器である。35は粗製深鉢上器である。

全体的に称名寺式系・堀之内式系・加曾利B式系の土器が認められるが、無文粗製の土器片が多く割合を占める。有文土器では堀之内・加曾利B式系の破片が多い。底部は殆どが網代痕を有する。

S B - 03

遺構（第17図）

位 置：X-31グリッドにおいて検出された。

検出状況：敷石と石囲い炉の検出によってその存在が確認された。本址の南西方向のほぼ半分が水田の畦畔によって削除されている。

規模と形態：当初は柄鏡形の敷石住居址と考えたが、敷石と主体部の関係が不明瞭なので、両者が異なる遺構で、切り合い関係にあると考えた方がよさそうである。主体部の直径は4m程度の円形を呈するものと思われる。敷石部は長さ2.5m程度が残り、幅は不明である。

覆 土：敷石部は押し出しによる黄褐色の砂疊層に覆われていた。主体部は黄褐色と一部黒色土に覆われていた。地山は押し出しによる黄褐色と黒色土で、覆土との見極めは困難を極めた。

床 面：主体部の敷石はわずか鉄平石の破片が残る程度である。床面は平坦で堅くしまっている。

炉 : 主体部中央に位置し、一辺65cm、深さ16cmを測る方形の石囲い炉である。縁辺に立てられた4個の炉石はすべてひび割れていた。底面には焼土がみられた。

柱 穴：内部に6基、壁外縁辺部に2基のピットが検出された。いずれも覆土は黒色土であ

るが、Pit-5は黄褐色土が詰まっていた。Pit-6の南側には割石を囲んだ部分がみられる。

遺物(第74図)

1(Pit-1)は称名寺式系と思われる。2は隆線に圧痕を施し、斜行沈線を地文とする。3は口唇部内面に沈線、外面に2条の細い隆線を巡らし刺突を施す。4は口縁部内外面に2条の沈線を施す。5は口縁部内外面に沈線、口唇部に刻みを施す。6は沈線・隆線に刻み目を施す。7は口縁部外面の微隆線に斜め刻み目、口縁部内面に庇状の張り出しを持ち、平行沈線間に斜め刻み目を施す。8は沈線を太い点状の沈線で区切る。9は平行沈線を蛇行する沈線で区切る。10は平行沈線と撚紐状の沈線を施す。11は集合沈線を文様要素とする、注口土器と思われる。12は充填繩文(上段無節R・他L,R)。13は圧痕隆帯のもの。14は沈線間に円形の刺突を施すもの。15は網代痕を有する底部である。2・3のような堀之内式系、5~11のような加曾利B式系のものが見られる。

SB-04

遺構(第18図)

位置：N-30グリッドにおいて検出された。

検出状況：黒色土中に造られており、明確なプランは検出できず、カマドと貼り床の一部が検出されただけである。

規模と形態：東側にカマドをもつ竪穴住居であろう。

覆 土：黒色土

床 面：貼り床が一部認められる。

カマド：割石が二列に残り、内部に土師器の壺の完形品が残っていた。

柱 穴：不明

遺物(第75図)

土師器の壺・皿・甕を図化し得た。1はロクロ回転(右)糸切未調整で、内面黑色処理され、放射状のミガキが見られる。2は回転(右)糸切未調整で、内面黑色処理され、「*」形のミガキが見られる。3は回転(右)糸切未調整で、内面にミガキが施される。4は胴部調整にヘラケズリを行う。5はロクロ成形の後、胴部をヘラケズリする。1・2・4はカマド内出土である。

SB-08

遺構(第18図)

位 置：O-18グリッドにおいて検出された。

検出状況：水田の畦畔にかかっていたため、南北方向半分は削り取られている。遺物のまとまりと、鉄平石の並びからその存在が確認された。水が湧きだし調査は困難を極めた。

規模と形態：一辺4.2m程度の隅丸方形を呈するものと思われる。

覆 土：黒色土で、地山との差異は微妙であった。

床 面：所々鐵平石の小破片がみられ、敷石されていたらしい。

炉 灰：不明

柱 穴：壁外縁辺部、コーナー近くに2基のピットが検出された。

遺 物（第75・76図）

1は口縁部が肥厚し、沈線及び羽状構成の繩文が施される。2は粗い繩文が施される。3は隆帯に竹管の背を押圧し、口唇部内外面には加飾が見られる。4は波状口縁の波頂部に円孔を穿ち、鎖状の隆線が垂下する。5は充填繩文。6は充填繩文（L R）。7は隆線に刺突及び充填繩文（無節L）。8は隆線に押圧及び充填繩文（R L）。9は沈線による幾何学的文様及び充填繩文（L R）。10は口唇部に鋸歯状の刻み目、口縁部内面に庇状の張り出しをもつ。11は朝顔形に聞く深鉢で、充填繩文（L R）による幾何学的な文様構成をもつ。隆線は刻み目が施され、3単位の8の字状の貼付文が口縁部に付き、その部分の口唇部は内側に折り込まれ、更にその内側には円形の刺突と沈線が施される。この8の字状の貼付文の間には、折り込まれることのない8の字状の貼付文が配される。復原できるものは11のみであり、主に堀之内式系の新しい段階のもの（5～9）が多い。10のような加曾利B式系のものは少ない。

2 土 壤（第31～34図）

S B-01の石抜い炉の周辺に土壤13基が検出されている。詳細は土壤観察一覧表に記載した。

遺 物（第77図）

ここでは主な有文土器を図化した。その他の遺物については土壤一覧表に記載した。

S K-01出土：1・2は同一個体で、繩文は無節と思われる。内面に炭化物が付着する。

S K-02出土：1は網代底。2は鉢の頸部で沈線が施される。いずれも炭化物が付着する。

S K-11出土：1は充填繩文（R L）で、内面に炭化物が付着する。

3 配石土壙・配石遺構（第19～22図）

調査区南隅に礫群が検出され、10数基の配石土壙・遺構が検出された。

S X-01（第23図）

N-19グリッドにおいて検出された。SB-02内に造られ、礫を閉んだ状態で検出された。これを取り除くと、SB-02の石閉い炉が検出された。覆土は黒色土で、SB-02を切っている。掘り方等のプランは明確でない。

S X - 02

欠番

S X - 03 (第24図)

O-15グリッドにおいて検出された。中縁から巨礫が堆積する部分を長方形に掘り込み、その縁辺部に礫を長方形に並べ造られている。主軸はN-73°Eを示し、長軸約144cm、短軸約94cm、深さは最大で25cmを測る。検出時東壁寄りに40×28×19cmの角の取れた礫が置かれ、その下部から伏鉢が出土した。覆土は2層からなり、第I層は明茶褐色の砂質土に黄褐色土のブロックが斑に入る。第II層は灰黄色の砂質土で堅くしまりがある。第II層は地山であり掘り過ぎである。

遺物 (第78図)

伏鉢は胸部内湾して立ち上がり、頸部から大きく外に開く、口唇部はやや内湾する。頸部に沈線を1条巡らし、上半部(口縁部)は無文、下半部は2条の平行沈線によって、渦巻文を連続させる。この沈線間にはL Rの繩文を充填する。口縁部内面には3単位の拳状の小突起が貼付される。その下部、前述の頸部を巡る沈線上に、8の字状の貼付文を施す。底部は不明瞭ながら、網代痕を有する。堀之内式系の特徴を良く備えている。

S X - 04 (第23図)

Q-17グリッドにおいて検出された。1m程度の方形に礫が組まれ、その内部にも礫が詰まっている。深さは明らかにすることはできなかった。

S X - 05 (第25図)

S-20グリッドにおいて検出された。平石を縁辺部に斜めに立て掛けて、所々大礫を支い、菱形の石棺状に閉んでいる。主軸はN-35°Eを示し、長軸約105cm、短軸約62cm、深さは最大で約24cmを測る。覆土は5層からなり、第I層は粘質の茶黒色土、第II層は黒色土と黄褐色土の混ざりで粘質、第III層は粘質の黒褐色土、第IV層は粘質の黒色土に褐色土が混ざる、第V層は粘質の黄褐色土である。

遺物 (第77図)

1・2は充填縄文（L R）。3は沈線による横方向の長楕円区画と思われる。いずれも堀之内式系のものである。

S X-06 (第26図)

R-19グリッドにおいて検出された。石で完全に囲んだ状態ではなく、北東方向の縁辺部に集中して「コ」の字状に鉄平石や偏平な礫を敷き、この短辺に添って衝立状に立てた鉄平石がみられた。底面にも鉄平石が部分的に敷かれている。南西方向の縁辺部には棒状の長さ1m余りの礫が斜めに横たわっていた。土壇の主軸はN-52°-Eを示し、長軸約220cm、短軸約88cm、深さは最大で約18cmを測る。覆土は4層からなり、第I層は粘質の茶黒色土、第II層は砂質の灰褐色土、第III層は砂質の灰黒褐色土、第IV層は砂質の黒褐色土である。

遺物 (第77図)

1は口縁部に微隆起線を巡らす。2は微隆起線内に縄文（R L）を施す。3は充填縄文（R L）。4は充填縄文（無節のL）。5は沈線による幾何学的文様。6は充填縄文（L R）と口唇部に刻み目を施す。中期末から後期中葉にかけての土器片である。

S X-07 (第25図)

S-18グリッドにおいて検出された。礫の間を掘り込んで土壤としたものであろう。厳密な配石遺構とはいえない。「く」の字状のプランを呈し、2基の土壇が切り合っている可能性もあるが、層位的に確認することはできなかった。長軸約2m、短軸約90cm、深さ約20cm余りを測る。覆土は2層からなり、第I層は堅くしまった黒色土に灰色土が混じり、細礫を含んでいる。第II層は堅くしまった明褐色土である。

S X-08 (第27図)

S-19グリッドにおいて検出された。礫の間を掘り込んで土壤としたものであろう。土壤のプランは不整楕円形を呈し、長軸約180cm、短軸約127cm、深さ約12cmを測る。主軸方向北東側に伏鉢が検出された。南西側に台状の巨礫が据えられていたが、S X-11との接点にあり、本址に係わるものかは不明である。覆土は明確にし得なかったが、平面プランは地山との区別が困難であった。

遺物 (第81図)

伏甕は底部から直線的に大きく開き、口唇部に4単位の突起を有する。突起はヒマワリ状の大突起とナルト状の小突起の2種からなる。突起下は穿孔される。口縁部内面には6条の沈線を巡

らし、この間には刻み目を施す。この沈線は穿孔部ではこれを取り囲むように、同心円状となる。内面はヘラミガキが入念に成される。外面はヘラケズリ状のミガキが施される。加曾利B式系の特徴を備えている。

S X - 09 (第27図)

S - 18グリッドにおいて検出された。礫の間を掘り込んで土壤としたものであろう。土壤の縁辺部に偏平な石がまばらに置かれている。土壤は平面プランと地山の区別が困難で、覆土も明確にし得なかった。土壤は長軸約150cm、短軸約90cm、深さ最大で約20cmの不整梢円形のプランを呈すると思われる。北東方向はS X - 06と接し、棒状の礫が横たわる。

遺物 (第78図)

1は口縁部に隆線を巡らす。2は沈線により曲線の文様を表す。1は中期末、2は堀之内式系であろう。

S X - 10 (第28図)

R - 19グリッドにおいて検出された。長軸約200cm、短軸80cmの短冊状に偏平な石を一列に敷き、そのすき間に5~10cm大の礫を配している。検出時に一部平石が2枚重なっている部分があり、蓋状に覆われていたことも考えられる。また南東寄りには縁辺部を礫で囲んだ方形の土壤が付属的に存在し、一边約30cm、深さ約13cmを測る。本址にこの土壤が付属するかは不明であり、本址が暗渠の基底部の可能性もある。

遺物 (第78図)

1・2とも充填繩文 (L R) がなされ、堀之内式系のものであろう。

S X - 11 (第29図)

S - 19グリッドにおいて検出された。土壤の縁辺部に礫を並べていると思われるが、平面プランと地山の区別が困難で、覆土は明確にし得なかったが、長軸約120cm、短軸約70cm、深さ約10cmの梢円形のプランを呈するものと思われる。S X - 08と接し、台状の石を共有するかのようであるが、S X - 08で触れたとおりである。

S X - 12 (第29図)

配石土壤群より約10m離れた、T - 25グリッドにおいて検出された。鉄平石などの偏平な石が、一部重なって出土した。土壤などの掘り込みはなかった。敷石住居の残骸の可能性がある。

S X - 13 (第30図)

R - 18グリッドにおいて検出された。土壤の縁辺部に疊を並べていると思われるが、平面プランと地山の区別が困難で、覆土は明確にし得なかつたが、長軸約170cm、短軸約120cm、深さ約20cmの楕円形のプランを呈するものと思われる。底面からは3基のピットが検出されたが、本址に係わるものかは不明である。

遺物 (第78図)

1は集合沈線、加曾利B式系の注口土器と思われる。

S X - 14 (第30図)

Q - 14グリッドにおいて検出された。角疊を「コ」の字状に組んでいる。内部からは焼土等は検出されていない。本址の東2mには鉄平石などの偏平な石を弧状に配置した箇所がみられるが、その関係は不明である。敷石住居に残骸の可能性もある。

S X - 15 (第31図)

S - 19グリッドにおいて検出された。100×66×21cmの平石の下から、半分掛かって検出された。土壤の縁辺部に疊を並べていると思われるが、平面プランと地山の区別は困難で、覆土は明確にし得なかつたが、長軸約110cm、短軸約100cm、深さ約20cmを測る。

4 ピット (第32・33図)

S B - 01に係わるピットが存在するものと思われる。詳細はピット一覧表に掲載した。

5 埋設土器

埋壺 - 1 (第34図・第79図)

S - 27グリッドにおいて検出された。掘り方は部分的にしか認められないが、直径50cm余りと思われる。無文の深鉢形上器の胴下半部が埋設されていた。深鉢形土器の内部には黒色土が堆積し、大疊が混入していた。

伏壺 - 1 (第34図・第80図)

O - 27グリッドにおいて検出された。掘り方は鍋底状の底面のみ認められた。周辺を大疊が巡っており、そこから推定すると、直径50cm余りの円形の土壤と思われる。底部を欠いた無文の深鉢形土器が西側に傾いて埋設されていた。

伏壺（鉢）－2（第34図・第80図）

Q-21グリッドにおいて検出された。浅鉢形土器が単独で出土し、掘り方は全く不明である。この浅鉢形土器は3単位の波状口縁を呈し、口縁部内面に沿って沈線を2条巡らす。外面はヘラケズリ気味のミガキが斜横方向に見られる。内面は横方向のミガキが見られる。

第3節 B地点の調査

0地点の農道を挟んだ南側の水田を調査対象とし、便宜的にB地点とし上段と下段に分けた。重機を使用し表土を剥ぎ取った後、グリッド法によって発掘調査を実施した。グリッドは他の地点のグリッド設定に整合性を持たせ、磁北を基準に南北軸を設定し、南から5・6・7・8・9……とし、それに直交させて東西軸をD・E・F・G・H……とした。なおグリッドは一辺3mである。

検出された遺構は縄文時代の住居址5軒（敷石を伴うもの4軒）・平安時代の住居址2軒・土塙51基・ピット107基・埋設土器1基である。住居址は調査区上段に散在し、南側に土塙とピットの集中箇所が見られる。下段南側も土塙とピットの集中箇所が見られる。遺物の出土状況も南側程多い。北西側に行くほど黒色土層が厚く谷状となり、遺物の出土も少なくなる。土塙とピットの検出面は黄褐色のローム面で、北側にこれらの見られないのは、黒色土堆積面の為と思われる。

1 住居址

SB-05

遺構（第36図）

位 置：D-6グリッドにおいて検出された。

検出状況：黒色土を掘り込んで造られていたため明確なプランはわからず、貼り床が検出されるに及んでその存在が確認された。

規模と形態：一辺約2.5mの方形を呈するものと思われ、深さは25~40cmを測る。南東の壁の中央にカマドをもつ。

覆 土：詳細にはできなかったが、主に黒色土が堆積し、地山との区別は困難を極めた。

床 面：堅い貼り床が形成されているが、南西方向の壁際は不明瞭であった。

カ マ ド：U字型に礫が立てられて残っており、灰黄色土（ローム）の混じる黒色土を貼って造られたと思われる。礫はいずれも内側に傾いていた。底面はよく焼けている。

柱 穴：ピットは10基検出された。

遺物（第82図）

1は土師器の坏で、ロクロ成形され底部はヘラケズリされる。内面黒色処理され「火」形の暗文が見られる。口唇部はヘラミガキされる。2は土師器の高台付坏で、ロクロ成形・回転糸切の後に高台が付けられる。内面黒色処理され底部中央から放射状のヘラミガキ、側面は横方向のヘラミガキが見られる。3は土師器の壺の破片で、外面は縦方向のカキメ状の調整が著しく、内面は横方向のヘラナデが見られる。4は須恵器の口縁部で赤灰色を呈し、焼きが甘い。羽釜の破片が出土しているが、小破片で同化できない。その他、土師器の坏類・須恵器の壺などの破片が見られる。

SB-06

遺構（第37図）

位置：L-12グリッドにおいて検出された。

検出状況：表土を剥ぎ取ってすぐ、石囲い炉と敷石が検出され、その存在が明らかになった。

規模と形態：プランやピットが検出できなかったため不明であるが、敷石住居であることは確かである。

覆 土：なし

床 面：所々に鉄半石がみられる。

炉：62×51cmの方形の石囲い炉で、深さ11cmを測る。偏平な石を四角く組んで造られている。焼土はみられない。

柱 穴：検出されない。

遺物

本址は覆土がなく、表土内の遺物がこれに伴うものか判断しがたい。石囲い炉内出土の網代痕のある土器底部だけが本址に伴うものと思われる。本址周辺から伏せた状態で浅鉢（第111図-38）が出土したが、本址に伴うものか不明である。

SB-09

遺構（第38図）

位置：H-10グリッドにおいて検出された。

検出状況：水田の畦畔にかかるて検出されたため、南西側の壁は削平されている。黄褐色の地山と黒色の覆土は明瞭に区別できた。Pit-101に切られている。

規模と形態：一辺約4mの方形を呈する堅穴住居であろう。

覆 土：黒色土

床 面：礫の入った黄褐色の地山は堅くしまっている。

炉 中央部に直径40cmの円形を呈する焼上範囲が検出された。

柱 穴：壁外コーナーに1基、内部コーナー近くに2基が検出された。

遺物（第82図）

1は繩文（LR）。2は無節の繩文。3は磨消繩文（LR）。4は無文粗製土器の口縁部である。5は無文で口縁部が「く」の字に屈曲する。6は口縁部が「く」の字に屈曲し、外面に沈線を巡らす。7は網代底。遺物の量は少なく、文様のあるものは更に少ない。4～6は堀之内式系であろう。

SB-10

遺構（第39図）

位 置：L-17グリッドにおいて検出された。

検出状況：水田の畦畔下から明確なプランをもって検出された。

規模と形態：3.7×3.3mの隅丸の長方形のプランを呈し、深さ15cmを測る。北東方向にカマドをもつ。

覆 土：3層からなり、第I層は粘質の黒色土、第II層は粘質の黒色土に黄褐色のローム粒及び炭化物が混入する。第III層は粘質の黄褐色土に黒色土が混入する。

床 面：黄褐色土と黒色土の混入する貼り床が認められた。

カマド：一対の平石が立って検出され、その前方には同様の平石3点が水平に置かれていた。その間からは土師器（4）及び焼土が出土している。また、カマド右にも平石が水平に置かれ、その下部から圧し潰された状態で土師器（2）が出土した。

柱 穴：6基のビットが検出されたが、規則的な配列は認められない。

遺物（第83・84図）

1は土師器の壺で、底部回転糸切未調整・内面黒色処理である。内面には炭化物が付着する。2は1と同様の調整で、外面に炭化物が付着する。3（カマド出土）も同様の調整であるが、「火」形の暗文が見られる。口縁部外面に炭化物が付着する。4（カマド出土）は大形の壺で、ロクロ成形・内面黒色処理される。5は土師器の小瓶で、外面黒色処理され、胴部は縦方向のミガキが著しい。ロクロ成形・付け高台である。6（カマド出土）は土師器の甕で、ロクロ成形され胴部下半部外面へラケズリされる。口唇部を凹ます。7（カマド出土）は土師器の甕で、ロク

□成形・胴部下半部へラケズリされる。内面は横方向のヘラナデされる。

S B-11

遺構(第40図)

位 置: F-9グリッドにおいて検出された。

検出状況: 石窯いの炉と敷石の検出によってその存在が明らかとなった。壁や柱穴は認められなかった。

規模と形態: 敷石住居と思われるが、プランや規模は不明である。

覆 土: 黒色土

床 面: わずかに鉄平石の散在が認められる。

炉 : 軽石で方形に組まれた石窯い炉で、一部欠損するが、大きさは98×75cm程度の長方形を呈するものと思われ、深さ20cmを測る。底面には焼土が認められる。

柱 穴: 不明

遺物(第84図)

明確なプランを検出できなかったので、明らかに本址に伴うものと思われる、石窯い炉内出土の土器破片の拓影を掲げた。1は充填縄文(無節R)。2・3・5は充填縄文(L R)。4は沈線。6は口縁部内外に沈線を巡らす。7は浅鉢の口縁部と思われる。堀之内式系が主である。

S B-12

遺構(第41図)

位 置: N-15グリッドにおいて検出された。

検出状況: 黒色土を除去したところ、偏平な石の配列が検出されたので住居址と推定した。

規模と形態: 柄鏡形の敷石住居かも知れない。プラン等は不明。

覆 土: 黒色土

床 面: 所々敷石がみられるが、そのほかは柔らかい黒色土である。

炉 : 石窯い炉のものと思われる、ひび割れた平石が認められ、内部から土器片が出土した。

柱 穴: 不明

遺物

本址に明確に伴う遺物の出土は、石窯い炉内出土の無文土器であるが、図化していない。

SB-14

遺構(第38図)

位 置：N-22グリッドにおいて検出された。

検出状況：黒色土の落ち込みと土器の出土によって、その存在が確認された。水田の畦畔に位置するため大半が削平されている。

規模と形態：敷石住居と思われる。

覆 土：黒色土

床 面：鉄平石の敷石がみられる。この敷石の上に一部炭化材が認められた。

炉 : 不明

柱 穴：1基検出されている。

遺物(第85図)

1は浅鉢で、斜めの刻み目を施した隆線が2条巡り、8の字状の貼付文が配される。充填縄文(L R)である。2は頸部に円文・円形刺突を巡らす、大形の鉢。3は2本の沈線が巴状に絡む渦巻文。4~6は充填縄文(L R)。7は斜行集合沈線と充填縄文(L R)。8は口縁部内面に5条の沈線を巡らし、口唇部に刻み目を施す。9は集合沈線による渦巻き状の文様。1~7は堀之内式系、8・9は加曾利B式系である。

2 土壌(第42~58図)

詳細は土壤観察一覧表に記載した。

遺物(第86~92図)

ここでは有文土器を図化し、その主な文様構成について記した。その他の遺物については土壤一覧表に記載した。

SK-03：1は磨消縄文(無節のR)と思われる。2は充填縄文(無節のR)。3は太い沈線間に縄文(R L)を充填。4は太い沈線間に縄文(L R)を充填。5は口縁部で太い沈線間に縄文(R L)を充填。

SK-04：1は沈線。2は沈線間に縄文(R L)。

SK-05：1は注口上器の注口部と胸部の一部である。注口部基部には沈線により花状の文様。胸部は渦巻文間に集合沈線で接続する。加曾利B式系の注口土器の特徴をよく備えている。

SK-07：1は無文の浅鉢で口縁部の一端を内側に折り込む。網代底を有する。加曾利B式系と思われる。

- SK-08：1は条線。2は微隆起線と縄文（LR）を施す。3は斜め刻み目のある隆線と充填縄文（LR）。4は口縁部外面に微隆起線を巡らす。3は堀之内式系であるが、他はそれより古手と思われる。
- SK-11：1は微隆起線と縄文（RL）を充填。中期末のものと思われる。
- SK-15：1はLRの縄文。2は微隆起線と縄文（RL）。中期末のものと思われる。
- SK-22：1は磨消縄文。2は沈線と縄文（無節のR）。3・4は充填縄文（LR）。3・4は堀之内式系、他はそれより古手と思われる。
- SK-25：1は磨消縄文と思われる。2は口縁部内面に連続刺突文と底状の出っ張り。3は口唇部に加飾し、内外面に数状の沈線を施す。2・3は加曾利B式系である。
- SK-26：1は沈線と刺突文を文様要素とする、堀之内式系のものである。
- SK-27：1は梢円形を呈する微隆起線の区画内に、縄文（LR）を充填する。口縁部は欠損するが、磨いて擬口縁を作り出している。2は波状口縁を呈するとも思われ、口縁部に微隆起線を巡らし、口縁部は無文帯、微隆起線下は縄文（LR）を充填する。この横方向の微隆起線から梢円状の微隆起線が垂下するものと思われる。3は微隆起線で区画し、口縁部は無文帯、下部は縄文（RL）を充填する。4は3と同様で、縄文はLRである。5は口縁部無文帯、微隆起線間に縄文（無節R）を充填する。6は口縁部無文帯、微隆起線下部に縄文（RL）を施す。所謂双耳壺状の深鉢と思われる。7は口縁部にラッパ状の突起をもつ深鉢。突起には橋状の把手が付くと思われる。口縁部無文帯、微隆起線下部に縄文（RL）を施す。8は口縁部に微隆起線を巡らす、無文の浅鉢。9は兩重文。10は断面を丸鑿状の深い沈線で区画し内部に縄文（LR）を充填する。波状口縁を呈するものと思われる。11は波状口縁の波頂部に把手を施し、口縁部は無文帯、微隆起線下部は幾何学的な磨消縄文（LR）を施す。12は磨消縄文（無節のR）。13は隆起線上に縄文（LR）を施し、下部は磨消縄文を施す。大部分が中期末から後期初頭のものである。
- SK-33：1は充填縄文（LR）。2は外面に刻み目を施す隆線と充填縄文を、内面に2条の沈線を施す。3は片口付の鉢で、内外面とも器面が荒れ剥落が著しい。底部内外面はヘラミガキが顕著である。1・2は堀之内式系である。
- SK-34：1は口縁部内側に沈線とボタン状の貼付文を施す、堀之内式系のものである。
- SK-35：1は沈線による縦位の梢円区画内に縄文（LR）を施す。磨消縄文を施す称名寺式系と思われる。
- SK-36：1は微隆起線と縄文。

S K - 45 : 1・2 は充填繩文 (L R)。堀之内式系。

S K - 47 : 1 は沈線による同心円文に充填繩文を施す。2 は沈線による渦巻文。堀之内式系。

3 ピット (第42~58図)

詳細はピット観察一覧表に記載した。

遺物 (第92図)

ここでは有文土器を図化し、その主な文様構成について記した。その他の遺物についてはピット一覧表に記載した。

Pit-80 : 1 は集合沈線によって渦巻文などを描く、加曾利B式系の注口土器。2 は同じく加曾利B式系のもの。3 は充填繩文 (L R) で堀之内式系と思われる。

4 埋設土器

埋甕 - 2 (第41図・第93図)

L-8 グリッドにおいて検出された。平面の掘り方は不明瞭であったが、断面の層序は明確で、直径60cm余りの円形の土壙と思われる。上面は削平されるが、深鉢形土器の上部を逆位に埋設している。埋甕は胴部下半は失われるが、キャリバー形の深鉢である。口縁部に先端の尖った4単位の突起が施される。突起間を繩文の施された微隆起線が弧状に連なり、口縁部無文帯を作り出す。突起下の弧状の微隆起線の下部から、2重の微隆起線による逆U字状の区画がなされる。内部の繩文 (R L) は磨消繩文で、微隆起線より先に施される。この2重の逆U字状微隆起線の間に、1重の微隆起線が施される。内部は磨消され無文となる。

第4節 C 地点の調査

B地点の北西の水田を調査対象とし、便宜的にC地点とした。平成3年度の試掘調査の結果、貼り床とともに弥生土器が出土した為、グリッド法により調査を実施した。グリッドは他の地点と整合性をもたせ、磁北を基準に南北軸を設定し、南から2・3・4・5・6……とし、それに直交させてC・D・E・F・G……とした。なお一辺は3mである。

検出された遺構は弥生時代末期の住居址1軒と土壙1基である。

1 住居址

S B - 07

遺構(第60図)

位置：F-10グリッドにおいて検出された。

検出状況：黒色土を掘り込んで造られているため、明確なプランは認められず、貼り床と遺物によってその存在を確認した。

規模と形態：約5.9×4.9mの楕円形に近い形を呈し、深さは約20cmを測る。東と西側の壁が判然としない。

覆土：黒色土

床面：堅くしまっている。

炉：直径90cm余りの地床炉が確認され、内部には焼土が認められる。

柱穴：4基が確認されている。

遺物(第68図)

1・3は櫛描波状文を地文に、頸部に簾状文を巡らす。2は外面にハケ状の器面調整の後、波状文を施す。内面はハケ状の調整が顕著である。4・5はハケ状の器面調整のあと波状文を施す。

6は櫛描直線文。7は胴部下半分の破片で、櫛描波状文とヘラミガキを施す。8は斜走直線文を横羽状に施す。その他、蓋・赤色塗彩された高杯の脚部・鉢などの破片が出土しているが、小片で図化できない。

2 土壙(第60図)

SK-01：SB-07の南壁際に検出された。切り合い関係は不明である。詳細は土壤観察一覧表に記載した。

第5節 D地点の調査

0地点の北側に近接する水田を調査対象とし、便宜的にD地点とした。発掘方法はグリッド法とトレチ法を併用した。グリッドは他の地点と整合性を持たせ、磁北を基準に南北軸を設定し、南から3・4・5・6・7……とし、それに直交させて東西軸をA・B・C・D・E……とした。なお一辺は3mである。

検出された遺構は縄文時代後期前葉の敷石住居1軒・平安時代の住居址1軒・土壙2基・前者の住居址に付随するとと思われる、ピット37基である。

1 住居址

S B - 13

造 構 (第62~65図)

位 置 : B - 7 グリッドにおいて検出された。S X - 01 と S K - 1 に切られている。S K - 2 との切り合い関係は不明である。

検出状況 : 敷石の一部が検出されその存在が明らかとなった。土質の違いによるプランの検出はできなかった。敷石面を広げると、その周辺部から礫が検出された。南西方向は後世の搅乱を受け、敷石がみられない。周辺の礫はしっかり配置されたというものではなく、不安定な感じを受けた。また、南西方向の搅乱を受けた部分にも、礫は見られるが、本址に係わった礫と思われるものの、かなり移動しているのではないかと思われる。敷石と礫を実測後、これらを除去しピットの検出とサブトレチチを3本掘り込んで、敷石下の層序を明らかにした。

規模と形態 : 円形に並ぶ礫とピットの分布から、円形プランの、直径約6.2mの規模を有する敷石住居と推定される。敷石部は六角形を呈していたと思われるが、北西側の敷石が張り出し、周辺部を回る礫もこの部分で途切れている。敷石と周辺部を回る礫との間の空白部分はどのような構造になっていたか不明である。敷石の下部に更に敷石を敷く部分(図では青色)が見られるが、これは敷石を水平に安定させるための裏込めの石と考えられる。また、南西方向の礫の除去後に検出された、直列に並ぶ5個の礫(図では青色)は本址に係わるものか不明である。

覆 土 : 4層からなり、第I層は耕作土で黒褐色を呈し小礫を少量含んでいる。第II層は溶脱化した赤褐色土。第III層は茶褐色土の混入する、しまりのある黒色土で小礫を含む。第IV層は茶褐色土の混入する、しまりのある明黒色土で、第III層より大きめの小礫を含む。

床 面 : 六角形に鉄平石が敷かれていたと思われる。

炉 : 方形の石囲い炉であった可能性があり、ひび割れた平石一点が縁辺に認められた。掘り方は約90cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約25cmを測る。底部には深鉢形上器の底部が2点埋められ、焼土もみられた。

柱 穴 : 本址周辺からは37基のピットが検出されたが、周辺部の礫を除去して検出されたものがほとんどである。また、南西方向のピットは搅乱や地層の状態から、検出できなかった。この全ピットが本址に係わるものかは不明であるが、Pit-9・Pit-12・Pit-13・Pit-15・Pit-22・Pit-26の6基はその配列と深さから本址に係わる柱穴と考えられる。Pit-9周辺から炭化材が出土している。

サブトレンチの層序：

a層：黒色土（褐色土少量混入）・粘質 b層：暗黒色土・粘質 c層：黒色土（褐色土少量混入・中疊含有）・粘質 d層：褐色土・粘質 e層：黒色土・粘質 f層：砂疊層 g層：焼土 h層：黒色土と褐色土の混合・砂質 i層：灰褐色土・砂質 j層：灰褐色土（一部酸化）・砂質 k層：灰色（一部酸化） l層：褐色土（黒色土混入・疊含む）・粘質 m層：黒色土（褐色土少量混入・中疊含有） n層：灰色土・粘質 o層：灰黑色土（黄褐色土混入）・粘質 p層：灰黑色土（砂疊混入） q層：黒色土・粘質

遺物（第94～102図）

1は微隆起線に繩文（RL）を充填。2～4は条線を地文とする。5は縦位の長楕円の磨消繩文である。6は繩文（RL）と円形の刺突文。7は磨消繩文（LR）。8は充填繩文（RL）で口縁部内面に對の円形のボタン状の突起が付く。9は磨消繩文（RL）の渦巻文。10（Pit-15）11・12（P-6）・13は円あるいは渦巻文に充填繩文（LR）を施す。14は沈線の渦巻文。15～25は刻み目をもつ隆線を口縁部に巡らすものである。8の字状の貼付文や充填繩文（LR）を施すものも見られる。15の繩文は無節のしで、口縁部内面に沈線で加飾する。26は波状口縁で、波頂部に円形刺突と押圧痕を施す隆線が垂下する。27は沈線に8の字状の貼付文。28は隆線と貼付文のみで胴部は無文である。29～31（P-12）・32（P-11）～34（P-4）は充填繩文（LR）で三角形や菱形の幾何学的文様を施す。35は刻み目を施す4条の細い隆線に、2段の8の字状の貼付文を施す。胴部には充填繩文（LR）により、紐の絡むような文様を構成する。36（P-1）は充填繩文（LR）。37は口縁部内面に3条の沈線を巡らし、小波状の口縁は内側に折り込まれ、この内面に8の字状の貼付文を施す。38は帯状の充填繩文（LR）内に連続刺突文を施す。40は隆線に連続刺突文を施す。41は沈線により紐が絡むような文様を構成する。注口土器と思われる。42は沈線による文様構成。43は口唇部を折り返し、充填繩文（LR）される。44は「く」の字状に屈曲する口縁部で、磨消繩文（LR）される。45は充填繩文（LR）。46は磨消繩文（無節のL）で、沈線を「ノ」の字状の沈線で区切る。47は磨消繩文間に「の」の字状の沈線。48は沈線間に2条の沈線を左右交互に施す。49は無文の壺形土器。50は注口部。51（P-7）～54は注口土器の把手部である。55（P-4・5・7）は刻み目を施す隆線に8の字状の貼付文を施し、その下部に眼鏡状の充填繩文（LR）を施す。56（P-2）は網代底を有する無文土器。57（P-15）・58（P-16）は炉内に埋設されていた土器で、57は底部に木葉痕、58は網代痕を有する。59～62はミニチュア土器で、62は脚部と思われる。64は匙状の土製品である。10～40は堀之内式系の特徴を備えている。1～9はそれより古手であろう。41～47は加曾利式系の特徴を備えていると思われる。全体的には堀之内式系の新しい段階のものが多い。65（Pit-37）は浅鉢の口縁部で、刻み

目をもつ隣線を施す。66 (SK-2内出十) は押圧隆帯を口縁部に巡らせる。

土製品としては土偶脚部、石器類としては石鐵・打製石斧・磨製石斧・凹石・石匙・石棒・玉が出土している。詳細は遺構外出土遺物の石器の項及び石器観察一覧表に記載した。玉は敷石より下部から出土したので、本址に伴うものか断定できない。

SB-15

造 構 (第66図)

位 置 : TR-D トレンチにおいて検出された。

検山状況 : カマドと土器の出土によってその存在が明らかとなった。

規模と形態 : プランや壁は不明である。

覆 土 : 黒色土

床 面 : 堅い貼り床が一部認められる。

カ マ ド : 部材に利用された石と思われるものが認められ、内部から土師器が出土した。部材には一点の石皿が用いられていた。

柱 穴 : 不明

遺 物 (第102図)

1 は土師器の壊で、回転(右)糸切底未調整・内面黒色処理され、暗文状のヘラミガキが見られる。内面の一部に炭化物が付着する。2 も土師器の壊で、回転(右)糸切底未調整・内面黒色処理され「×」形の暗文が見られる。3 (カマド出土) は軟質須恵器の壊で、回転糸切底未調整である。4 は土師器の碗でロクロ成形・内面黒色処理される。5 は土師器の皿で、ロクロ成形・内面黒色処理され、「*」形の暗文が見られる。外面は水引き状のヘラミガキされる。6 (カマド出土) は土師器の甕で、ロクロ成形される。底部は平底で糸切痕が認められる。

2 土 壤 (第65図)

SK-1 : SB-13を切り、SX-01に切られる。SX-01の掘り方とも考えられるがはっきりしない。規模は土壤一覧表に記載。

SK-2 : SB-13との関係は不明。Pit-39が柱痕だとすると、その掘り方かもしれないがはっきりしない。規模は土壤一覧表に記載。

3 配石土壤 (第65図)

SX-01 : SB-13とSK-1を切っている。鉄平石を立てて囲んだ土壤の内部から焼骨が出土した。この鉄平石はSB-13のものを転用したものと思われる。焼骨は良好な焼け方

であり、残存状態も良い。遺物は堀之内式系の土器片が出土している。出土の焼骨については西沢寿見先生に鑑定をお願いした。

4 ピット（第65図）

ピット観察一覧表に記載した。

凡　　例

土壤・ピット観察一覧表の表記について

1. 大きさ

長軸、短軸の長さは平面図上で測り、深さは検出面から最深部までの垂線の長さを記した。土壤とピットの区別は主観的であり、数値的な区別はしていない。

2. 断面形

分類は阿久遺跡（『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』原村その5）の土壤の分類を参考にし、以下のように分類した。

- a. 深さと長径の比が1:3以上で、浅く断面形が方形または逆台形のもの。
- b. 深さと長径の比が1:3以上で、断面が丸みをもつものなどa以外のもの。
- c. 深さと長径の比が1:3~1:1で、断面形が方形または逆台形のもの。
- d. 深さと長径の比が1:3~1:1で、断面形が丸みをもつもの。
- e. 深さと長径の比が1:3~1:1で、段がつくかピットをもつもの。
- f. 深さと長径の比が1:1以下で、断面形が方形または逆台形のもの。
- g. 深さと長径の比が1:1以下で、断面形がf以外の形のもの。

3. 時　期

出土遺物のある場合は、無文のものを除き、可能な限り図化した。所産期については明記していない。

第2表 土壌・ピット観察一覧表

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	断面形	切り合 い 関 係	遺物・備考	
A地点							
SK-01	O-25	(90)×88×12	楕円形	b			
SK-02	O-24	104×102×20	円形	a			
SK-03	P-24	118×95×30	楕円形	c	SK-04	重複	
SK-04	P-24	"	"	"	SK-03	二段落ち	
SK-05	P-24	80×65×18	楕円形	b		疊	
SK-06	P-24	83×40×19	双円形	a			
SK-07	P-24	55×43×29	楕円形	c			
SK-08	P-23	56×55×25	円形	c			
SK-09	P-23	55×55×37	円形	c			
SK-10	O-24	53×50×29	円形	c			
SK-11	O-22	103×72×36	不整形	a		疊	
SK-12	O-22	60×50×30	円形	c			
SK-13	O-22	60×52×30	円形	c			
Pit-01	P-24	34×30×10	円形	a			
Pit-02	Q-24	35×30×19	円形	c			
Pit-03	Q-23	35×28×21	楕円形	c			
Pit-04	P-24	36×30×30	円形	c			
Pit-05	O-24	35×33×18	円形	c			
Pit-06	P-24	40×40×35	円形	c			
Pit-07	O-23	46×40×26	円形	c			
Pit-08	O-23	47×40×17	隅丸三角形	c		縄文土器	
Pit-09	O-23	50×35×8	楕円形	a			
Pit-10	O-22	44×43×9	円形	a			

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
B地点						
SK-01	T-15	90×80×59	不整円形	c	SK-19・21	SK-21を吸収
SK-02	V-15	58×55×28	円形	c		疊
SK-03	U-15	(203)×(115)×30	楕円形?	a		
SK-04	V-15	156×110×22	椭円形?	b		
SK-05	U-15	104×98×19	方形	a		
SK-06	U-16	95×80×18	不整形	a	SK-07	
SK-07	U-16	97×92×36	円形	c	SK-06	疊
SK-08	T-16	80×73×46	隅丸方形	c	Pit-02	Pit-02 消滅
SK-09	T-17	185×150×40	不整形	c		二段落ち
SK-10	U-16	84×73×22	円形	a		
SK-11	U-16	93×77×43	不整形	e		二段落ち
SK-12	T-17	75×70×48	円形	c		
SK-13	T-17	78×60×28	椭円形	e		二段落ち
SK-14	T-17	100×85×27	円形	a		
SK-15	U-17	84×84×15	方形	a		疊
SK-16	U-18	184×93×27	不整椭円形	a		疊
SK-17	U-19	95×95×18	円形?	a		
SK-18	V-16	115×95×16	椭円形	a		縄文土器・疊
SK-19	T-15	85×80×30	円形	c	SK-01・20・21	疊
SK-20	T-15	68×(26)×15	円形?	b	SK-19	
SK-21	T-15				SK-01・19	SK-01に吸収
SK-22	T-15	113×83×40	椭円形	e		二段落ち
SK-23	T-15	143×132×54	円形	c		
SK-24	S-15	98×90×34	不整形	c		
SK-25	R-15	155×146×20	不整形	a		疊
SK-26	S-19	152×110×48	不整形	e		疊・二段落ち

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い 関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
B地点						
SK-27	S-14	144×144×26	円形	a		疊
SK-28	S-14	95×55×16	梢円形	e		二段落ち
SK-29	T-14	110×88×25	梢円形	a		
SK-30	S-18	94×75×21	不整長方形	a		疊
SK-31	T-19	100×82×27	不整円形	a		疊
SK-32	I-8	106×78×29	不整形	b		疊
SK-33	I-9	137×137×38	円形	b		
SK-34	I-8	140×133×39	円形	a		
SK-35	K-9	101×92×69	円形	c		疊
SK-36	L-10	186×(60)×37	梢円形	e	SK-52	二段落ち
SK-37	L-10	70×67×51	不整方形	e		二段落ち・疊
SK-38	L-11	148×98×19	梢円形	b		疊
SK-39	欠番					
SK-40	K-12	108×80×34	不整形	d		疊
SK-41	L-12	130×114×61	円形	g		疊
SK-42	K-13	298×168×57	不整形	e		二段落ち
SK-43	K-11	120×84×35	不整形	e		二段落ち・疊
SK-44	K-9	171×104×47	隅丸長方形	e		二段落ち・疊
SK-45	J-9	229×197×21	円形	b	Pit-41・83	疊
SK-46	G-12	142×134×19	不整円形	a		疊
SK-47	I-16	101×80×52	不整形	o		二段落ち・疊
SK-48	I-15	177×105×26	不整形	e		二段落ち・疊
SK-49	I-15	188×113×26	不整形	b		疊
SK-50	H-14	252×177×14	不整梢円形	a		疊
SK-51	I-14	133×109×15	梢円形	b		疊
SK-52	L-10	131×117×53	不整方形	c	SK-36	疊

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
B地点						
Pit-01	U-14	144×(109)×55	不整円形?	e		縄文土器・二段落ち
Pit-02	T-16	消滅			SK-08	縄文土器(中期末)
Pit-03	U-15	33×32×14	不整円形	c		
Pit-04	U-15	33×32×16	円形	d		
Pit-05	U-15	30×30×18	方形	c	Pit-06	
Pit-06	U-15	30×28×17	円形	c	Pit-05	
Pit-07	欠番					
Pit-08	欠番					
Pit-09	T-16	48×37×17	椭円形	d		
Pit-10	T-16	26×25×11	円形	d		
Pit-11	T-15	33×27×27	円形	c		
Pit-12	T-16	34×30×8	不整円形	a		
Pit-13	T-16	34×27×7	椭円形	a		
Pit-14	欠番					
Pit-15	T-16	31×28×13	円形	c		
Pit-16	T-16	22×18×4	椭円形	a		
Pit-17	T-15	41×40×29	不整方形	c		二段落ち
Pit-18	U-15	27×17×15	椭円形	d		
Pit-19	S-15	37×36×14	円形	c		
Pit-20	T-15	48×37×9	不整形	a		縄文土器(後期)
Pit-21	T-15	20×18×7	円形	d		
Pit-22	S-15	36×28×19	椭円形	c		
Pit-23	R-15	34×31×27	円形	c		
Pit-24	S-14	28×20×13	椭円形	c		
Pit-25	S-14	51×49×17	方形	c		縄文土器(後期)
Pit-26	S-14	34×32×11	円形	a		縄文土器

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
B地点						
Pit-27	S-14	35×27×24	楕円形	c		縄文土器
Pit-28	T-14	32×30×23	円形	c		縄文土器(後期)
Pit-29	T-14	29×25×16	円形	c		
Pit-30	S-14	23×20×21	円形	d		
Pit-31	Q-19	47×42×11	不整円形	a		
Pit-32	Q-19	44×40×24	方形	e		二段落ち
Pit-33	S-14	53×50×30	円形	d		
Pit-34	欠番					
Pit-35	T-15	31×23×11	楕円形	a		縄文土器
Pit-36	I-8	48×46×18	円形	c		
Pit-37	I-8	(35)×(27)×16	楕円形?	c		
Pit-38	J-8	37×34×9	方形	a		
Pit-39	J-9	36×31×9	方形	a		
Pit-40	J-9	41×35×15	方形	c		
Pit-41	J-9	31×29×10	不整円形	a	SK-45	
Pit-42	J-9	29×29×11	円形	e		二段落ち
Pit-43	K-9	50×45×9	不整円形	a		
Pit-44	K-9	49×34×20	楕円形	d		疊
Pit-45	K-9	31×25×9.5	楕円形	a		疊
Pit-46	K-9	45×40×30	楕円形	c		
Pit-47	K-9	19×17×7	円形	c		
Pit-48	K-9	32×29×13	不整円形	c		
Pit-49	K-9	52×38×15	楕円形	e		疊・二段落ち
Pit-50	K-9	34×30×9	円形	a		
Pit-51	L-9	60×50×27	楕円形	c		
Pit-52	K-10	23×18×14	楕円形	c		
Pit-53	K-10	32×32×19	円形	c		縄文土器

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
B地点						
Pit-54	K-10	38×38×9	圓丸方形	a		
Pit-55	K-10	60×60×44	不整円形	e		縄・二段落ち
Pit-56	K-10	70×44×32	椭円形	e		二段落ち
Pit-57	K-10	43×43×11	圓丸方形	a		
Pit-58	L-10	30×30×28	円形	d		
Pit-59	K-10	40×34×15	椭円形	b	Pit-60	
Pit-60	K-10	56×44×37	"	d	Pit-59	
Pit-61	K-11	40×34×15	不整円形	b		
Pit-62	K-10	38×28×15	椭円形	d		縄文土器
Pit-63	K-11	60×46×19	不整形	a		
Pit-64	K-11	63×38×10	双円形	b		
Pit-65	L-10	66×52×50	椭円形	d		縄
Pit-66	L-10	36×34×28	不整円形	e		二段落ち
Pit-67	L-10	40×40×28	円形	e		二段落ち
Pit-68	L-10	60×50×12	椭円形	b		
Pit-69	L-10	(40)×40×13	不整椭円形	b	Pit-70	
Pit-70	L-10	44×(38)×16	"	d	Pit-69	
Pit-71	L-10	40×40×24	円形	d		
Pit-72	L-11	40×30×21	椭円形	d		縄・縄文土器
Pit-73	L-11	66×32×14	不整形	b		縄文土器
Pit-74	L-11	68×44×22	椭円形	e		二段落ち
Pit-75	L-11	24×24×37	円形	e		二段落ち
Pit-76	L-11	40×40×40	不整方形	c		縄文土器
Pit-77	M-11	79×75×10	不整円形	b		
Pit-78	M-12	45×45×28	円形	e		縄文土器・黒曜石・ 二段落ち
Pit-79	M-12	80×45×39	椭円形	e		縄文土器・三段落ち
Pit-80	L-12	64×50×34	椭円形	c		

遺構番号	出 土 グリッド	大 き さ (cm)	平 面 形	断 面 形	切り 合 い 関 係	遺 物・備 考
		長 軸 × 短 軸 × 深 さ				
B地点						
Pit-81	L-11	65×45×28	椭 圆 形	d		
Pit-82	L-12	(90)×70×16	椭 圆 形 ?	b		
Pit-83	J-9	45×35×27	椭 圆 形	d	SK-45	
Pit-84	J-10	64×45×4	不整長方形	a		疊
Pit-85	J-10	110×45×6	不 整 形	a		疊
Pit-86	J-11	50×35×16	不整長方形	a		疊
Pit-87	欠 番					
Pit-88	J-11	90×75×35	不 整 形	e		三段落ち
Pit-89	"	"	"	e		"
Pit-90	"	"	"	e		"
Pit-91	L-13	64×54×7	椭 圆 形	a		
Pit-92	欠 番					
Pit-93	欠 番					
Pit-94	K-13	56×40×13	椭 圆 形	b		縄文土器
Pit-95	K-14	(30)×20×16	椭 圆 形 ?	d	SK-42 Pit-96	
Pit-96	K-14	18×18×3	円 形	b	Pit-95	
Pit-97	K-14	30×24×23	椭 圆 形	e		二段落ち
Pit-98	K-14	24×24×5	円 形	b		
Pit-99	K-14	48×47×7	椭 圆 形	b		
Pit-100	L-13	58×50×13	椭 圆 形	a		縄文土器(後期)
Pit-101	H-11	(90)×(53)×8.5	円 形 ?	b	S B-09	
Pit-102	H-11	85×81×24	円 形	b	Pit-103	縄文土器(後期)・疊
Pit-103	H-11	(74)×45×19	長 方 形 ?	b	Pit-102	縄文土器・疊
Pit-104	H-11	98×75×19	不整椭圆形	b		疊
Pit-105	H-13	92×(71)×29	椭 圆 形	e		縄文土器・疊・二段 落ち
Pit-106	F-12	93×(70)×14	不整椭圆形	a	Pit-107	縄文土器(後期)
Pit-107	G-12	64×(64)×15	円 形 ?	a	Pit-106	疊

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
B地点						
Pit-108	F-12	(43)×(23)×15	椭円形?	a		縄
Pit-109	L-16	90×70×23	不整椭円形	b		縄文土器
Pit-110	K-16	119×91×13	不整椭円形	a		縄文土器(後期)
Pit-111	J-13	115×111×21	不整方形	b		縄文土器(後期)
Pit-112	K-14	40×25×14	椭円形	d		縄文土器
Pit-113	J-14	97×50×19	双円形	b		縄文土器
Pit-114	K-15	70×56×19	不整長方形	b		無文土器(後期)
C地点						
SK-01	G-9	105×100×53	円形	c	SB-07	
D地点						
SK-1	B-6	130×100×?	長方形?	?	SX-01	
SK-2	B-6	(110)×94×?	椭円形?	?	Pit-23・25・35	
Pit-1	C-8	26×25×34	円形	f		
Pit-2	C-8	23×22×32	円形	f		
Pit-3	C-7	114×78×10	不整椭円形	a	Pit-4	
Pit-4	C-8	22×21×36	円形	f	Pit-3	
Pit-5	B-8	33×33×19	円形	c	Pit-6	
Pit-6	B-8	(16)×20×10	円形?	c	Pit-5	
Pit-7	B-7	37×32×30	円形	c		
Pit-8	B-7	52×38×20	椭円形	c		縄
Pit-9	B-8	78×47×77	不整椭円形	c		縄
Pit-10	B-8	73×36×28	椭円形	e		縄・二段落ち
Pit-11	B-7	29×25×25	円形	c		
Pit-12	A-7	62×44×58	椭円形	c		縄
Pit-13	A-7	45×44×28	円形	c		
Pit-14	A-6	(78)×(62)×34	椭円形?	e		縄・二段落ち
Pit-15	A-6	43×37×40	円形	c		

遺構番号	出土 グリッド	大きさ(cm)	平面形	断面形	切り合 い関 係	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ				
D地点						
Pit-16	B-6	33×25×10	楕円形	a		
Pit-17	A-6	30×23×25	楕円形	c		
Pit-18	A-6	25×22×10	円形	c		
Pit-19	A-6	34×30×24	円形	e		二段落ち
Pit-20	A-6	32×25×4	楕円形	a		
Pit-21	A-6	73×63×67	円形	c		
Pit-22	B-6	47×43×51	円形	f		
Pit-23	B-6	50×42×24	円形	d	SK-2	
Pit-24	B-6	42×35×42	円形	e		二段落ち
Pit-25	B-6	48×30×28	楕円形	c	SK-2	
Pit-26	B-6	38×37×26	円形	d		
Pit-27	C-7	20×20×30	円形	f		
Pit-28	C-7	31×31×48	円形	f		
Pit-29	C-7	32×30×22	円形	c		
Pit-30	C-8	46×45×48	円形	g		
Pit-31	C-8	67×58×22	円形	b		
Pit-32	C-8	93×68×18	楕円形	a		
Pit-33	C-8	43×39×16	円形	c		
Pit-34	B-6	60×55×55	円形	c		
Pit-35	B-6	35×34×26	円形	c	SK-2	
Pit-36	B-6	33×27×15	円形	c		
Pit-37	B-7	(38)×40×(25)	長方形?	c		

第3図 土壌・ピット層序観察一覧表

遺構番号	色調・土質	遺構番号	色調・土質
A 地点		Pit-09	I : 黒色土 II : 茶色土
SK-01	I : 黒色土黄褐色混じり	Pit-10	I : 黒色土 II : 茶色土
SK-02	I : 黒色土 II : 黒色土茶色土混じり	B 地点	
SK-03	I : 黒色土黄色粒混じり	SK-01	I : 黒色土 II : 茶色土黒色土の混合
04	II : 黒色土砂礫質 III : 黒色土		III : 黄色土 IV : 黒色七茶色土混じり
SK-05	I : 黒色土茶色土混じり		V : 茶色土 VI : 茶色土黒色土混じり
SK-06	I : 黒色十茶色土混じり		VII : 黒色掛かった黄色土
	II : 酸化した土	SK-02	I : 黒色土砂礫混じり
SK-07	I : 黒色土茶色土混じり		II : 黒色土黄色土混じり
SK-08	I : 黒色土		III : 茶色土 a : 黄色土ブロック
SK-09	I : 黒色土	SK-03	I : 表土 II : 黒色土黄褐色土混じり
SK-10	I : 黒色土		III : 黒色土 a : 黄色土ブロック
SK-11	I : 黒色土	SK-05	I : 黒色土炭化物少量含む
	II : 黒色土茶色土混じり		II : 黒色土黃褐色土混じり炭化物含む
	III : 茶色土黄色土混じり		III : 茶色土 IV : 茶色土黃褐色土混じり
SK-12	I : 黒色土 II : 茶色土	SK-06	I : 黒色土燒土・炭化物少量含む
SK-13	I : 黒色土	07	II : 黄色土炭化物少量含む
Pit-01	I : 黒色十黄色土と細縛混じり		III : 茶色土
Pit-02	I : 黒色土細縛混じり	SK-08	I : 黒色土黄色粒混炭化物少量含む
	II : 茶色土		II : 黒色土黄色土混じり
	III : 黒色土砂質		III : 黒色土炭化物含む
Pit-03	I : 黒色土細縛混じり		IV : 黄色掛かった黒色土 V : 茶色土
Pit-04	I : 黒色土茶色土ブロック混じり	SK-10	I : 黒色土 II : 黄色土
Pit-05	I : 黒色土	SK-11	I : 黒色十 II : 黄色土黒色土混じり
Pit-06	I : 黒色土	SK-12	I : 黄色土黒色土混じり
Pit-07	I : 黒色土		II : 黑色土黄色土混じり
Pit-08	I : 黒色土茶色土ブロック混じり		III : 黑色土黄色土の混合 V : 黄色土
	II : 茶色土		IV : 黑色土黄色粒混じり VI : 黑色土

遺構番号	色調・土質	遺構番号	色調・土質
SK-13	I : 黒色土茶色土混じり II : 黒色土 III : 黄色土	SK-27	I : 黒色土 II : 黒色土炭化物含む III : 黄色土
SK-14	I : 黒色土黄色粒混じり II : 黒色土黄色土混じり III : 黄色土黑色土少量混じり		IV : 茶色土黄色土少量混じり V : 黒色土茶色土混合 VI : 茶色土黑色土混じり VII : 茶色土砂質
SK-15	I : 黒色土 a : 黄色土ブロック		
SK-17	I : 黒色土	SK-28	I : 黒色土 II : 黒色土黄色土混じり
SK-18	I : 茶色土 II : 黒色土 a : 黄色土ブロック		III : 黄色土黑色土少量混じり IV : 黄色土砂質
SK-19	SK-01をみよ ~21	SK-29	I : 黒色土炭化物少量含む II : 黄色土黑色土混じり
SK-22	I : 黒色土黄色土混じり II : 茶色土 III : 黒色土 IV : 黄色土	SK-31	I : 黒色土 II : 灰黄色土 III : 灰色掛かった茶色土
SK-23	I : 黒色土黄色土少量混じり II : 黒色土 III : 茶色土 IV : 黄色土 a : 炭化物		IV : 灰色掛かった黒色土 V : 灰色土砂質
SK-24	I : 黄色土茶色土混じり II : 黑色土黄色土少量混じり III : 黑色土 IV : 黑色土黄色粒混じり V : 黄色土黑色土混じり VI : 黄色土	SK-32	I : 黒色土茶色土混合 II : 茶色土 III : 黄色土
SK-25	I : 黒色土茶色土混じり II : 黒色土 III : 灰色土砂質 IV : 黑色土灰色土混じり	SK-33	I : 黒色土炭化物多量に含む II : 黒色土黄色土少量混じり III : 黄色土ブロック
SK-26	I : 酸化土黑色土少量混じり II : 灰色掛かった茶色土 III : 黑色土茶色土混じり IV : 黑色土 V : 灰色掛かった茶色土	SK-34	I : 黒色土 II : 黄色土
		SK-35	I : 黒色土黄色土少量混じり II : 砂跡 III : 黑色土 IV : 茶色土 V : 黄色土黑色土少量混じり
		SK-36	I : 黄色土黑色土少量混じり II : 黑色土黄色土混じり III : 黄色土茶色土混じり IV : 黑色土茶色土混じり
		SK-37	I : 黒色土茶色土混じり II : 黑色土 III : 茶色土黑色土混じり

遺構番号	色調・土質	遺構番号	色調・土質
SK-38	I : 茶色土 II : 黒色土 III : 黄色土黒色土少量混じり IV : 黄色土	Pit-33	I : 黒色土
		Pit-36	I : 黒色土茶色土混合 II : 黑色土黄色土混じり III : 黄色土茶色土混じり IV : 黄色土砂質
SK-41	I : 茶色土酸化土混じり II : 黑色土茶色土混じり III : 黑色土炭化物多量に含む IV : 茶色土 V : 黑色土黄色土ブロック混じり VI : 黄色土 VII : 黑色土砂混じり炭化物多量含有	Pit-37	I : 黑色土 II : 茶色土 III : 黄色土砂質
		Pit-38	I : 黑色土 II : 茶色土
		Pit-39	I : 黑色土 II : 黄色土
		40	
SK-42	I : 茶色土 II : 黑色土黄色土少量混じり III : 茶色土黒色土少量混じり IV : 黄色土黒色土少量混じり V : 黑色土 VI : 黑色土黄色ローム粒混じり	Pit-41	I : 黄色土黒色土混じり II : 黄色土黑色土混じり III : 黄色土
		Pit-42	I : 黑色土 II : 黄色土黑色土混じり III : 黄色土
		Pit-43	I : 黑色土 II : 黄色土
		Pit-44	I : 黑色土 II : 黑色土黄色土混じり III : 黄色土
SK-43	I : 茶色土酸化土混じり II : 茶色土黄色土混じり III : 黄色土	Pit-45	I : 黄色土黒色土少量混じり II : 茶色土 III : 黄色土 IV : 黄色土黒色土混じり砂質
SK-44	I : 灰色掛かった黒色土 II : 黑色土黄色土少量混じり III : 黑色土 IV : 黄色土 V : 砂礫 VI : 灰色掛かった黄色土ブロック	Pit-48	I : 黑色土 II : 黄色土
		Pit-49	I : 黑色土 II : 黄色土砂質 III : 黄色土黒色土少量混じり砂質
		Pit-50	I : 黑色土 II : 黄色土黒色土少量混じり炭化物含む
SK-45	I : 黑色土茶色土混じり II : 茶色土 III : 灰色掛かった黄色土	Pit-51	I : 黑色土 II : 黑色土黄色土混じり III : 黄色土
SK-52	SK-36をみよ		
Pit-01	I : 表土 II : 黑色土 III : 茶色土 IV : 黑色土茶色土混じり	Pit-54	I : 黑色土茶色土混じり II : 黄色土黒色土少量混じり
Pit-25	I : 黑色土黄色土混じり II : 黑色土 III : 黄色土砂質		

遺構番号	色調・土質	遺構番号	色調・土質
Pit-55	I : 茶色土炭化物含む II : 黒色土黄色土混じり III : 黒色土炭化物含む	Pit-79	I : 黒色土茶色土混じり II : 茶色土黄色土ブロック混じり III : 黄色土茶色土少量混じり
Pit-56	I : 茶色土 II : 黒色土茶色土少量混じり	Pit-80	I : 灰色掛かった茶色土 II : 茶色土黒色土混じり III : 茶色土炭化物混じり
Pit-57	I : 茶色土 II : 黒色土茶色土混じり III : 黄色土黒色土少量混じり	Pit-83	I : 黒色土黄色土混じり II : 黒色土炭化物少量含む III : 黄色土黒色土混じり
Pit-58	I : 黒色土茶色土少量混じり II : 黒色土	Pit-88	I : 灰色掛かった黒色土酸化土混じり II : 黑色土黄色土混じり III : 黑色土 IV : 黄色土
Pit-59	I : 茶色土 II : 茶色土黄色土混じり	89	
Pit-60	I : 茶色土 II : 黒色土 III : 灰色掛かった黄色土	Pit-94	I : 黒色土黄色土少量混じり II : 茶色土黄色土混合 III : 黄色土黒色土混じり
Pit-61	I : 灰色掛かった黒色土茶色土混入 II : 茶色土黄色土混じり	Pit-97	I : 黒色土 II : 黑色土黄色土ブロック ク混じり III : 黄色土
Pit-63	I : 茶色土酸化土混じり II : 灰色掛かった黄色土	Pit-99	I : 黒色土 II : 黄色土黒色土混じり
Pit-64	I : 茶色土酸化土混じり II : 灰色掛かった茶色土 III : 黒色土	Pit-100	I : 黒色土酸化土混じり II : 灰色掛かった黒色土黄色土混じり III : 黄色土
Pit-65	I : 黒色土	Pit-102	I : 黄色土茶色土混じり II : 黑色土黄色土混じり
Pit-67	I : 黑色土 II : 黑色土黄色土少量混じり III : 黄色土	103	II : 黑色土黄色土混じり III : 黄色土 IV : 黑色土砂質
Pit-68	I : 黑色土黄色土混じり II : 黄色土	Pit-104	I : 灰色掛かった黒色土 II : 茶色土 III : 黄色土茶色土混合
Pit-71	I : 黑色土黄色土混じり II : 黄色土黒色土少量混じり	Pit-106	I : 灰色掛かった黒色土 III : 黄色土黑色土混じり
Pit-72	I : 黑色土黄色土少量混じり II : 茶色土酸化土混じり III : 黄色土	107	II : 灰色掛かった黄色土 III : 黄色土黑色土混じり IV : 黄色土黑色土混じり V : 茶色土黑色土混じり
Pit-73	I : 黑色土黄色土少量混じり II : 黄色土		
Pit-76	I : 黑色土茶色土混じり II : 茶色土黄色土混じり		
Pit-77	I : 黑色土 II : 黄色土		
Pit-78	I : 黑色土茶色土の混合 II : 茶色土黄色土混じり III : 黄色土		

第6節 遺構外出土遺物

1 土器 (第103~116図)

遺構外からはコンテナ100箱に及ぶ土器が出土している。その数は示せないが、無文土器多くの割合を占めている。本紙では主な縄文土器の拓影と実測図を掲載した。最も古いものは結節状浮線文の施される諸磯C式系の土器である。次に現れるのは2の唐草文系土器である。いずれも数は少なく、遺構も検出されていない。数が増加するのは中期末の加曾利E式系のものである。後続の称名寺式系との線は11・12あたりで引けるかも知れない。13~22は称名寺式系のものである。28~30は同式系の突起である。33は三十稻場式系のものである。34が後続の堀之内式系との境目ではなかろうか。35は器形は中期的であるが、8の字状の貼付が後期なのでここに置いたが、中期のものかもしれない。36~47が堀之内式系のものと思われるもので、45は次の時期に入るかもしれない。48~62が加曾利B式系と思われるものである。縄文時代の土器はこの時期でなくなり、それ以降は弥生時代後期の箱清水式系土器、平安時代10世紀代の土師器、灰釉陶器、近世陶磁器等があるがここでは割愛する。

2 石 器

今回の発掘調査で出土した主な石器類の点数は以下のとおりである。

A 石 鐵	126点	(21.0%)	B 打製石斧	207点	(34.4%)
C 磨製石斧	37点	(6.2%)	D 石 船	3点	(0.5%)
E 石 錐	11点	(1.8%)	F 刃 器	11点	(1.8%)
G 磨 石 等	130点	(21.6%)	H 多 孔 石	28点	(4.7%)
I 石 盆	12点	(2.0%)	J 砥 石	11点	(1.8%)
K 石 棒	15点	(2.5%)	L 石 剣	1点	(0.2%)
M 軽石製石器	7点	(1.2%)	N そ の 他	2点	(0.3%)
			総 数	601点	(100.0%)

A 石鐵 (第117~119図)

総数126点出土している。製品は欠損品を含め109点、未製品は17点である。製品と未製品には欠損品や失敗品なども含まれており、その判別は困難で主観的にならざるを得ず、この数値は概数と考えて欲しい。また、34・35の様な石錐と判別しにくいものもある。製品中有茎は14点、無茎は81点である。石材は黒曜石製98点、チャート製22点、頁岩製4点、メノウ製1点、不明1点

である。

B 打製石斧 (第120~124図)

破片を含め総数207点が出土している。完形品は43点を数える。特に7は楔形を呈し、両極に剥離面をもつ。42は抉入部をもつ。この二者は打製石斧の範疇外の別の機能有するものと思われる。

C 磨製石斧 (第125・126図)

総数37点出土している。1点を除きすべて定角式である。小形の盤状のものから大形のものまで、バラエティーに富む。

D 石 鍤 (第127図)

総数3点出土している。いずれも横形のものである。

E 石 錐 (第128図)

総数11点出土している。チャート製7点、黒曜石製3点、真岩製1点を数える。つまみの有無がある。

F 刃 器 (第127~129図)

上記以外の刃部を有する石器を一括して扱った。総数11点出土している。

第127図-4は縦長の剥片の長軸側辺部に、鋸歯状の刃部を付けるものである。第128図-5は搔器状の刃部をもつものである。第128図-11は縦長の剥片の長軸側辺部に、連続的な調整によって刃部を作り出している。第129図-1~9は大形で、縦長剥片の長軸側辺部を刃部とするものである。

G 磨石・凹石・敲石・丸石 (第130図・写真図版28)

総数130点出土し、分類することなく一括して扱った。完形109点、破片21点で、ほとんどが安山岩製である。

H 多孔石 (写真図版34)

総数28点出土している。いずれも人頭大の安山岩の自然隕で、主に平坦面を利用して、数個から数10個の凹みがつけられている。

I 石 盆 (第131・132図)

総数12点出土している。

1(A・Q-28)は先端部を欠くが長方形を呈し、有脚のものである。2(B・L-10)は有脚のものの基部の破片で、脚部に3箇所の凹石状の凹みが認められる。3(B・L-7)は有脚のものの先端部の破片である。4は基部の破片で砂岩製である。5(A)は角張った偏平な自然隕を用いて、2箇所に磨面が認められる。6(A・P-21 S-1)は基部を欠くが梢円形を呈する。7(D・SB-15

S-1)は直方体の自然礫を用い、磨面のほかはあまり手を加えていない。先端部磨面を欠く。平安時代のカマドの部材に転用されていたと思われる。8(A・R-15)は基部の破片で側面中央部がくびれる達磨形のものと思われる。配石群の中から出土した。9(A・P-18)は小形円形のもので唯一の完形品である。10(0・コ-12)は基部の破片である。11(A・P-26)は欠損するが、小形の円形を呈するものと思われる。4以外は安山岩製である。

J 砧 石 (第133図)

破片等を含め11点出土している。

1(B・T-14)は欠損するが、中央部に縦長3条の研磨痕が認められる。2(B・SK-10 S-1)は欠損するが、表裏面と左右側面に研磨痕が認められる。3(0)は3条の棒状の溝と凹みをもつ。4(A・Q-26)は槍先状を呈し、左右側面を両刃状に研磨し、右側面は特に鋭利で刃部を形成しているかの様である。基部は剥離痕を残す。5(A・Q-17)は欠損するが、分銅形を呈していたものと思われる。中央部が凹み、側面の周囲を両刃状に研磨している。6(A・U-24)は不整円形を呈し、下端側面を両刃状に研磨している。いずれも砂岩製で、4~6は両刃状に研磨され砥石の範疇に入れてよいかどうか疑問が残る。そのほかは図示していないが、板状で表裏面に研磨痕が認められるもの、平安時代のものと思われる、大形で鋭利な刃物痕を多く残すもの、江戸時代以降のものと思われる、鋸引き痕の残る変質流紋岩製の棒状のもの等がある。

K 石 棒 (第134図・写真図版34)

总数15点出土し、いずれも欠損している。直径8cmを越える大形品はほとんどB地点出土で、無頭のものと思われる。図示したのは小型品のみである。

1(A・SB-08 S-1)は緑泥片岩製で、器面はよく研磨されている。2(D・SB-13 S-14)は緑泥片岩製で先端部がやや細まる。4と接合する。3(0・コ-19)は緑泥片岩製で、基部と思われる部分に敲打痕が残り、やや窄まっている。また、部分的に敲打痕が残る。4(B・N-23)は緑泥片岩製で、先端部と基部を欠く。2と接合する。5(A・P-24 N-19接合資料)は絹雲母片岩製で、先端部は丸まり断面は梢円形を呈する。6(B・TR-9)は絹雲母片岩製である。7(B・G-10)は緑泥片岩製の有頭のものである。器面はかなり脆弱である。

L 石 剣 (第134図)

1点出土している。8(A・V-25)は頁岩製で、厚さは4mmと薄く、明確な刃部は形成されない。研磨痕が観察される。

M 軽石製石器 (第133図)

用途不明の軽石製のものを一括した。总数7点出土し、有孔のもの3点、無孔のもの2点、不明のもの2点を数える。

7(B・L-18)は長楕円形を呈し、中央部と基部とのほぼ真ん中に穿孔される。8(B・J-17)は横形を呈し、基部近くに穿孔される。9(B)は半分欠損するが、定角式磨製石斧状を呈するものと思われる。10(B・G-9)は短圓形を呈すると思われるが、一部欠損する。穿孔の有無は不明である。11(B・M-9)は長方形を呈し、穿孔されていない。12(B・L-18)は兩垂形を呈し、穿孔されていない。13(B・L-13)は橢形を呈するものと思われる。穿孔の有無は不明である。

N その他(第133図-14・第128図-12)

14は用途不明のもので、絹雲母片岩製で、ほぼ隅丸方形を呈する。各辺は欠いたりあるいは自然の凹みを利用して、抉ぐられており、擦痕も一部見受けられる。12は棒状の石材を剥離によって整形し、更に研磨して調整している。先端部はやや尖り、基部に打製によるえぐりをいれ、つまみ状の小突起を作り出している。実用的な石器というよりは、垂飾りのような装飾品を想定したい。

3 土製品(第135~138図)・石製品(第134図)

A ミニチュア土器(第138図)

1(A・SB-08)は口縁部を欠く、口縁部下と胴部下に刻み目をもつ隆線を巡らし、その間に2本の同様の隆線を連結させる。2(A・W-31)は口縁部の一部が突起し、穿孔される。網代底を有する。3(A・N-20)は口縁部が窄まり、網代底を有する。4(A・K-11)は胴部の張る無文のもの。5(A・O-26)は台付の無文のもの。6(A・V-28)は球形の無文のもの。7(B・SB-05)は高環状のもの。8(O・キ-7)は無文の注口土器で注口部と把手部を欠く。9(O・キ-7)は浅鉢形のものである。

B 鍤形土製品(第138図)

10(D・E-12)は鍤部は欠損する。11(A・S-27)は柄部は環状、鍤部は深く、長楕円形を呈する。SB-13からは柄部に孔を有するほぼ完形のものが出土している。

C 土偶(第135~137図)

いずれも破片で総数14点出土している

1(A・N-30)は頭部で、後頭部が一部欠損する。顔はハート形に近く、鼻と額をY字状の隆線で表現する。目は沈線で切れ長に表現する。鼻孔は隆線の基部に、刺突の一孔で表現されている。口孔も同様である。2(TP-31-1)は胴部下半及び腕部が欠損する。顔は頸部を欠損するが、1と同様の表現方法である。頭部後ろ側面が穿孔される。胸部は乳房が表現される。3(A・P-9)は胸部で左肩部が残る。乳房が表現される。4(A・Q-25)は腕部と思われ、上面に沈線で同心円と方形の区画が施される。5(B・M-15)は下半身で、左脚部を欠損する。身体中央に沈線を

垂下させ、不規則な曲線を配する。6(A)は肩部から腕部の破片で、3本の沈線で指を表現している。肩部にはL Rの縦文を充填する沈線が施される。7(A・Q-28)は頭部(顔面)と乳房が欠落した痕跡が残る胸部。刺突で表現された胸から、胸にかけて沈線を施す。背中に沈線で文様を施す。股から胸部を貫き孔を穿つ。8(A・P-17)は胸部と思われ破片で、8の背中の文様と類似する沈線が施される。9(A・Q-26)は胸部下半の破片と思われる。表裏面に十文字と三角形の沈線が施される。10(D・SB-13)は左脚部で、沈線によって指を表現する。11(B・F-9)は脚部である。12(A)・13(A・O-28)は同一個体と思われ脚部の破片で、側面に長椭円形の区画を施し、R Lの縦文を充填する。14(A・N-22)は右脚部の破片で、5本の沈線で指を表現する。15(D・SB-13)は脚部の破片である。

D 土器片円盤(写真図版27)

総数23点が出土している。完形品は18点で、最小は 2.5×2.4 cm、最大は 5.0×4.7 cmを測る。破損品の中には両面から穿孔途中のものが含まれる。

E 玉類(第134図)

材質と形状の異なるものが3点出土している。

9(D・SB-13 S-16)は黒褐色から黒黄色を呈する滑石製の玉で、楕円形を呈し、二箇所に穿孔され、両面穿孔である。下端側面に溝が彫り込まれる。10(A・Q-24)はヒスイ製で兩垂形を呈する。片面穿孔で、穿孔部の直径は4.9mmを測るが、実際の貫通部分は 2×0.8 mmを測る。断面は凹字状を呈し、管錐で穿孔したものと思われる。11(B・F-9)は緑泥片岩製で、両面穿孔される。

F 磨

金原川水系では産出しないチャートの凹疊が数10点出土している。それ自体で何らかの機能を有していたか、また石器の素材となっていたかは不明である。千曲川から賣されたものであろう。

第4表 遺構外出土土器観察表

図版番号	出土地点	部位・器形	文様構成	備考
103-1	C・SB-07	体部	筋節浮線文を密に施す	
2	A・R-26	深鉢	波状口縁・U縁部にS字状の沈線 ・縦位の2重の隆線間に横位の沈線充填	
3	Z	胴部	4条の沈線を垂下させ、空白部に繩文(RL)充填	
4	B・K-6	深鉢 体部	上下二段の長楕円区画内に繩文(RL)充填・炭化物付着	
104-5	B・K-6	深鉢	口縁部欠損縦位長楕円の磨消繩文(無筋のR)	
6	B・K-7	双耳痕状の鉢	磨消繩文(RL)・把手部外面に繩文(RL)	
105-7	A・P-26	深鉢	口縁部無文帯・磨消繩文(RL)	
8	B・L-8	深鉢 脚部	2重隆線・繩文(LR)充填	
9	B・M-8	深鉢	口縁部無文帯・隆線・繩文(LR)	
106-10	B・S-14	深鉢	口縁部無文帯・隆線・繩文(RL)	
11	B・K-8	深鉢	口縁部無文帯・隆線・繩文(無筋のR)	
12	B・M-8	深鉢	口縁部無文帯・隆線・沈線内繩文(RL)充填	
13	B・M-7	深鉢	波状口縁・口縁部無文帯・沈線区画外繩文(LR)充填	
14	B・M-7	深鉢 脚部	沈線間繩文(無筋のR)充填	
15	A・R-28	深鉢胴下半部	磨消の逆J字状文を下端で区画・磨消繩文(RL)	
107-16	B・N-10	深鉢	口縁部無文帯・沈線内繩文(RL)充填	
17	B・M-9	深鉢 頭部	磨消繩文(RL)・沈線	
18	A・Q-27	深鉢 頭部	磨消繩文(無筋のL)	
19	B・M-8	深鉢	逆J字状文?・部分的に磨消繩文(無筋のL)	
20	B・N-10	深鉢	J字状文を下端で区画・繩文(RL)充填	
21	B・N-10	深鉢 脚部	渦巻文?・磨消繩文(RL)?	
22	B・M-8	深鉢 脚部	渦巻文?・繩文(無筋のR)充填	
23	B・N-10	深鉢 脚部	沈線内に繩文(RL)充填・垂下する隆線に押圧痕	
108-24	B・L-8	深鉢 脚部	沈線の渦巻文・垂下する隆線に押圧痕(1条)	
25	O・キ-8	深鉢 脚部	沈線	
26	O・ク-16	深鉢 脚部	沈線の渦巻文	
27	A・P-27	深鉢胴下半部	垂下する沈線	P-1
109-28	A・P-27	波状口縁	8の字状の突起の上部欠損・微隆起線上に円形刺突・繩文(RL)	
29	B・V-24	波状口縁	半捻転状の突起・沈線間に繩文(RL)充填	
30	A・R-27	波状口縁	機螺旋状の突起・繩文(RL)充填	
31	B・L-7	口縁部	押圧隆帯	
110-32	A・V-28	口縁部	押圧隆帯	

図版番号	出土地点	部位・器形	文様構成	備考
109-33	B・L-9	口 縁 部	把手・刺突文	
110-34	B・M-7	口 縁 部	突起・渦巻文・磨消繩文(L.R)	
35	B・N-10	波状口縁	8の字状の突起(4単位)	
36	A・T-25	胴下半部	垂下する隆線に押圧痕・磨消繩文(L.R)?・網代底	
37	B・G-9	胴下半部	沈線の渦巻文・充填繩文(L.R)	
111-38	B・L-12	浅鉢	刺突文・沈線の渦巻文と三角文・充填繩文(L.R)、SB-06に伴うものか	P-1
39	D・E-12	深鉢	波状口縁(3単位)・刻み目をもつ隆線・沈線の渦巻文・充填繩文(L.R)	
112-40	B・N-13	口 縁 部	突起に穿孔・刻み目をもつ隆線に8の字状貼付文 ・幾何学的文様・充填繩文(L.R)	
41	A・T-25	口 縁 部	菱形の沈線・充填繩文(L.R)・外面炭化物付着	SI-III社
42	A・T-25	口 縁 部	刻み目をもつ隆線に8の字状の貼付文・集合沈線 ・充填繩文(L.R)	SI-III社
43	A・P-27	口 縁 部	突起部に穿孔・隆線に刺突・充填繩文(L.R)	
44	B・K-20	口 縁 部	斜め刻み目をもつ隆線・充填繩文(L.R) ・繩文帶内横位の蛇行沈線	
113-45	B・L-8	口 縁 部	三角状の沈線・充填繩文(L.R)	
46	D・TR-C-8	深鉢	沈線に沿って連続円形刺突文・充填繩文(無跡のL)	
47	O・ナ-13	注口土器	沈線・渦巻文	
48	O・カ-8	小形深鉢	突起・口縁部内面に沈線	
49	A・W-31	浅鉢	沈線を太い点状の沈線で区切る・充填繩文(L.R)・黒色	
114-50	A・T-21	小形鉢	沈線を「ノ」の字状沈線で区切る・充填繩文(L.R)・網代底・黒色	
51	B・P-9	浅鉢	突起口縁部内面に沈線・外面無文黒色	
115-52	A・O-26	深鉢	波状口縁・突起・集合沈線・沈線の渦巻文	
53	A・B-27	胴 部	絡紐状の沈線	
54	A・Q-26	壺 形	内面口唇部に沈線・集合沈線・沈線の渦巻文・黒色	
55	A・Q-27		絡紐状の沈線中空土偶?	
56	O・ケ-17	浅鉢	弧線文をC字状の沈線で区切る・磨消繩文(R.L)	
116-57	O・カ-13	頭	頸部沈線を「ノ」の字状の沈線で区切る・充填繩文(L.R)	
58	O・カ-8	胴 部	集合沈線・充填繩文(L.R)・纏紐状の沈線	
59	O・ケ-11	口 縁 部	口縁部内面に集合沈線・外面に段状の集合沈線	
60	O・ケ-17	口 縁 部	突起・口唇部に斜め刻み目・集合沈線	
61	C・SK-01	口 縁 部	突起部に穿孔と円形刺突・沈線・「ノ」の字状の沈線 ・充填繩文(L.R)	
62	A・W-31	深鉢	山状の突起・無文	

第5表 石器観察一覧表

石 鐵

図版番号	出土地点	分類		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		基部	茎部							
117-1	A・P-17	平	無	1.3	1.0	0.2	0.2	黒曜石		
-2	A・U-24	"	"	1.2	1.1	0.3	0.2	"		
-3	B・S B-09	凹	"	1.4	1.6	0.3	0.4	"		
-4	A・P-17	平	"	1.5	1.0	0.3	0.2	"		
-5	D・S B-13c	凹	"	(1.7)	(0.9)	0.3	0.2	"	脚部欠損	
-6	D・S B-13b	"	"	1.6	1.1	0.2	0.2	"		
-7	D・S B-13	"	"	2.1	(1.7)	0.5	1.2	"	脚部欠損	
-8	D・S B-13e			2.2	1.6	0.7	1.8	"		未製品
-9	A・G-26	凹	無	3.5	(1.6)	0.5	1.3	"	脚部欠損	
-10	A・R-26	"	"	2.7	(1.6)	0.3	0.9	"	"	
-11	B・M-22	"	"	2.6	(1.4)	0.5	1.2	"	"	
-12	B・J-18	"	"	2.8	(1.8)	0.3	1.3	チャート		
-13	A・U-24	"	"	3.0	1.9	0.4	1.7	黒曜石		
118-14	C・E-10	"	"	2.9	(1.4)	0.5	1.3	"	脚部欠損	
-15	B・S K-41	"	"	2.4	(1.3)	0.3	0.6	"	"	
-16	A・Q-17	"	"	2.1	(1.2)	0.2	0.3	チャート	"	
-17	B・U-21	"	"	(3.2)	1.6	0.4	2.2	"	先端部欠損	
-18	B・H-9	"	"	2.0	1.5	0.3	0.5	黒曜石		
-19	A・Q-26	"	"	1.9	1.2	0.3	0.4	"		
-20	A・Q-18	"	"	1.7	1.3	0.2	0.2	"		
-21	D・E-13	"	"	1.6	1.3	0.3	0.4	?		
-22	A・P-29	"	"	1.7	1.3	0.3	0.5	頁岩		
-23	D・C-4	"	"	2.1	1.3	0.4	0.7	黒曜石		
-24	T P-31-1	平	"	1.9	1.2	0.3	0.6	チャート		
-25	A・Q-26	"	"	2.4	1.5	0.6	1.5	"		
-26	B・G-13	凹	有	2.9	1.7	0.4	1.7	頁岩	先端部・基部欠損	

図版番号	出土地点	分類		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		基部	茎部							
119-27	C・SB-07	凹	有	(2.9)	1.6	0.3	1.5	チャート	先端部・基部欠損	
-28	A・Q-29	"	"	2.5	1.4	0.4	1.1	黒曜石	基部欠損	
-29	A・P-30	凸	"	(2.0)	1.4	0.4	0.9	"	先端部欠損	
-30	A・O-16	"	"	3.9	1.5	0.5	2.5	"	基部欠損	
-31	A・Y-34	"	"	2.2	1.8	0.4	1.0	"	"	
-32	A・Z	"	"	3.6	1.5	0.4	2.3	頁岩	"	
-33	B・SK-33	"	"	2.4	0.8	0.4	0.8	メノウ	"	
-34	A・R-16	"	"	3.7	0.8	0.6	2.0	チャート		
-35	A・S-16	"	"	4.2	1.2	0.7	3.7	頁岩	基部欠損	

打製石斧

図版番号	出土地点	分類		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		平面	刃部							
120-1	B・I-13	短冊	円刃	(6.8)	4.9	1.9	(110)	頁岩	基部欠損	刃部磨耗
-2	D・B-5	分鋸	"	8.9	6.1	1.5	85	"		
-3	B・Pit-80	短冊	不明	(5.4)	(4.8)	1.8	(59)	"	基部・刃部欠損	
-4	A・SB-08	"	"	9.1	4.7	9.7	88	"	刃部欠損	
-5	B・U-14	分鋸	円刃	9.0	4.8	1.3	57	"		
-6	B・SK-04	短冊	不明	(5.0)	(4.8)	2.0	(47)	"	基部・刃部欠損	
100-6	D・Pit-13	"	直刃	12.1	5.3	1.9	152	"		
-7	D・SB-13e	"	不明	7.6	4.3	1.7	65	"		接合資料
120-7	B・M-19	"	直刃	6.5	3.4	2.2	71	"		
-8	B・W-15	"	偏刃	11.1	5.0	1.9	149	"		
-9	B・SK-27	"	"	13.0	5.4	1.9	148	"		
-10	B・N-11	"	"	9.7	4.6	1.4	84	"		
121-11	B・F-9	"	円刃	(9.8)	4.5	(2.1)	(122)	"	基部欠損	
-12	A・Q-25	"	偏刃	10.7	5.0	1.6	100	"		
-13	A・P-16	撥	円刃	9.0	4.7	1.9	92	"		

図版番号	出土地点	分類		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		平面	刃部							
121-14	O・キ-6	撥	円刃	11.3	4.9	1.8	119	頁岩		
-15	T P -33	"	偏刃	6.6	4.2	1.1	41	"		
-16	A・Q-26	"	"	8.3	4.4	1.4	64	"		
-17	A・P-22	短冊	円刃	(11.3)	5.0	2.1	(151)	"	基部欠損	
-18	B・H-9	分銅	"	15.5	6.2	2.5	253	"		
-19	B・M-18	"	"	(11.9)	8.4	1.5	(129)	"	刃部欠損	
122-20	A・R-26	短冊	"	11.5	4.1	2.0	122	"		
-21	T P -43	撥	"	(14.0)	5.6	2.1	(211)	"	基部・刃部欠損	
-22	O・カ-7	分銅	"	9.8	4.3	2.1	99	"		
-23	B・I-9	分銅	"	9.6	4.4	2.1	136	"		
-24	O・カ-6	短間	直刃	11.4	4.7	2.0	123	"		
-25	T P -35	撥	偏刃	11.4	5.6	1.9	114	"		
-26	O・カ-11	"	偏刃	10.9	6.0	1.7	136	"		
-27	B・L-7	短冊	円刃	12.0	6.2	1.6	157	?		
-28	O・キ-11	"	"	12.6	5.2	1.8	134	頁岩		
123-29	B・V-15	"	偏刃	11.1	4.2	2.2	119	"		
-30	B・T-15	"	"	12.4	5.7	1.6	151	"		
-31	A・U-24	"	直刃	7.6	4.2	2.2	78	?		
-32	A・V-22	"	円刃	10.0	5.1	1.7	91	"		
-33	A・R-16	撥	偏刃	11.6	4.6	1.0	121	頁岩		
-34	T P -26	短冊	直刃	9.8	4.0	1.4	71	"		
-35	T P -43	"	円刃	9.1	3.0	1.3	66	"		
-36	A・Q-27	撥	"	7.4	4.4	1.3	46	"		
-37	B・L-7	短冊	"	11.9	3.9	1.6	86	?		
124-38	B・SK-35	"	直刃	9.5	3.7	1.2	57	砂質頁岩		
-39	B・SB-10d	"	円刃	12.1	4.2	2.0	140	"		
-40	B・SK-12	撥	"	10.6	4.6	2.0	130	"		

図版番号	出土地点	分類		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
		平面	刃部							
124-41	A・S X-01	分離	円刃	13.2	5.5	2.4	172	砂質頁岩		
-42	A・L-29			5.4	4.7	0.9	30	?		異形石器

磨製石斧

図版番号	出土地点	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
125-1	O・コ-13	定角式	6.8	4.3	(1.9)	(86)	石英閃綠岩	基部中央欠損	
-2	A・S B-02	"	6.6	2.6	1.2	35	綠泥片岩		
-3	B・G-10	"	(5.6)	3.8	(1.7)	(63)	"	基部欠損	
-4	A・Q-39	"	3.7	2.8	0.9	15	粘板岩	刃部全体欠損	再生
-5	D・D-4	"	(4.4)	3.7	1.0	31	"	基部欠損	
-6	A・T-38	"	15.3	5.1	3.3	422	輝石安山岩	刃部一部欠損	
-7	B・F-9	"	(6.3)	4.0	1.5	(78)	?	基部・刃部欠損	
-8	A・R-19	"	(8.0)	5.4	2.6	(196)	"	基部欠損	
-9	B・V-19	"	(11.8)	(5.6)	2.5	(239)	"	刃部肩欠損	
-10	A・Q-14	"	(12.2)	(5.9)	2.1	(186)	"	基部・刃部肩欠損	
126-11	A・P-25	"	(8.7)	5.4	(2.5)	(136)	"	基部・刃部肩欠損	
-12	B・K-20	"	(3.8)	2.7	0.8	(15)	"		
-13	A・R-30	"	5.2	3.3	1.1	(35)	"		
-14	A・S-25	"	(7.0)	(3.4)	1.3	(51)	"	基部・刃部欠損	
-15	D・S X-01	"	8.1	4.2	2.2	(122)	"	刃部肩欠損	再生
-16	A・V-38	"	8.5	3.5	1.6	75	"		
-17	A・S-19	"	(5.1)	(3.5)	(1.1)	(18)	"	刃部肩欠損	
-18	A・P-17	"	7.1	3.7	1.7	84	"		
-19	A・T-38	"	7.3	3.9	1.6	80	"		
-20	O・キ-7	"	3.6	1.3	0.4	4	"		
-21	A・P-17	"	4.3	1.8	0.6	9	"	刃部一部欠損	
100-1	S B-13 S-1	"	(11.4)	(5.9)	(2.6)	312	粘板岩	刃部欠損	転用(叩石)

図版番号	出土地点	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
100-2	S B-13 S-11	定角式	(9.9)	(6.1)	(1.8)	183	?	刃部欠損	
-3	" S-12	"	(12.8)	(6.7)	(3.0)	464	粘板岩	基部・刃部欠損	
-4	"	"	6.7	4.1	1.4	68	"		再生
-5	" C区	"	14.4	6.5	3.6	504	安山岩	基部一部欠損	

その他の石器

分類	図版番号	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
石匙	127-1	A・P-17	2.5	5.9	0.6	7.9	チャート		
	-2	D・S B-13	3.8	4.7	0.6	10.8	頁岩		
	-3	B・T-21	4.4	5.9	0.9	24.6	?		
刀器	-4	B・L-23	3.1	(3.5)	0.6	6.0	"		鋸齒状の刃部
搔器	128-5	A・P-14	3.0	2.0	0.7	3.0	チャート		
石錐	128-6	A・N-22	2.8	1.2	0.5	1.0	"		
	-7	B・M-20	3.1	0.8	0.4	1.2	"		
	-8	B・F-10	3.7	0.7	0.3	1.1	"		
	-9	A・N-27	2.0	2.4	0.6	1.8	"	先端部欠損	
削器	-10	B・N-15	2.5	2.1	0.7	2.7	"	"	
	128-11	A・L-18	2.4	3.6	0.7	3.6	黒曜石		
	128-12	B・L-8	7.6	1.3	1.0	10.9	"		垂飾り?
刃器	129-1	A・S X-01	(6.7)	5.1	1.6	(60)	砂質頁岩		
	-2	A・O-14	(9.2)	6.2	(1.9)	(114)	"		
	-3	T P-30-2	8.3	3.1	1.3	34	"		
	-4	O・キ-7	(8.1)	(4.6)	(1.6)	(49)	"		
	-5	O・コ-17	7.8	6.7	1.9	112	"		
	-6	A・S X-08	(10.6)	4.2	0.9	(38)	"		
	-7	A・P-22	(9.0)	5.8	1.3	(67)	"		
	-8	A・P-29	7.7	3.4	1.3	32	凌質頁岩		
	-9	B・K-18	(5.9)	4.7	(1.4)	(44)	?		

凹 石

番号	図版番号	使 用 痕			出 土 地 点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考
		凹 部	敲 打	磨 面							
1	100-9	○(1+2)			D・SB-13S-5	10.1	8.4	5.4	440		
2	130-7	○(1+2)		○	A・SX-10	(15.2)	9.6	5.5	810		
3		○(1+2)		○	A・U-27	(9.3)	9.2	5.5	450		
4		○(1+1)			A・R-26	9.0	7.8	4.7	240		
5		○(1+1)		○	B・N-12	9.5	7.7	4.2	310		
6		○(1+1)		○	A・N-27	11.9	6.9	4.6	500		
7		○(1+2)			D・SB-13b区	10.1	7.1	5.0	420		
8		○(1+1)			D・B-4	12.8	6.7	6.4	520		
9		○(1+1)	○		D・D-8	9.2	6.2	6.2	310		4面に凹部有り
10		○(1+1)		○	B・L-7	(9.7)	6.0	5.8	300		
11		○(1+1)		○	A・P-27	11.3	6.8	4.2	220		
12	130-5	○(2+2)		○	A・SB-08S-3	10.7	9.1	6.5	960		
13	101-10	○(1+1)	○	○	D・SB-13S-8	10.0	8.9	5.7	770		
14	101-14	○(1+1)		○	D・SB-13S-18	11.2	9.8	4.1	730		
15		○(1+1)		○	A・O-27	7.6	7.5	5.4	380		
16					A・M-17	7.0	6.7	5.9	300		
17		○(1+2)		○	B・N-13	9.0	7.9	5.8	430		
18		○(1+0)		○	D・SB-13b区	8.6	8.4	4.8	300		
19		○(2+2)		○	D・B-4	10.7	9.2	3.8	550		
20		○(1+1)		○	A・W-27	10.4	9.5	4.5	490		
21		○(1+1)		○	A・Q-15	10.3	9.6	4.3	630		
22		○(1+1)		○	A・Q-27	10.6	9.6	3.5	540		
23		○(2+0)		○	A・P-16	10.6	8.8	3.9	520		
24		○(1+2)	○	○	B・L-18	8.7	7.4	3.8	300		
25		○(2+2)	○	○	A・O-32	8.9	8.0	4.9	500		
26		○(2+2)	○	○	A・N-23	9.2	8.2	5.2	440		
27		○(1+0)	○	○	B・M-14S-3	9.4	8.1	5.6	580		
28		○(2+2)		○	B・K-18	10.4	8.6	5.8	760		1面に凹部有り

番号	図版番号	使用 績			出土 地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考
		凹 部	敲 打	磨 面							
29		○(2+2)	○	○	B・U-15	10.3	8.3	5.7	560		
30		○(2+2)		○	A・Q-29	10.1	8.6	5.2	720		
31		○(2+2)	○	○	B・K-20	10.2	8.2	4.9	560		
32		○(2+2)	○	○	B・V-15	10.4	9.0	4.7	720		
33		○(4+2)		○	A・Q-18	11.4	9.6	4.7	640		
34		○(2+2)	○	○	B・T-21	11.8	9.0	5.7	980		
35	130-1	○(2+2)			A・SB-01	10.1	7.8	4.2	460		
36	100-8	○(2+2)	○	○	D・SB-13S-3	10.4	7.3	4.4	530		
37	101-13			○	D・SB-13S-17	(14.5)	9.5	5.5	1,190		
38		○(2+0)	○	○	0・SK-01	11.4	7.9	4.4	680		
39		○(2+2)		○	B・F-9	12.6	8.0	3.3	490		
40		○(2+?)	○	○	B・O-18	12.9	8.6	2.6	420		
41		○(2+0)	○	○	A・P-28	13.5	8.9	4.5	740		
42		○(1+2)		○	B・L-20	12.7	8.9	5.0	770		
43		○(2+2)		○	A・N-23	14.0	8.7	4.3	890		
44		○(1+2)		○	B・M-14S-1	11.8	8.0	4.1	600		
45		○(2+1)		○	A・R-26	12.1	8.9	4.8	780		
46		○(1+1)			B・V-15	12.6	7.8	5.4	750		
47		○(2+2)		○	A・S-26	11.9	8.2	4.2	670		
48		○(2+2)	○	○	A・O-20	11.0	7.7	5.7	670		
49		○(3+3)	○	○	D・D-4	11.6	7.2	4.4	520		凹部が溝状に連続
50		○(2+0)	○	○	A・O-23	11.4	7.5	3.6	480		
51		○(2+2)	○	○	D・C-4	10.6	7.6	4.5	540		
52		○(1+1)		○	B・J-15	10.0	7.5	3.8	460		
53		○(2+2)	○	○	A・R-28	10.2	7.6	4.1	530		
54		○(1+1)			B・V-15	9.5	7.2	3.9	510		
55		○(2+2)	○	○	B・M-20	10.3	7.5	4.8	570		
56	101-15	○(1+0)		○	D・SB-13b区	10.1	6.4	4.2	420		

番号	図版番号	使用痕			出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
		凹部	敲打	磨面							
57	101-17	○(1+2)		○	D・SB-13e区	10.4	6.1	3.0	320		
58		○(1+1)		○	B・G-10	9.2	7.4	4.9	410		
59		○(1+1)			B・M-9	9.6	6.3	3.4	230		
60		○(2+2)	○	○	B・L-18	11.9	7.7	4.2	570		
61		○(2+2)		○	B・J-15	11.3	7.7	3.6	520		
62		○(2+2)	○	○	B・V-15	12.7	8.5	3.6	540		
63		○(2+2)	○	○	B・Z	11.1	8.1	6.2	960		
64	130-2			○	B・SB-05	(6.5)	(8.6)	(4.7)	(380)		1/2欠損
65		○(0+1)	○	○	A・W-31	8.2	7.4	4.9	460		
66		○(2+2)	○	○	O・ケ-17	8.7	7.1	4.4	420		
67		○(2+0)		○	A・N-22	9.4	6.4	3.6	320		
68		○(2+2)		○	B・K-18	10.7	8.5	4.8	680		
69		○(3+2)	○	○	B・N-23	11.4	7.6	3.6	520		凹部が溝状に連結
70		○(2+2)	○	○	A・Q-16	11.6	7.0	3.5	420		"
71		○(3+2)	○	○	O・コ-13	12.5	6.8	3.3	330		
72			○	○	A・O-28	13.2	8.0	3.8	570		
73	130-3	○(0+2)		○	B・SB-05	12.3	5.9	4.4	500		
74	101-12	○(2+1)			D・SB-13S-15	13.2	7.1	3.6	510		凹部が溝状に連結
75	101-16	○(1+3)			D・SB-13b区	14.0	6.9	4.5	580		"
76	101-19	○(0+2)			D・SB-13e区	12.5	5.9	3.3	380		
77	130-6	○(2+1)			A・SX-03S-2	13.8	6.8	4.4	630		凹部浅い
78	101-18	○(2+2)		○	D・SB-13e区	(9.8)	(6.4)	(2.9)	(350)		1/3欠損
79					A・P-15	17.2	8.6	5.3	1,060		
80		○(2+2)			B・I-14	14.7	7.6	4.3	650		
81		○(3+2)	○		A・S-28	16.0	7.1	3.6	720		一面の凹部浅い
82		○(2+2)			B・F-9	15.0	6.6	4.9	780		
83		○(2+2)			D・B-4	15.3	7.5	5.3	960		
84		○(0+2)		○	O・コ-15	12.5	6.0	4.0	480		

番号	図版番号	使用痕			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
		凹部	敲打	磨面							
85		○(0+2)			A・P-24	12.8	5.8	3.3	390		凹部浅い
86		○(2+2)	○	○	B・W-17	12.2	6.3	3.2	400		
87		○(2+2)			A・O-31	13.2	6.6	3.7	550		
88		○(2+2)			B・G-10	12.0	6.0	4.6	590		一面の凹部浅い
89		○(1+1)			A・SB-08	11.9	3.5	3.1	180		
90		○(0+1)			D・SB-13S-6	13.7	8.1	4.8	790		凹部浅い
91					○・キ-7	12.8	8.0	3.6	620		
92					B・N-23	11.5	6.7	3.9	460		
93			○		A・O-24	12.0	8.8	4.0	700		
94			○		B・M-15	11.9	9.0	4.7	670		
95			○		B・N-15	11.7	8.4	5.7	820		
96			○		A・V-28	11.4	8.9	4.2	660	閃緑岩	
97			○		A・OP-21+22S-1	10.4	8.9	4.2	600		
98			○		B・L-20	9.5	8.0	4.9	550		
99	130-4				A・SB-08	7.8	7.5	7.3	530		
100	101-11		○	○	D・SB-13S-10	7.0	6.3	3.6	240		
101					B・L-7	5.1	4.5	4.6	120		
102			○		D・B-4	10.5	9.1	5.9	810		
103			○		A・P-16	10.5	7.8	4.2	520		
104			○		B・K-20	9.1	7.3	4.3	510		
105			○		B・K-19	9.6	6.9	4.3	420		
106			○		B・M-14S-2	10.8	8.6	6.0	880		
107			○		B・M-21	9.4	8.0	5.7	630		
108			○		B・N-16	11.8	9.9	6.8	1,150		
109			○		D・C-4	11.2	9.2	6.8	980		
110			○		B・M-9	10.0	9.5	8.7	1,240		
111			○		B・G-10	8.2	7.7	7.1	730		

埋壟及び伏壠の層序

- 埋壟-1 I層 黒色土(粘質) II層 黒色土に黄色粒少量混入(粘質) III層 茶色土 IV層
黒色土
- 埋壟-2 I層 黒色土茶色土混じり II層 黒色土礫少量含む III層 茶色土黄色土少量混じり
(粘質) IV層 黒色土茶色土少量混じり V層 黄色土 VI層 黄色土茶色土混合 1
層 黒色土茶色土混じり 2層 茶色土黄色土少量混じり 3層 茶色土黑色土少量混
じり
- 伏壟-1 I層 黒色土(粘質)
- 伏壟-2 I層 黒色土(粘質) II層 茶色土(粘質) III層 黄色土(粘質)



第四章 ま と め

第四章 ま　　と　　め

1 地形について

辻田遺跡に残された住居は主に縄文時代後期前葉と平安時代後期のものである。縄文時代の住居址は所産期を確定できるものは少なく、SB-02・SB-13・SB-14の3基が掘之内式期に属するものと考えられる。他の縄文時代の住居址もこの時期を前後するものと考えられるが、断定はできない。遺跡の立地が急峻な扇状地に位置し、金原・成沢の2河川に挟まれるため、当時から相当の押し出しや小河川の移動があり、遺構の残り方にも影響を与える。特に0地点とA地点は北側を砂礫層が広範囲に覆っていた。発掘当初、この押し出しと縄文時代の生活の痕跡がどのような関係にあるか、層序の検出を試みたが、個々の複雑な層序を関係付けることは困難であった。0地点の北側の砂礫層中からは多くの縄文時代後期の土器破片が出土し、この時期以降に河川等の氾濫による押し出しがあったことを物語っている。本遺跡の南西2.2kmに位置する大川遺跡A地点においても同様の現象が認められた。A地点でいえる事は、押し出しによって覆われたり、破壊された痕跡が認められる事である。とくにSB-01は砂礫層に覆われ、石圓い炉と柱穴が認められるだけであったので、SB-03の敷石部（SB-03の張り出し部とは考えにくく別の遺構と思われる。）も同様であった。中央部TR-D周辺は砂礫の広がりの縁辺部にあたり、黒色土が堆積し、上部からは多量の土器片が出土した。ここは地下水位も高く周辺は湿潤であった。これを大胆に推理するなら、当時この周辺に小河川が存在し、そこに使用済みの土器を廃棄したのではないかと考えられる、しかし、埋甕-1の存在はこれをどのように理解すればよいかの問題も残る。もしかすると、黒色土であるため、遺構の存在がわからないまま掘ったために生じた現象かも知れない。B地点の北側も谷状となり、黒色土が厚く堆積するが、北に向かう程遺物は少なくなる。B地点下段の土壤群北側が遺跡の縁辺でその先は小河川の造る谷になるのではないかと思われる。このことはA・0・B地点とD・C地点は小河川を隔てて対峙していたもののように考えられるが、しかし、この小河川がこれ以降に形成された可能性も考えられる。A地点の小河川が土器捨て場に利用されていたのではないかとする考え方や、試掘調査の結果でテストピットのTP-43からは砂礫に混じって縄文時代後期の土器が多く出土していることと矛盾を生ずるが、小河川が幾つもの時期にわたって複数が存在したとすればその考え方も妥当であるが、いずれも肩位的な裏付けのない考え方であり、当時の地形を推定することは困難である。発掘調査やそれに先立つ試掘調査でいえることは、遺跡内には小河川の幾つかが、時期を異にして存在したこと。遺跡はこれら小河川に關係する災害を受けていることである。

2 敷石住居について

縄文時代の住居は10軒検出され、そのうち敷石のなされるものは8軒である。その内の3軒が堀之内式期の所産と考えられる。その他は遺物の出土量が少なく所産期を推定することは困難であるが、堀之内式期の時期を大きく隔てるものはないと思われる。また配石造構(S X)の中にはS X-12・14のような敷石住居の残骸と思われるものもある。

基本的な構造は竪穴式であるが、SB-06・11・12・13の4軒が壁の立ち上がりが確認できなかった。これらはいずれも表直下で検出されたためと思われるが、SB-13は敷石部の周辺を礫が丸く囲み、より平地式の様相を呈する。形態はSB-13・14が円形で、SB-02・08・09が方形に近く、SB-01・06・12は不明である。張り出し部をもつ柄鏡形はないと思われる。SB-03は主体部に接近して敷石が検出され、これが張り出し部と考えられたが、主体部と敷石部の連続性がなく、同一の造構ではなく別々の造構が切り合い関係にあるものと判断した。敷石はSB-13が六角の形状を良く残し、SB-02が石囲い炉の幅に連続して敷石がなされる。SB-12も全体像はつかめない。SB-14もある程度の広がりはあるものの全体像はつかめない。その他の住居の敷石は極僅かしか残っていない。SB-02・13のように敷石の下部に敷石を安定させるためと思われる、裏込めの石が認められるものもある。SB-13のように住居のプランと敷石部の形態は必ずしも一致しない。炉の存在が明確なものは5基で、石囲い炉が認められるのは、SB-02・03・06・11の4基である。石囲い炉の平面形態が方形で、部材に安山岩を用いたものが主で、SB-11は一部欠損するが長方形を呈すると思われるもので軽石が用いられている。SB-02・03の石囲い炉はひび割れている。柱穴の認められるものはSB-02・03・08・13・14で、SB-02・03は壁の縁辺部を回るものと、床面のものとがあるが、これらが同時に存在していたかは不明である。SB-08は壁コーナー外にそれぞれ1基認められる。SB-08は内部に1基が確認されただけである。いずれも残存状態が悪くその構造を詳しく知り得るものはないが、そのなかでも比較的の状態の良かったSB-13について気付いたことを数点述べたい。本址の状態は、北東の半分強に敷石とその周辺を回る礫（以下周縁礫と略す）が残り、南西のほぼ半分が何らかの破壊を受け、敷石が剥がれたり、周縁礫が動かされていた。1点は柱穴の位置と周縁礫の位置が必ずしも一致しないことである。比較的深く、本址の柱穴と考えられるPit-9・12・13・21は周縁礫の下部から検出されたが、Pit-15・22はこれから外れ、敷石部の一辺に沿って検出された。発掘調査の結果からはPit-15・21・22の3基が本址の柱穴と同時に存在したことを立証することは不可能であるが、3基のピットの並び方は敷石部と他のピットとの全体的な配置から考えると、偶然とは考えにくい。これらのピットが同時に存在した柱の痕とすれば、周縁礫（これがどんな機能を有していたかわからないが）上に立つ柱と、敷石部の一辺に沿って並んで立

つ柱が存在していたことになる。2点は周縁疊はしっかりと固定されたものではなく、不安定な浮いたような状態であったことで、レベル的には敷石部よりも高い位置にあった。3点は周縁疊の内部に敷石部がすっぽり納まるものではなく、北西に張り出すことである。周縁疊はこの張り出し部分で途切れている。このことはこの張り出し部が出入り口である可能性を示している。これが出入り口であるとすれば、北西方向を向いていることになる。これらのこととは建物の上部構造を考える上で参考になることと思われる。4点は炉に接して東側に人力では動かすことのできない巨疊があり、断面の観察では本住居構築時にこれを取り除こうと努力したが果たせず、これを断念した痕跡が見られることである。この巨疊は敷石面では僅か数cm頭を突き出すだけであるが、この回りに小さな鉄平石を並べてどうにか覆い隠している。5点は焼骨が出土していることで、1箇所は擾乱部分で、S X-01出土の焼骨と関連するものかもしれない。もう1箇所はPit-13の覆土から検出されている。ここからは打製石斧の基部1/2の破片が出土し、b区出土の残り1/2の刃部と接合した。いずれの焼骨も本址との関連は薄いものと思われる。

3 配石墓群について

A地点南隅で検出された配石群内には配石土壙が数基確認された。これを人為的な配石群と断定したのは、部分的には自然堆積の地山の疊群が存在するが、配石土壙の存在と疊中から石皿の破片の出土があったことから、ある程度自然の疊の広がりを利用しているものの、人為的な疊の移動があったと考えてのことである。配石土壙からは骨の出土がなく、土壤分析も行っていないが、S X-03・08から伏鉢の出土があったことから、墓壙であると断定した。配石群内には検出された土壙のほかに検出されないまだ多くの土壙が存在したと思われるが、検出面の大部分が黒色土でこれらの検出は困難であった。ほとんどのものは石の配置から配石土壙を想定したものもあるが、土壙の確認できたものは少ない。調査時の繁雑さを避けるため、ここに検出されたすべてを配石土壙の名のもとに括っているが、単なる土壙といつてもあることを了解願いたい。また全体図の中には配石造構ととらえられるものもあるが、その立証が困難なので配石造構として扱っていない。配石土壙には大きく分けて、土壙の縁辺部に疊を並べるものと、石棺状に平石を立てて組んだものの2種がある。伏鉢を埋納したもののかに、S X-06のように立石を伴うものがある。これらの営まれた時期は前述の2点の伏鉢の出土から、堀之内式期の新しい方から加曾利B式期の古い頃ではなかろうか。

4 B地点SK-27出土の一括土器について

土壙は直径144cm、深さ26cmを測る。覆土は7層からなり、土器は1層中から出土した。土器は口縁部文様帯を喪失し、微隆起線文をもつもの2~8がある。6は双耳壺となるものと思われる。7は橋状の把手を受けたラッパ状の突起をもつ。8は無文である。9は雨垂文。10は口縁部

文様帶に窓枠状の区画文をもつ土器で、沈線は断面が丸鑿で彫ったような深い沈線で、内面に沈線が浮き出るほどではないが、それに近い状態である。繩文は充填繩文で、併出の他の土器と比べ、目の細かな単節の L R を充填する。11は波状口縁部の波頂部に把手を有し、口縁部無文帶で微隆起線文をもち、細い沈線で区画された直線的な磨消繩文帯をもつ。12は無節の R を用いた磨消繩文。13は太い沈線で区画された曲線的な磨消繩文である。(第88~90図)

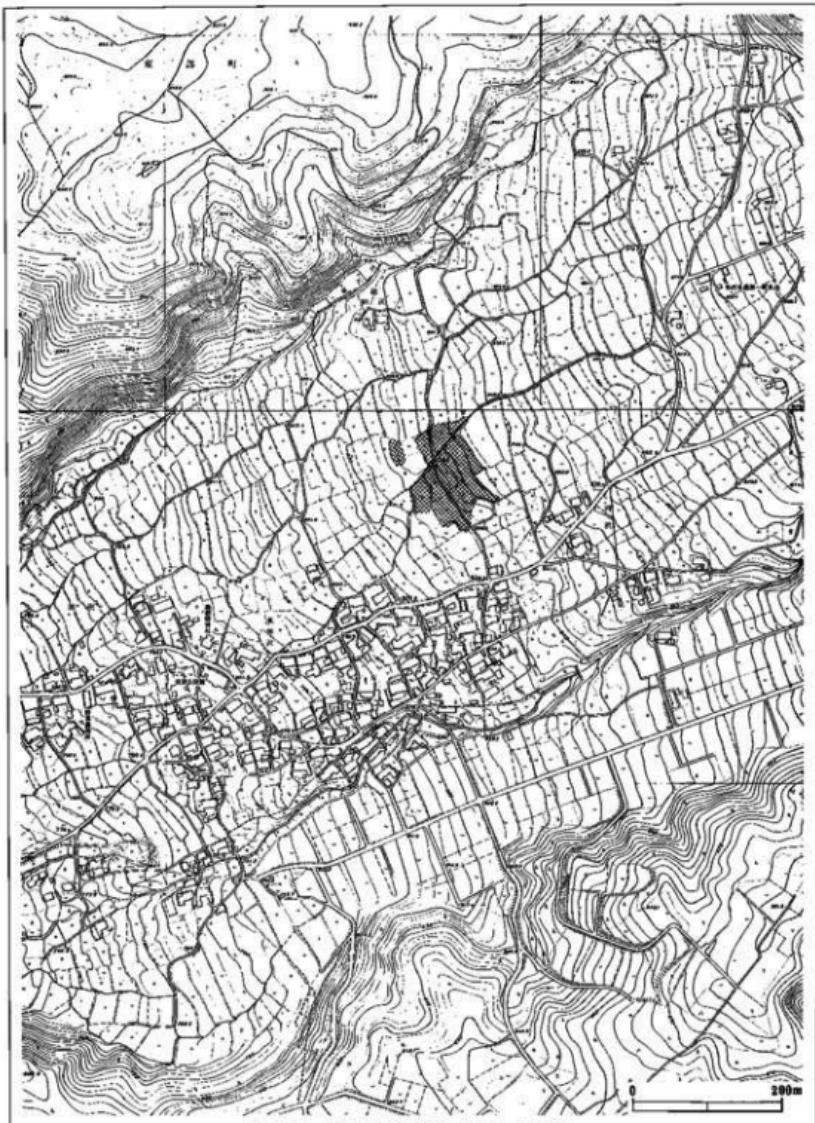
1~8・11は加曾利E式系の最終段階の特徴をよく示している。8は小破片ではあるが、曾利式系の最終段階に位置するものであろう。10は関西の中津式系の影響が顕著に現れている。これらのことから、本一括資料は中期末から後期初頭の過渡的な様相を示すものと言えよう。10が搬入品か否かは私の能力をはるかに越える問題なのでここでは言及できない。

参考・引用文献

- 小林達雄 1994「繩文土器の研究」小学館
鈴木徳雄 1990「称名寺式土器」「特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録」調査研究集録第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
鈴木徳雄 1991「称名寺式の変化と文様帶の系統—「文様帶系統論」と文様帶連続説の再検討—」『土曜考古学研究』第16号
鈴木保彦・山本暉久 1989「加曾利E式土器様式」「繩文土器大観 4 後期 晩期 繩繩文」小学館
玉田芳英 1989「中津・福田K II式土器様式」「繩文土器大観 4 後期 晩期 繩繩文」小学館
中島庄一 1989「称名寺式土器様式」「繩文土器大観 4 後期 晩期 繩繩文」小学館
平林 彰 1993「繩文土器の系統と変遷」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11—明科町内—北村遺跡本文」(財)長野県埋蔵文化財センター
柳澤清一 1992「加曾利E(新)式編年研究の現在」「古代」第94号早稲田大学考古学会
山本孝司 1992「加曾利E 3~4式と曾利V式について—神奈川県新戸遺跡出土資料を再検討して—」「古代」第94号早稲田大学考古学会
渡辺 務 1990「横浜市緑区松風台遺跡出土の称名寺式土器」「特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録」調査研究集録 第7冊 横浜市埋蔵文化財センター



実測図版



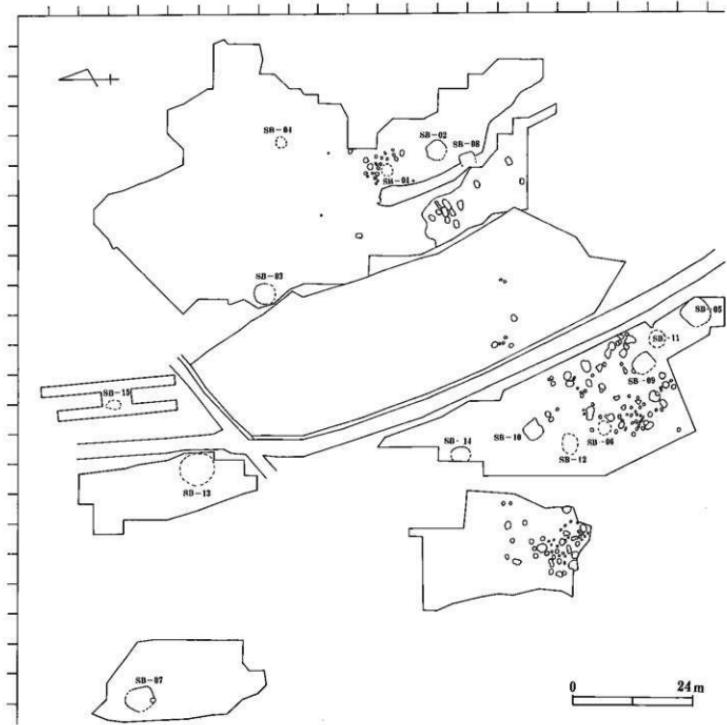
第5図 辻田遺跡地形図 (1:7500)



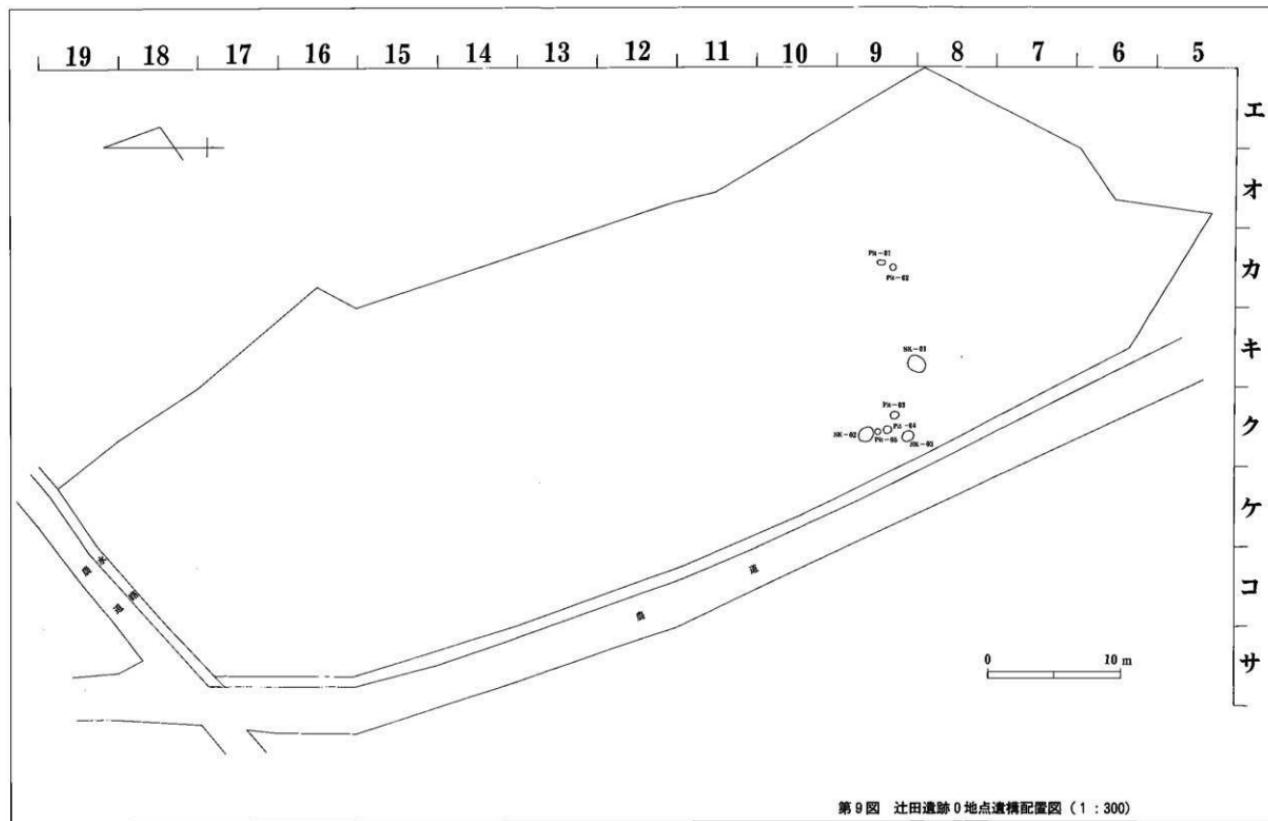
第6図 試掘テストピット位置図 (1 : 1500)



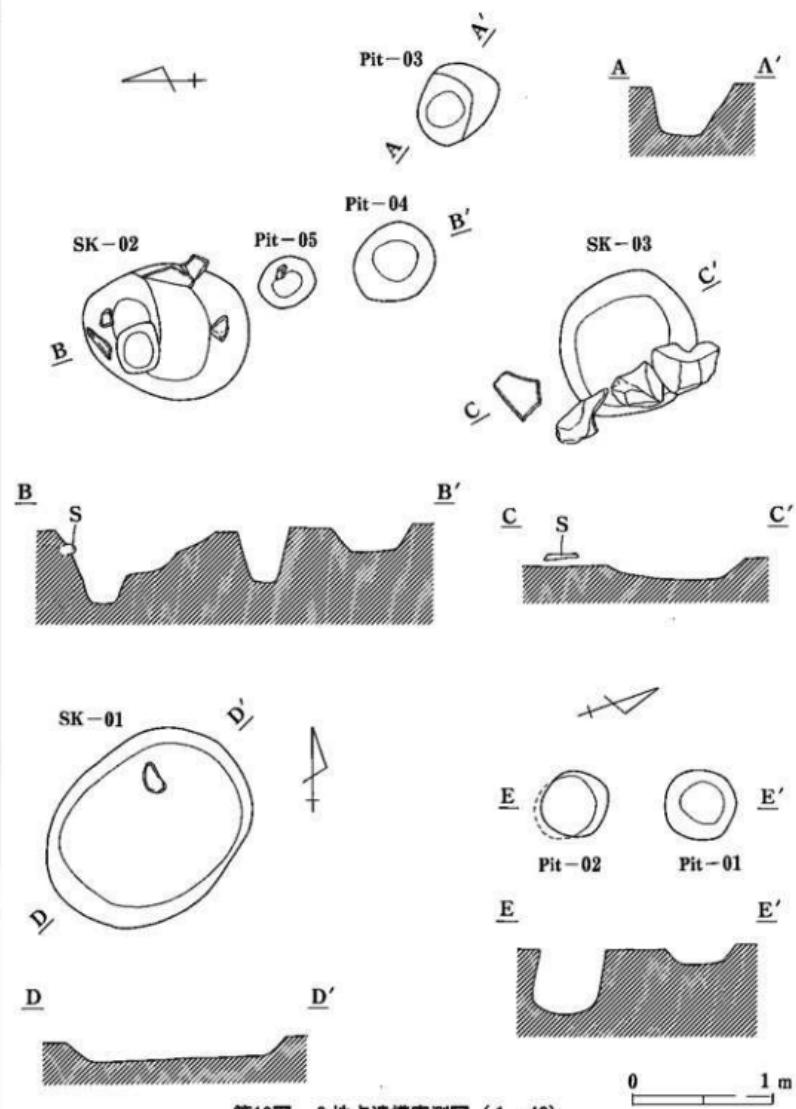
第7図 調査範囲図 (1 : 1500)



第8図 全地点遺構配図 (1 : 800)

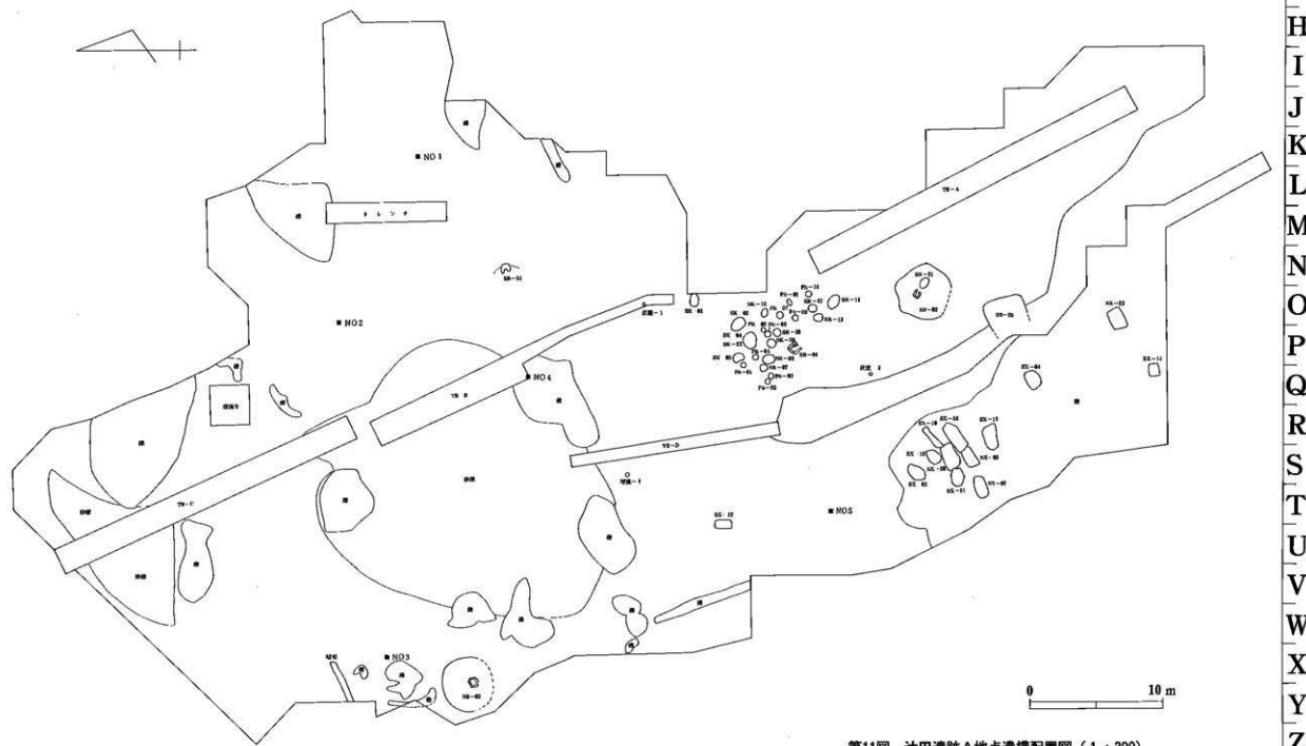


第9図 沢田遺跡 0地点遺構配図 (1 : 300)



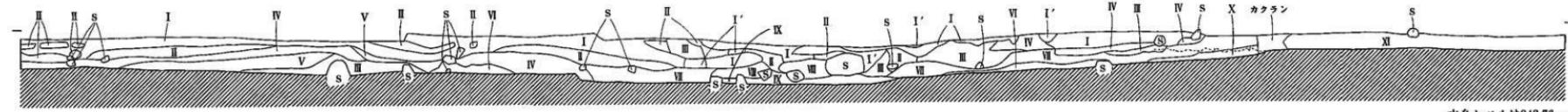
第10図 0地点遺構実測図 (1 : 40)

42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11



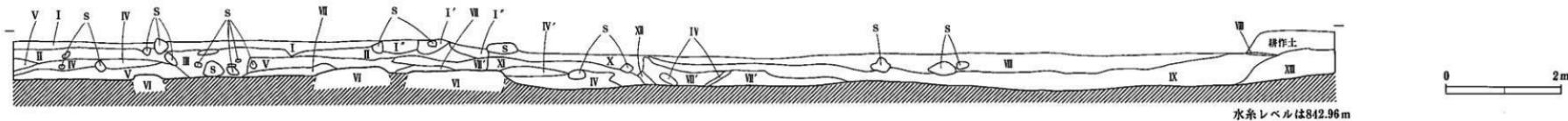
第11図 辻田遺跡A地点遺構配置図 (1 : 300)

TR-A



- | | | |
|----------------------------|---------------------|---------------------|
| I : 黒色土（粘質） | IV : 乳灰色土 細緻混じり（砂質） | VII : 茶色土（砂質） |
| I' : 黒色土 砂利層でI層より茶色土混入（砂質） | V : 灰色掛かった茶色土（粘質） | IX : 黒色土 茶色土混入で緻混じり |
| II : 黒色土と茶色土の混合 細緻混じり（粘質） | VI : 乳灰色土（砂質） | X : 黄色土（粘質） |
| III : 黄色土 酸化した土と細緻混じり（粘質） | VII : 黑褐色土（粘質） | XI : 黒色土と茶色土の混合（砂質） |
- ※層の中の破線は鉄分の堆積

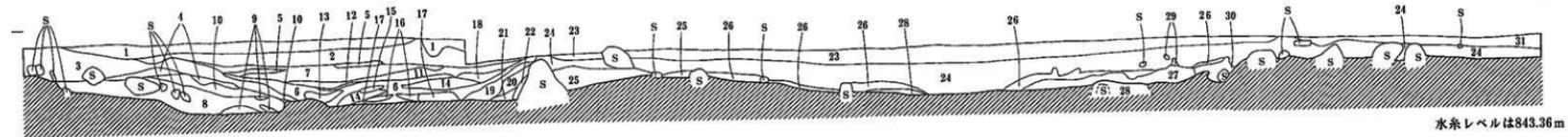
TR-B



- | | | |
|-----------------------|------------------------------|-------------------------------|
| I : 黒色土 黄色土少々混じり | IV : IV層に4~8cmの中緻混じり | IX : 黒色土（砂質） |
| I' : I層に5~10cmの中緻混じり | V : 茶色土 黄色土と細緻混じり | X : 茶色掛かった黒色土 1cm前後の中緻混じり |
| I' : 黒色土 5~10cmの中緻混じり | VI : 灰黄色掛かった黒色土（砂質） | XI : 茶色 細緻混じり |
| II : 黒色土 茶色土と細緻混じり | VII : 茶色土 黄色土混じり（砂質） | XII : 黒みの強い茶色土 |
| III : 黒色土 大緻混じり | VIII : 黑色土と茶黄色土の混合（砂質） | XIII : 赤みの強い黄色土 8mm~4cmの中緻混じり |
| IV : 黒色掛かった茶色土 | VII' : 灰色掛かった黒色土 1cm以上の中緻混じり | |

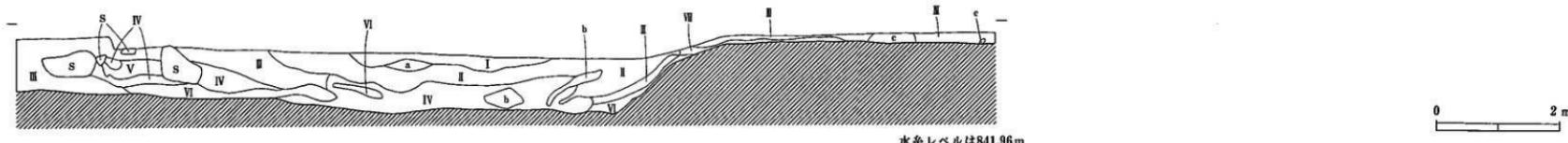
第12図 A地点トレンチ断面実測図（2：3）

TR-C



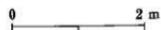
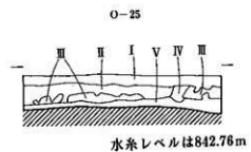
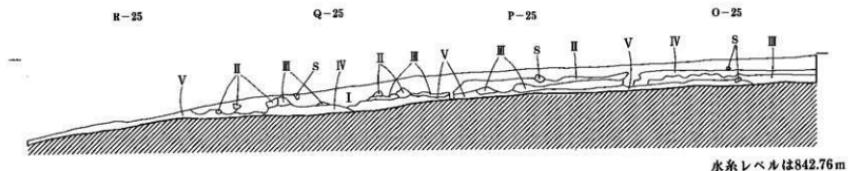
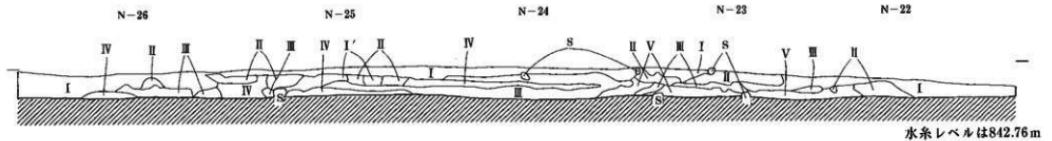
- | | | | |
|-------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------|
| 1 : 砂礫層 黒色土混じり | 9 : 灰色掛かった黄土 シルト（砂質） | 17 : 砂礫層 黄色っぽい灰土 | 25 : 黄色っぽい黒色土 砂混じりの隙隙 |
| 2 : 砂質層 黄色土混じり | 10 : 黒っぽい黄色土 硬い茶色土混じり | 18 : 黄色っぽい灰土 鉄分の酸化がみられる | 26 : 黄色っぽい黒色土（粘質） |
| 3 : 黒色土 | 11 : 黄色っぽい灰土と黒っぽい灰土の混じり（砂質） | 19 : 紫色っぽい黒色土 キメが細いシルト | 27 : 黑っぽい黄土（シルト） |
| 4 : 黒色土 茶色土少量混じり | 12 : 赤茶色土 鉄分が酸化？ | 20 : 灰色っぽい黒色土と黒っぽい灰土混じり（砂質） | 28 : 黑っぽい黄土 小穢泥じり（砂質） |
| 5 : 砂質層 荒い | 13 : 砂礫層 黄っぽい黒色土と赤茶色土の混じり | 21 : 黄色っぽい灰土（砂質） | 29 : 黑っぽい黄土（粘質） |
| 6 : シルト 細い | 14 : 黄色っぽい灰土と灰色っぽい黒色土の互層 | 22 : 紫色っぽい黒色土 糜が含む（砂質） | 30 : 黄色っぽい黒色土（粘質） |
| 7 : 砂礫層 黄色土混じり（小砾1cm前後） | 15 : 砂礫層 黄色っぽい灰土 | 23 : 茶色っぽい黒色土 泥混じり（粘質） | 31 : 赤っぽい黄土 小穢泥じり（粘質） |
| 8 : 灰色掛かった黒色土 | 16 : 荒砂層 赤茶色土と黄色っぽい灰土混じり | 24 : 黒色土（粘質） | |

TR-D



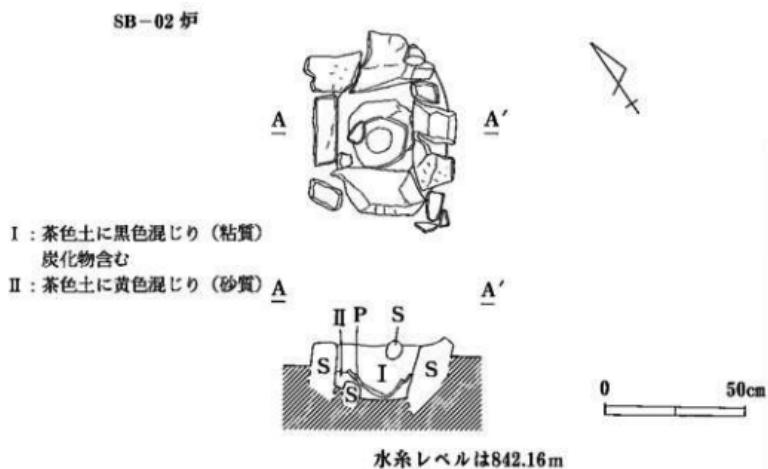
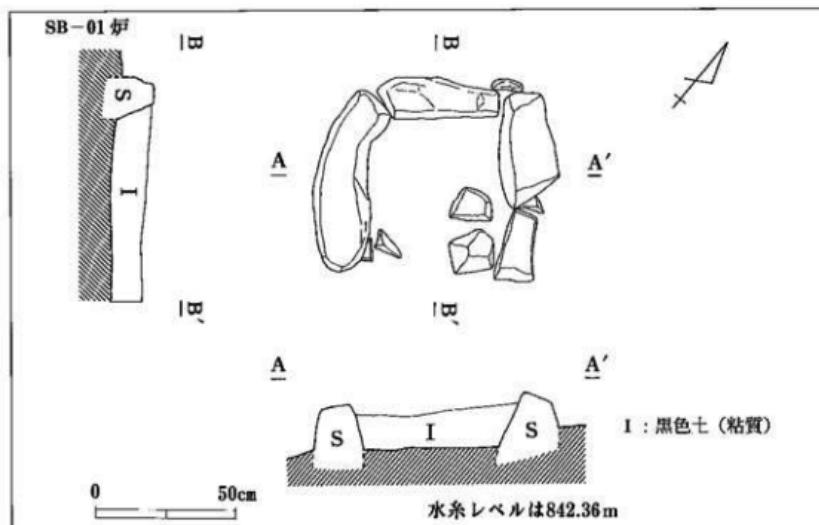
- | | | |
|----------------------------|------------------------------|--|
| I : 茶色土 1~5mm位の粗礫が密集（粘質） | V : 黄茶色土 3~5mmの粗礫と灰色土混じり（砂質） | a : I層に黄色粘質土が混じり、粗礫がない |
| II : 明黒色土 ブロック状に細礫混じり（砂質） | VI : 茶灰色土 上部に橙色土混じり（粘質） | b : 茶黒色土 1~8cmの中疊と砂利の
密集成層で酸化した土が見られる |
| III : 明茶色土 2~3mmの細礫混じり | VII : 茶色土 3~7cmの中疊と酸化した土混じり | c : 黄色土 3~7cmの中疊混じり（粘質） |
| IV : 茶灰色土 2~3mm位の細礫混じり（砂質） | | |

第13図 A地点トレーン断面実測図（2：3）

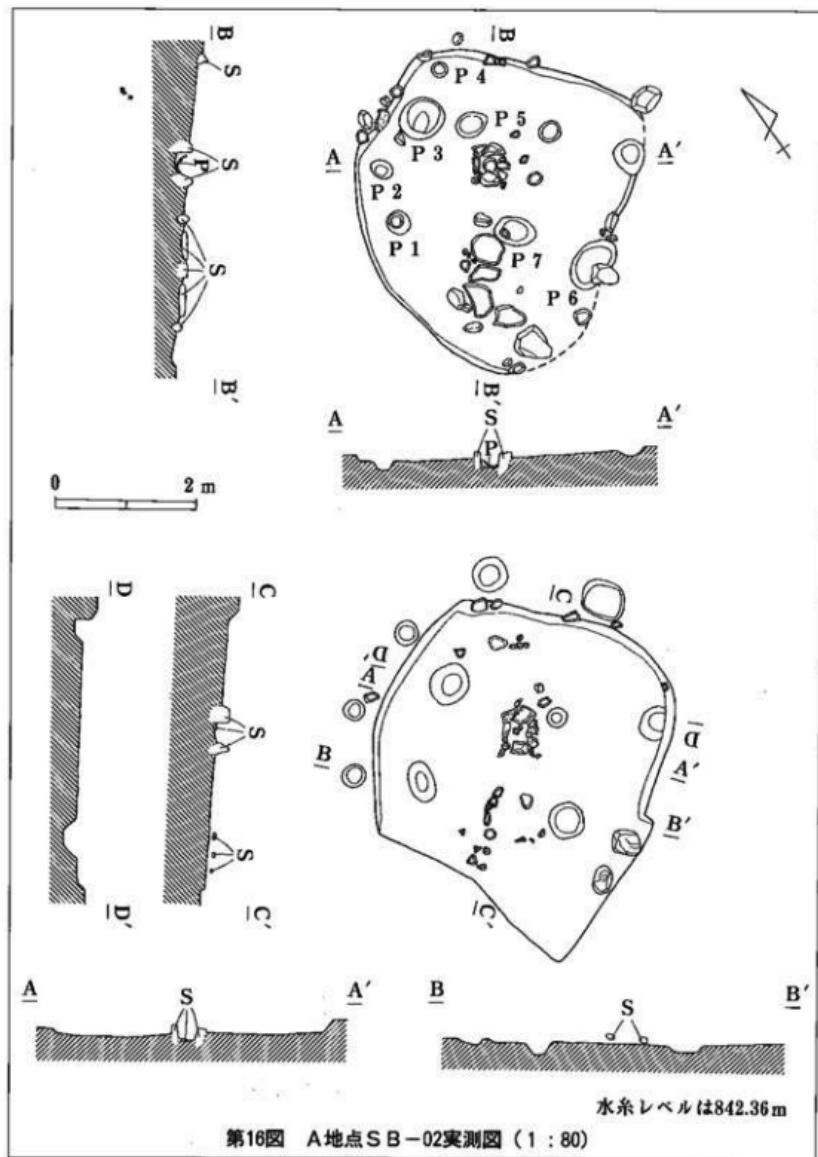


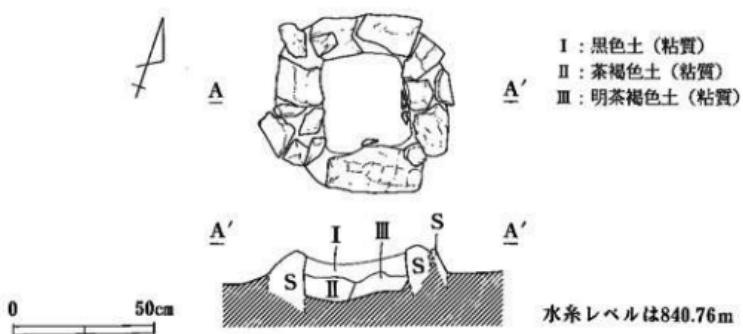
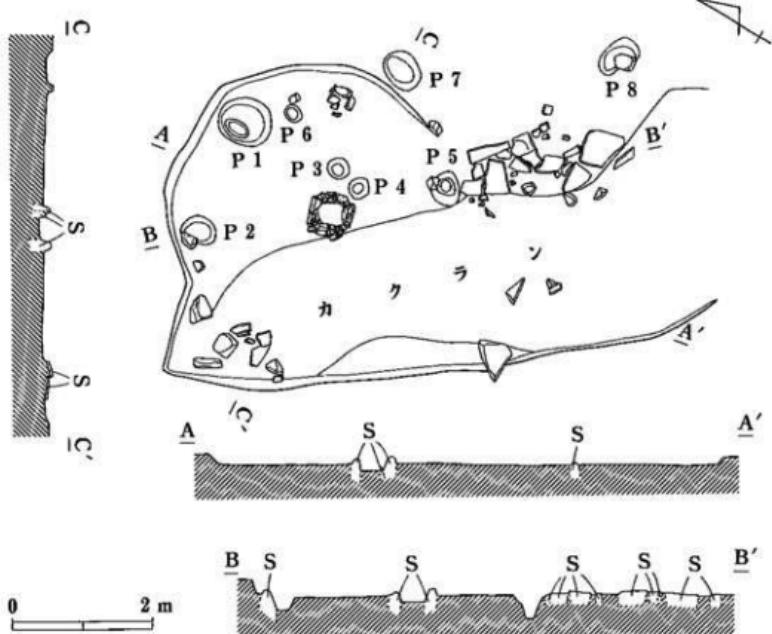
- I : 黒色土 (粘質)
- I' : 第I層より黒い
- II : 黒色土 茶色土混じり (粘質)
- III : 黄色土 小石・礫化繖混じり
- IV : 黄色掛かった茶色土 (粘質)
- V : 灰色掛かった茶色土 (粘質)

第14図 A地点造構グリッド断面実測図 (2 : 3)

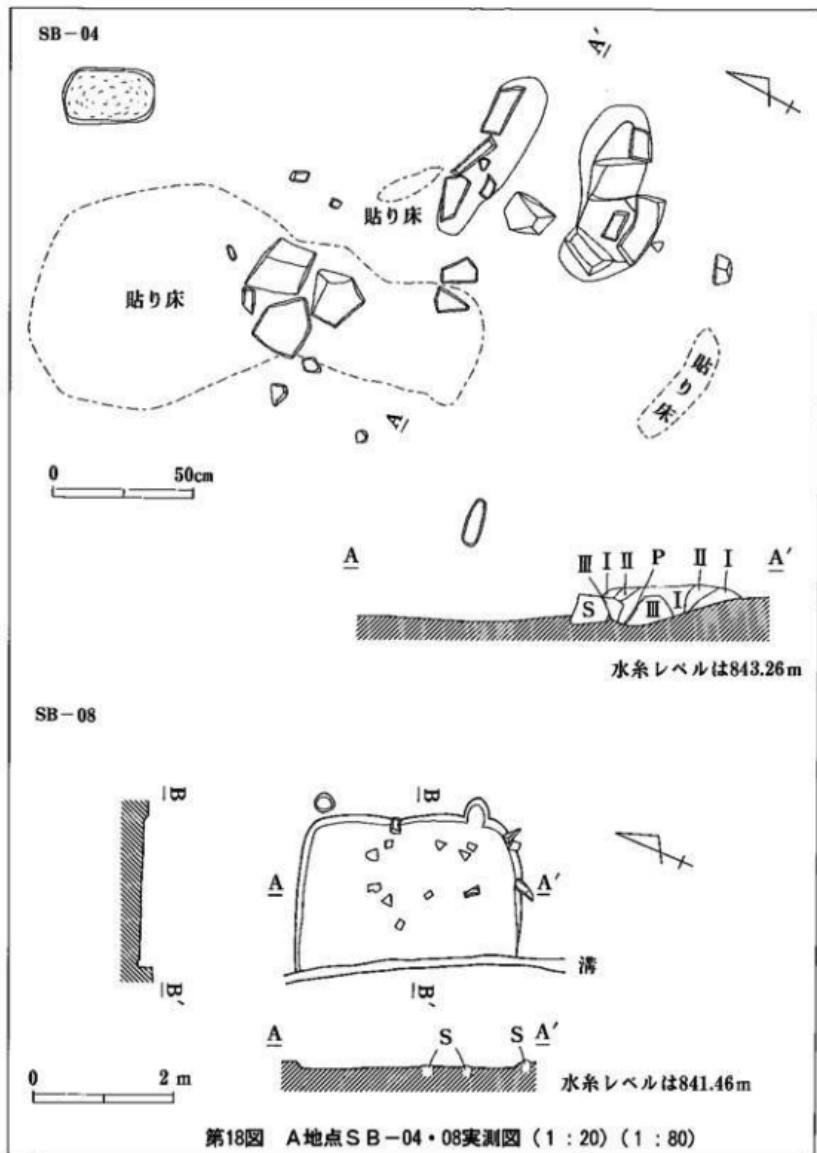


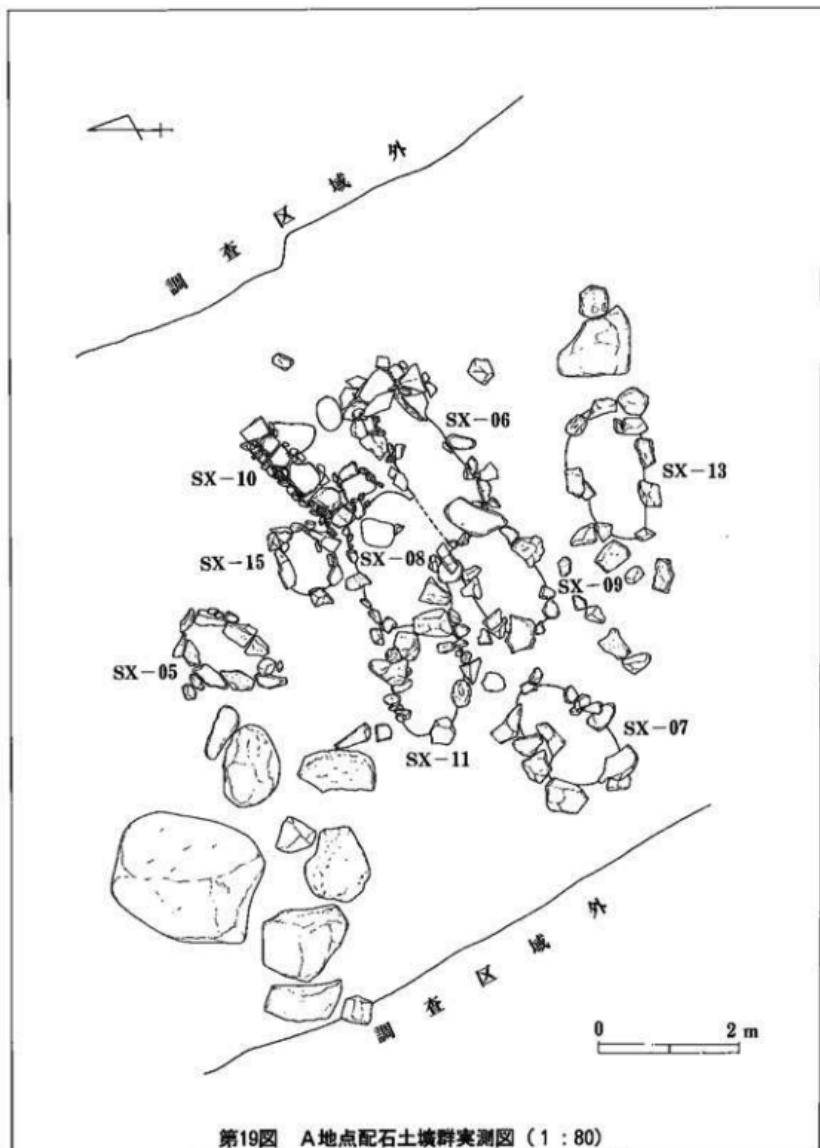
第15図 A地点SB-01・02石圓い炉実測図 (1:20)

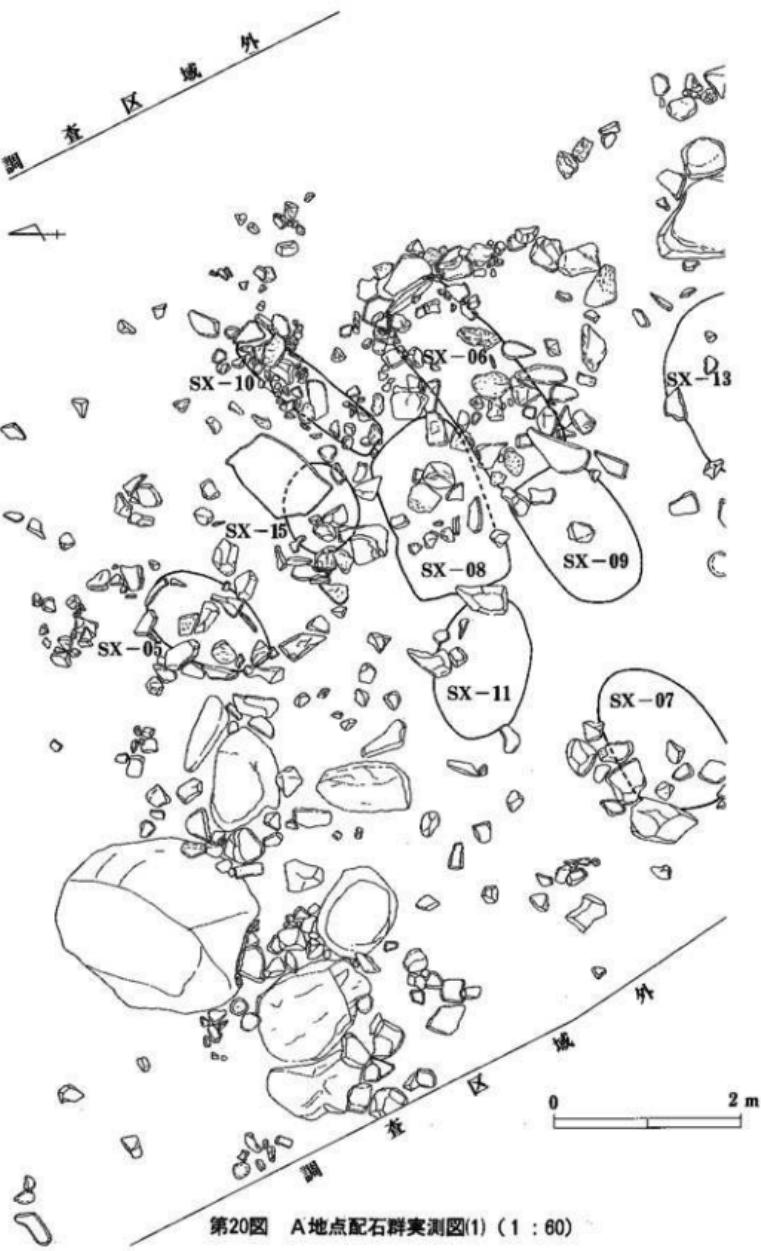




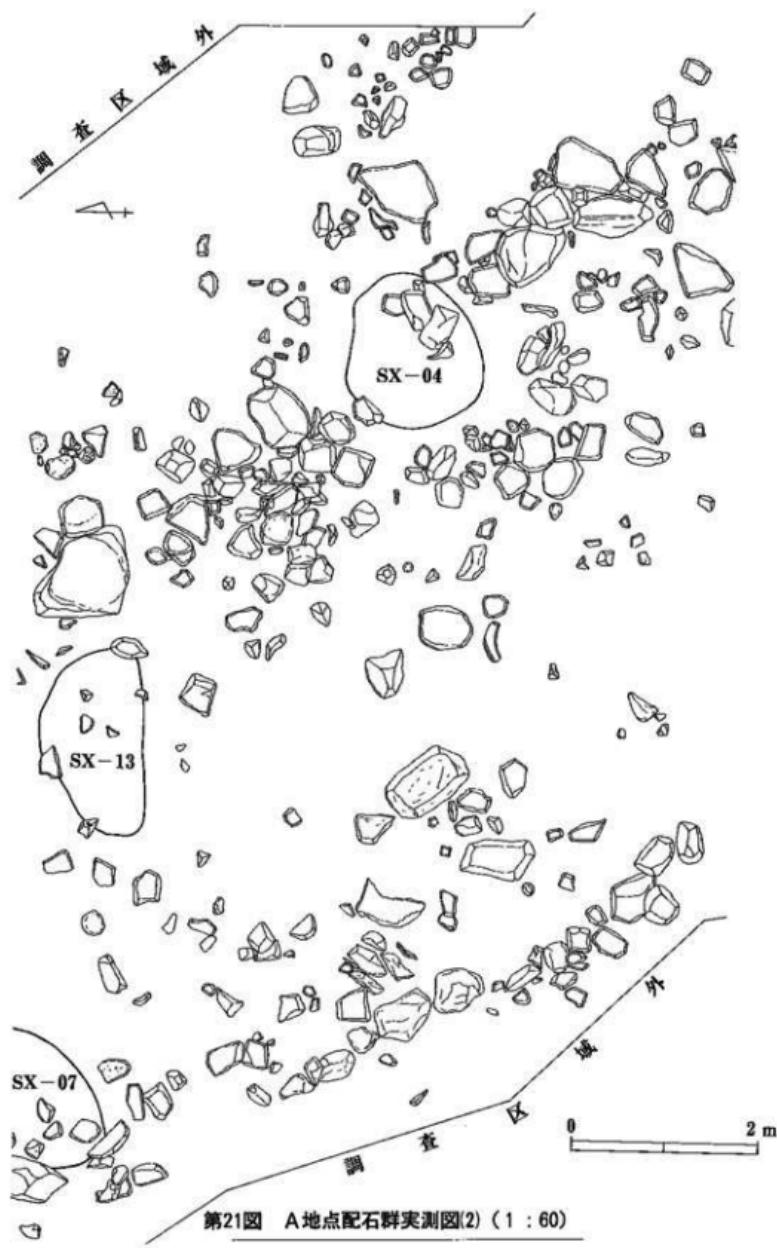
第17図 A地点SB-03実測図 (1:80) (1:20)



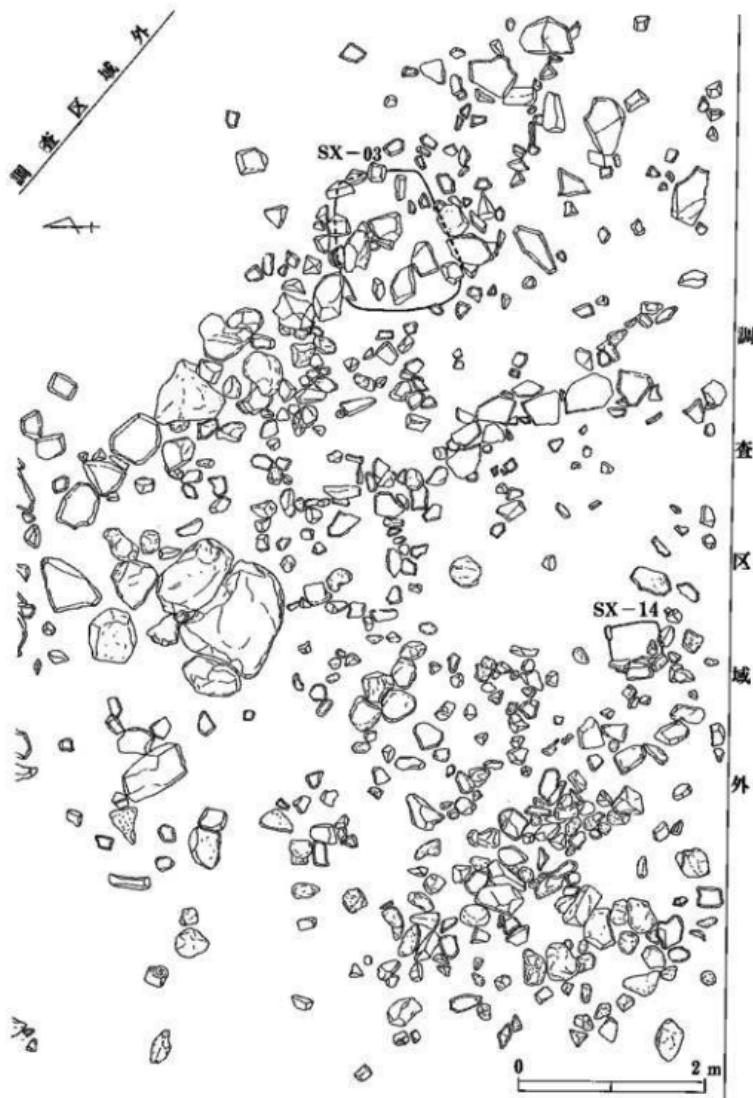




第20図 A地点配石群実測図(1) (1 : 60)

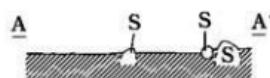
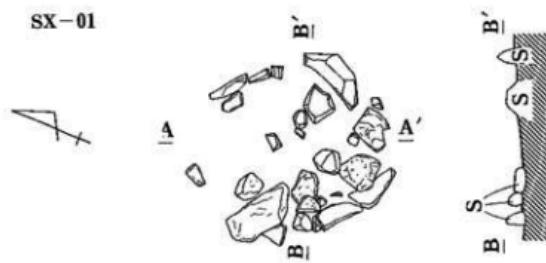


第21図 A地点配石群実測図(2) (1 : 60)



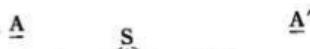
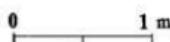
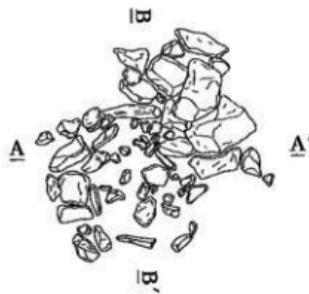
第22図 A地点配石群実測図(3) (1 : 60)

SX-01



水位は842.26m

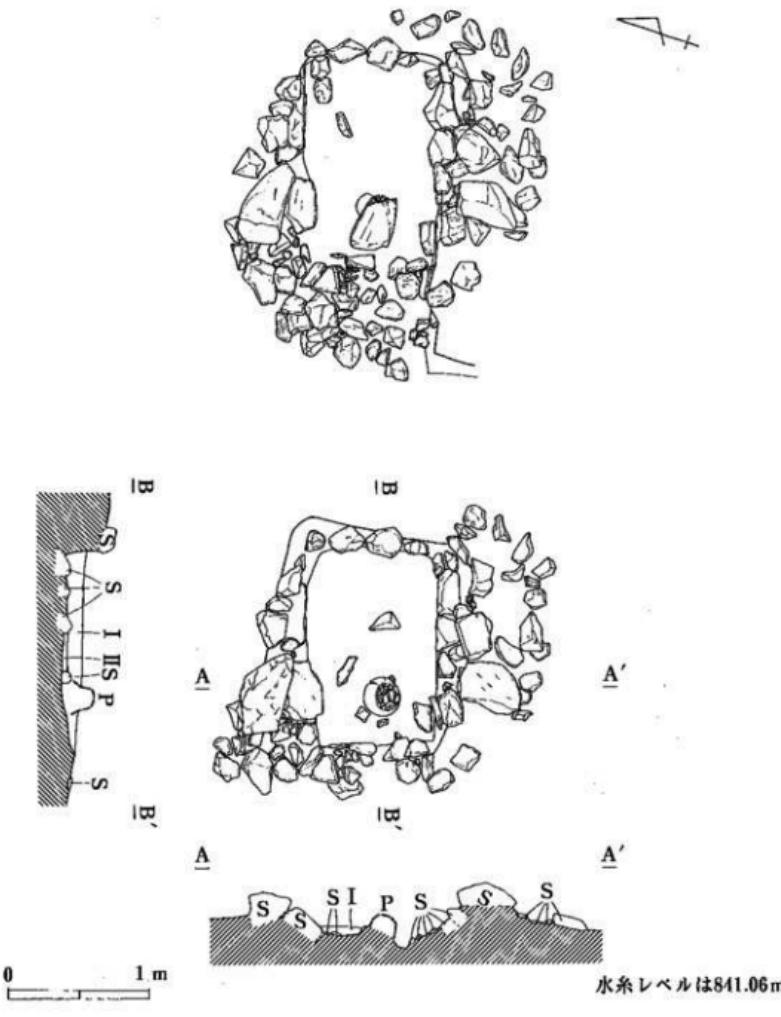
SX-04



水位は840.86m

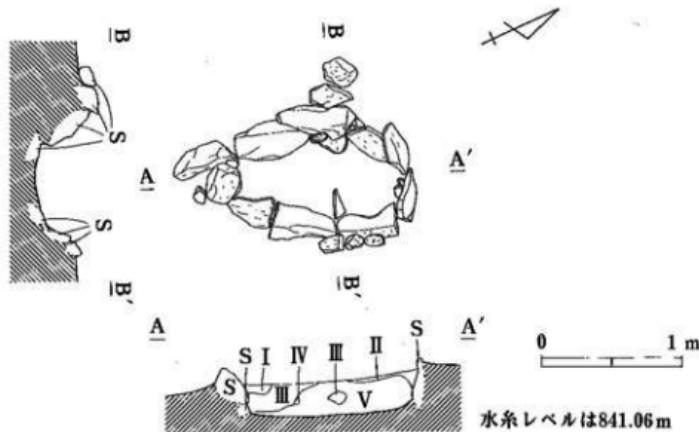
第23図 A地点 SX-01・04実測図 (1 : 40)

砾出土状況

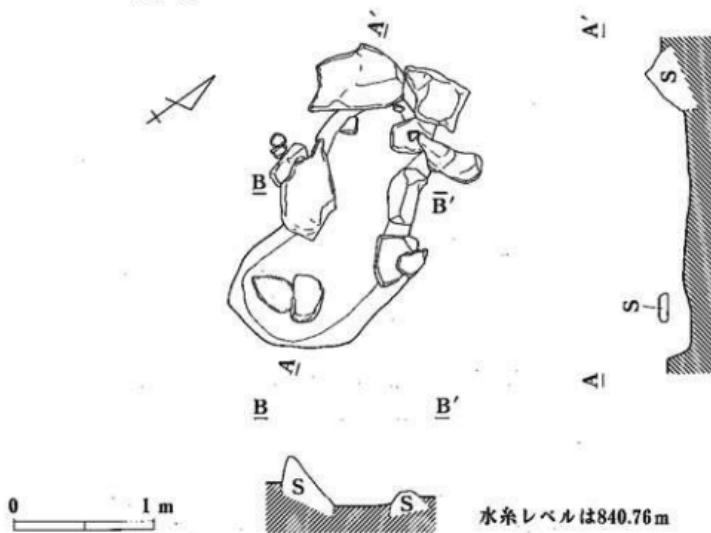


第24図 A地点 S X - 03実測図 (1 : 40)

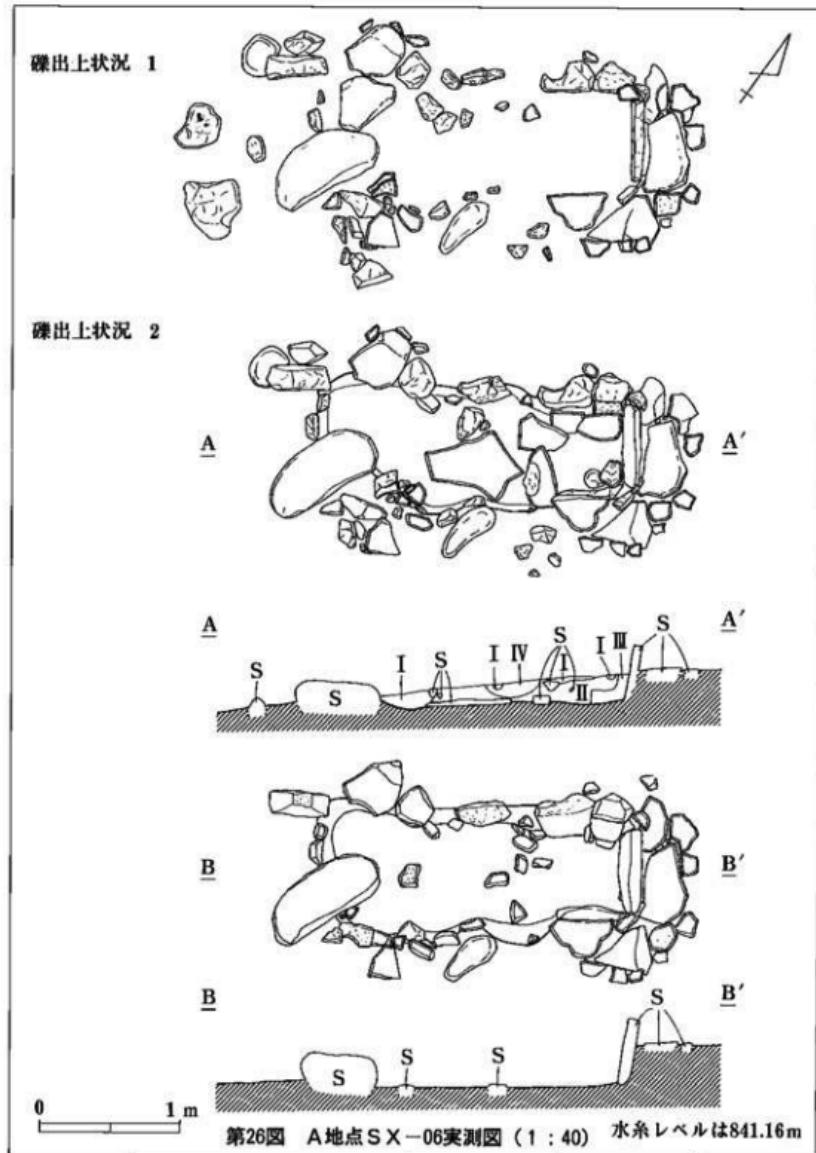
SX-05



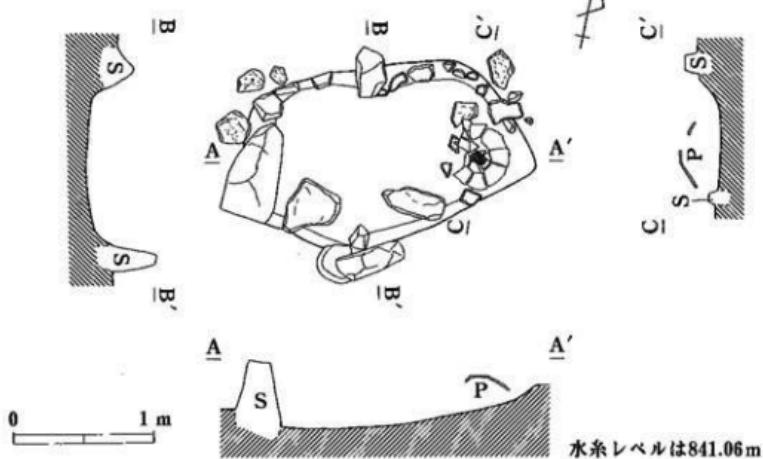
SX-07



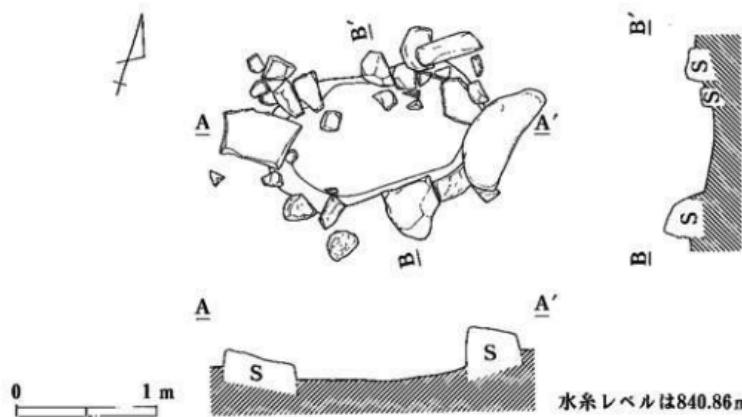
第25図 A地点SX-05・07実測図 (1:40)



SX-08

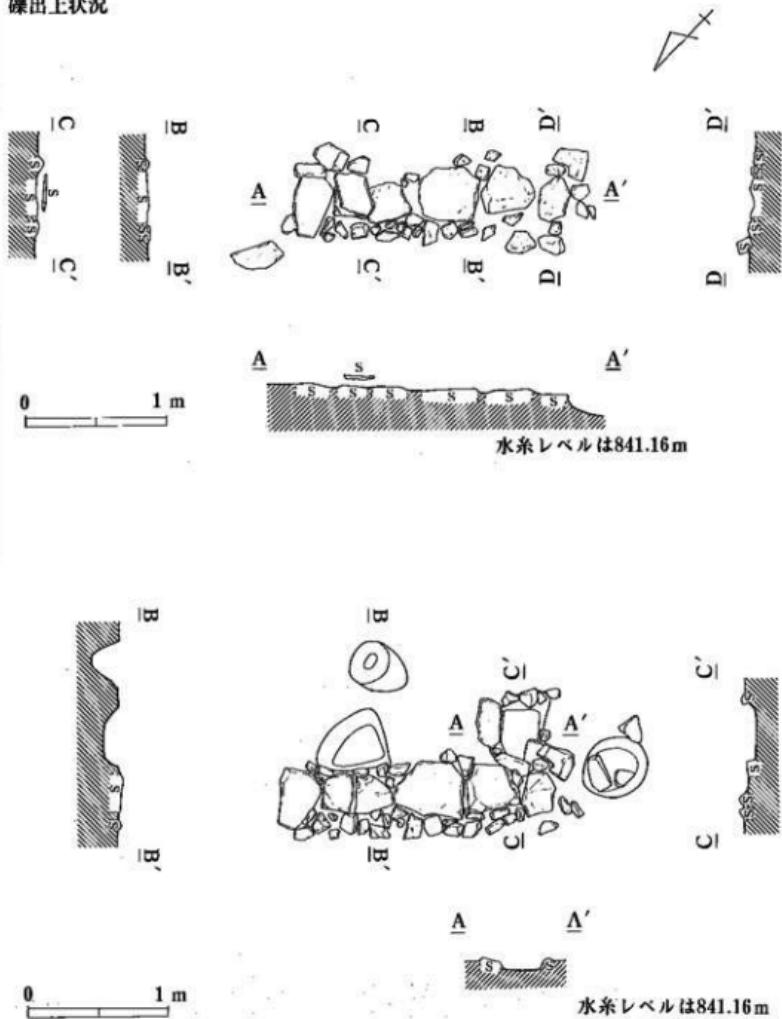


SX-09



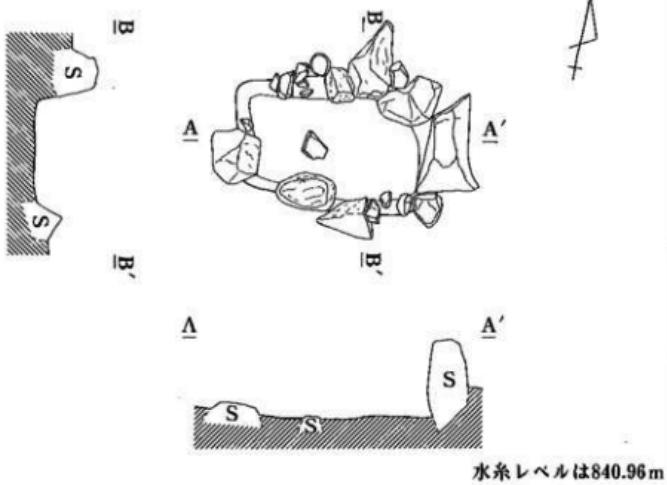
第27図 A地点SX-08・09実測図 (1:40)

露出上状況



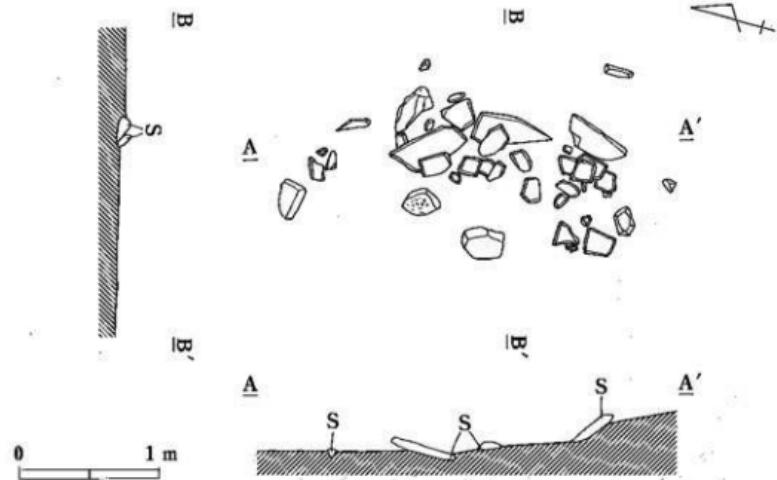
第28図 A地点 S X-10実測図 (1 : 40)

SX-11



水系レベルは840.96m

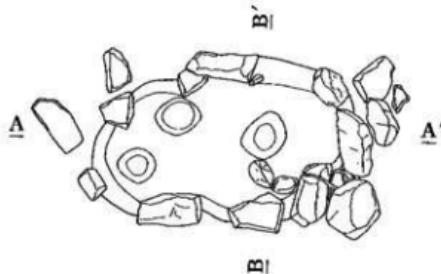
SX-12



水系レベルは841.26m

第29図 A地点 SX-11・12実測図 (1 : 40)

SX-13



B'



SX-14

水系レベルは840.86m



A



B'



B'



A

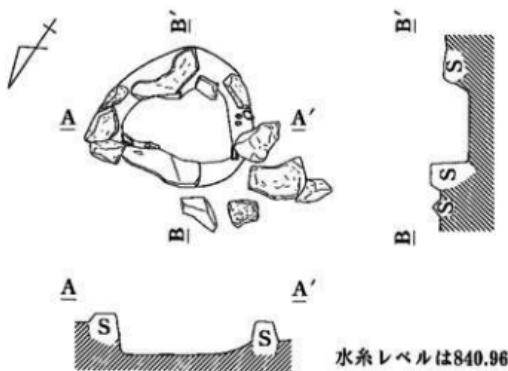


A'

水系レベルは840.56m

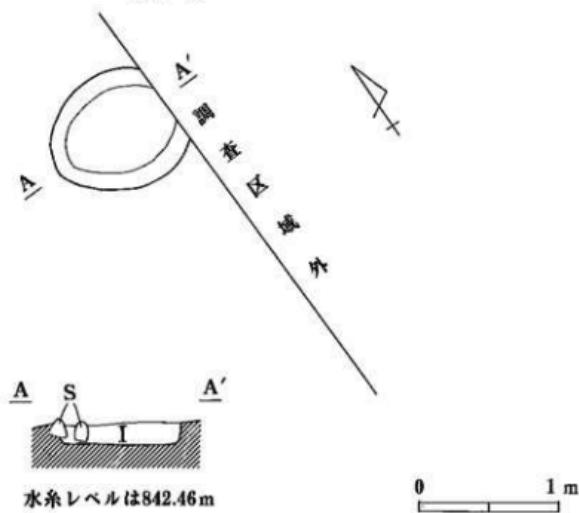
第30図 A地点SX-13・14実測図 (1 : 40)

S X - 15



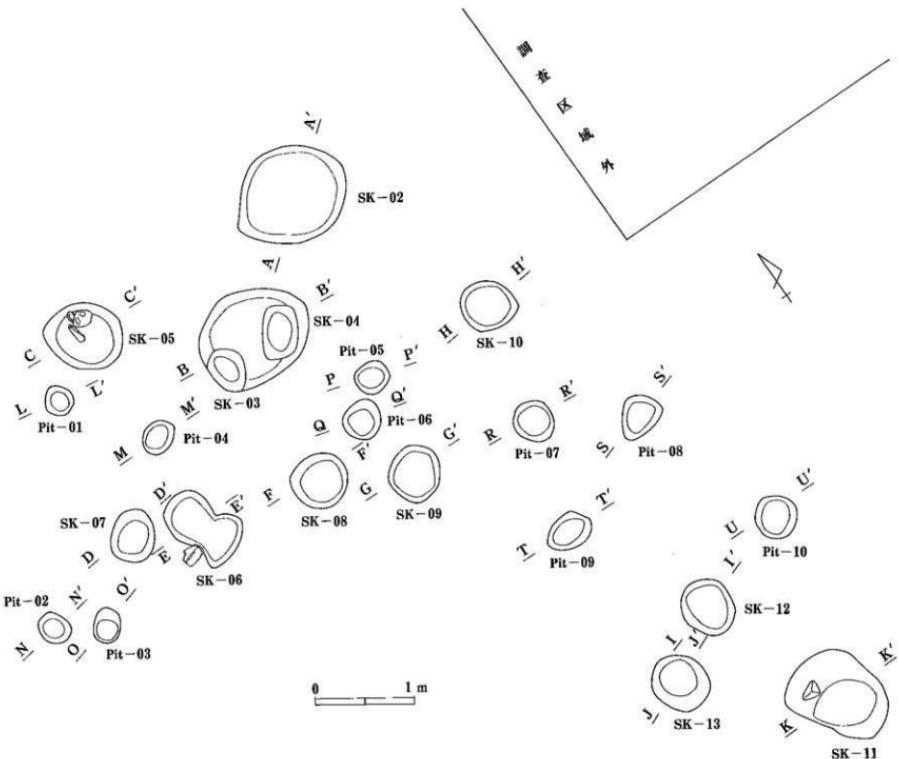
水系レベルは 840.96m

S K - 01

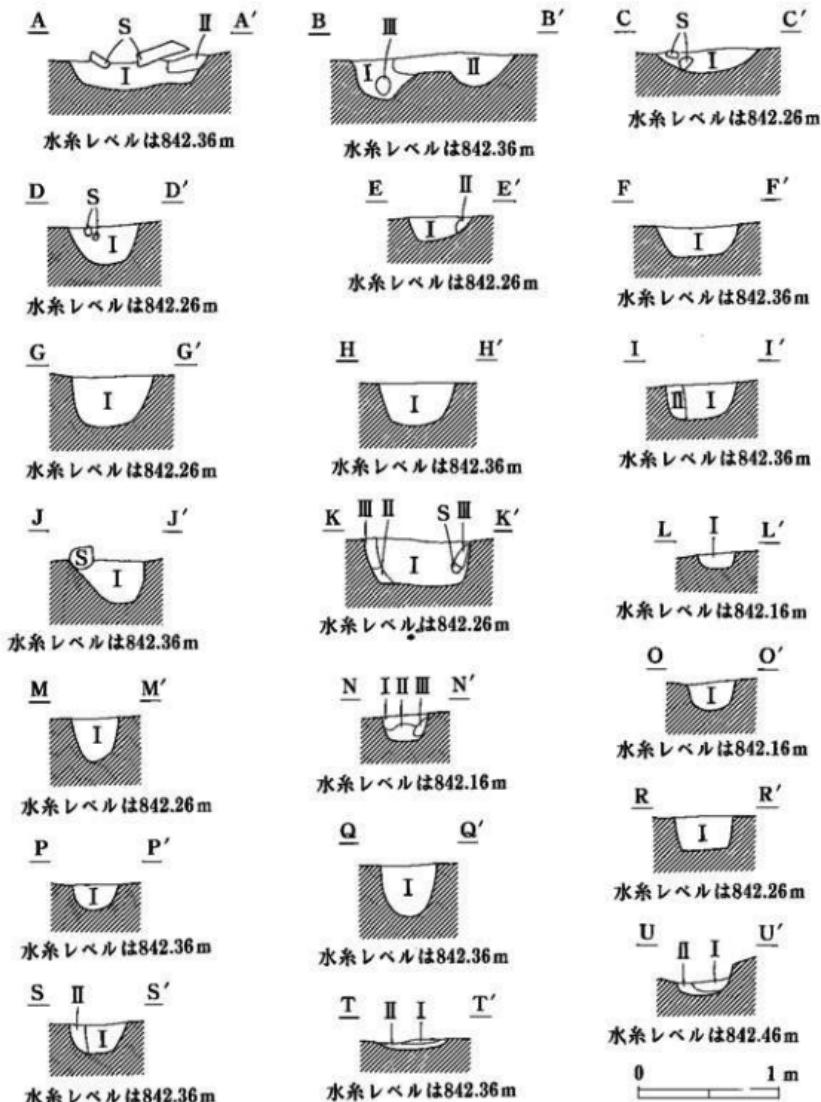


水系レベルは 842.46m

第31図 A地点 S X - 15・S K - 01実測図 (1 : 40)

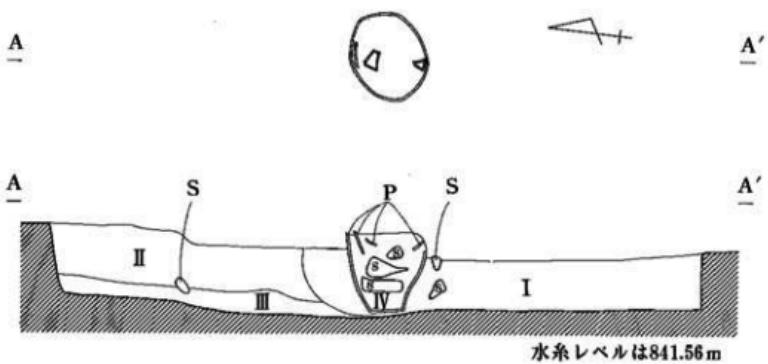


第32図 A地点造構平面実測図 (1:40)

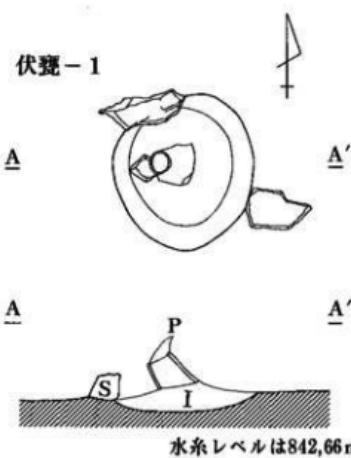


第33図 A地点遺構断面実測図 (1 : 40)

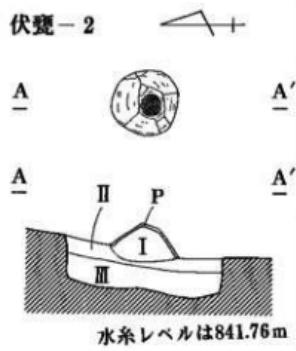
埋甕-1



伏甕-1

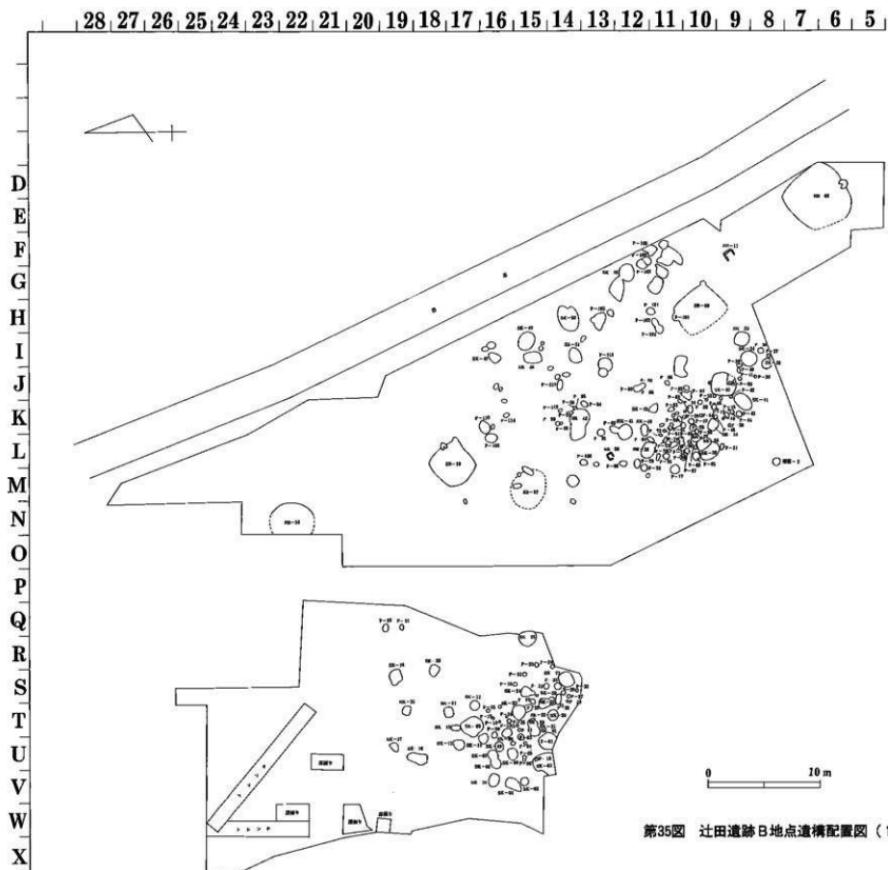


伏甕-2

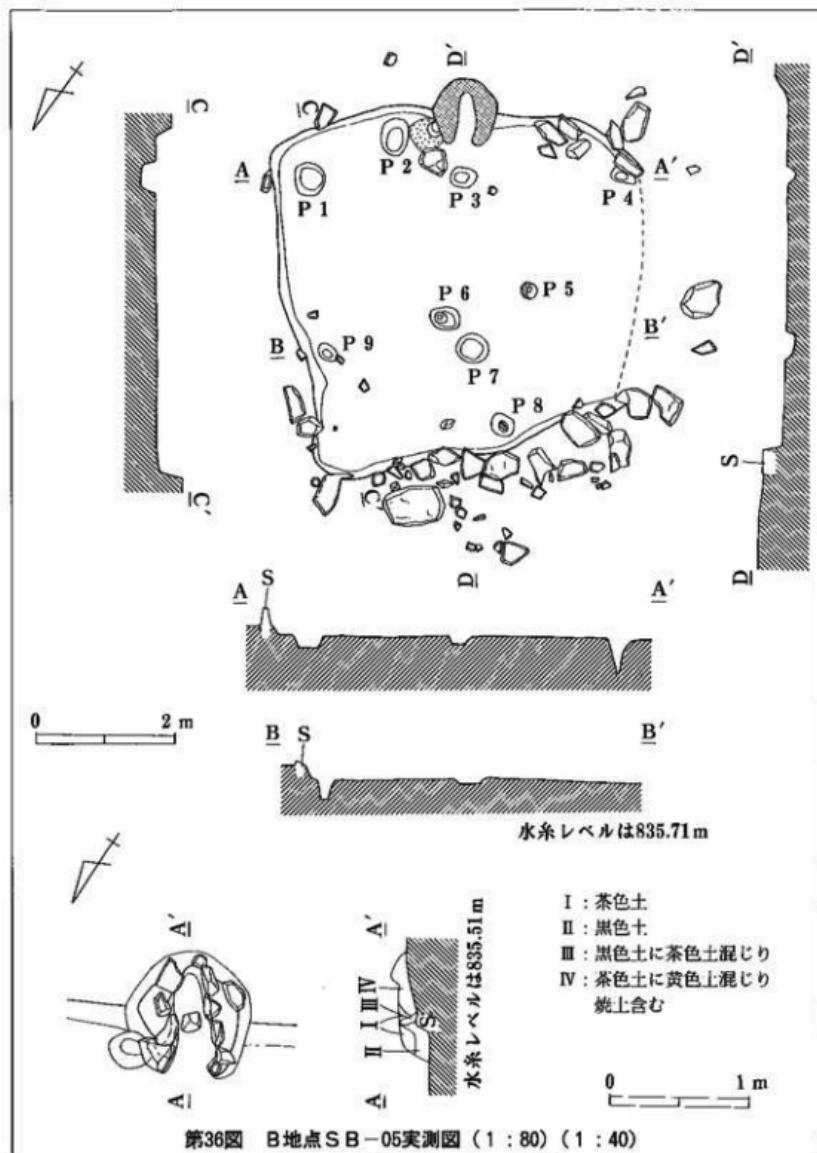


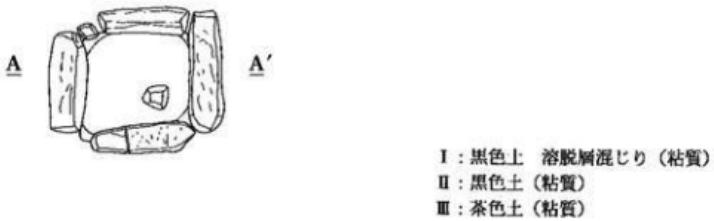
0 50cm

第34図 A地点埋設土器実測図 (1 : 20)

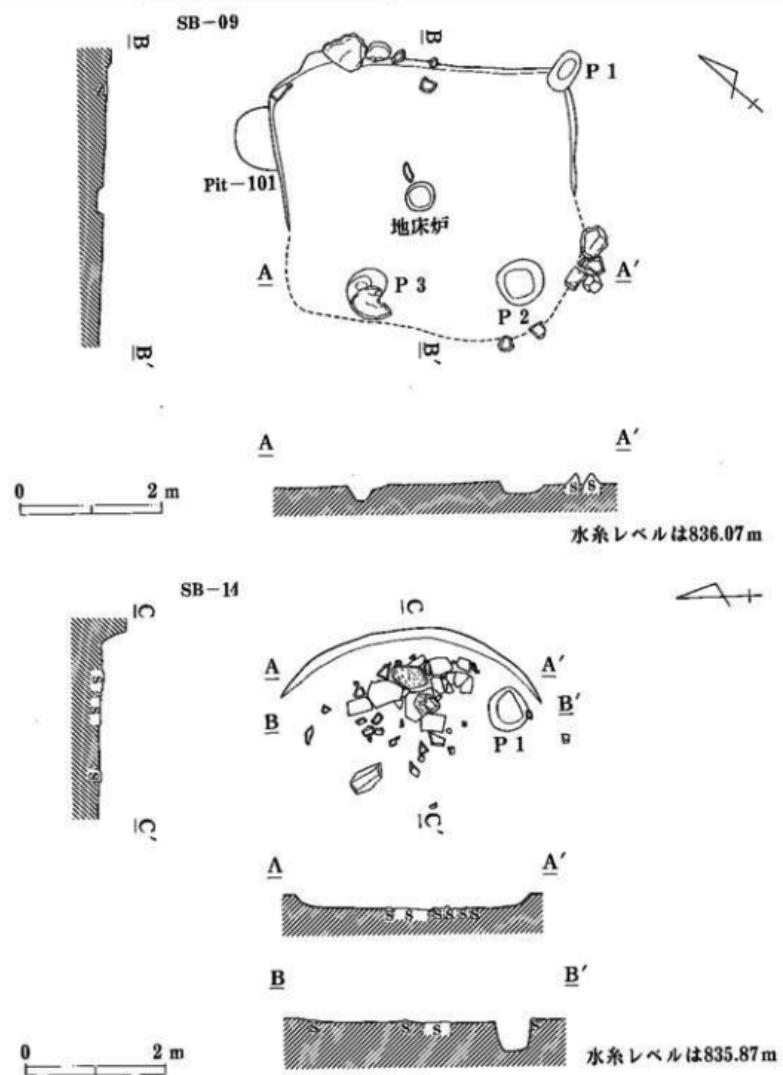


第35図 津田遺跡B地点遺構配置図 (1 : 350)

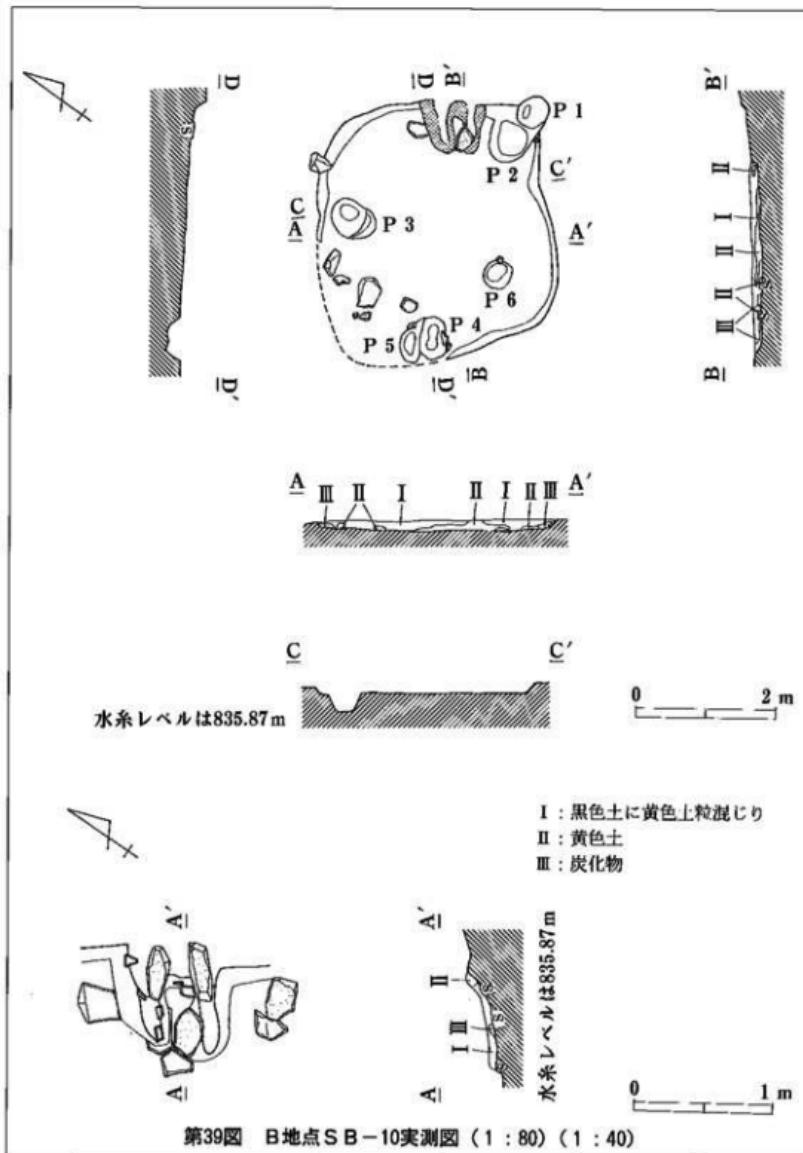


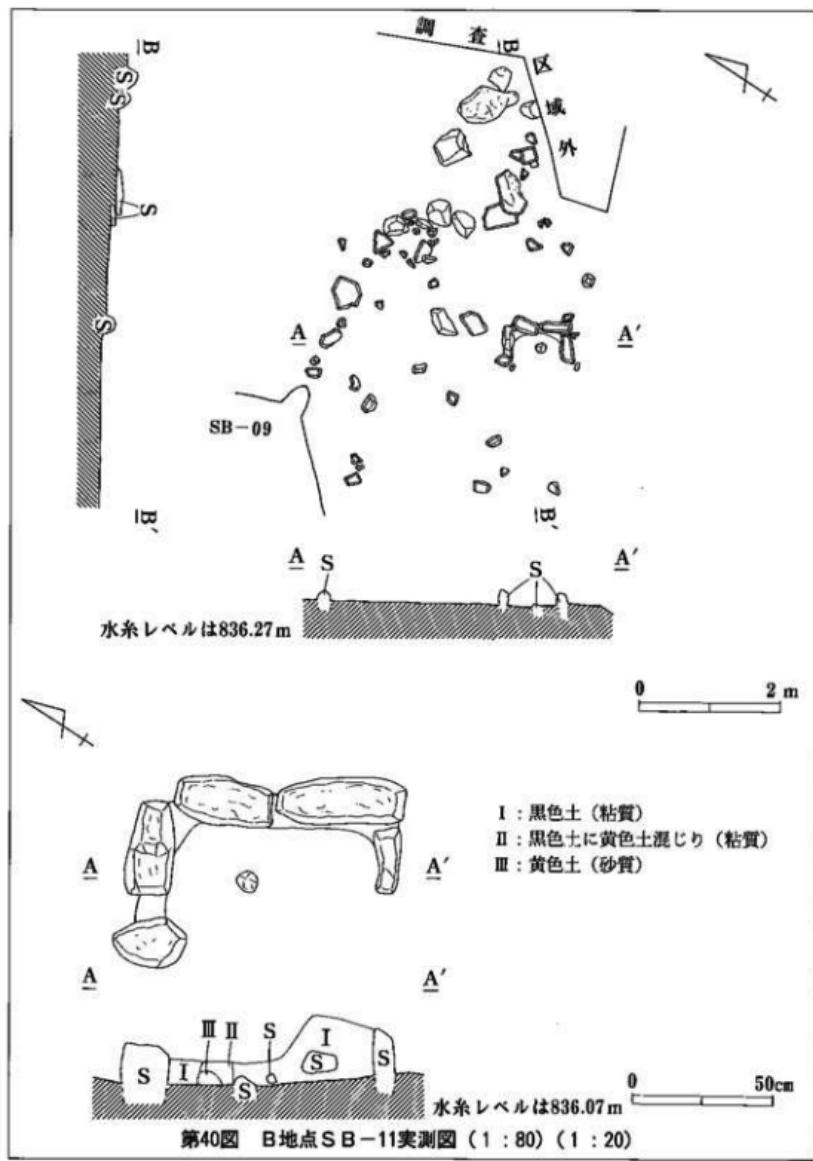


第37図 B地点SB-06実測図 (1:80) (1:20)

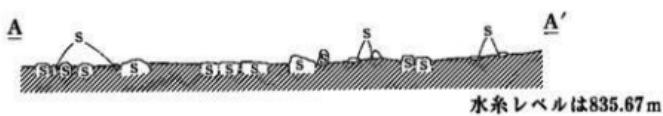
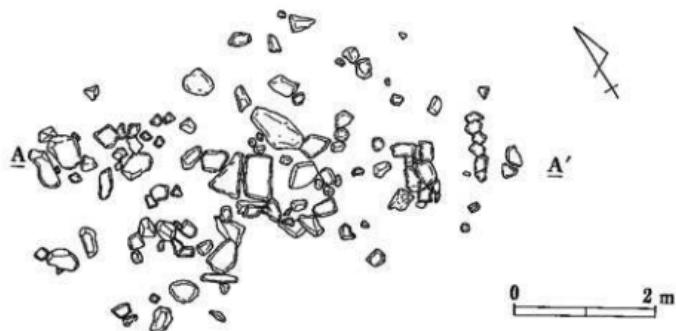


第38図 B地点SB-09・14実測図 (1:80)

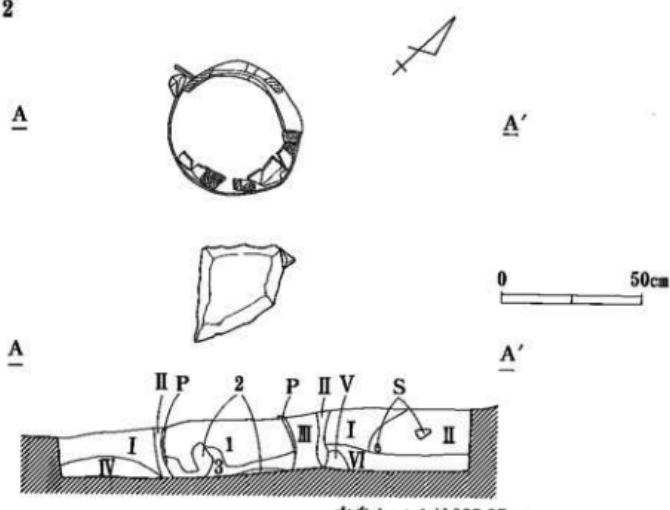




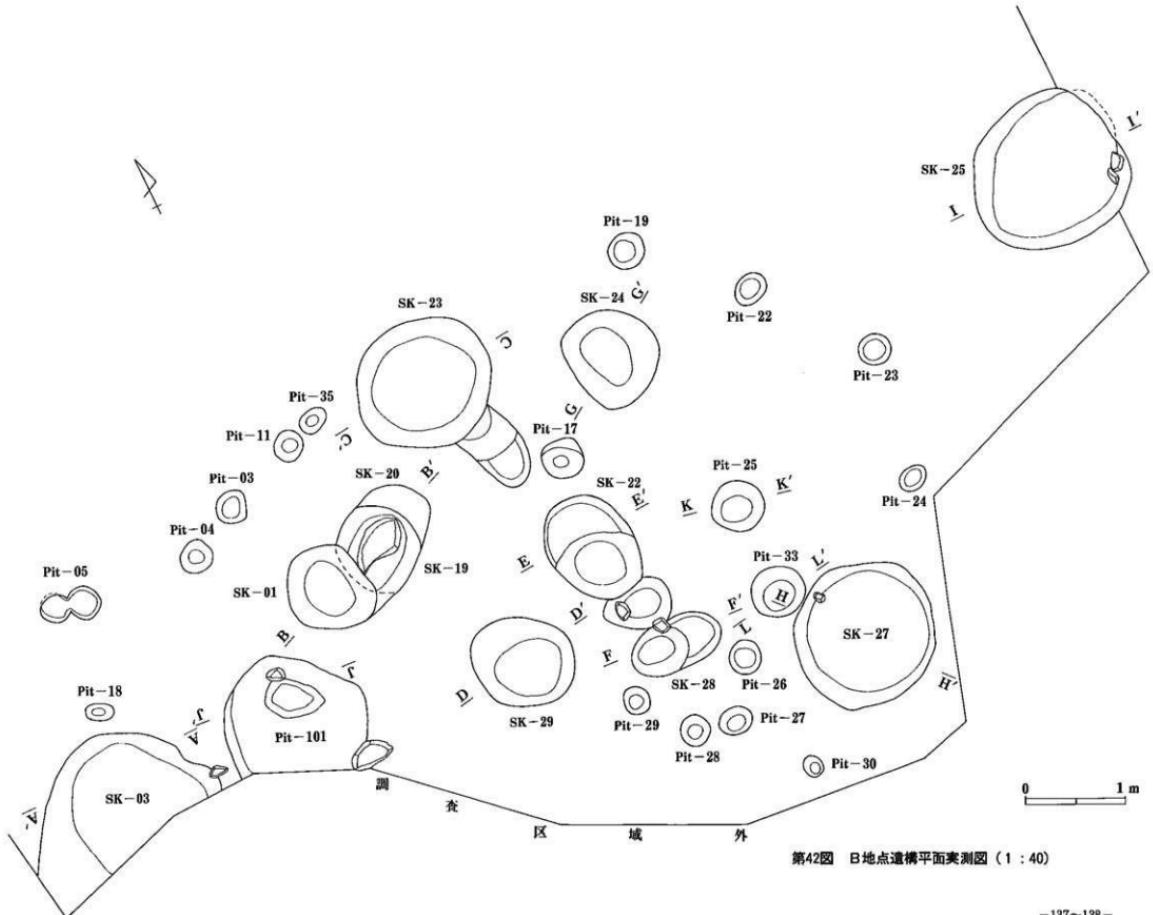
SB-12



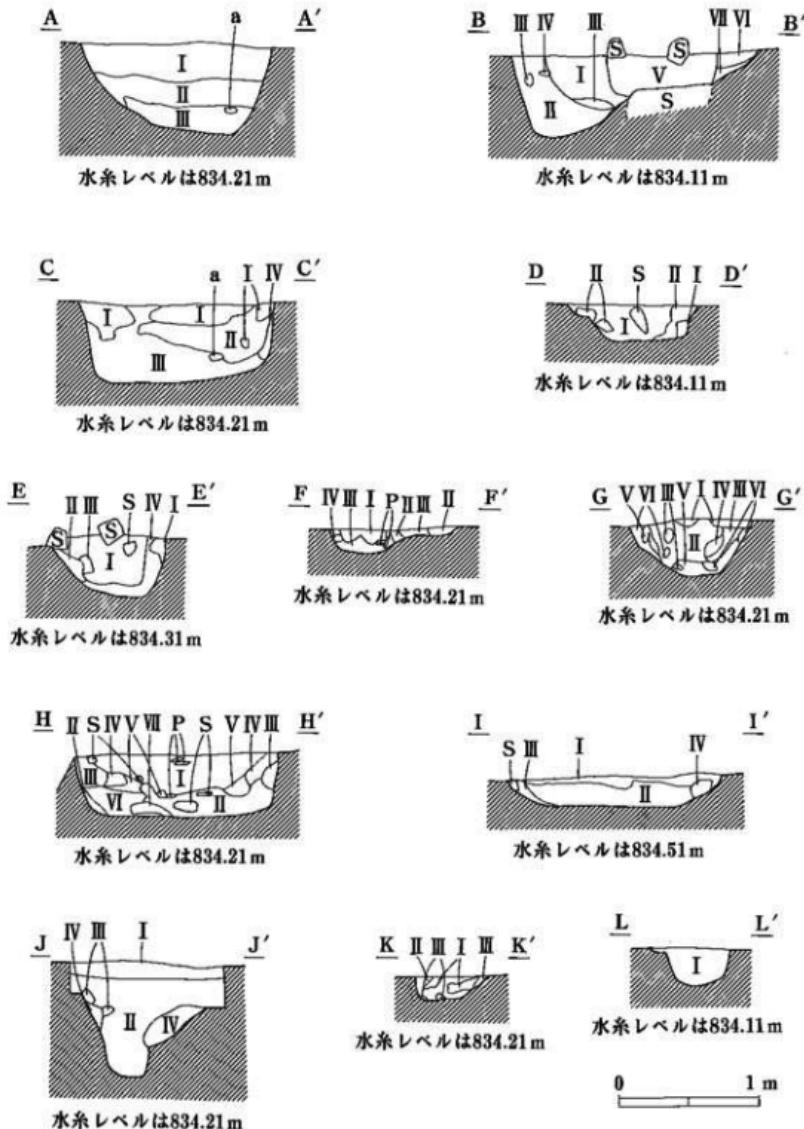
埋甕-2



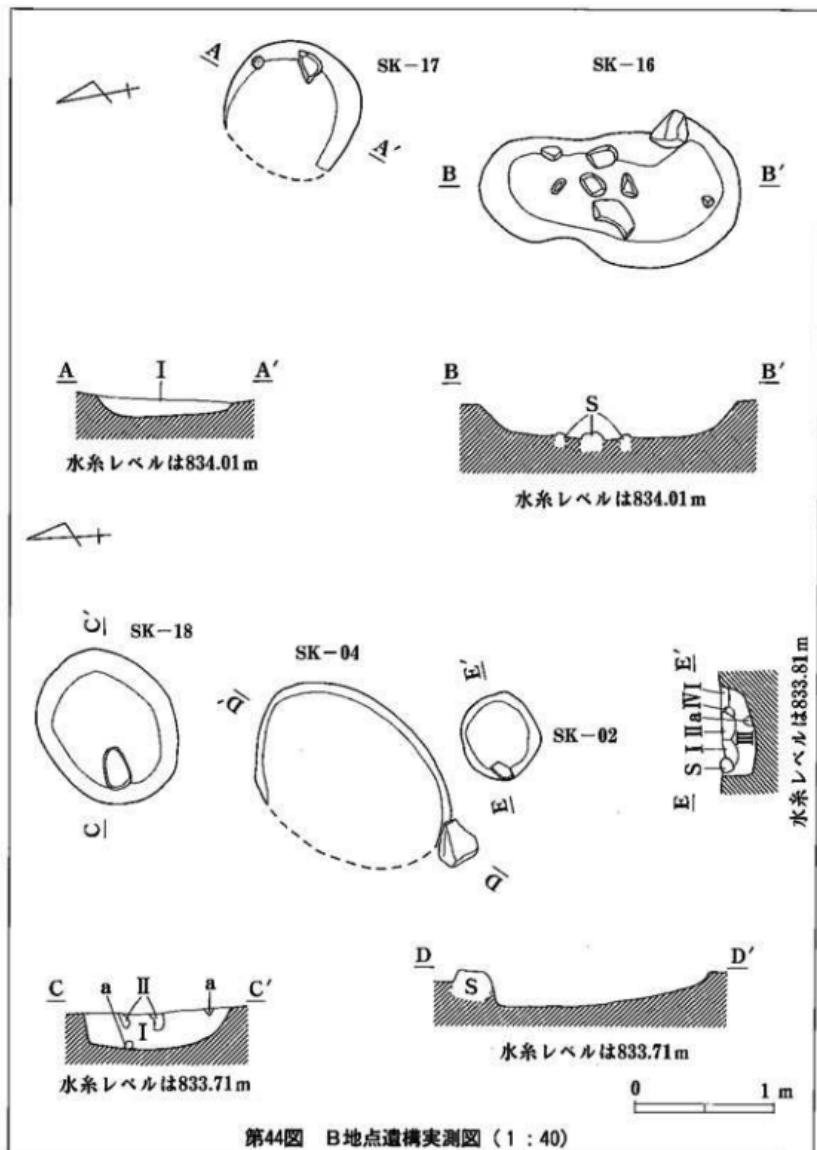
第41図 B地点 SB-12・埋甕-2実測図 (1:80) (1:20)



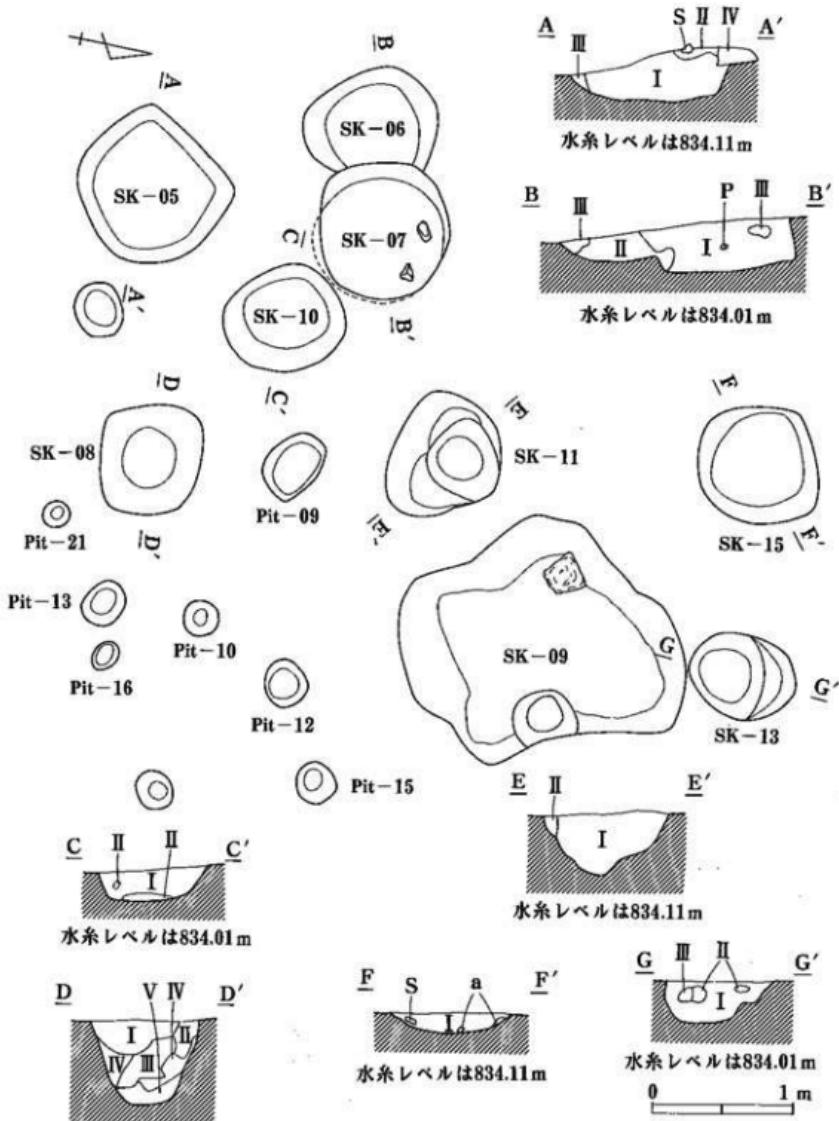
第42図 B地点遺構平面実測図 (1 : 40)



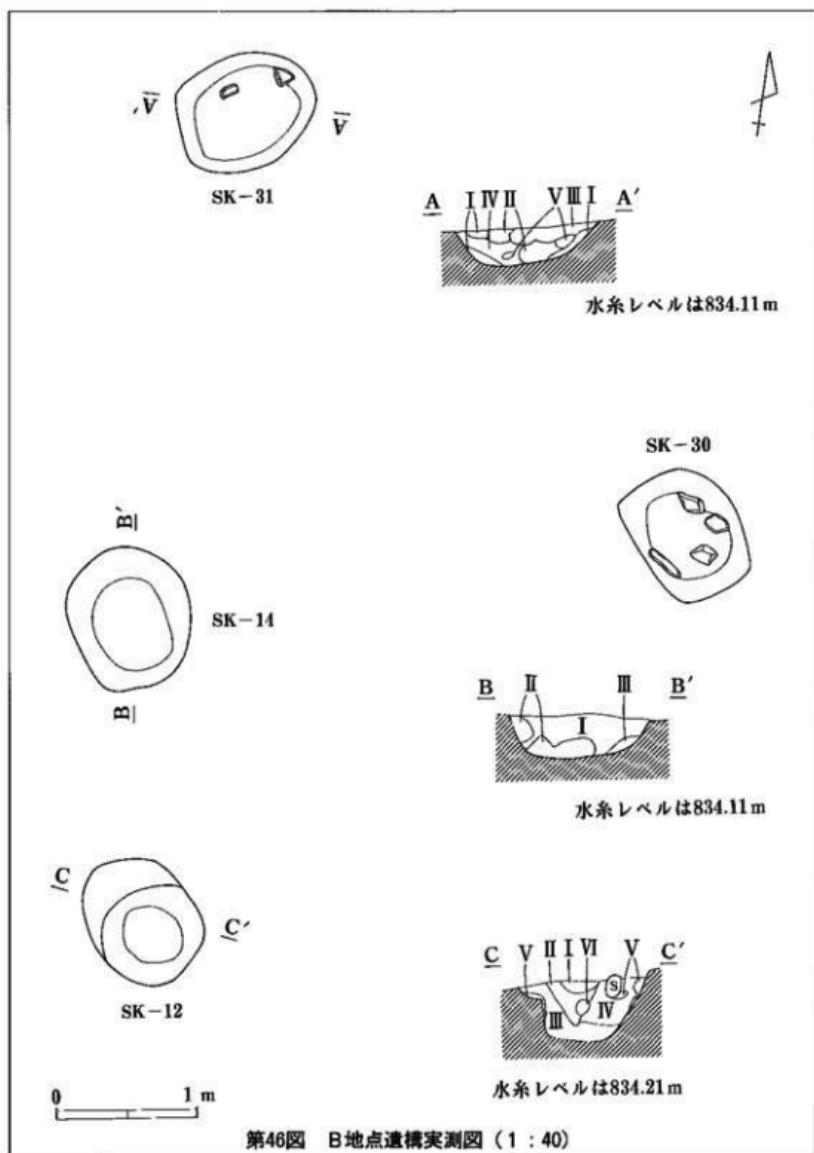
第43図 B地点造構断面実測図 (1 : 40)

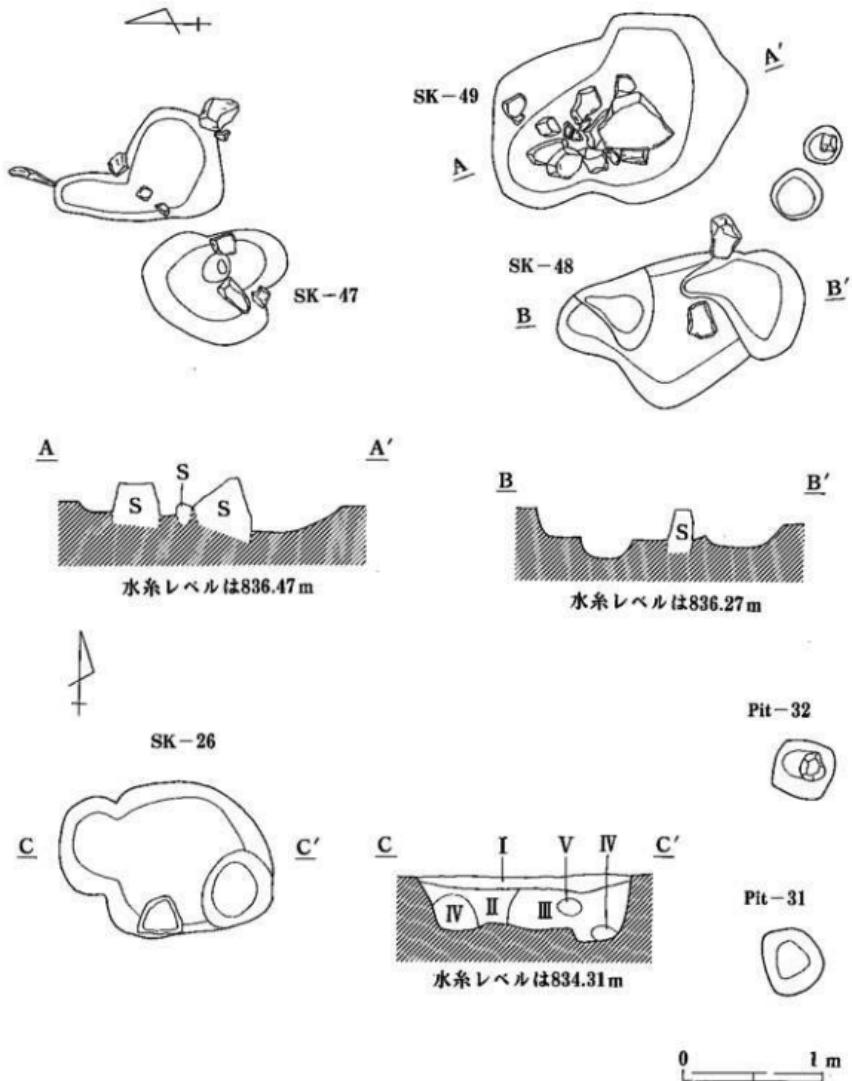


第44図 B地点造構実測図 (1:40)

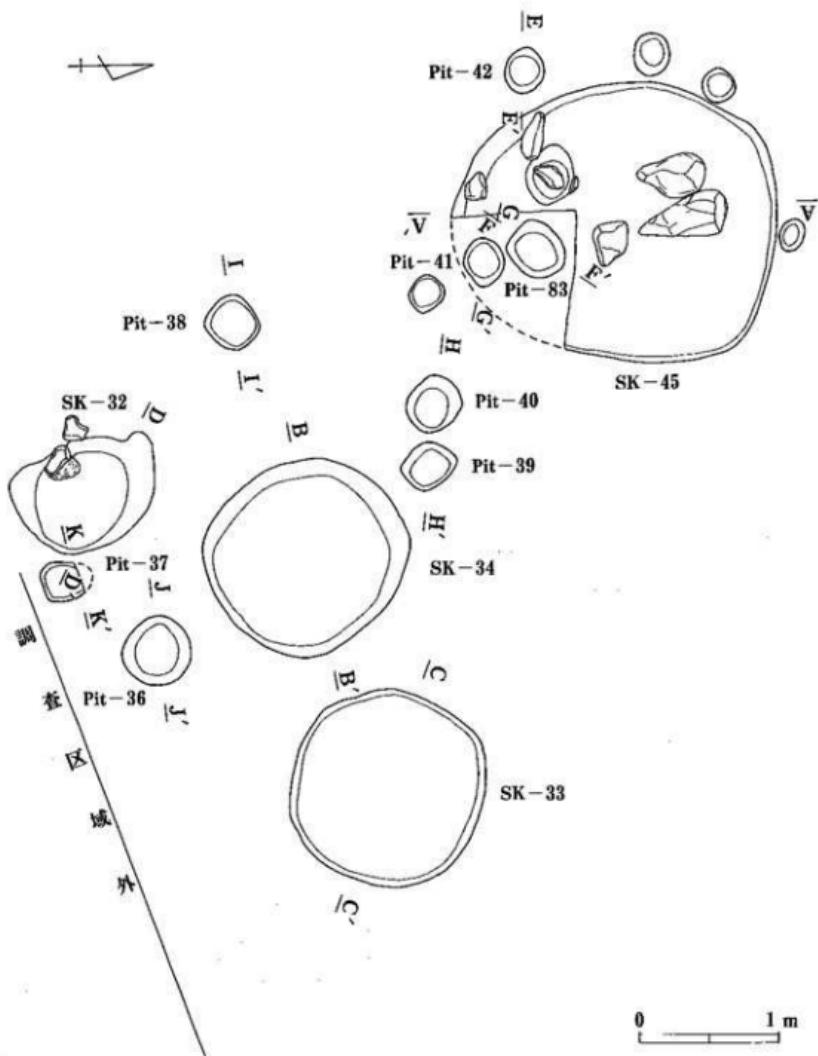


水系レベルは834.11m 第45図 B地点遺構実測図 (1 : 40)

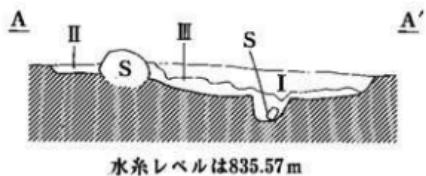




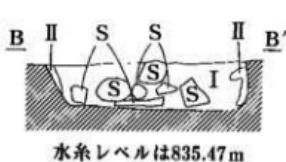
第47図 B地点遺構実測図 (1 : 40)



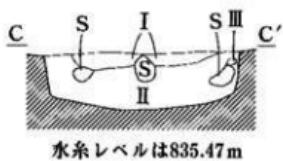
第48図 B地点遺構平面実測図 (1 : 40)



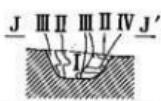
水系レベルは835.37m



水系レベルは835.47m



水系レベルは835.47m



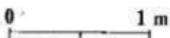
水系レベルは835.47m



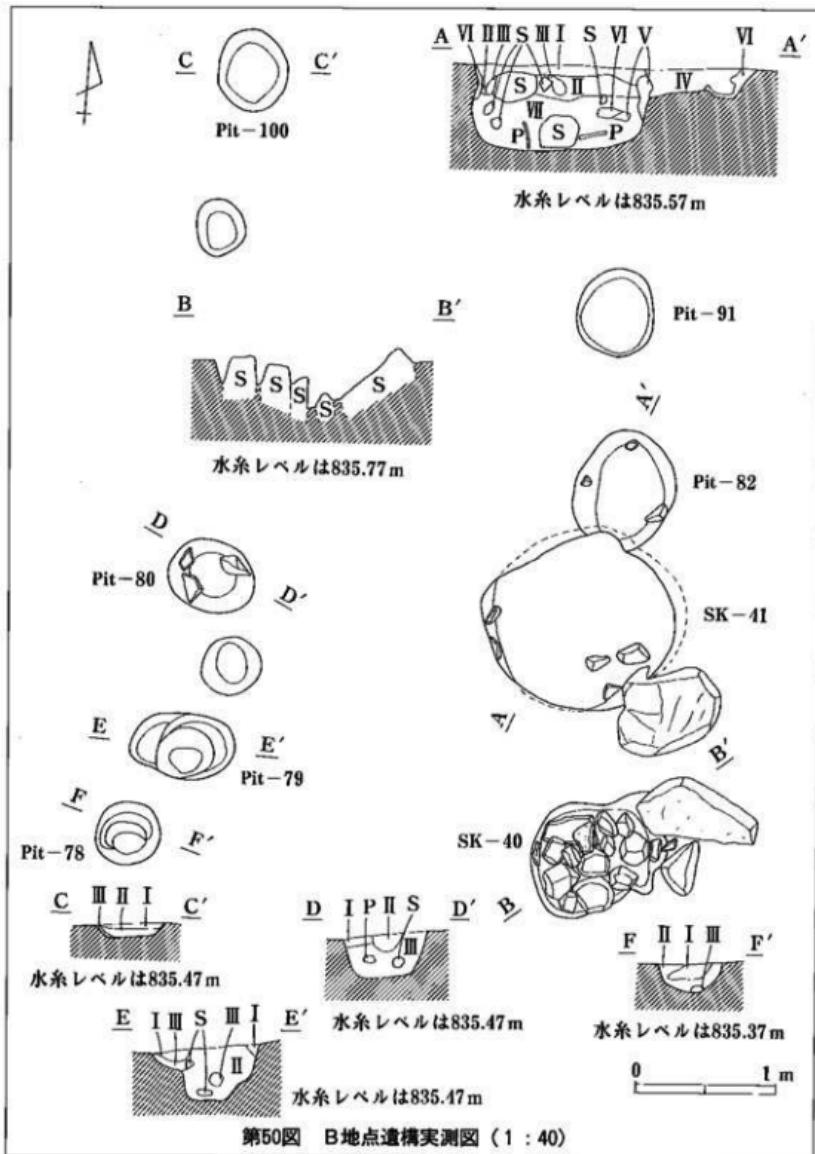
水系レベルは835.47m



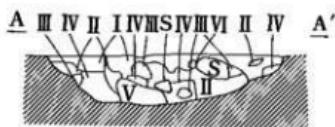
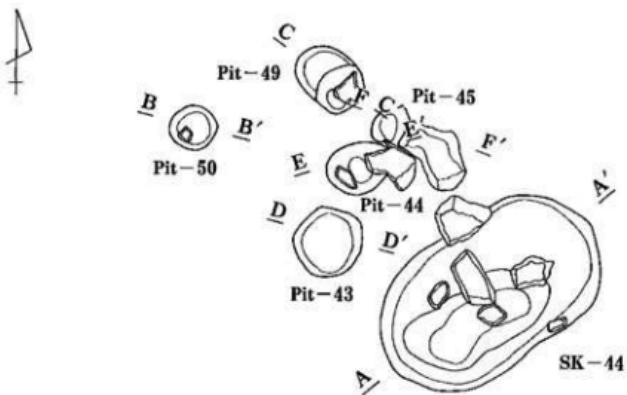
水系レベルは835.47m



第49図 B地点遺構断面実測図 (1 : 40)



第50図 B地点遺構実測図 (1 : 40)



水系レベルは835.47m



水系レベルは835.47m



水系レベルは835.47m



水系レベルは835.47m



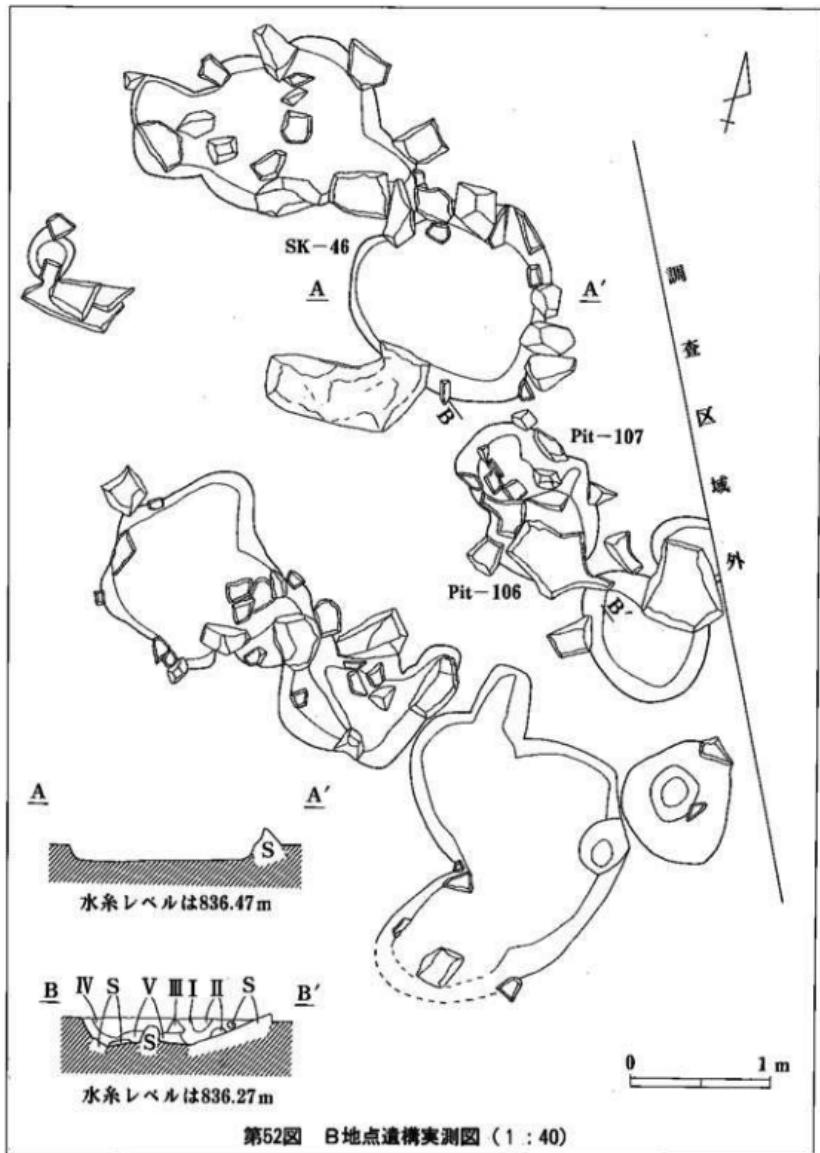
水系レベルは835.47m



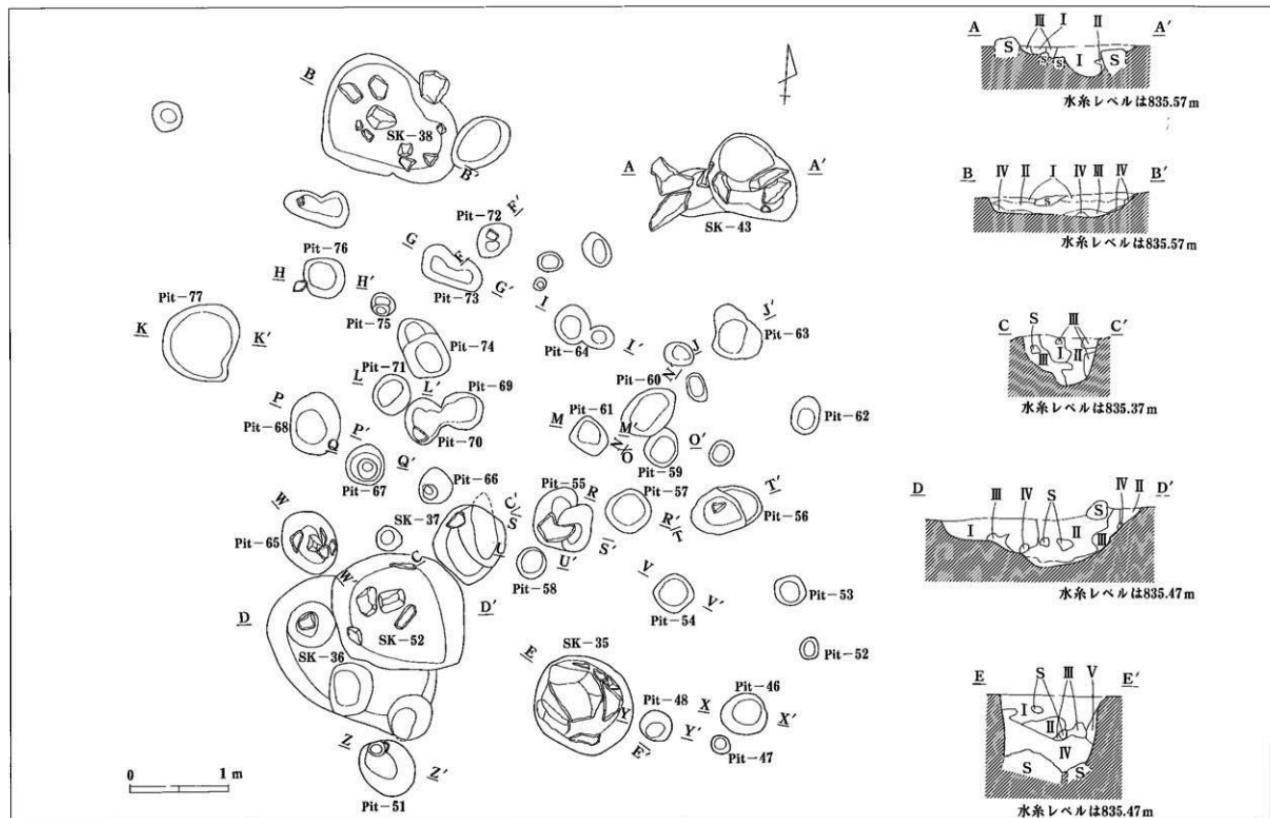
水系レベルは835.57m

0 1 m

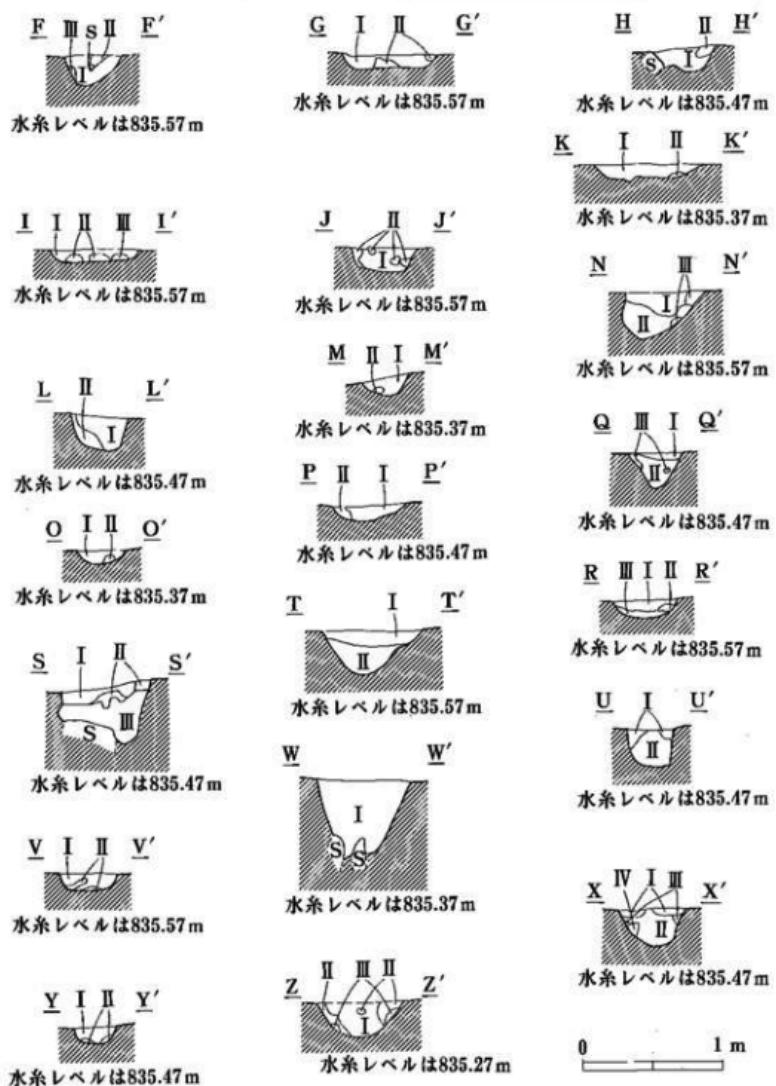
第51図 B地点造構実測図 (1 : 40)



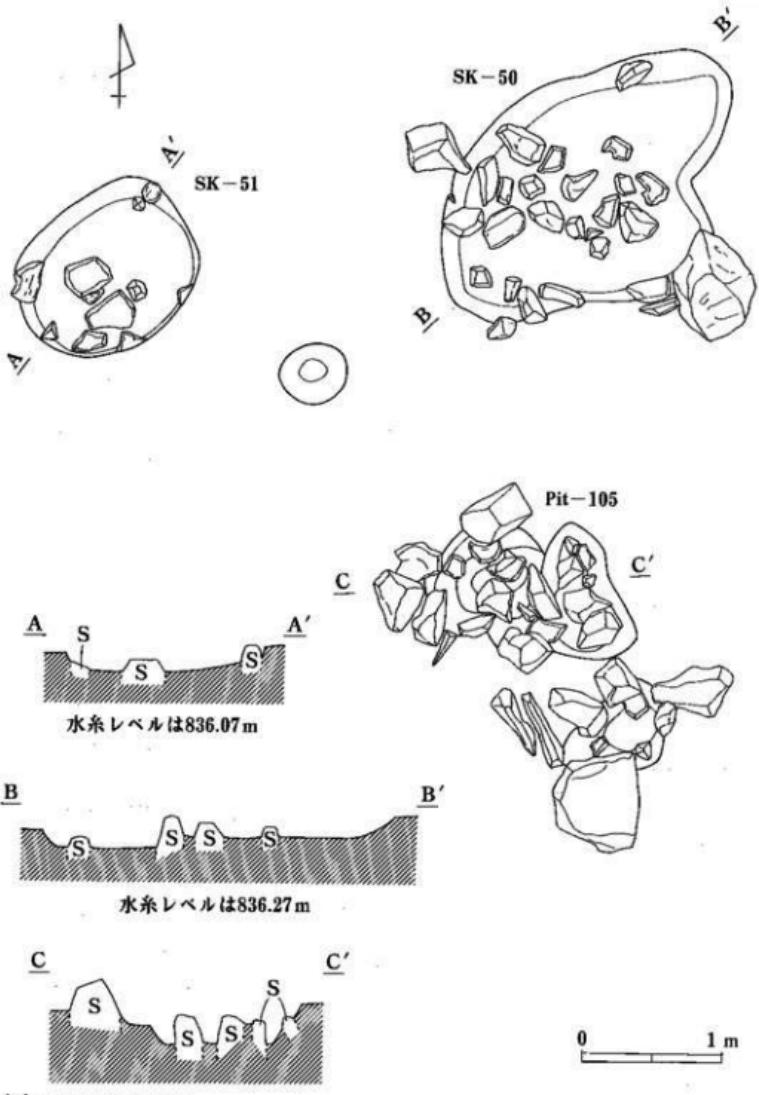
第52図 B地点遺構実測図 (1 : 40)



第53図 B地点遺構実測図 (1 : 40)

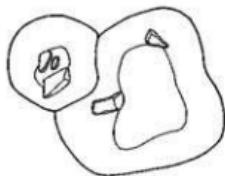


第54図 B地点遺構断面実測図 (1 : 40)



第55図 日地占遣標索測図 (1 : 40)

Pit-111



Pit-90



Pit-88-89

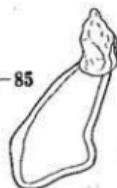


水位レベルは835.67m

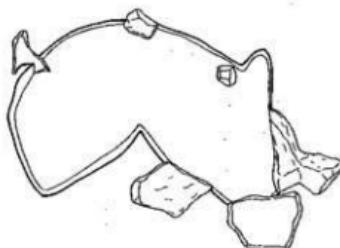
Pit-86



Pit-85

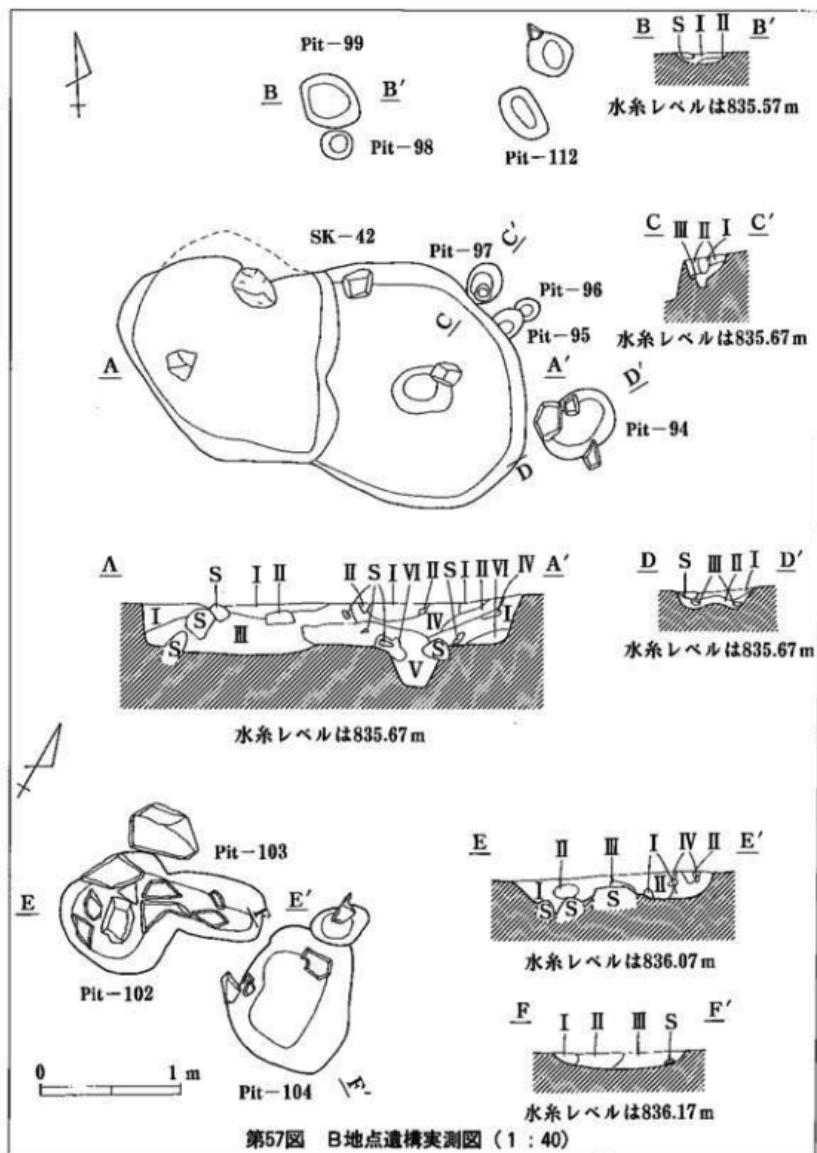


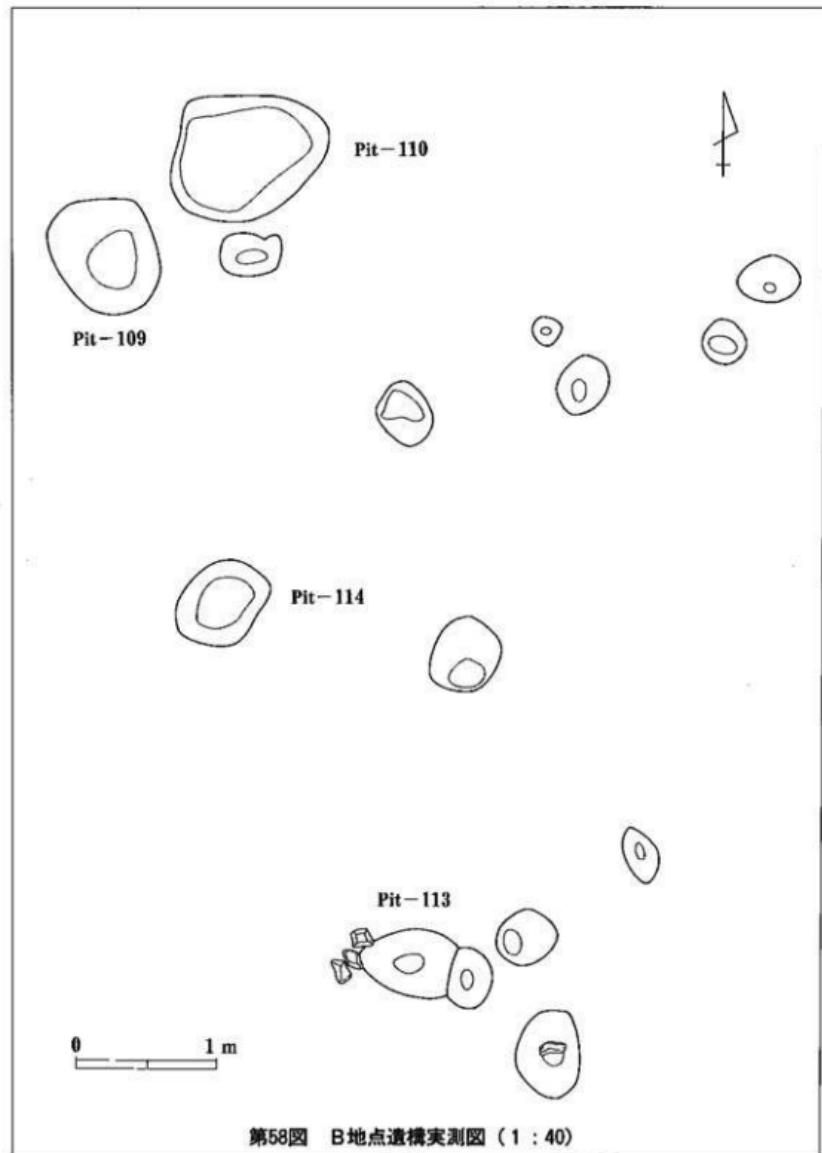
Pit-84



0 1 m

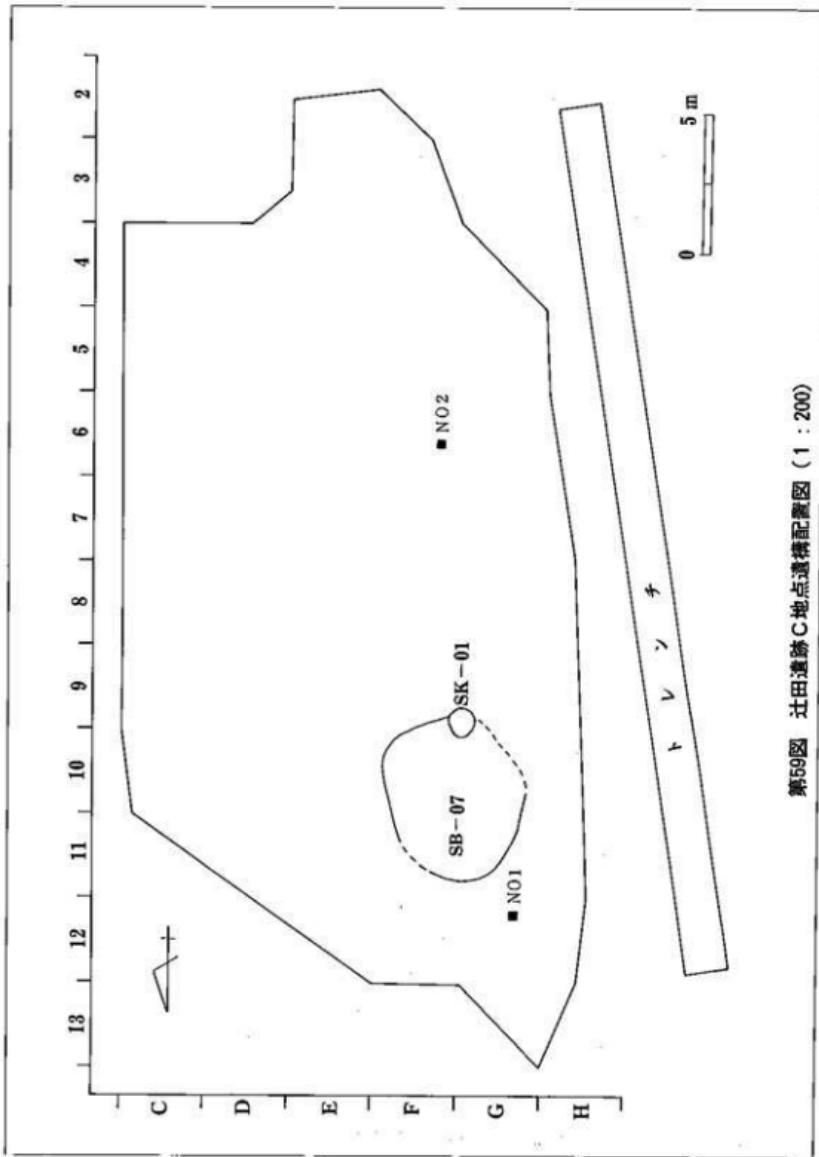
第56図 B地点遺構実測図 (1:40)

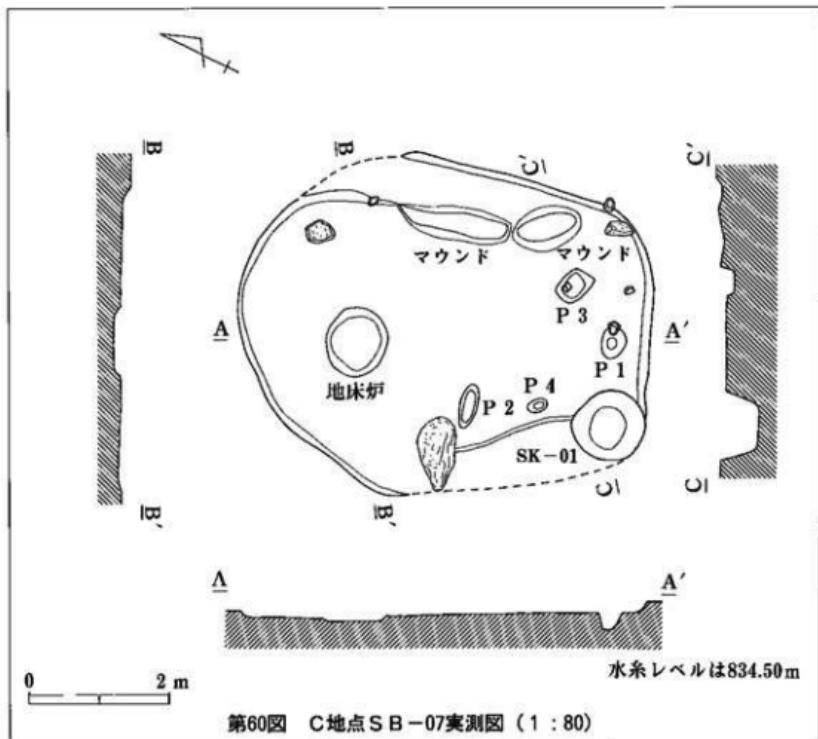




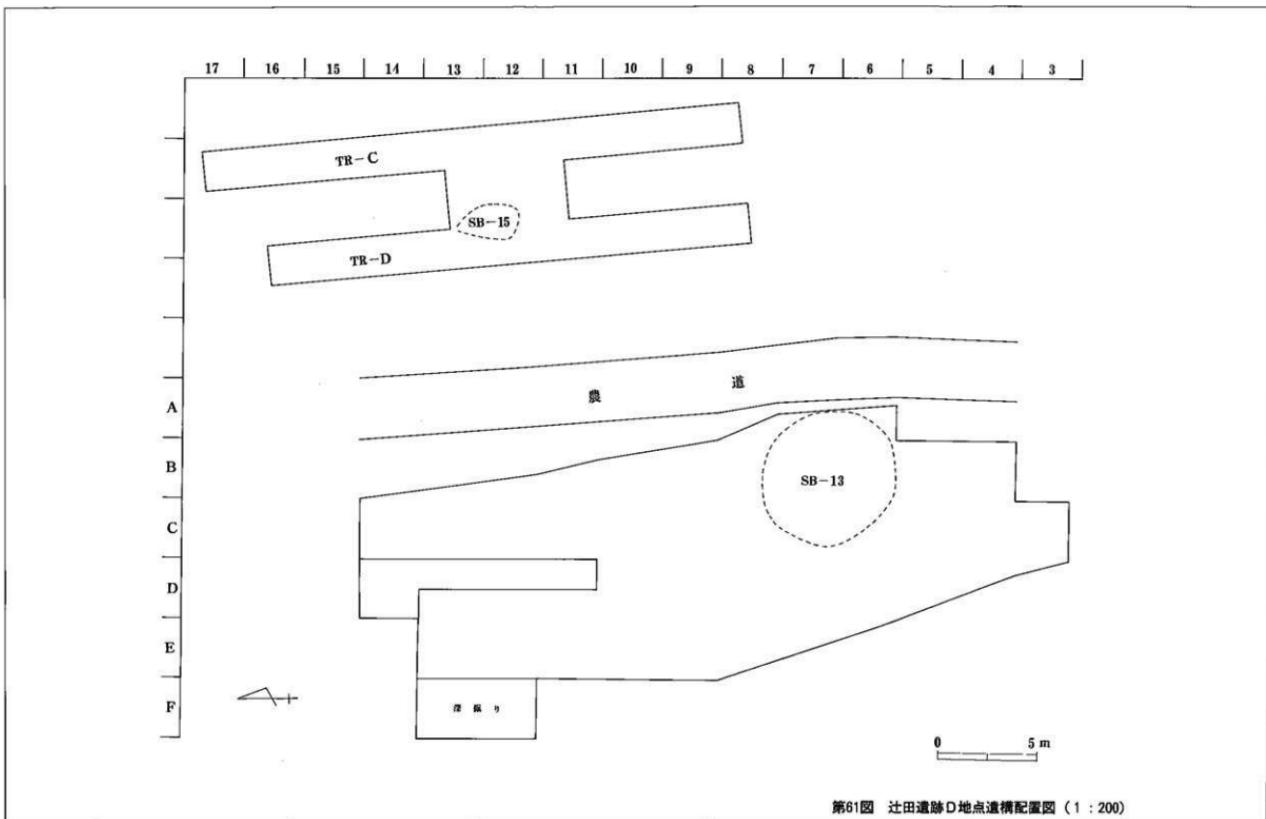
第58図 B地点遺構実測図 (1 : 40)

第59図 辻田遺跡C地点遺構配置図 (1 : 200)

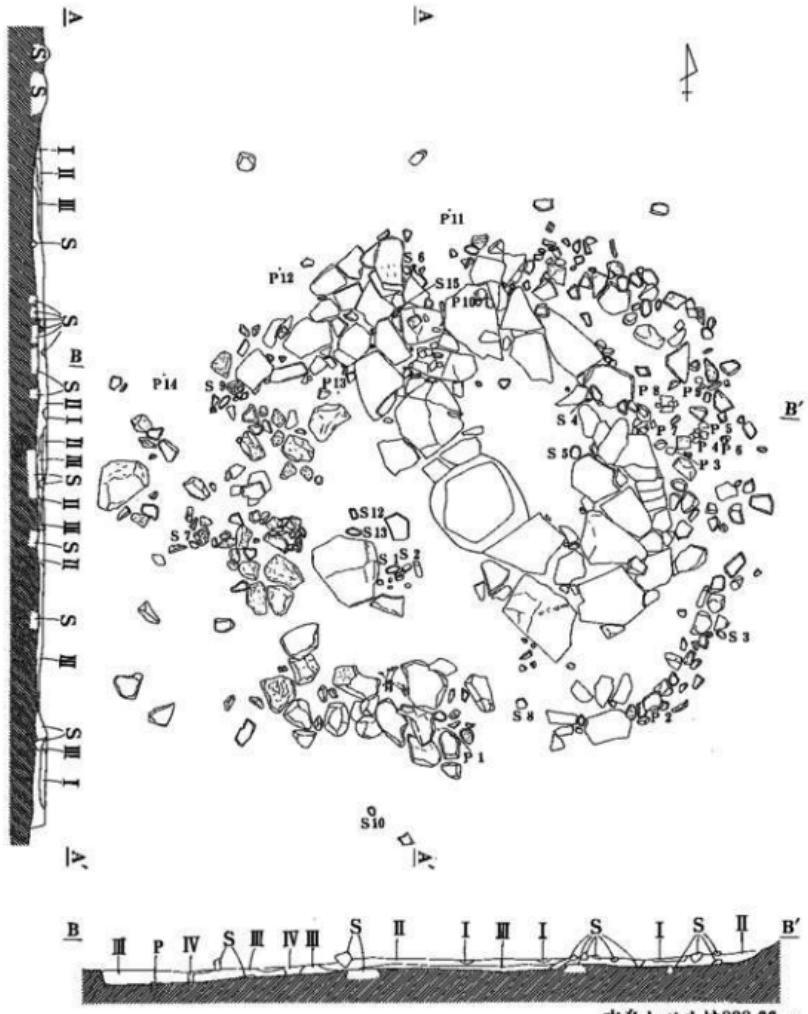




第60図 C地点SB-07実測図 (1 : 80)

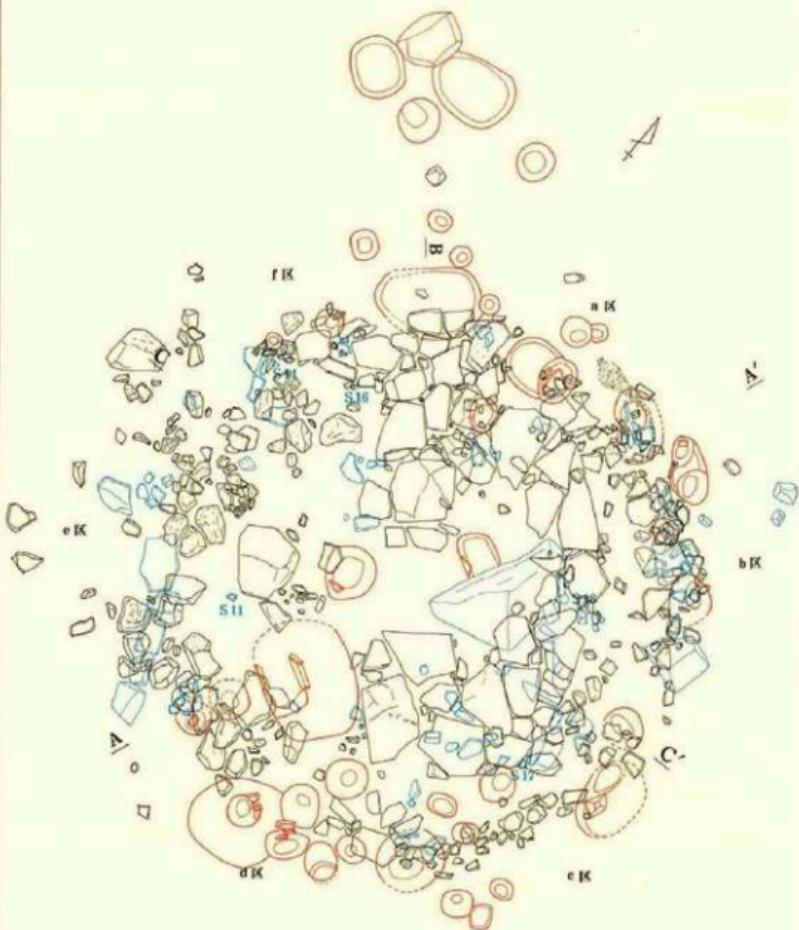


第61図 辻田遺跡D地点遺構配置図 (1 : 200)



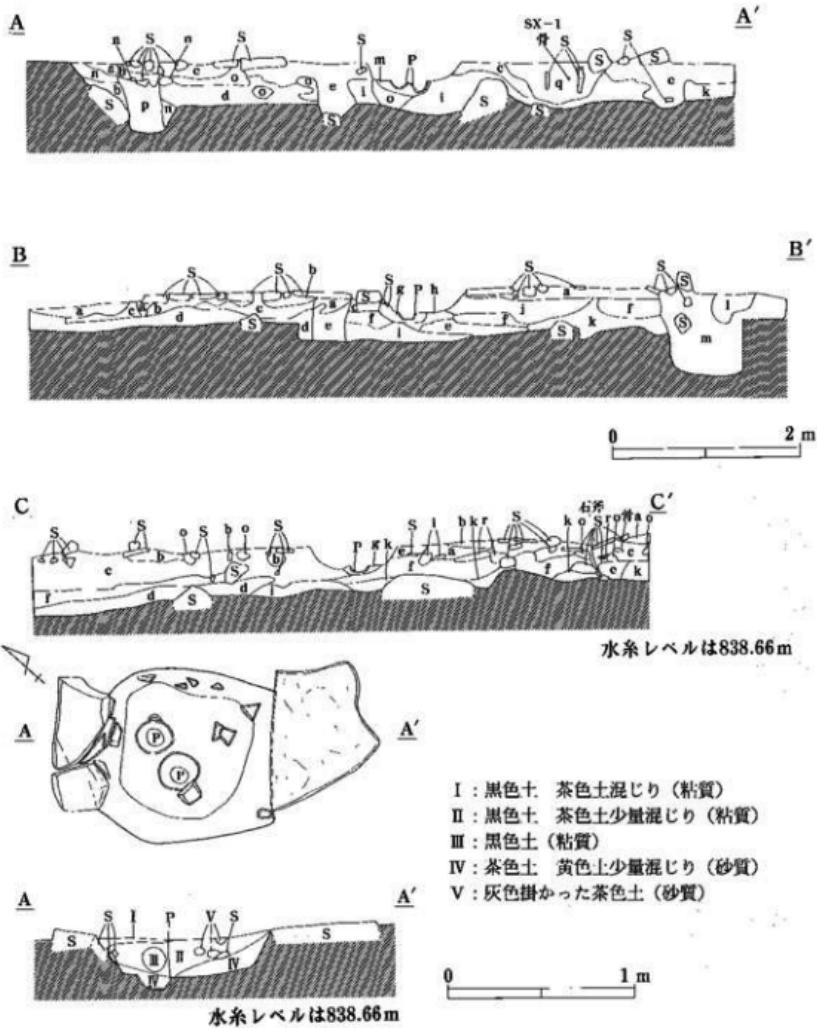
第62図 D地点SB-13実測図 (1 : 60)

0 2 m

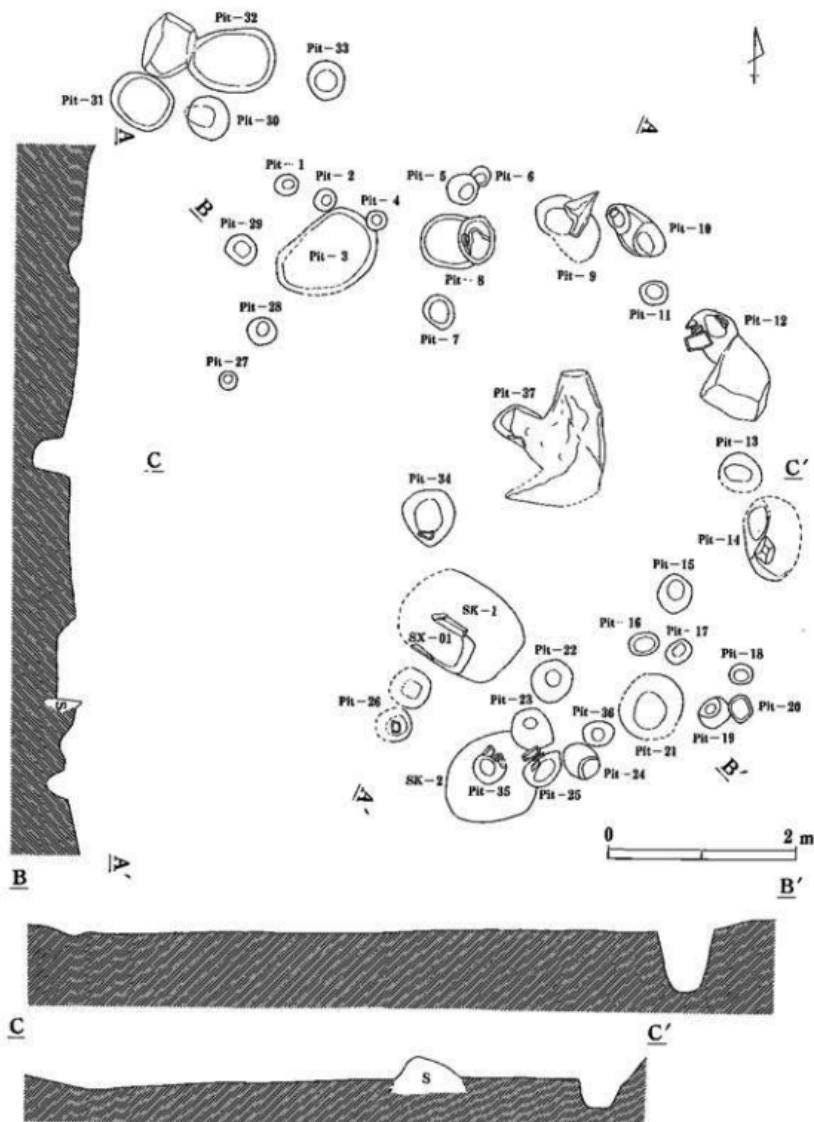


黒色=敷石の検出状態
青色=敷石除去後の状態
赤色=ピット

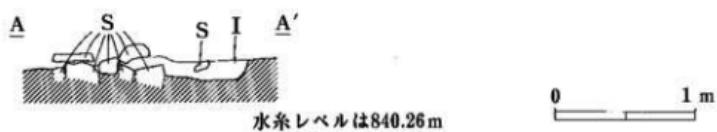
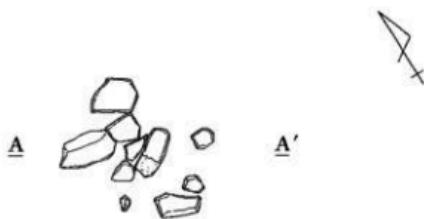
第63図 D地点SB-13実測図(1:60)



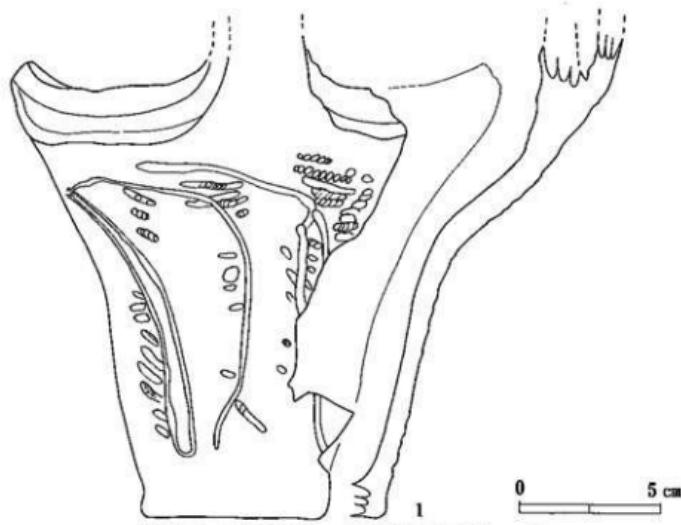
第64図 D地点SB-13実測図 (1:60) (1:30)



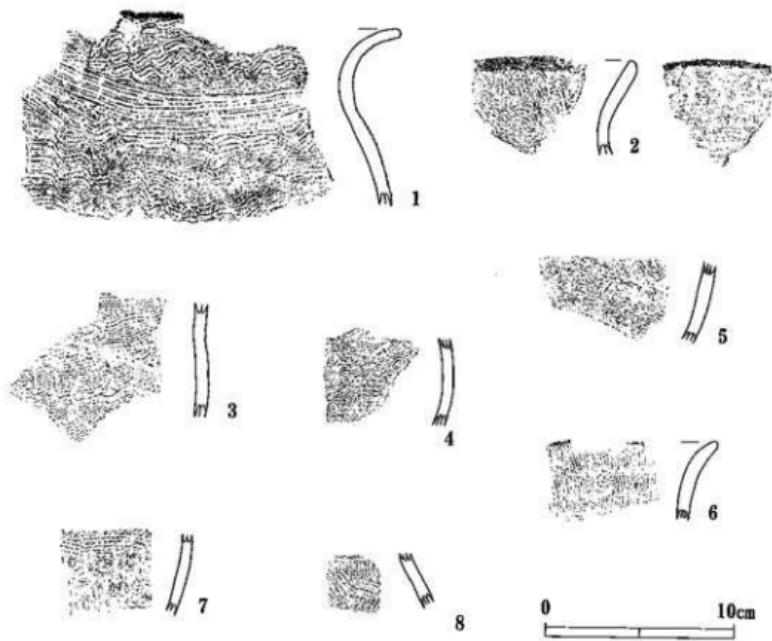
第65図 D地点SB-13実測図 (1 : 60) 水系レベルは838.56m



第66図 D地点SB-15実測図 (1:80) (1:40)



第67図 0地点SK-01遺物実測図 (1 : 2)



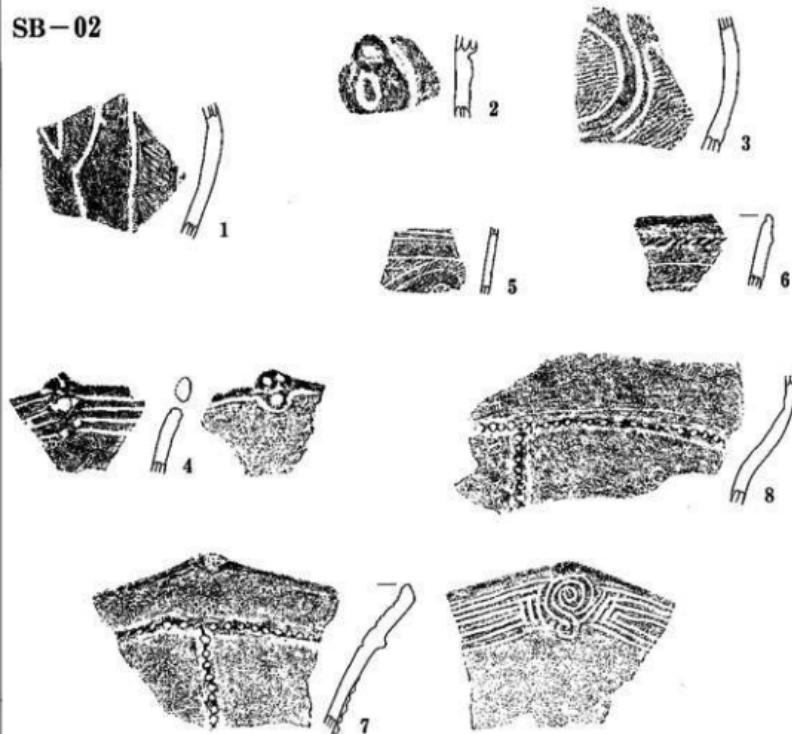
第68図 C地点SB-07出土遺物実測図 (1 : 3)

SB-01

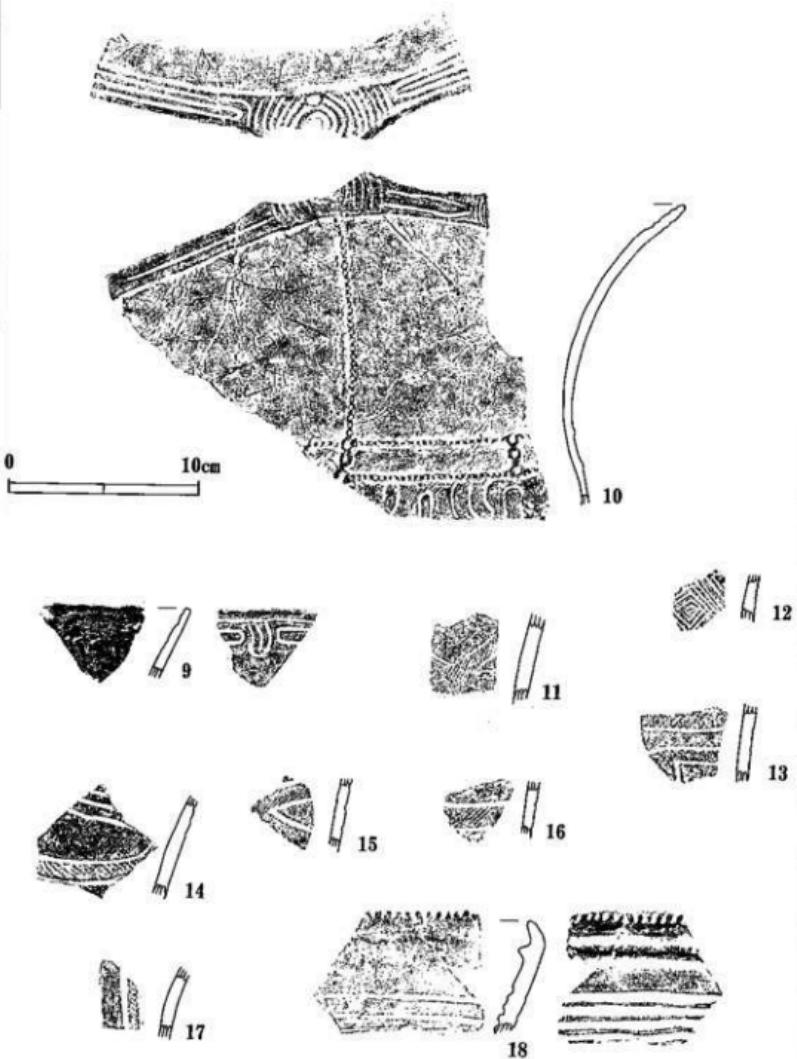


0 10cm

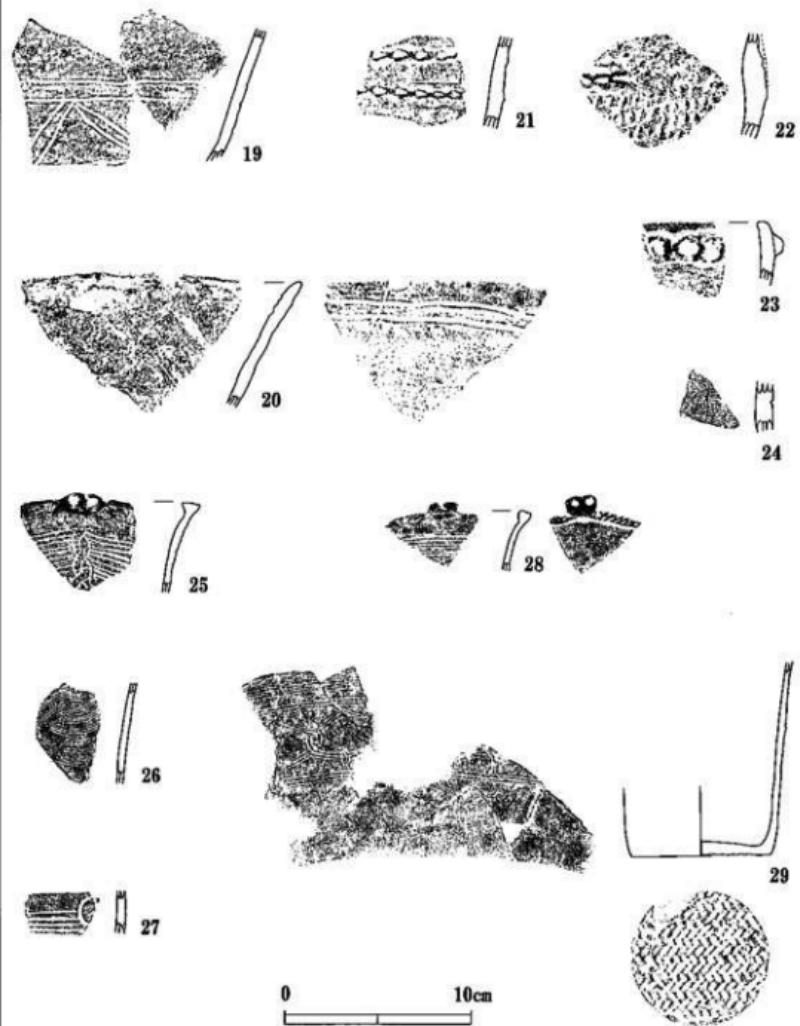
SB-02



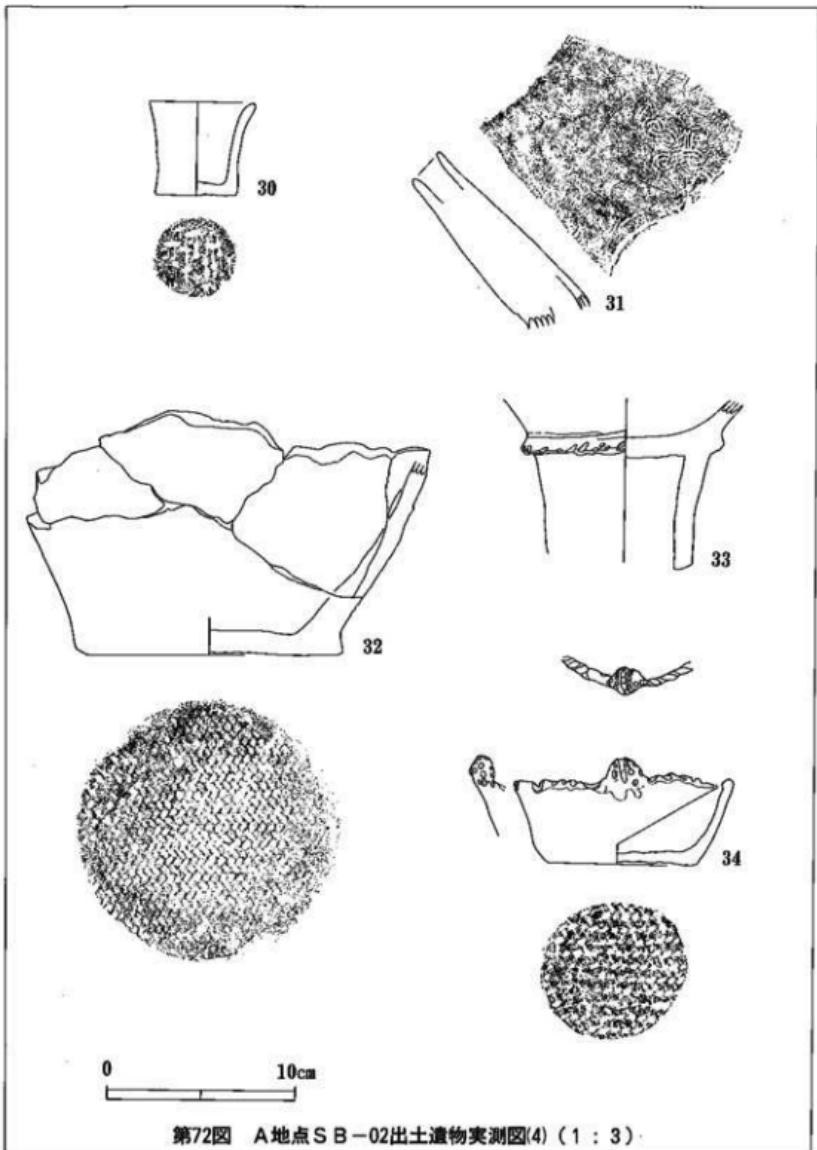
第69図 A地点SB-01・02出土遺物実測図(1) (1 : 3)



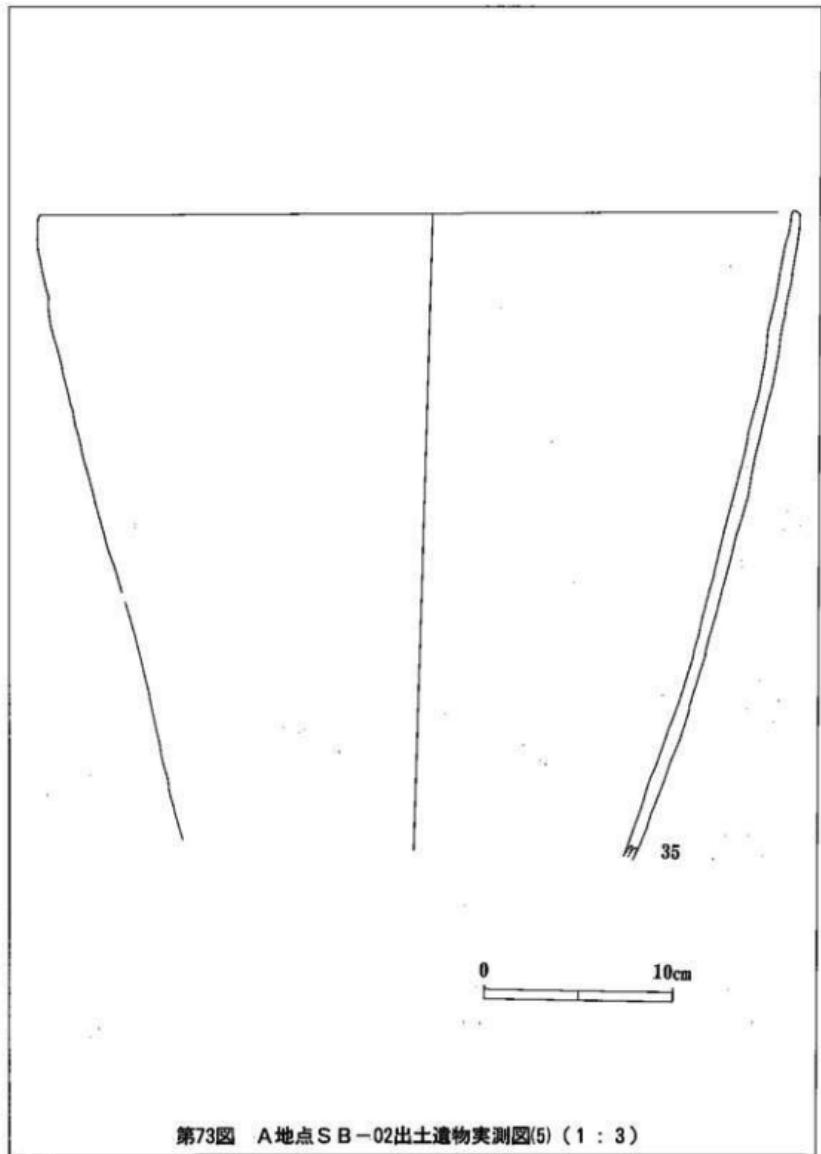
第70図 A地点SB-02出土遺物実測図(2) (1 : 3)



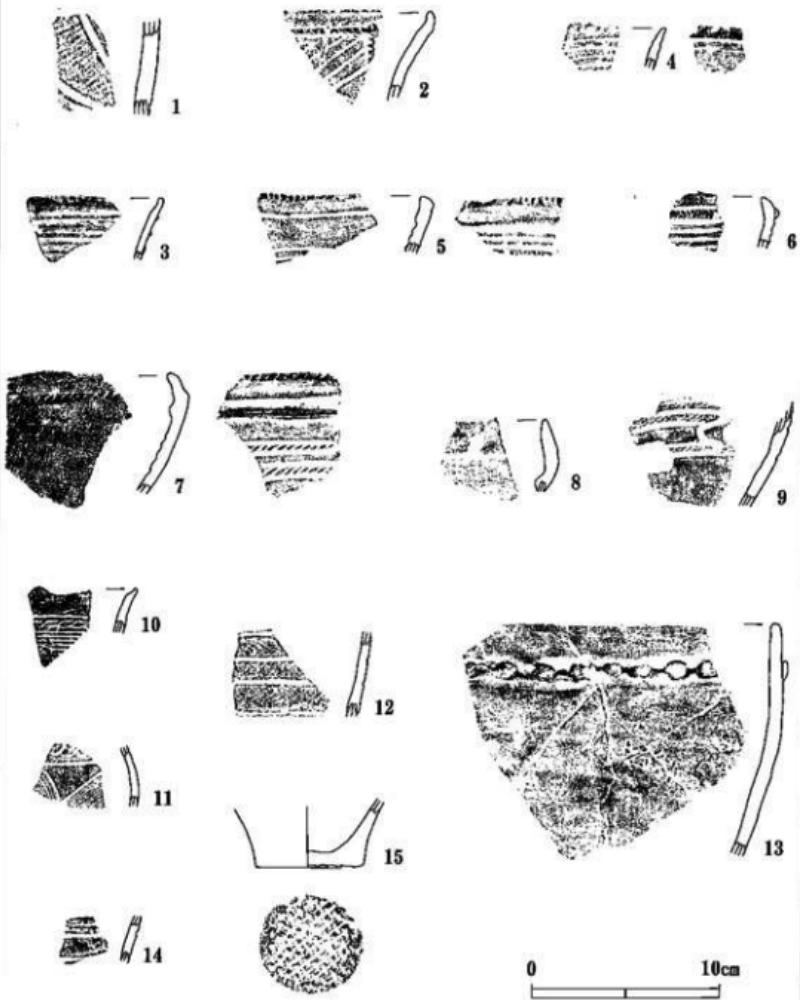
第71図 A地点SB-02出土遺物実測図(3) (1 : 3)



第72図 A地点SB-02出土遺物実測図(4) (1 : 3)

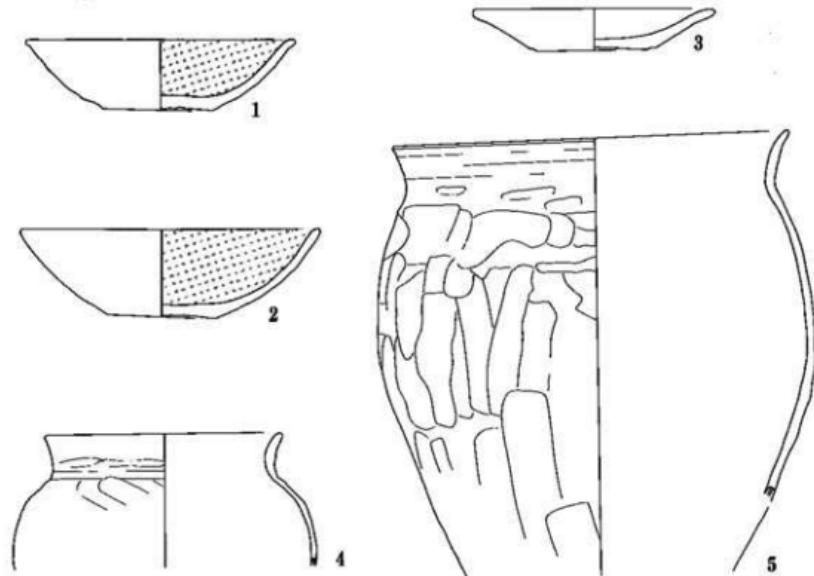


第73図 A地点 S B -02出土遺物実測図(5) (1 : 3)

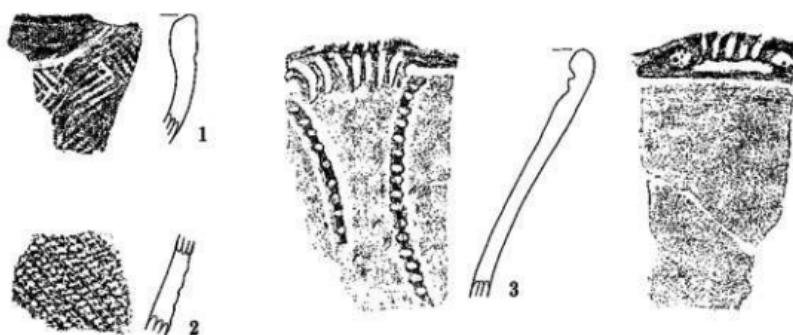


第74図 A地点SB-03出土遺物実測図 (1 : 3)

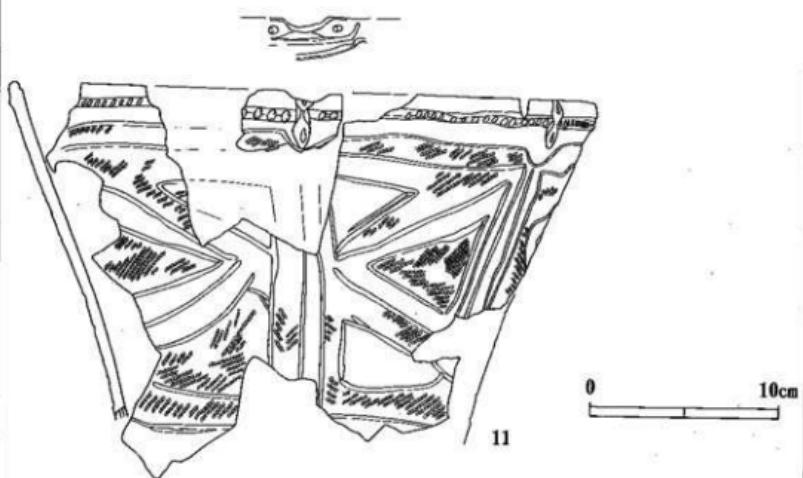
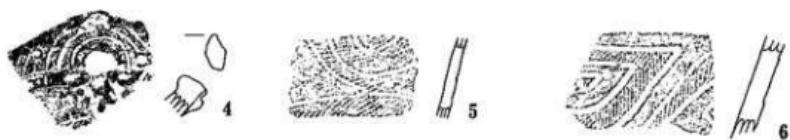
SB-04



SB-08

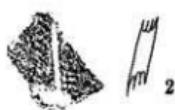
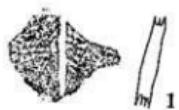


第75図 A地点SB-04・08出土遺物実測図(1)(1:3)

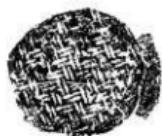


第76図 A地点SB-08出土遺物実測図(2) (1 : 3)

SK-01



SK-02



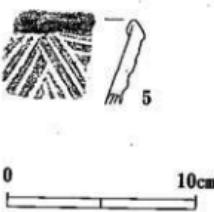
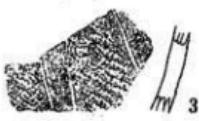
SK-11



SX-05

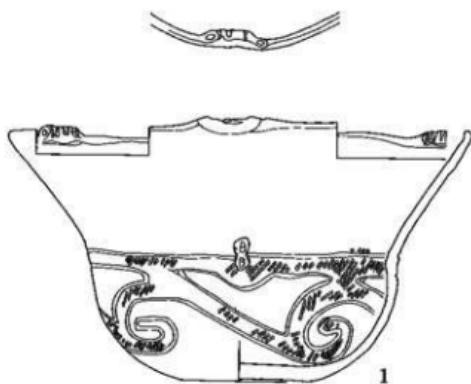


SX-06



第77図 A地点SK・SX出土遺物実測図(1:3)

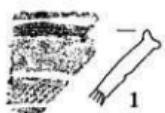
SX-03



SX-09



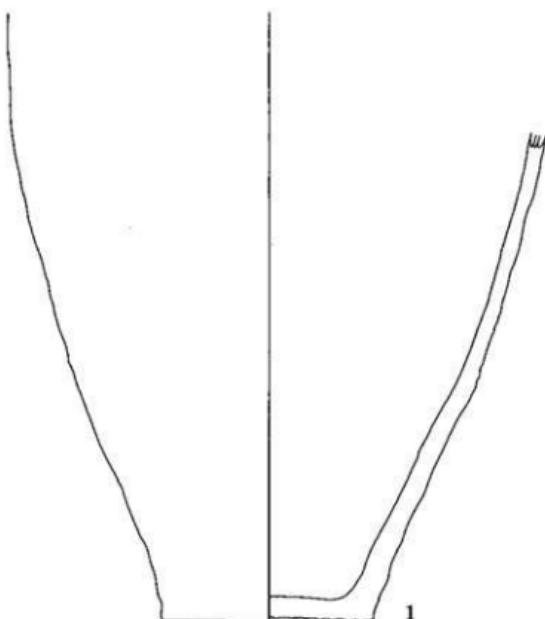
SX-10



SX-13



第78図 A地点S X出土遺物実測図 (1 : 3)

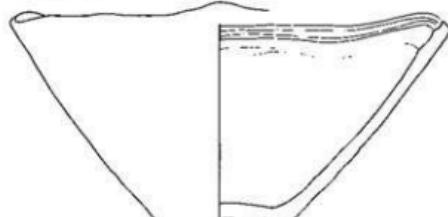


第79図 A地点埋甕-1出土遺物実測図 (1 : 3)

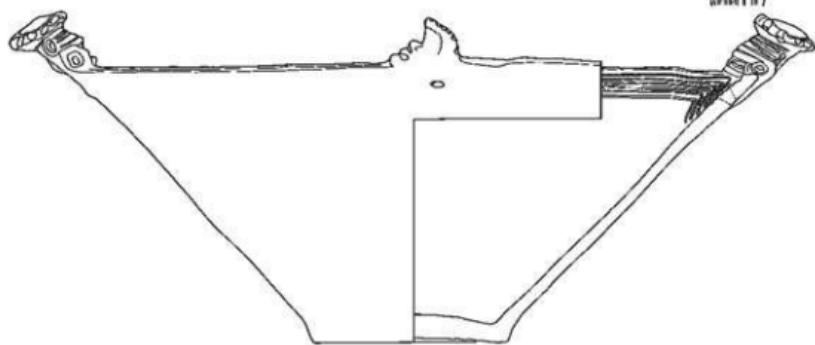
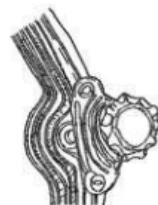
伏堀-1



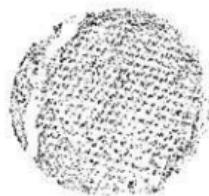
伏堀-2



第80図 A地点伏堀-1・2出土遺物実測図 (1:3)



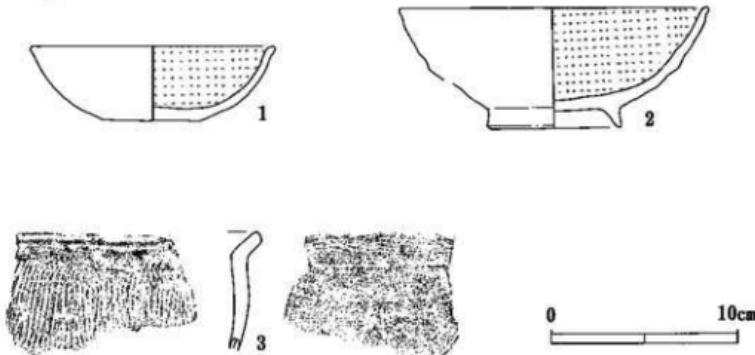
3



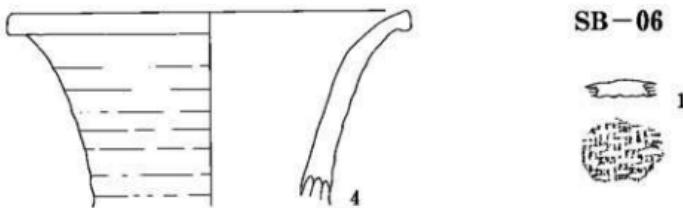
0 10cm

第81図 A地点S X-08出土遺物実測図 (1:3)

SB-05



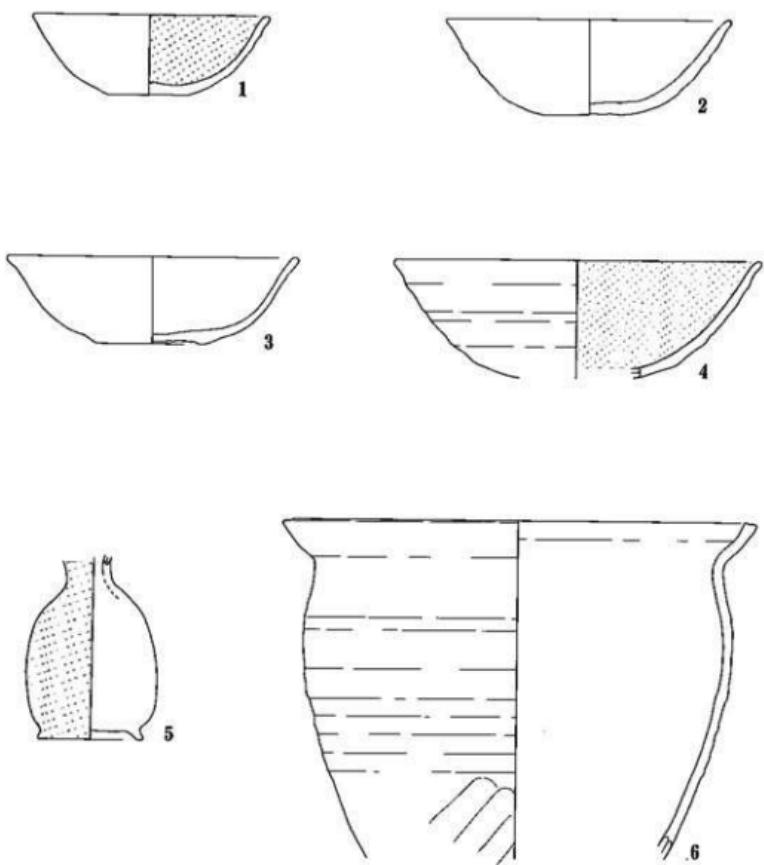
SB-06



SB-09



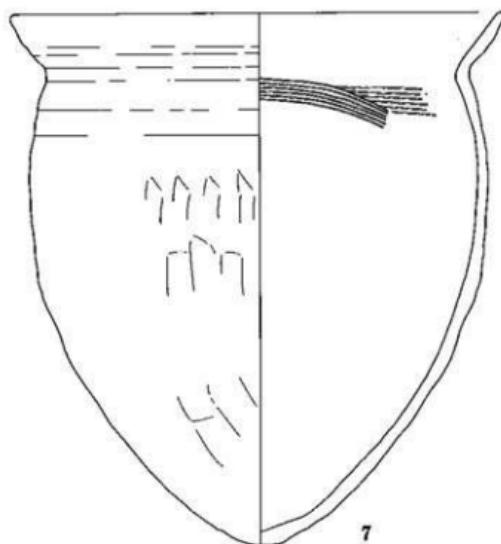
第82図 B地点 S B出土遺物実測図 (1 : 3)



0 10cm

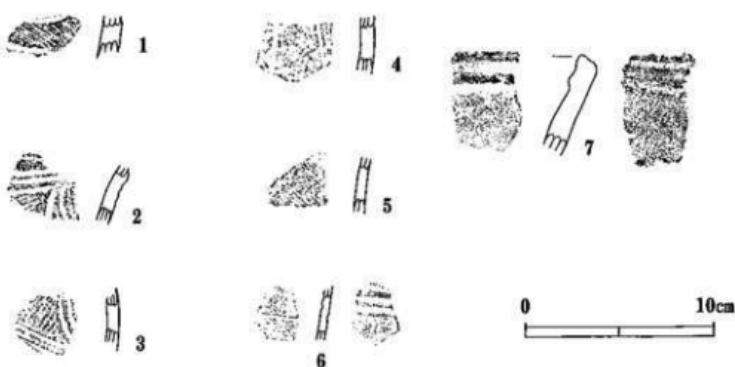
第83図 B地点 S B-10出土遺物実測図(1) (1 : 3)

SB-10

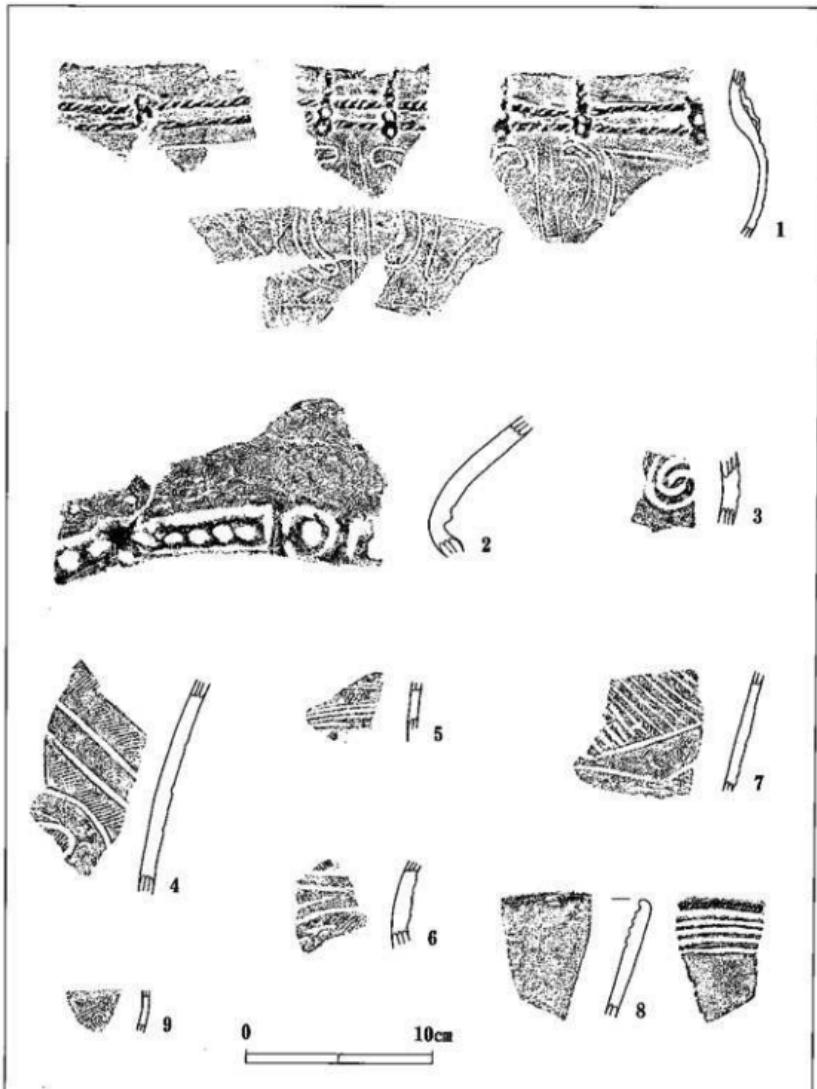


7

SB-11

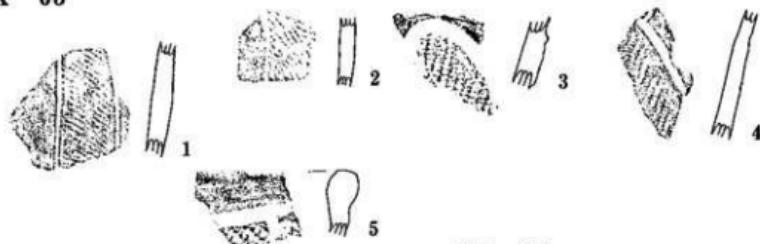


第84図 B地点SB-10・11出土遺物実測図(2) (1 : 3)



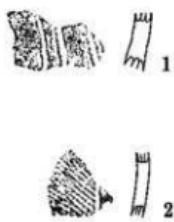
第85図 B地点SB-14出土遺物実測図 (1 : 3)

SK-03

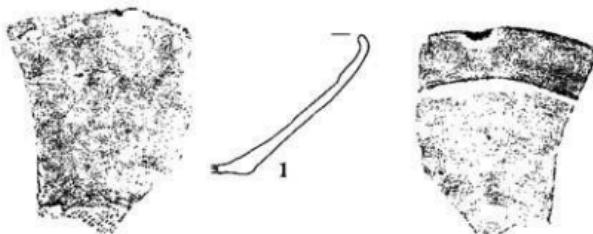


SK-05

SK-04

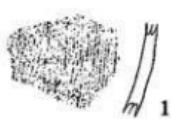


SK-07

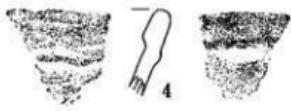


第86図 B地点SK出土遺物実測図(1) (1 : 3)

SK-08



SK-11



SK-15



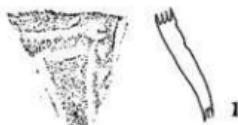
SK-22



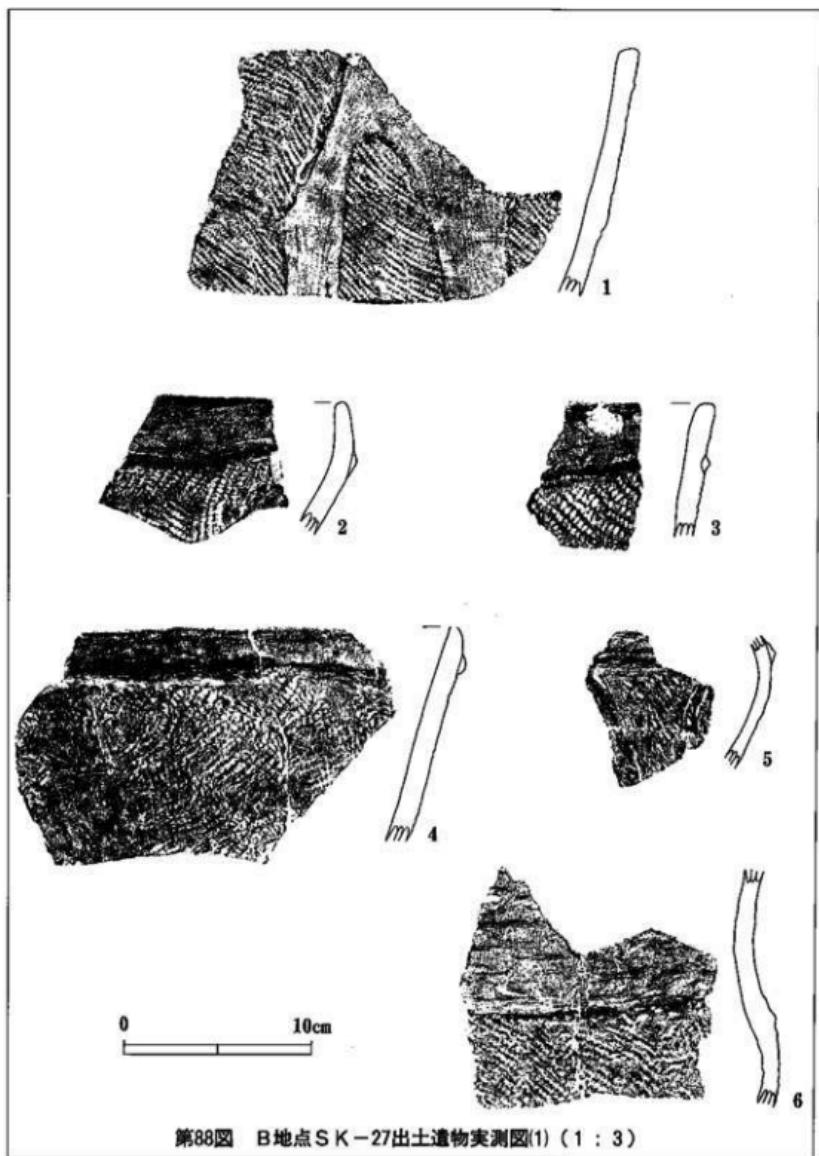
SK-25



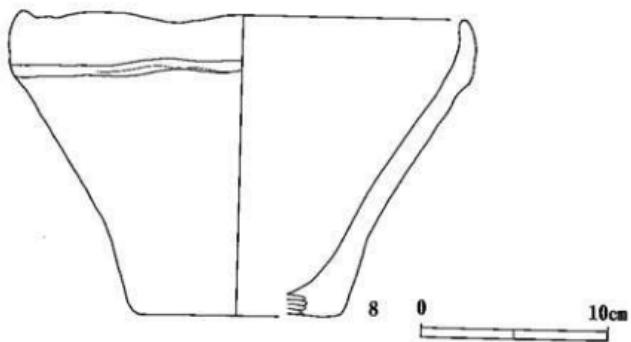
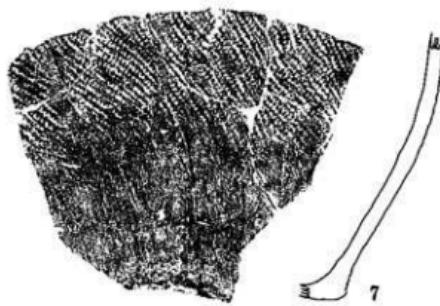
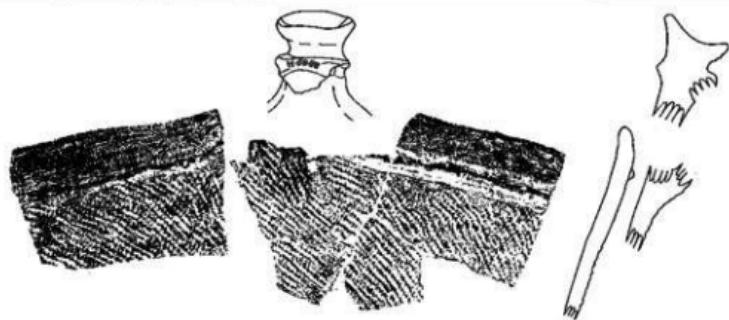
SK-26



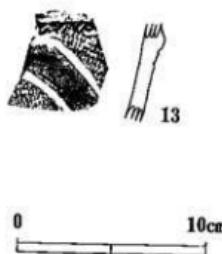
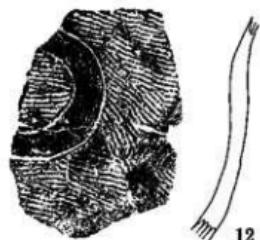
第87図 B地点SK出土遺物実測図(2) (1 : 3)



第88図 B地点SK-27出土遺物実測図(1) (1 : 3)



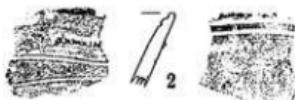
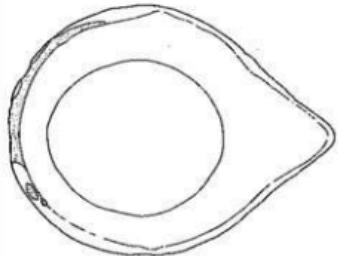
第89図 B地点 SK-27出土遺物実測図(2) (1 : 3)



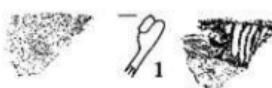
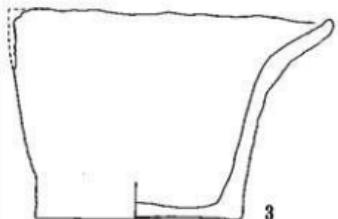
0 10cm

第90図 B地点SK-27出土遺物実測図(3) (1 : 3)

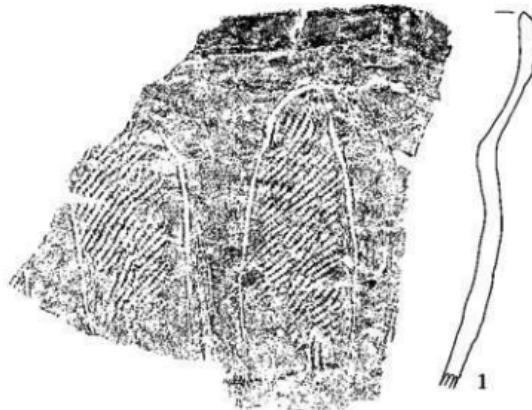
SK-33



SK-34



SK-35



0

10cm

第91図 B地点SK出土遺物実測図 (1 : 3)

SK-36



SK-45



SK-47



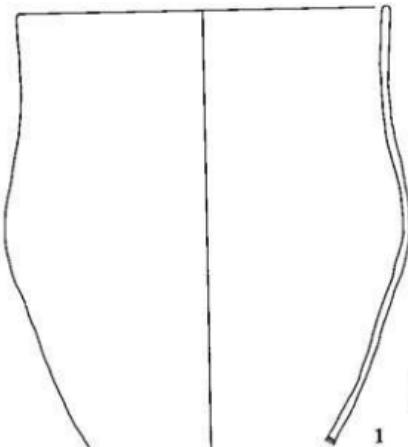
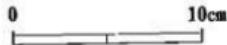
SK-48



Pit-80

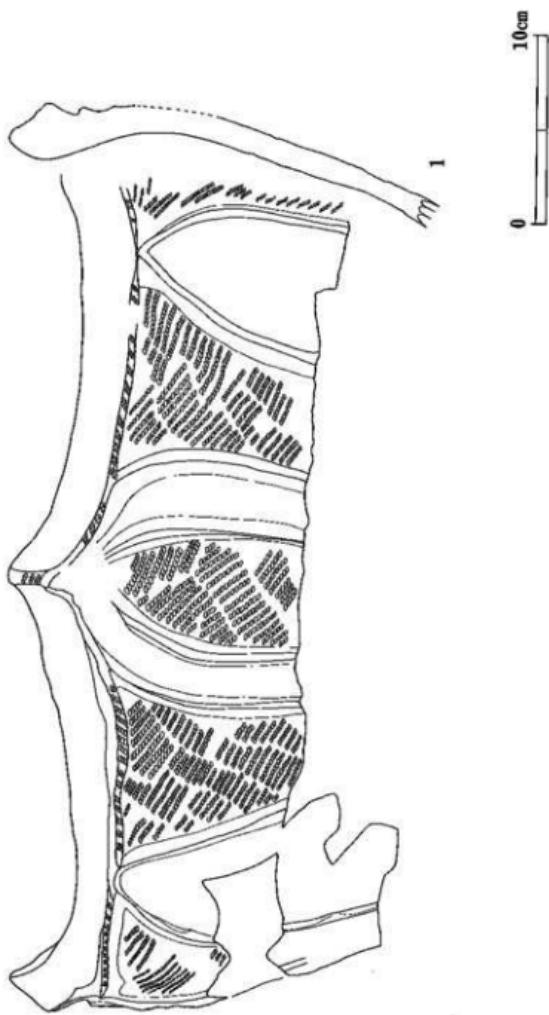


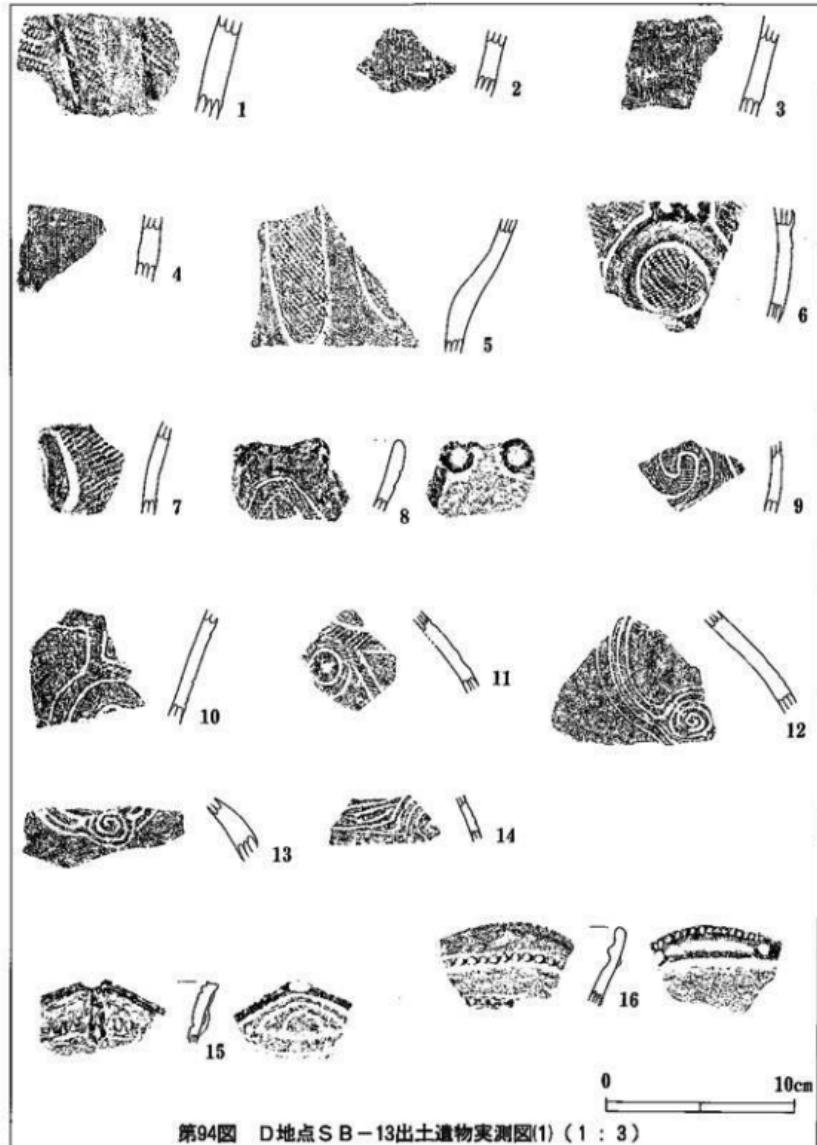
SK-41



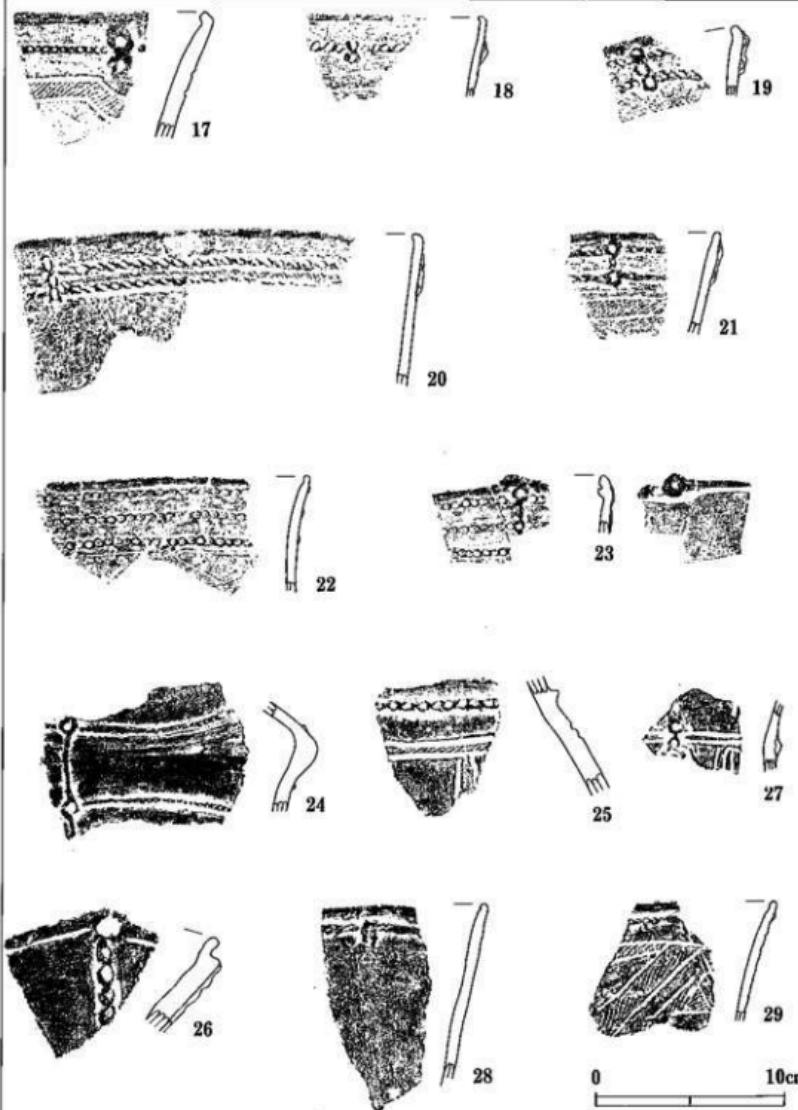
第92図 B地点SK・Pit出土遺物実測図 (1:3) (1:6)

第93圖 B地點埋甕—2出土遺物實測圖 (1 : 3)

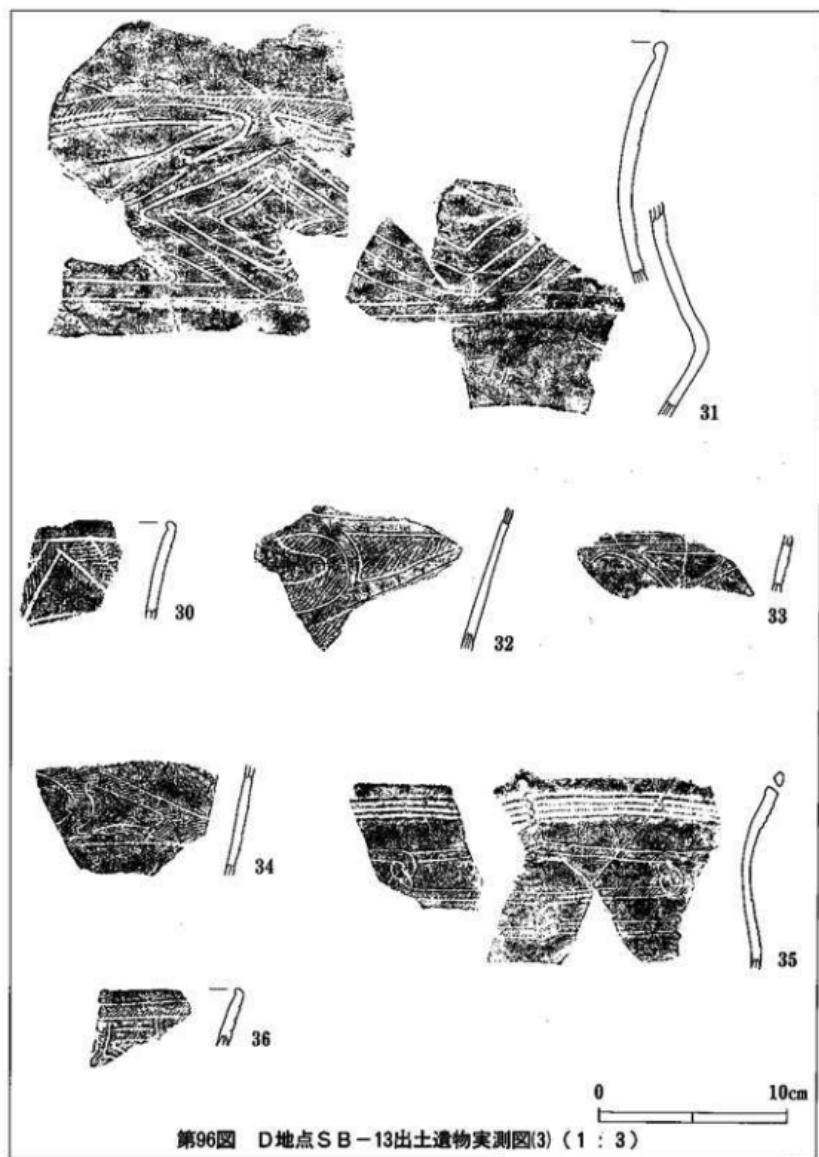




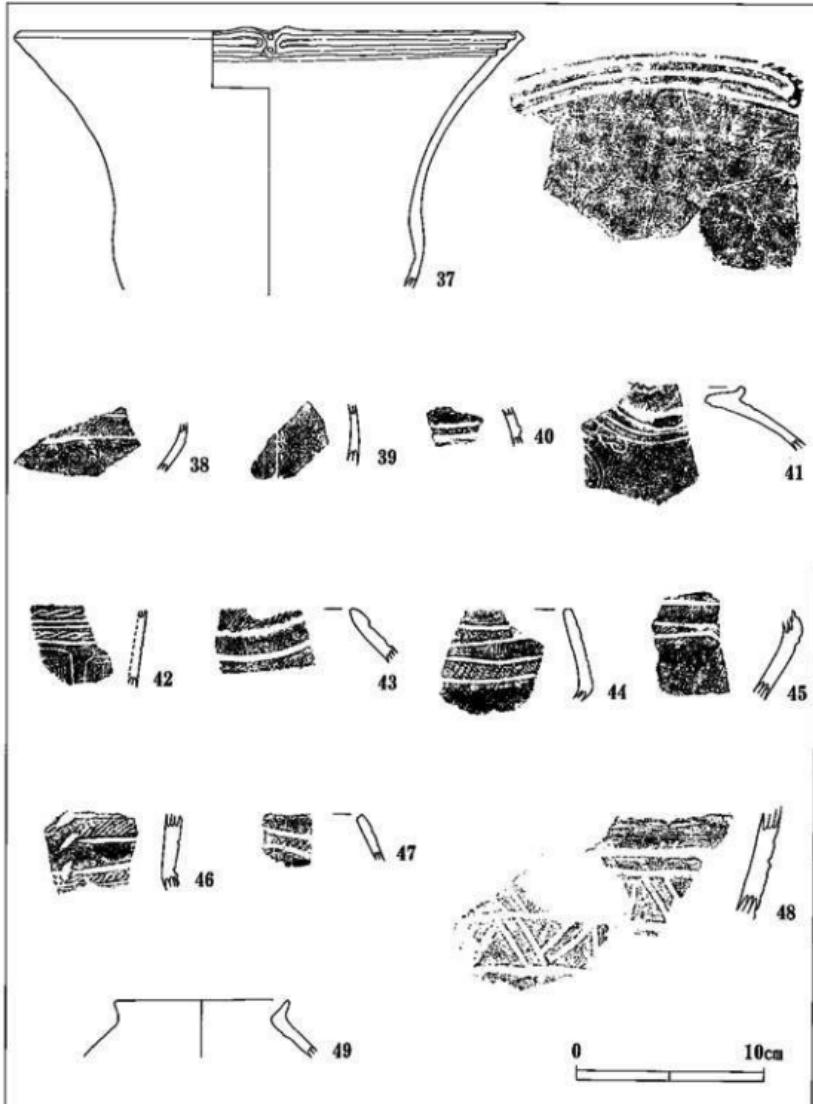
第94図 D地点SB-13出土遺物実測図(1) (1 : 3)



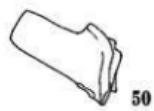
第95図 D地点SB-13出土遺物実測図(2) (1 : 3)



第96図 D地点SB-13出土遺物実測図(3) (1 : 3)



第97図 D地点SB-13出土遺物実測図(4) (1 : 3)



50



51



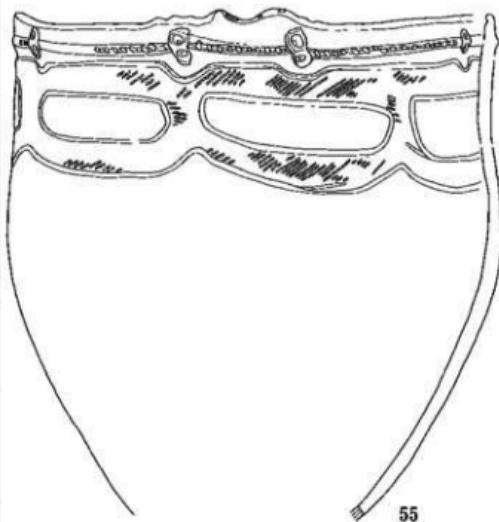
52



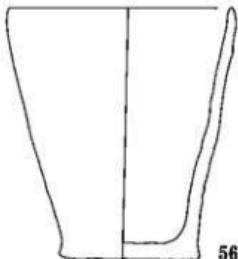
53



54



55

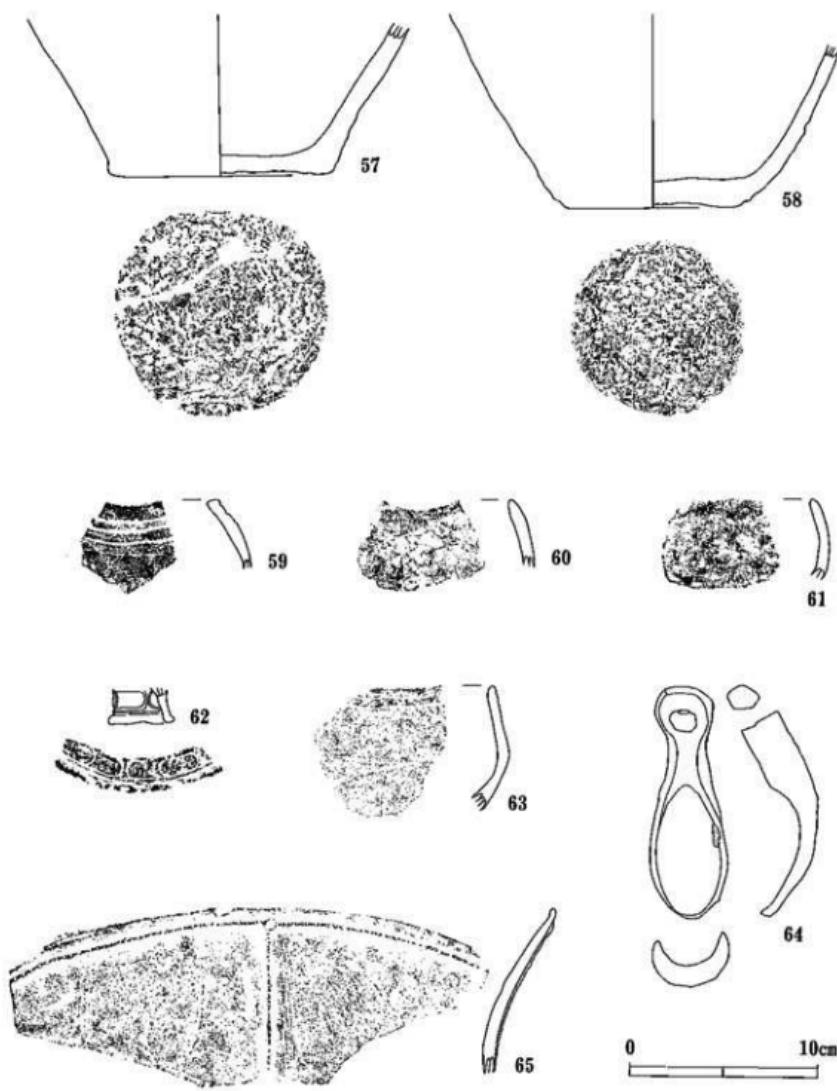


56



0 10cm

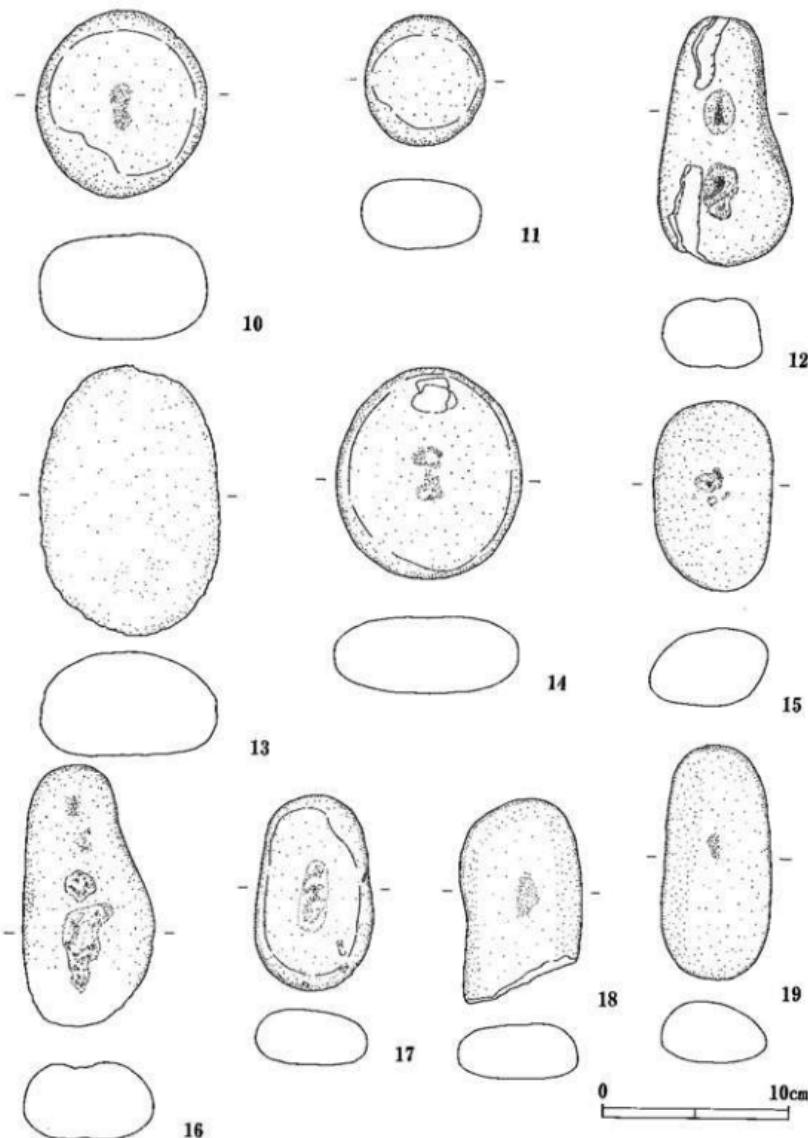
第98図 D地点S B-13出土遺物実測図(5) (1 : 3)



第99図 D地点SB-13出土遺物実測図(6) (1 : 3)



第100図 D地点SB-13出土遺物実測図(7) (1 : 3)

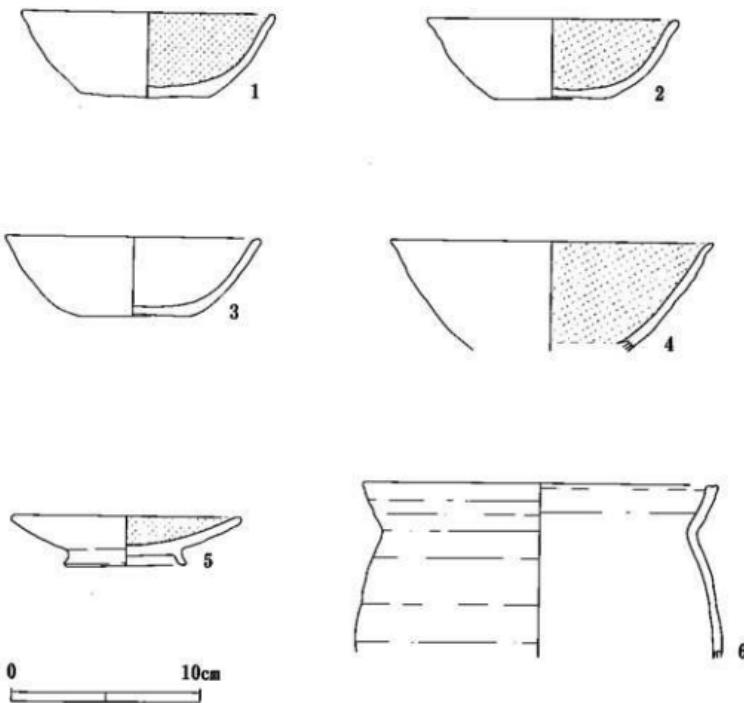


第101図 D地点SB-13出土遺物実測図(8) (1 : 3)

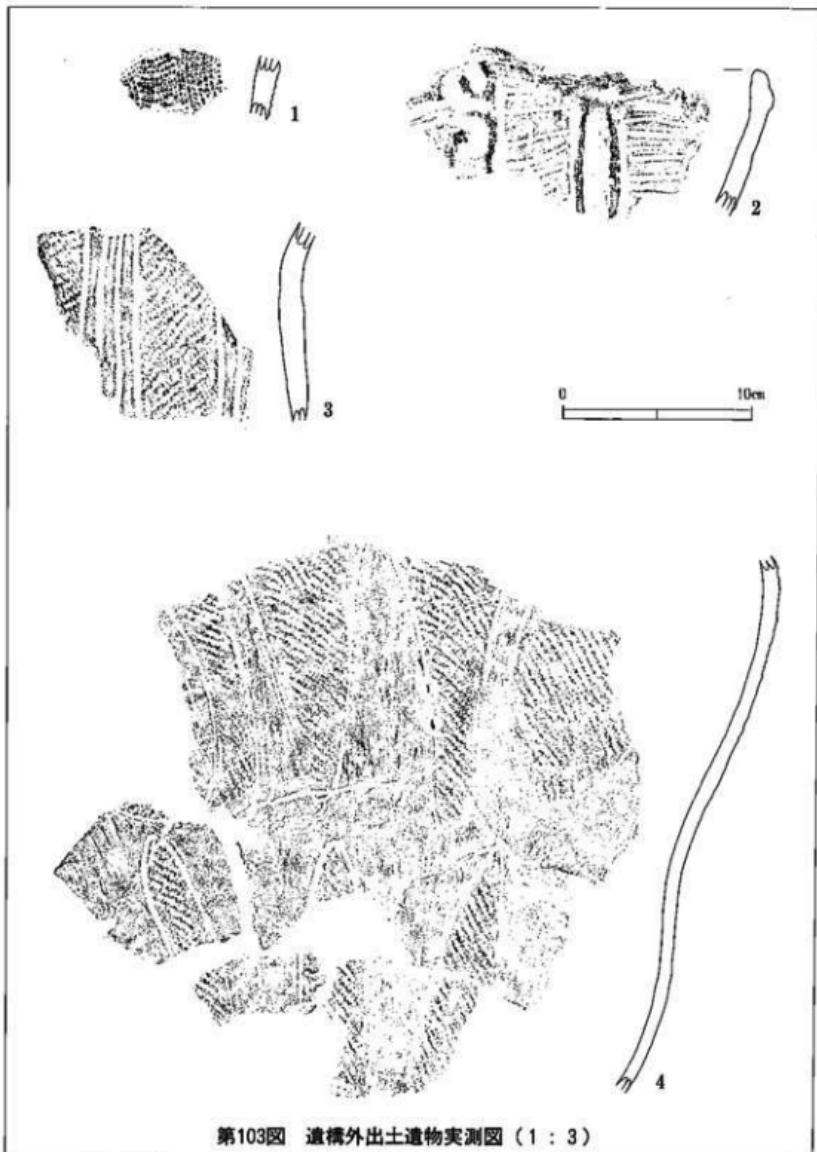
SB-13



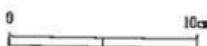
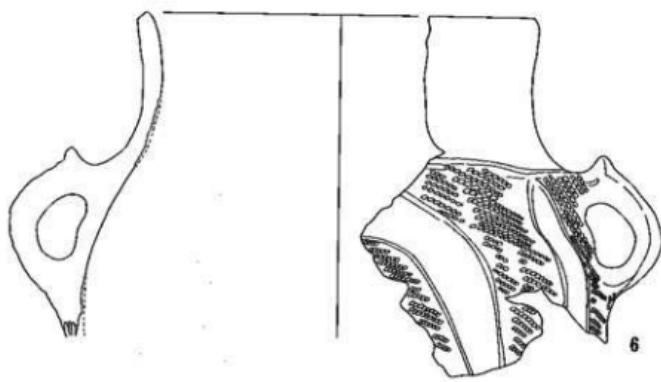
SB-15



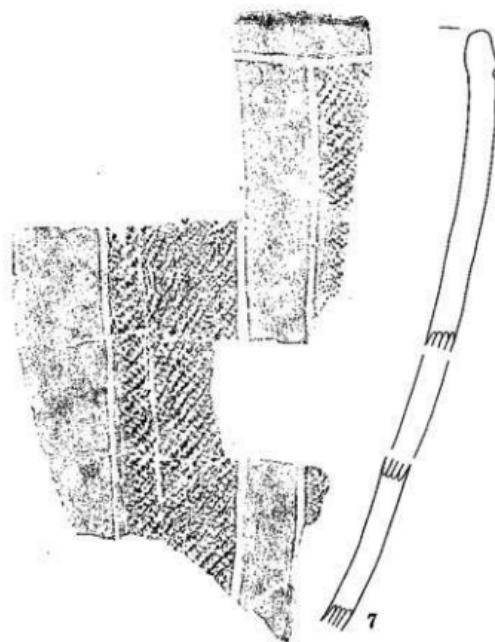
第102図 D地点SB-13・15出土遺物実測図 (1 : 3)



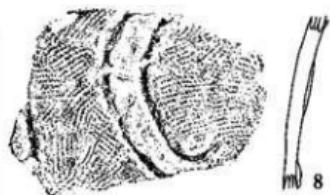
第103図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)



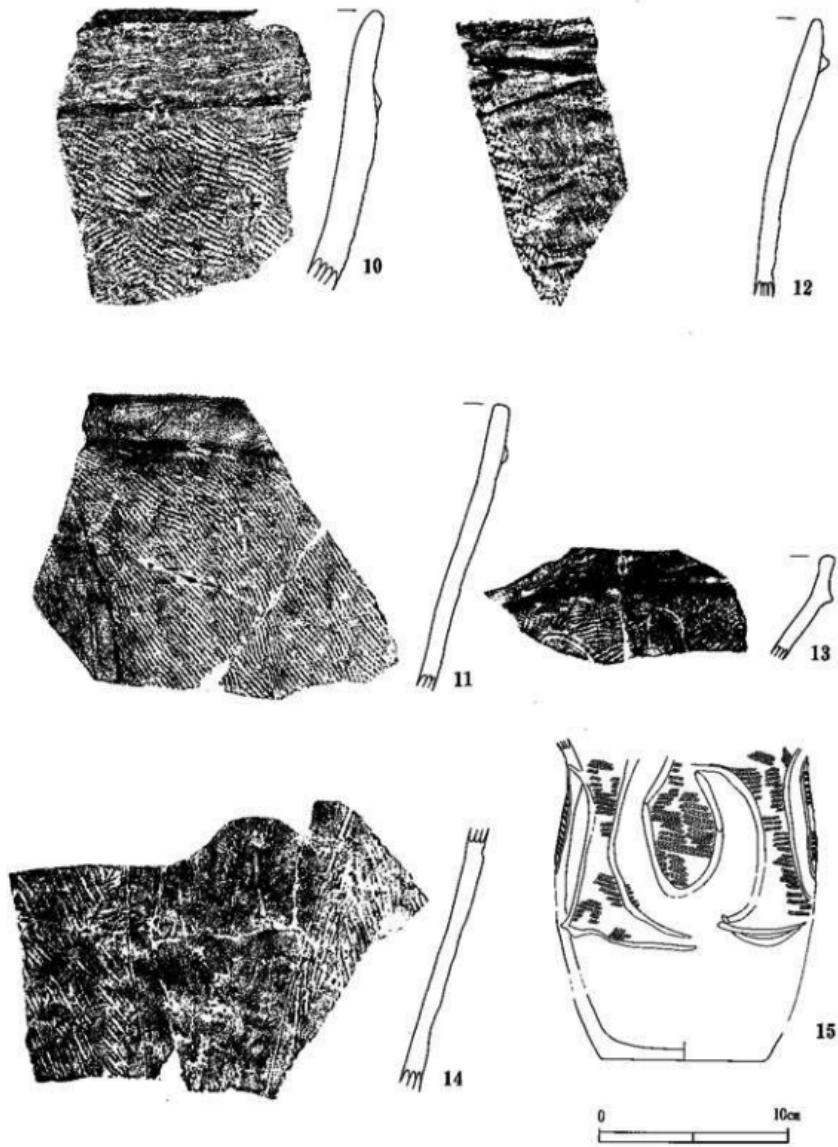
第104図 造構外出土遺物実測図 (1 : 3)



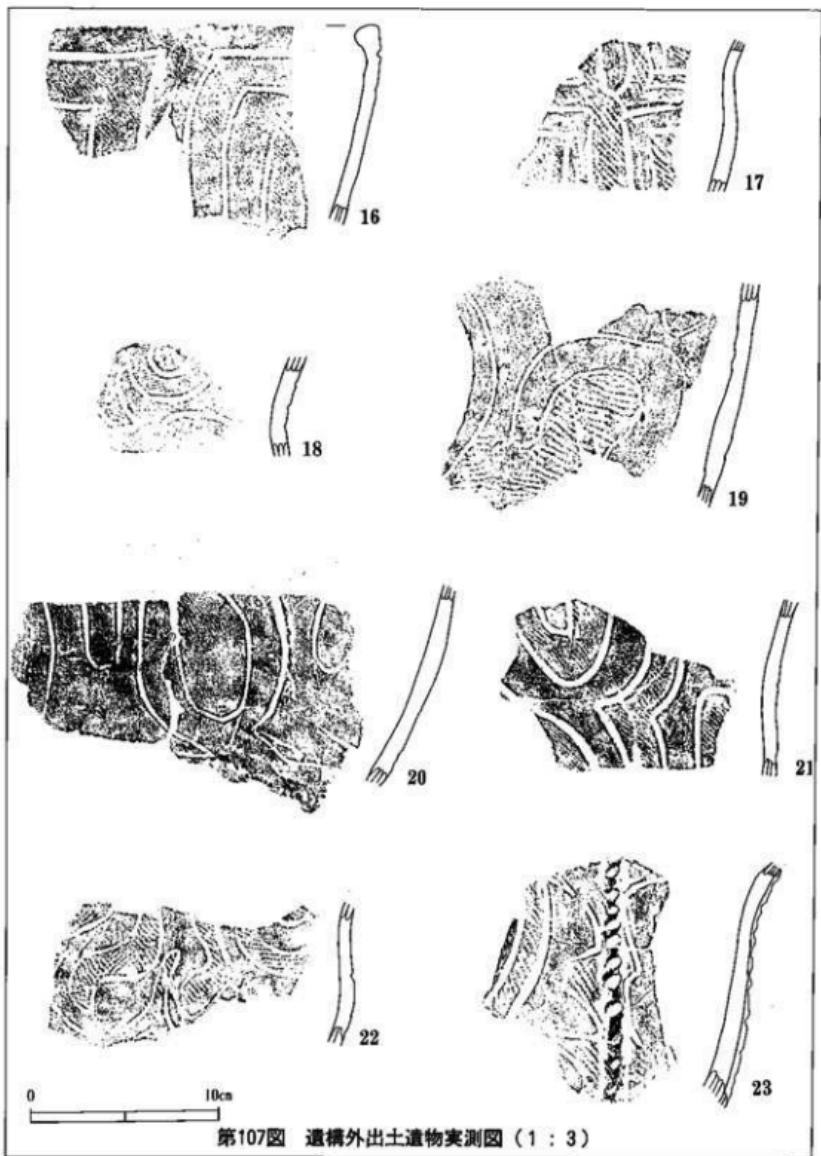
0 10cm

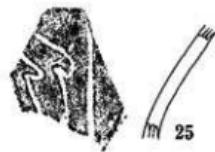
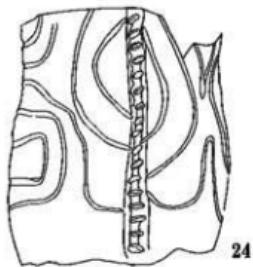
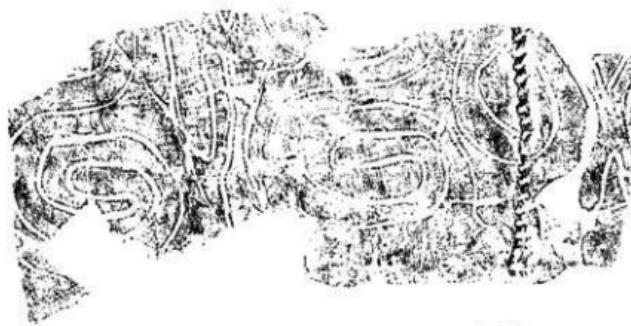


第105図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)



第106図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)

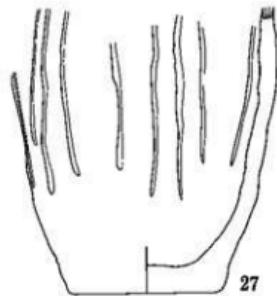




25

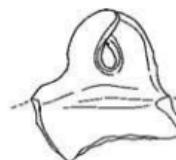
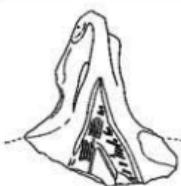
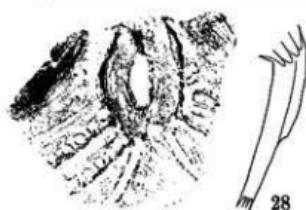


26

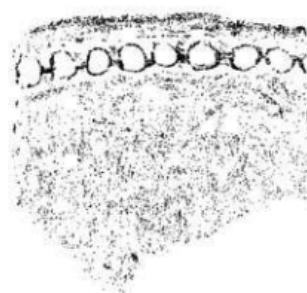


27

第108図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)



30



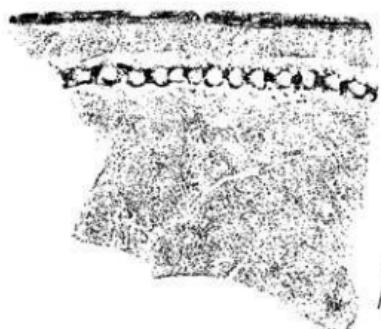
31

0

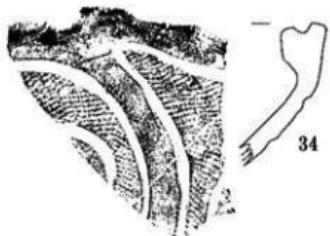
10cm



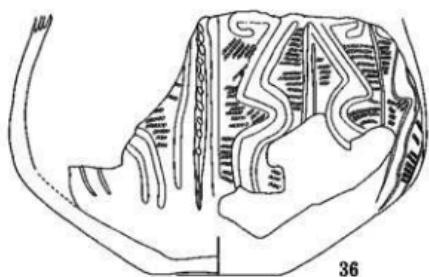
第109図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)



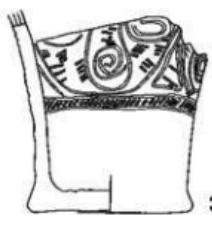
35



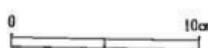
34



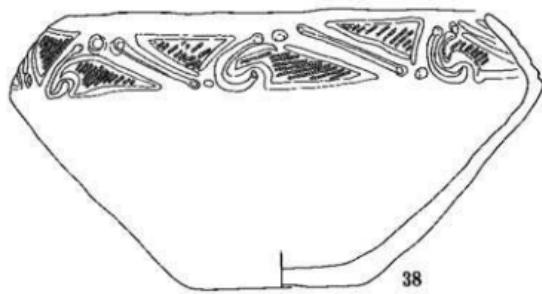
36



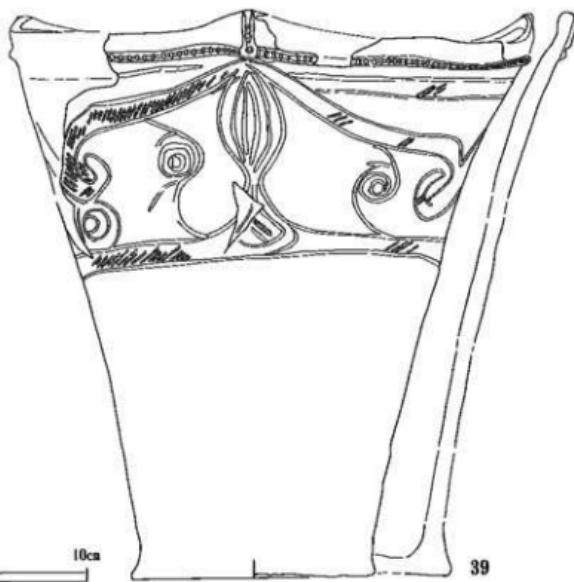
37



第110図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)

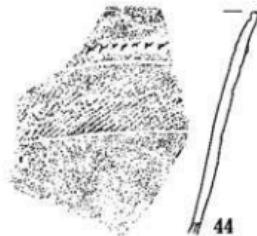
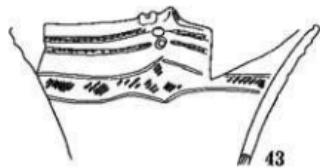
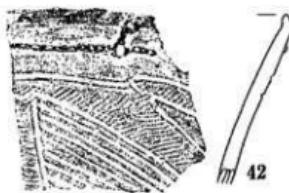
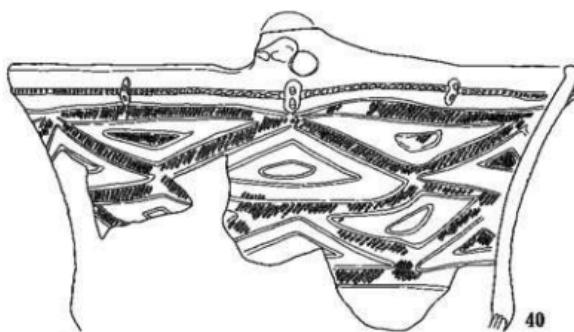


38

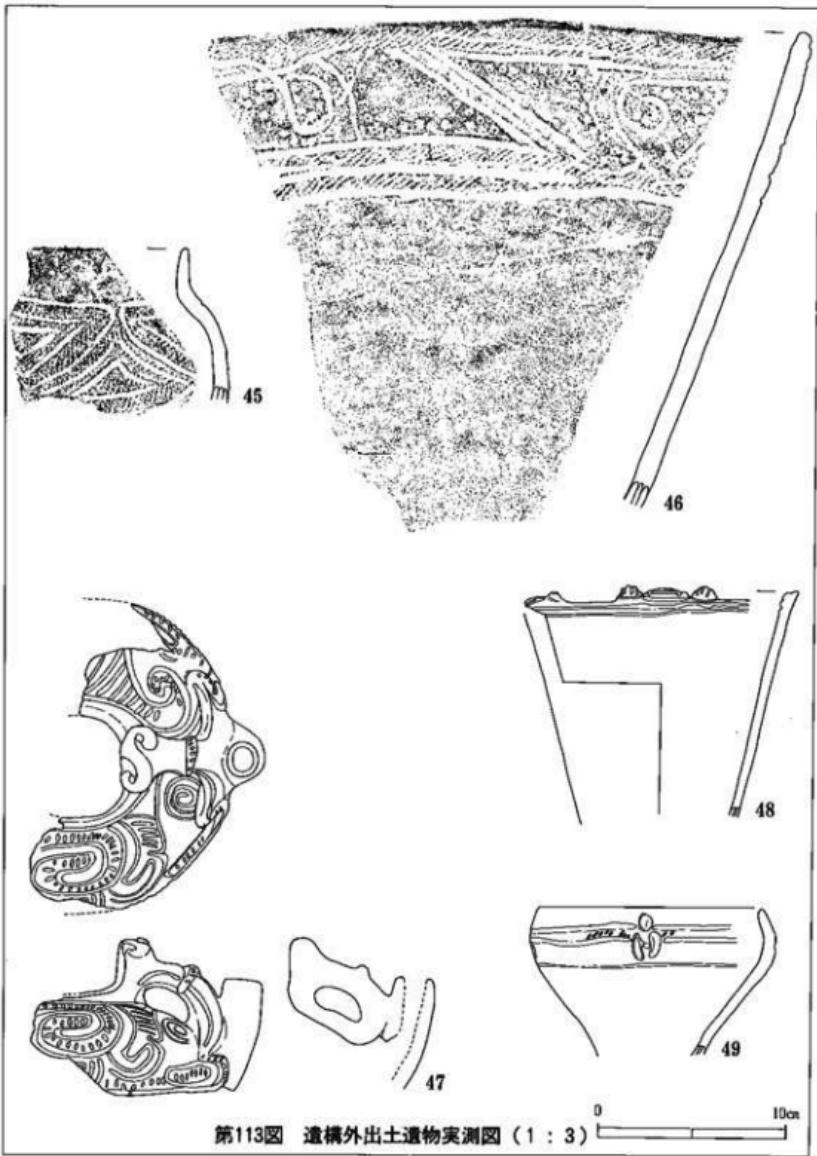


39

第111図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)

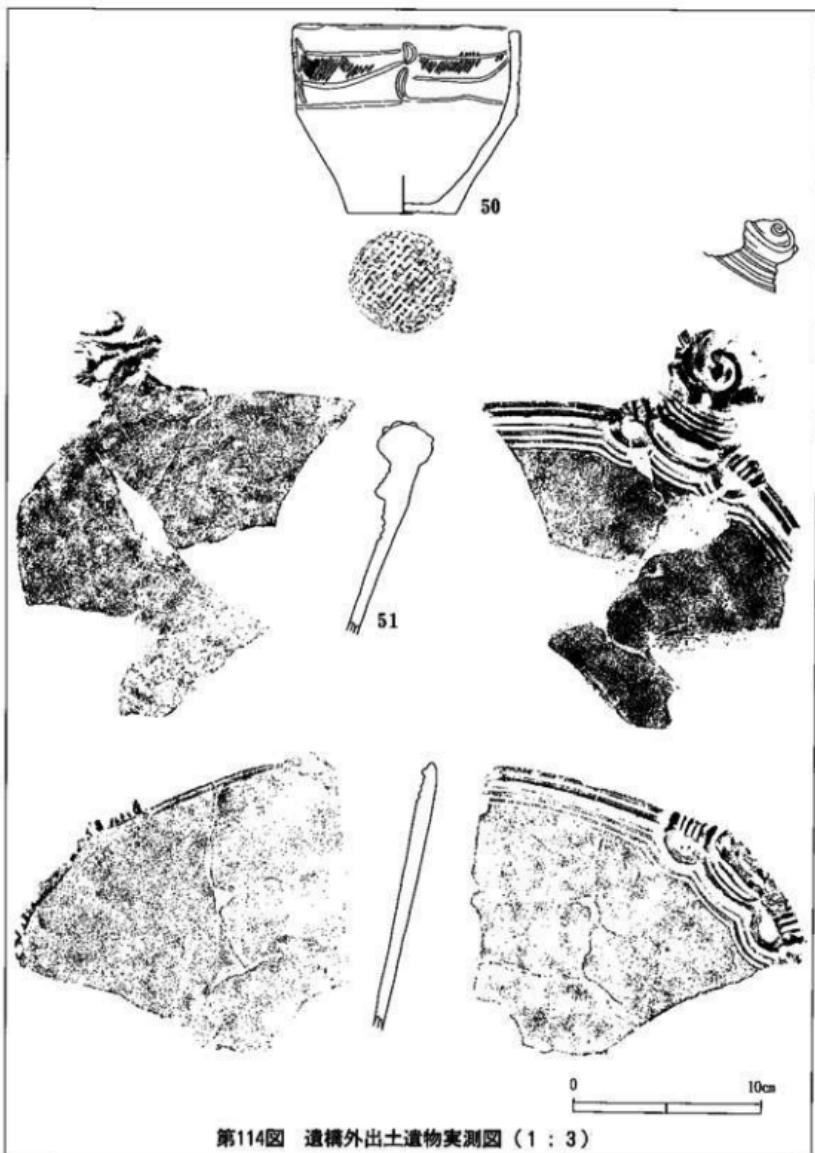


第112図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)

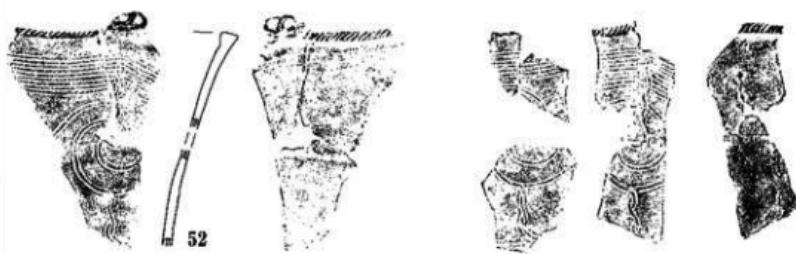


第113図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)

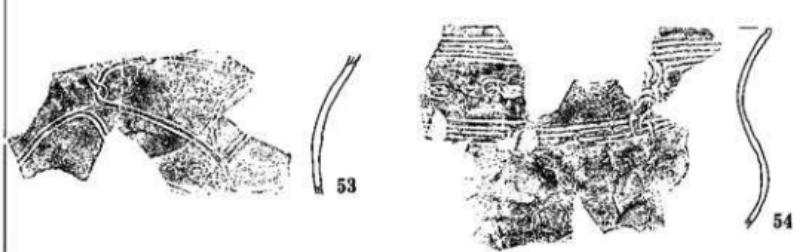
0 10cm



第114図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)

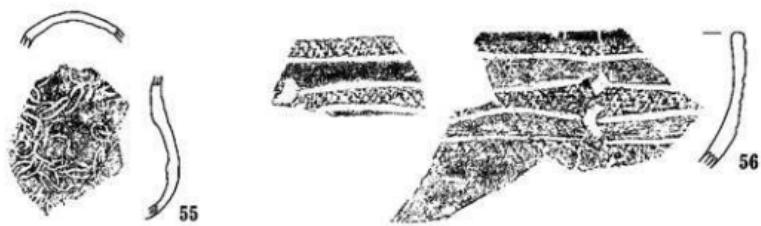


52



53

54

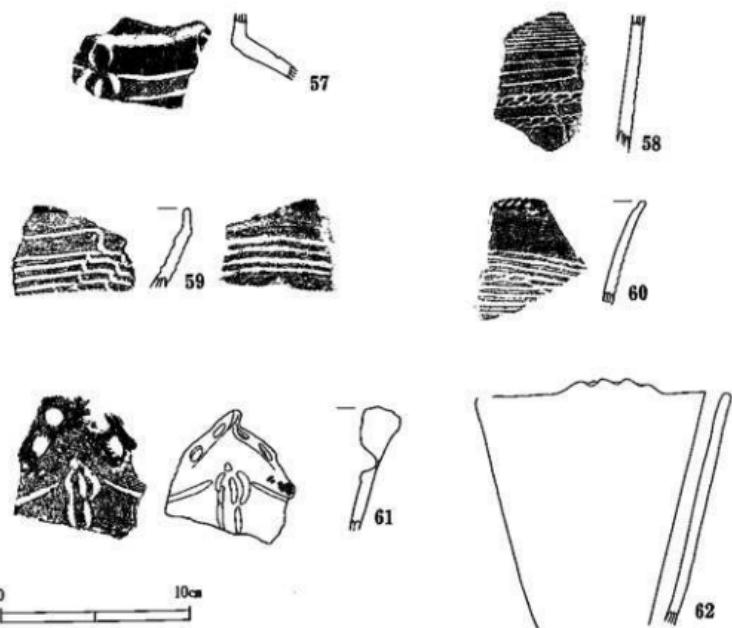


55

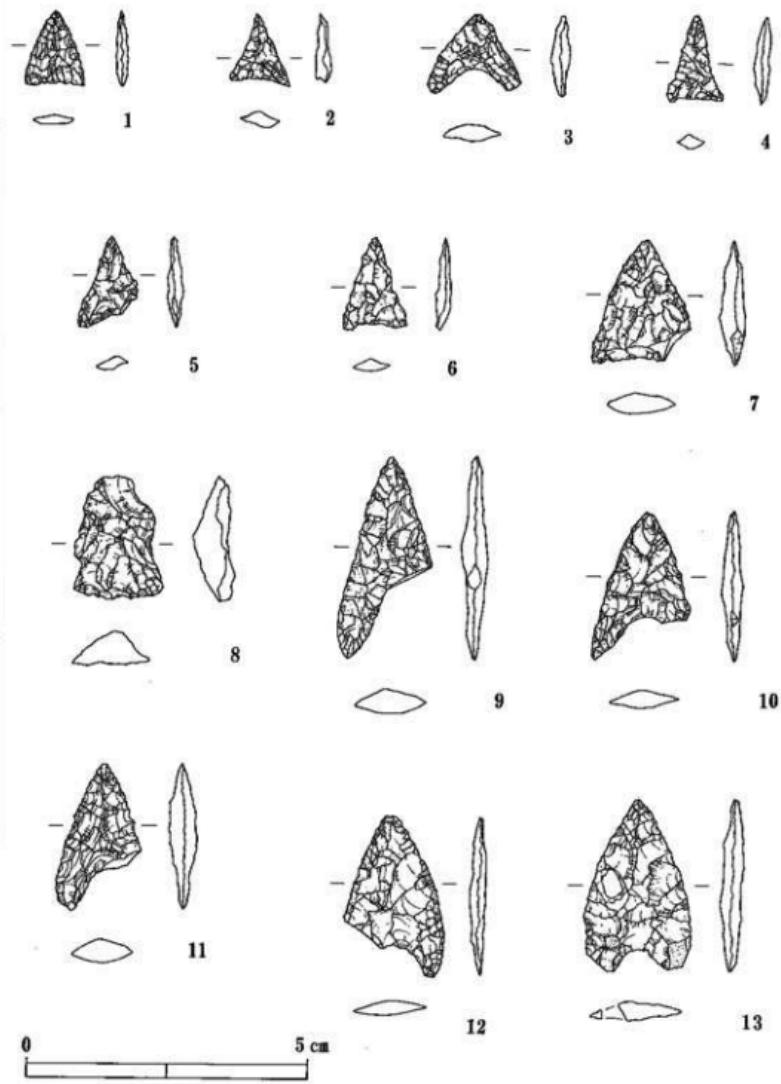
56



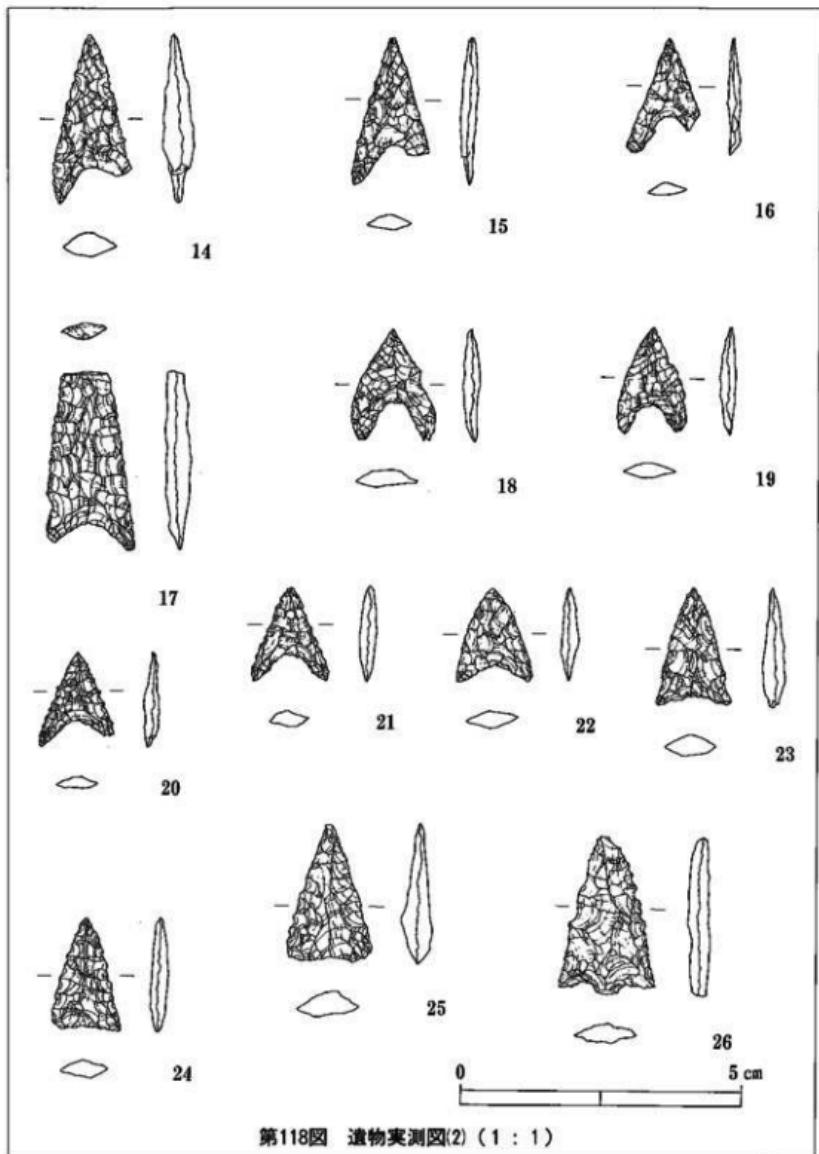
第115図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)



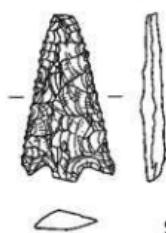
第116図 遺構外出土遺物実測図 (1 : 3)



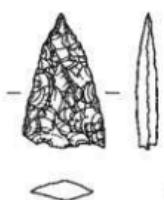
第117図 遺物実測図(1) (1 : 1)



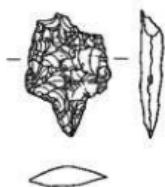
第118図 遺物実測図(2) (1 : 1)



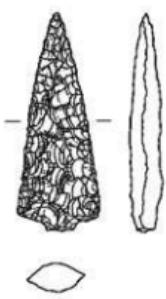
27



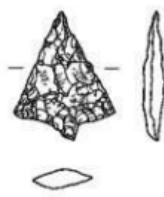
28



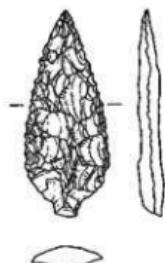
29



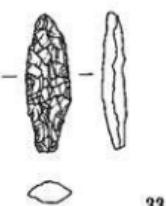
30



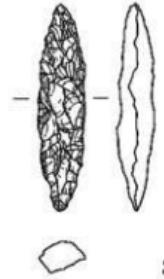
31



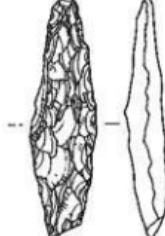
32



33



34

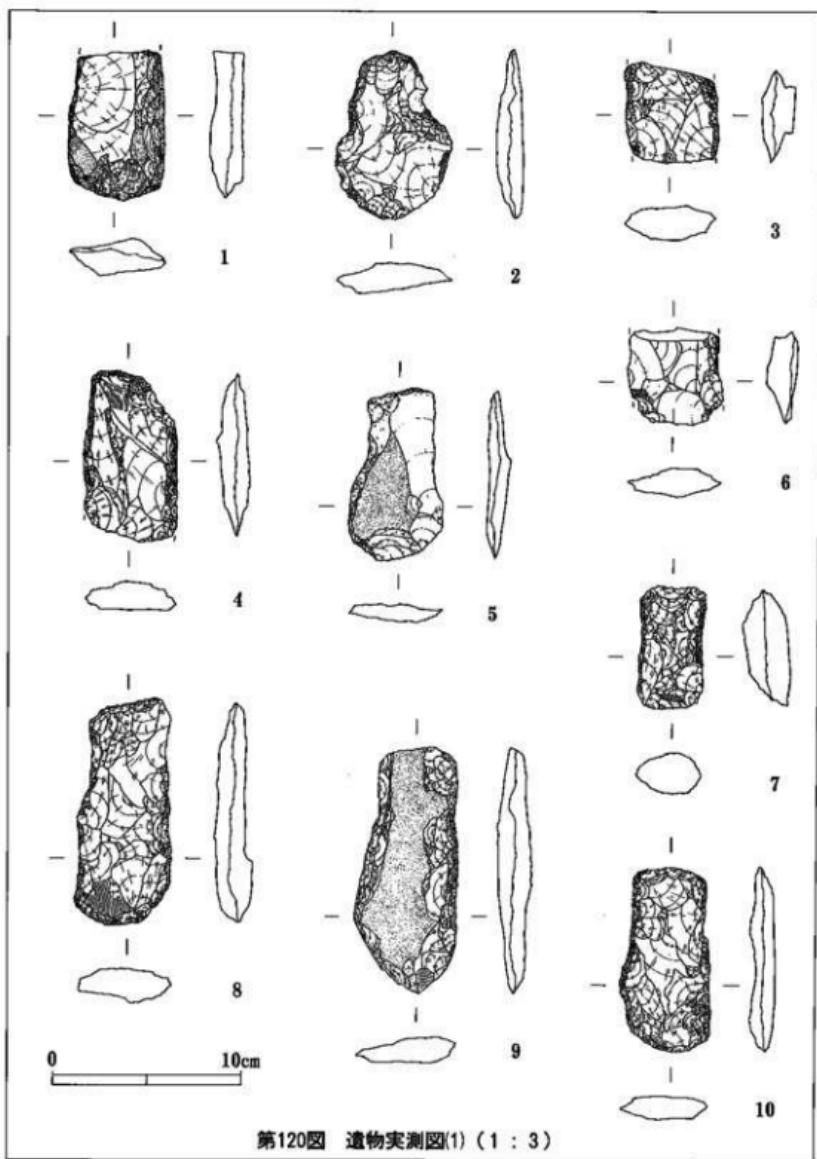


35

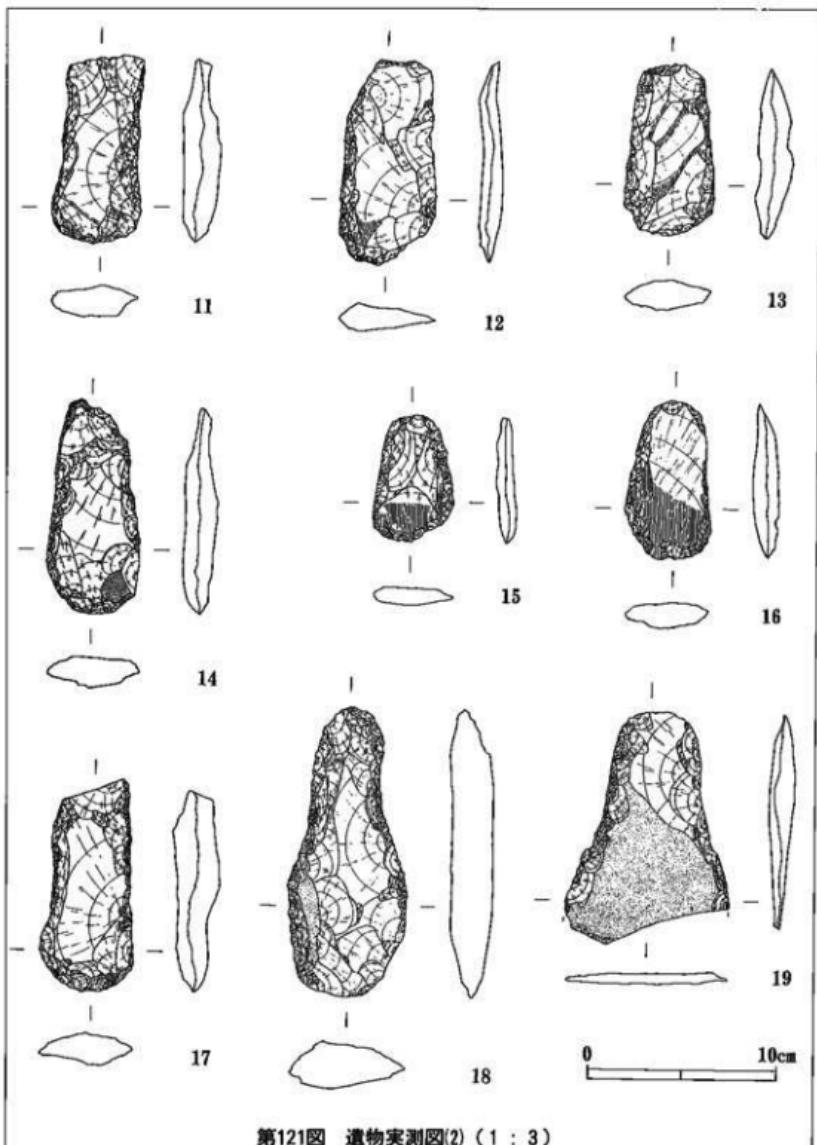
0

5 cm

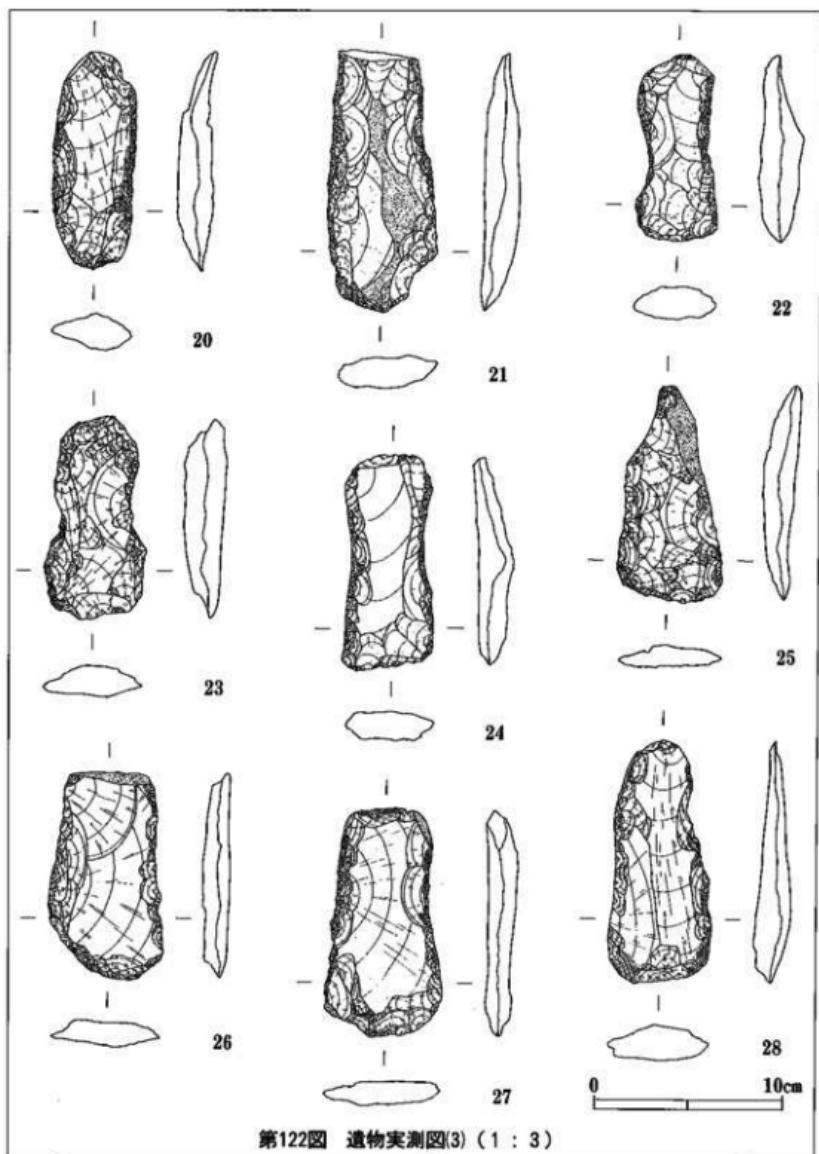
第119図 遺物実測図(3) (1 : 1)



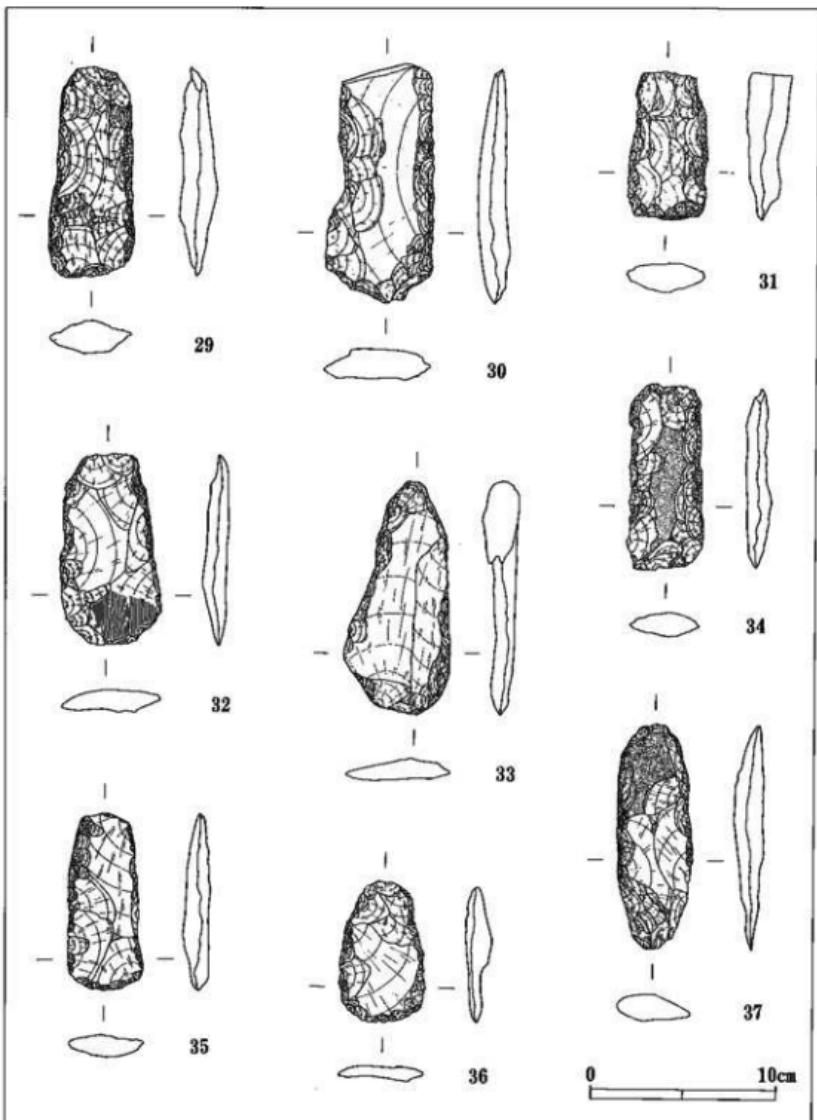
第120図 遺物実測図(1) (1 : 3)



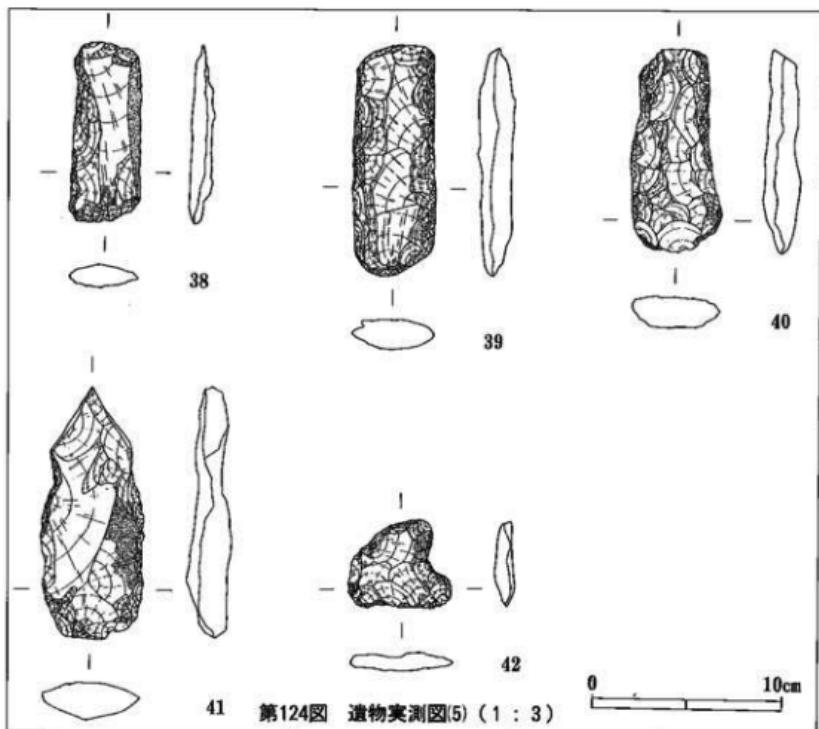
第121図 遺物実測図(2) (1 : 3)



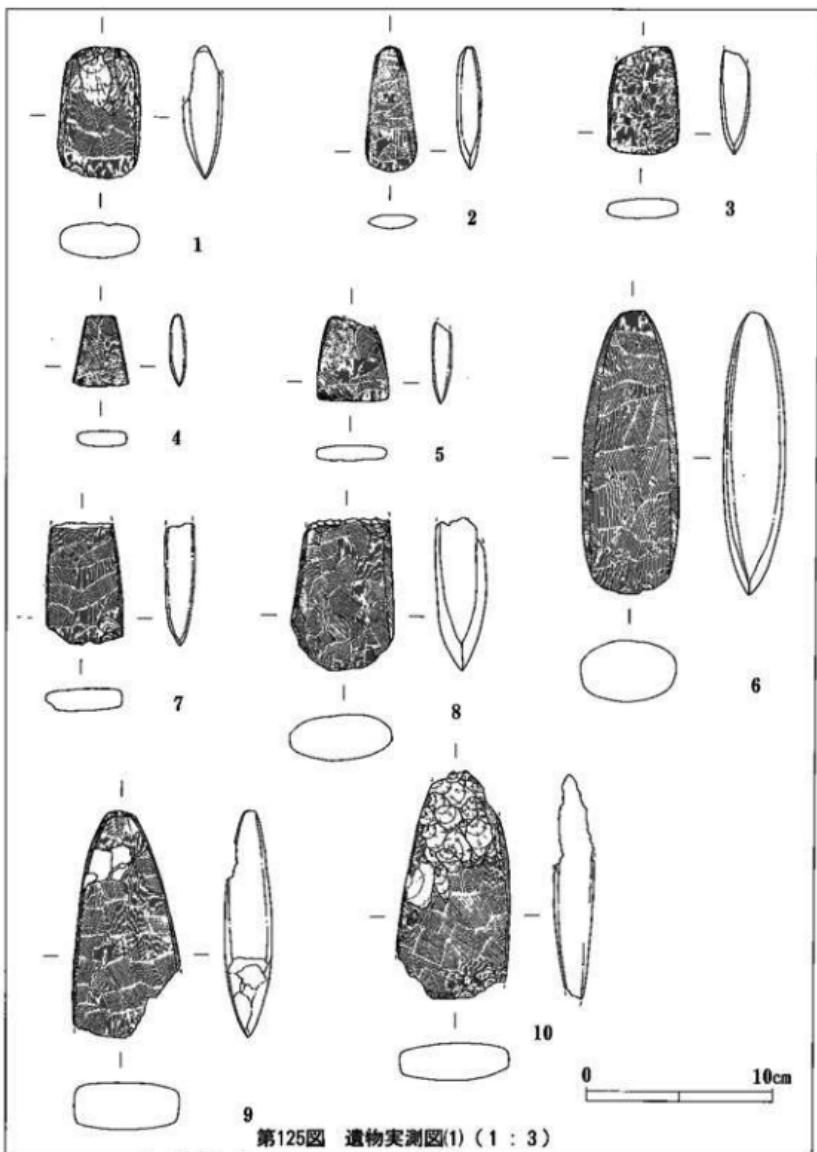
第122図 遺物実測図(3) (1 : 3)



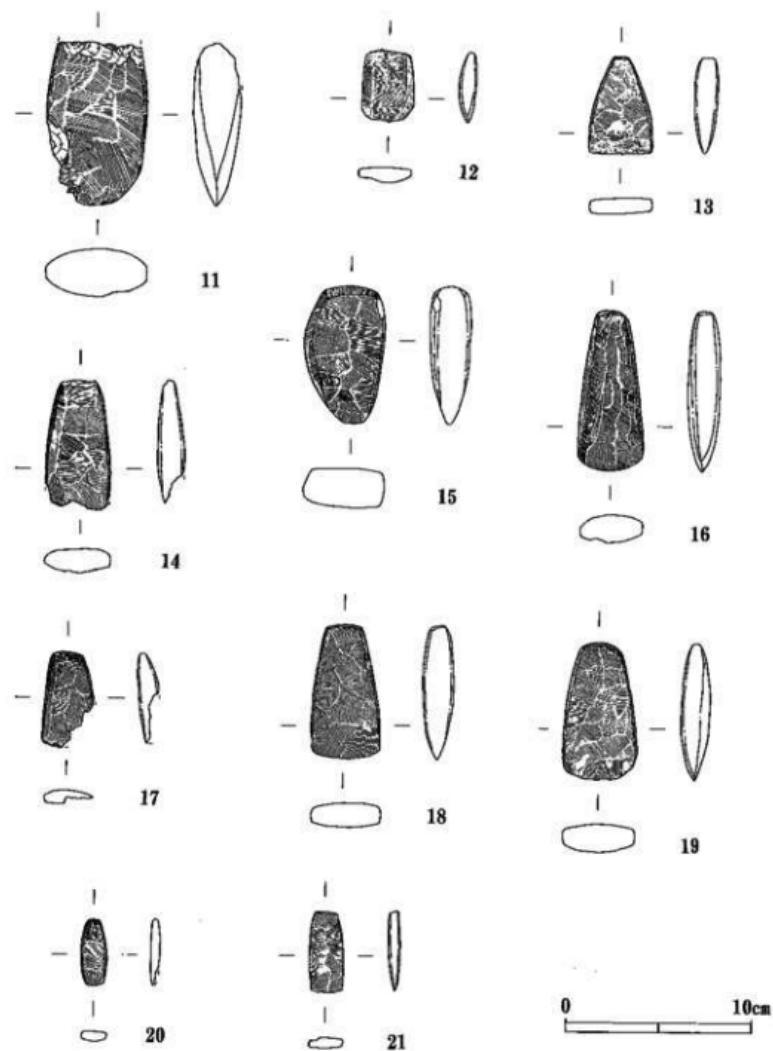
第123図 遺物実測図(4) (1 : 3)



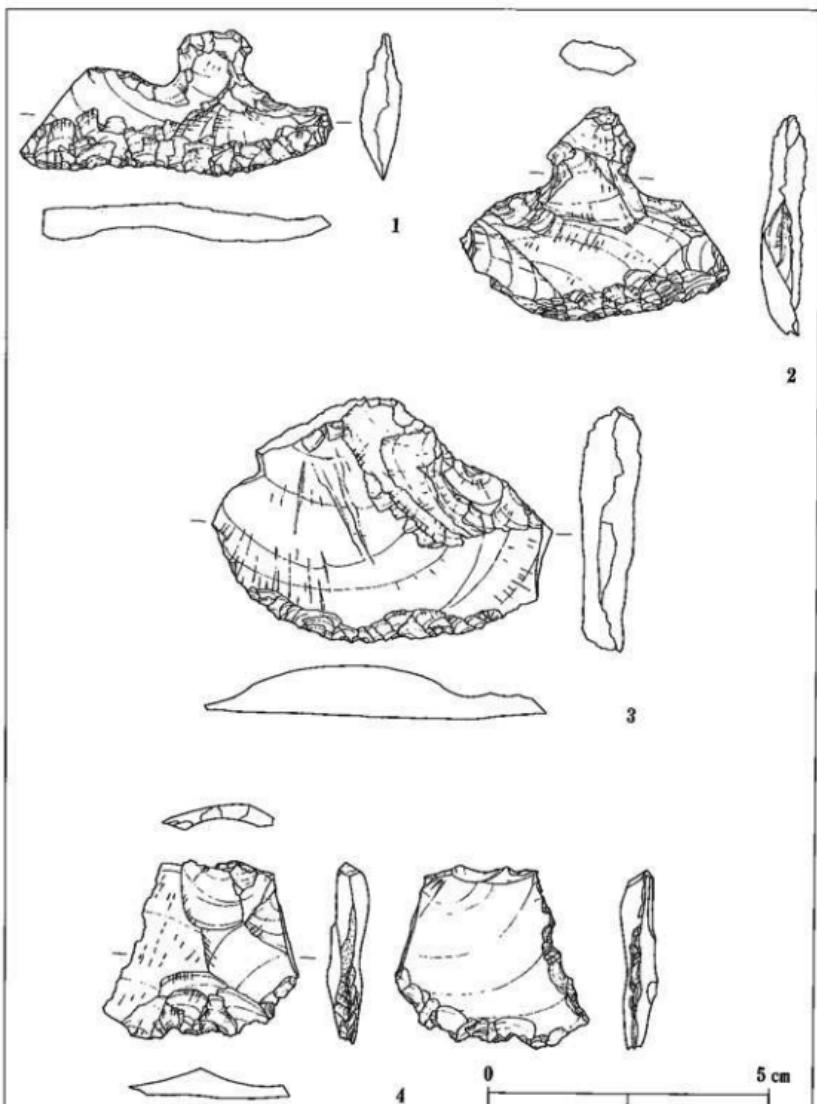
第124図 遺物実測図(5) (1 : 3)



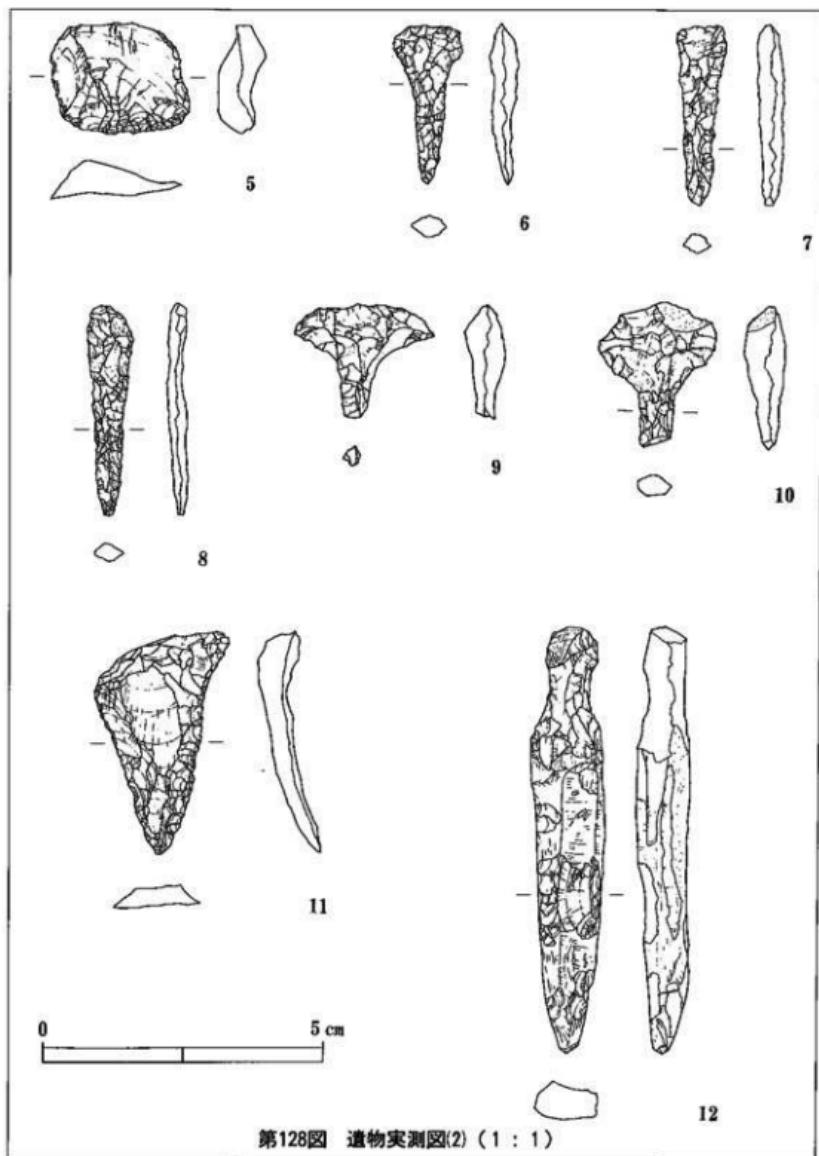
第125図 遺物実測図(1) (1 : 3)



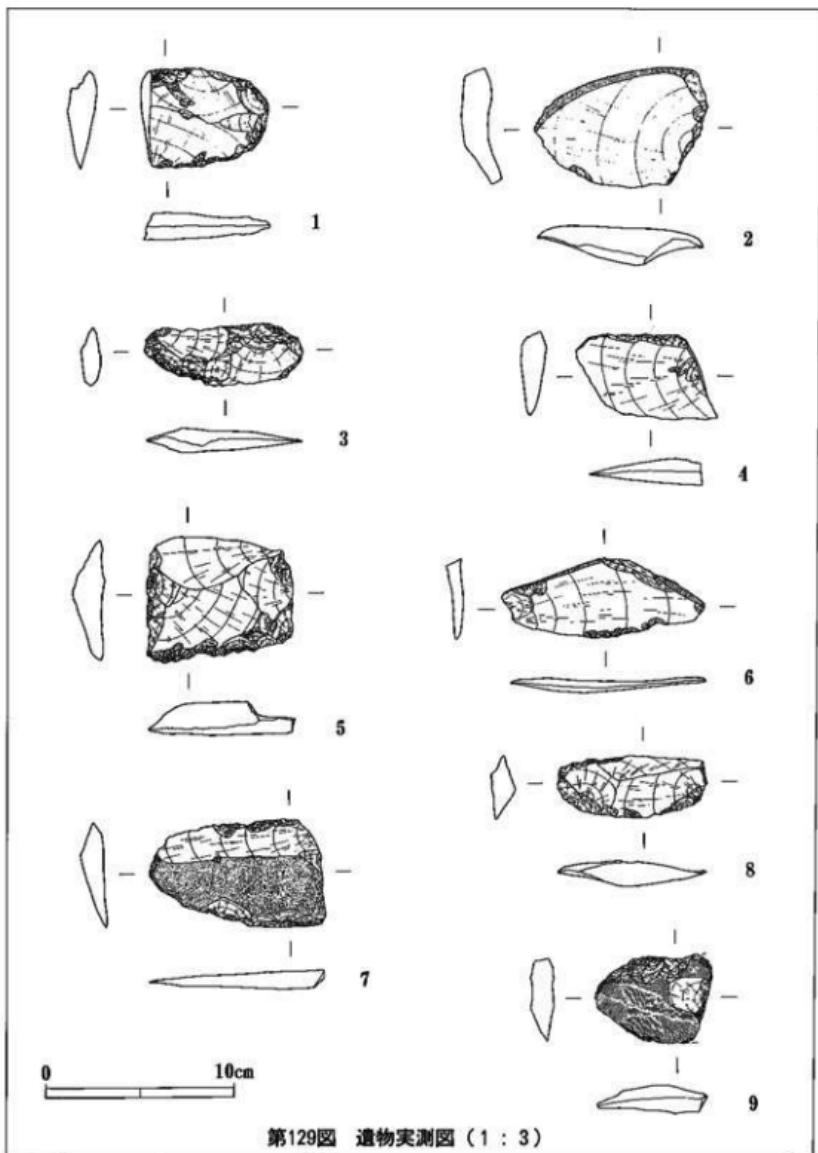
第126図 遺物実測図(2) (1 : 3)



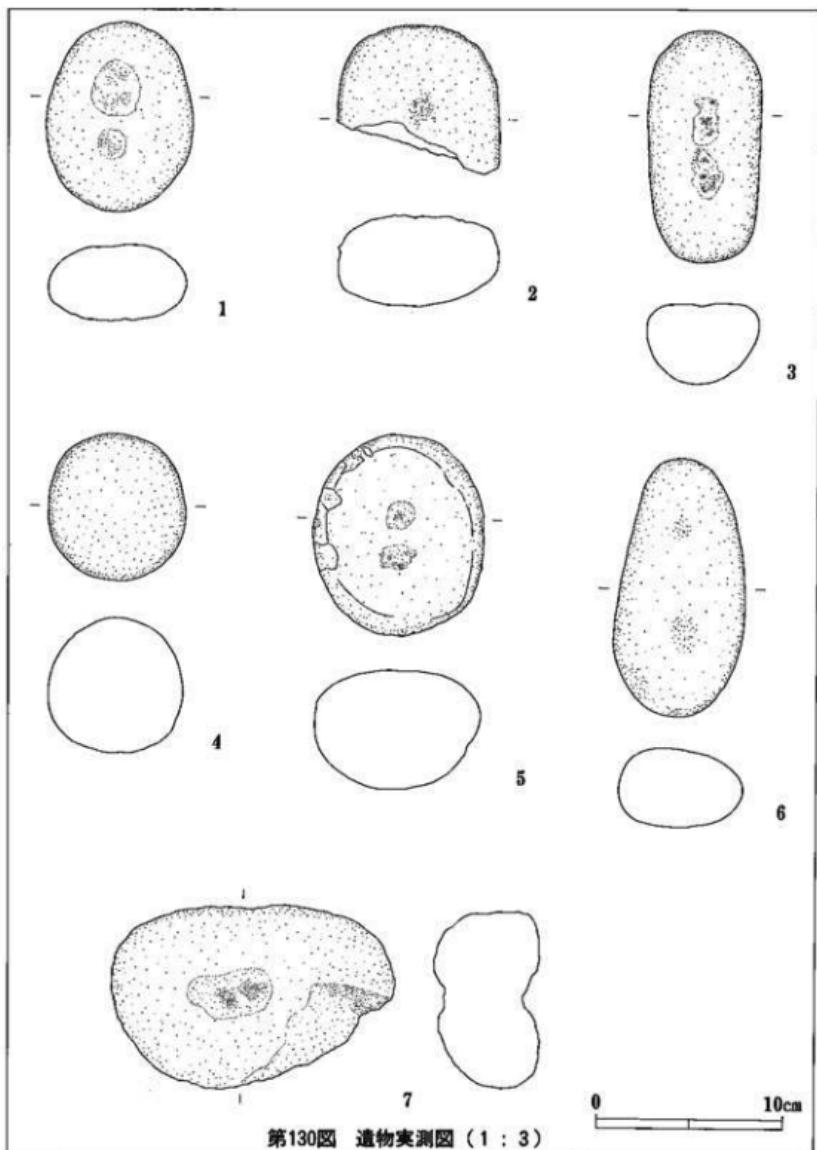
第127図 遺物実測図(1) (1 : 1)



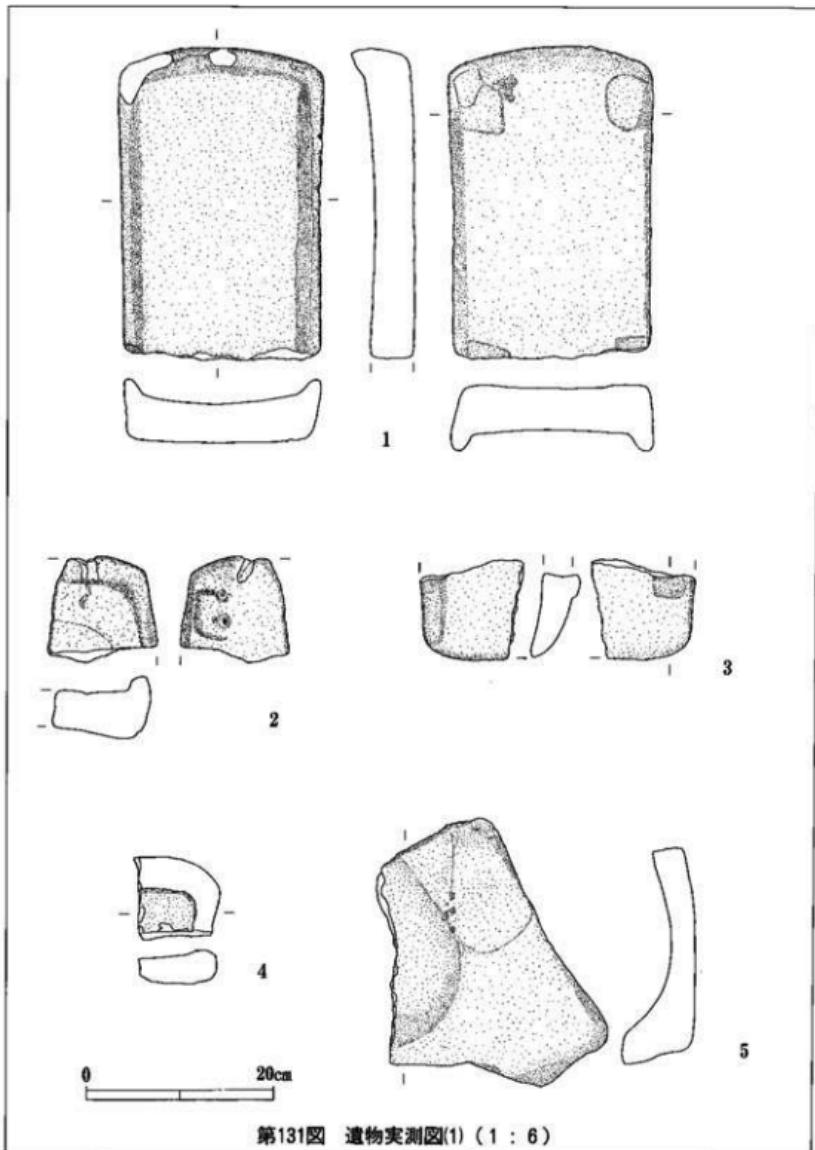
第128図 遺物実測図(2) (1 : 1)



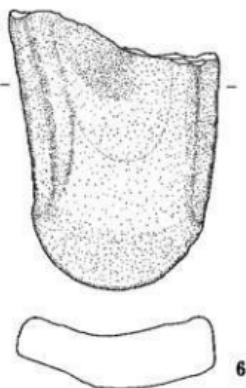
第129図 遺物実測図 (1 : 3)



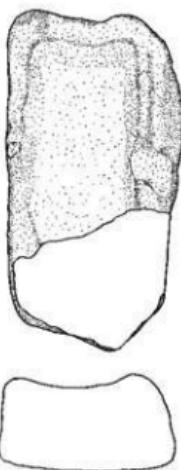
第130図 遺物実測図 (1 : 3)



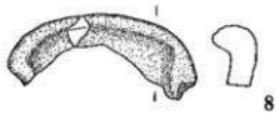
第131図 遺物実測図(1) (1 : 6)



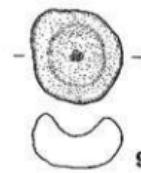
6



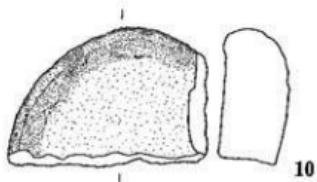
7



8



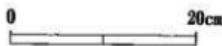
9



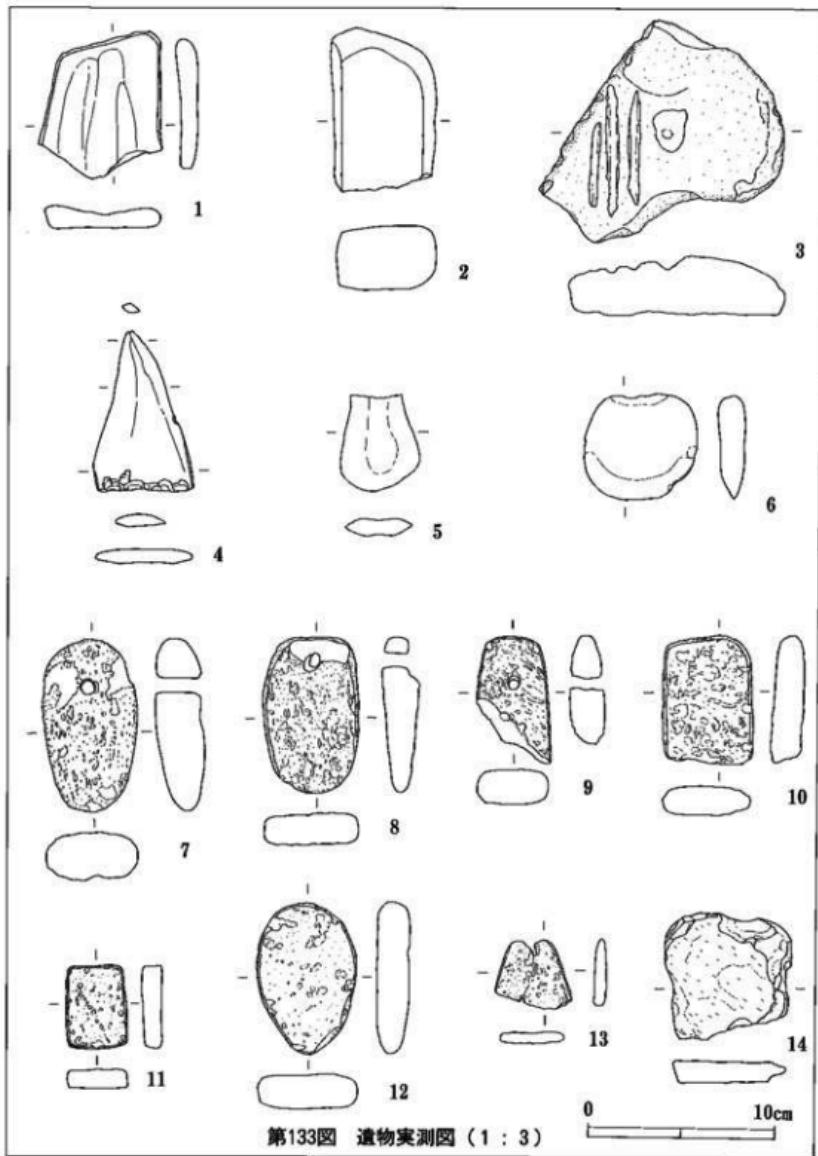
10



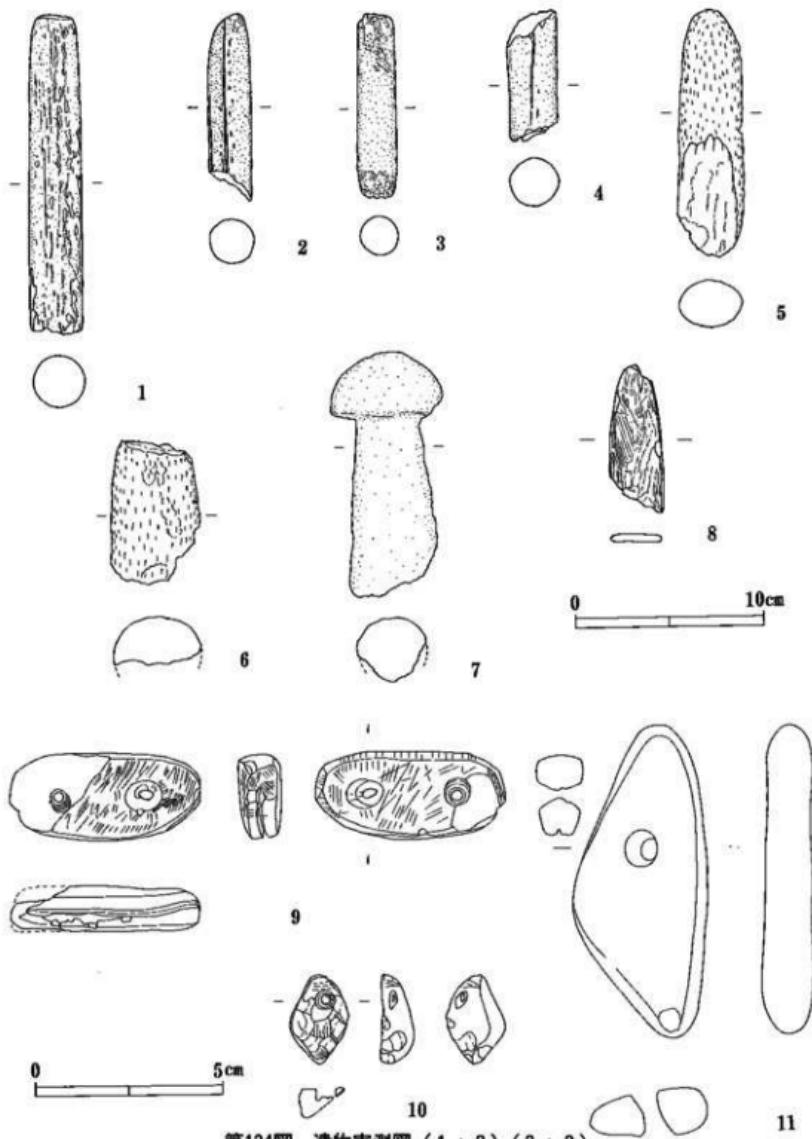
11



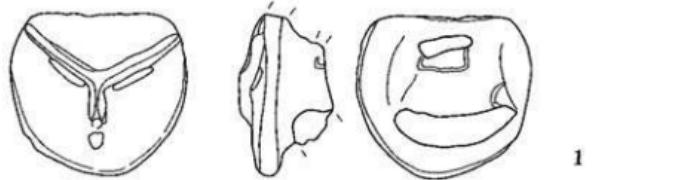
第132図 遺物実測図(2) (1 : 6)



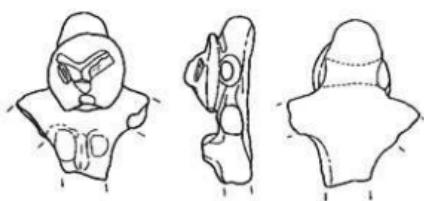
第133図 遺物実測図 (1 : 3)



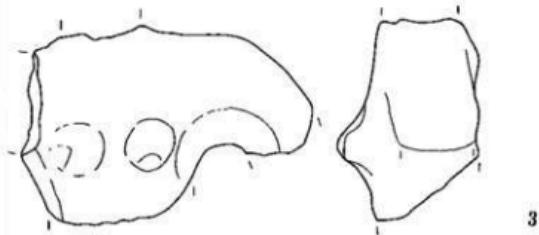
第134図 遺物実測図 (1 : 3) (2 : 3)



1



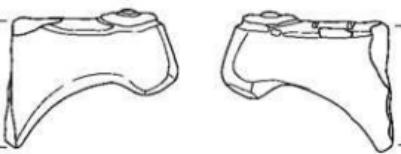
2



3

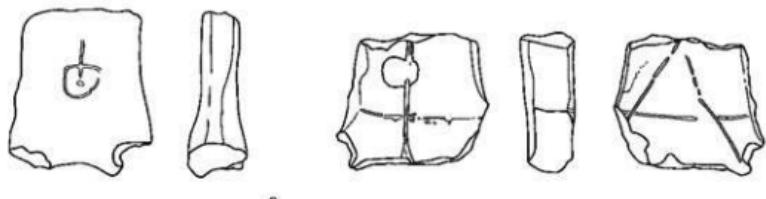
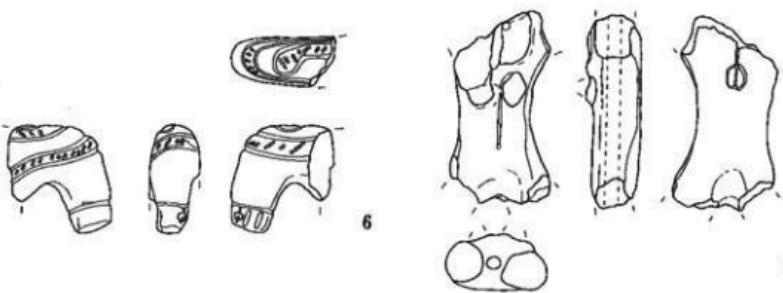
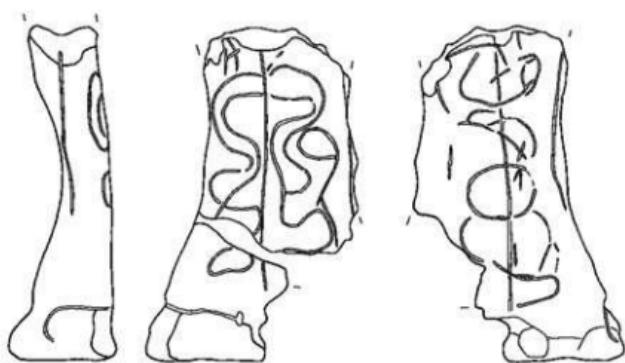


0 5 cm



4

第135図 遺物実測図(1) (1 : 2)



0 5 cm

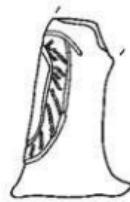
第136図 遺物実測図(2) (1 : 2)



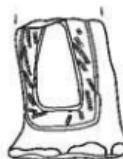
10



11



12



13



15



14



第137図 遺物実測図(3) (1 : 2)



第138図 遺物実測図 (1 : 2)

辻田遺跡出土の骨類について

信州人学医学部第2解剖学教室

西沢寿晃

骨類の出土遺構は第13号住居址（T J T - D S B - 13）=繩文時代後期=を切って作られた配石土壤内（S X - 01）であり、これとの関係は明確ではない細区（a、b、c、d、e、f区）からも出土している。さらに遺構との関係は不明であるグリット（T J T - B F - 9）の骨も含まれる。

骨類は人骨と獸骨に分けられる。S X - 01出土の骨は総て一括される人骨の破碎片で分量的にも多い。その他の区域からの出土骨もほとんどが人骨であり、さらにこれらの骨片は各区を通じて幾つかの部位で接合されることからも、人骨の遺構内での散乱状態が指摘されるものである。なお、獸骨はほとんどがシカの角の断片でありわずかな肢骨も混在する。

骨片はすべて焼骨であり、破碎が著しく進行し、細片状となってほとんどが原形を留めていない。人骨・獸骨ともに、かなり高温での燃焼の結果、骨の表面から内部の海綿質まで一様に白色を呈している。一般的に焼骨は、その受けた温度によって堅さを増し、金属性的な骨質に変化して、色調は灰白色から黒色まで様々に異なるものであるが、本例の場合、低温の不完全燃焼によって付着する炭素による黒色の骨片は皆無である。骨の緻密質には細かな亀裂や捩れによる変形が生じ、不規則な形の骨片となっているが、骨格を構成する部位によってはやや大形片として残るなど、残存の程度が異なっている。同時に極めて微細な骨片の残量も多い。また歯は歯冠を覆うエナメル質の崩壊により全く残存されていない。

以下、各区出土の骨類を人骨・獸骨に分け、一括したかたちで骨の部位を同定し、その内容についての概要を記載する。

人骨

頭蓋骨：頭蓋各部は極めて細小な破片として残存するが全体の量としてはさほど多くない。特に頭蓋冠などの扁平骨は内板と外板が剥離し、頭蓋底部分も細かな破碎片として残る。やや大形の骨片としては $5 \times 2\text{ cm}$ 、 $4 \times 2\text{ cm}$ 程度の大きさのものである。微細な骨片の量が多い。頭頂骨の鱗縁の小部分、頬骨弓の一部、後頭骨の上項線やラムダ縫合の一部などが識別できるのみで、形質的な観察は一切不可能である。骨質からみて堅く滑沢な緻密質を有する骨片に対して、やや軟質な保存状態の骨片との差異を感じられる。ただしこれらが異個体のものとなるかは不明である。（S X - 01）（e区）

椎骨：脊柱各部の椎骨の数が多い。ただしすべて椎体と椎弓部分に分離し破損されている。椎

体の残存数はおよそ15個、椎弓部分も約10個が数えられる。椎骨の位置が判明するのは仙骨の第1仙椎の椎体の一部、同じく正中仙骨稜の小部分などである。各椎骨の個体別は不明である。(S X-01) (d 区)

肋 骨：肋骨体の一部が5cmほどの長さで数本残存する。(S X-01) (d 区)

鎖 骨：右 胸骨端寄りの一部分で、円椎韌帶結節の突起が強い(S X-01)

肩甲骨：左右不明であるが肩峰の一部、肩甲頭の小部分などが認められる。(S X-01)

上腕骨：左右の骨体部分のほとんどは長さ5cmほどに縦割され、多くの破片となる。骨表面の剥落や亀裂・変形によりその形状の多くは崩壊し、接合は不可能である。しかし、異なる出土区での接合可能な骨片から3本の上腕骨の存在が確認できる。

①左 骨体の下部と滑車部が比較的原形を保つ(S X-01)ものに、筒状に形状を残す骨体の中央部分(d区)が接合され、上腕骨頭や肘頭窩、上腕骨小頭部分を欠くがほぼ原形に復する。形質としては骨体に大きな変形はみられずおむね伸直性を示す。大結節稜はさほど強度ではなく、結節間溝も浅い。三角筋粗面はわずかに痕跡的であり、内・外側頸上線は通常の発達程度である。骨体の収縮や変形の程度を勘考しても形状はやや細くきしゃであるといえる。

②右 骨体の下半分で大形の破片(S X-01)に対して、滑車部分(e区)が合致する。かなり強い亀裂が生じていて骨体は前後に扁平となるが下半部はほぼ原形を維持する。内・外側頸上線が発達している。

③左 骨体の上部および下部が各8cm位の長さで残る(e区)。変形は強いが筒状を保つ。骨質や形状から同一骨の部分と見られる。大結節稜の一部や三角筋粗面の発達はそれぞれ弱度である。しかし、骨体断面は太く、骨壁も厚く頑丈である。

②と③が形状からみて同一個体のものと見られるが、骨質の保存状態は微妙に異なる。すなわち右の骨表面は平滑・堅緻なのに対して、左はやや軟性で亀裂の傾向もわずかに相違する。またこの個体に対して①はかなりきしゃな形態を示しているといえる。

その他、上腕骨頭の小片(S X-01)が認められる。また骨体の破片の小部分が接合できる。(S X-01) (d, f区)

橈 骨：左右の骨体が多くの細片となるが、骨体の中央部分が比較的原形を保ち、計4本の橈骨の存在が認められる。

①左 茎状突起を欠くが、骨体中央部での接合によりほぼ原形に復する。骨の表面は滑沢で、骨体は筒状を保ち、全体的にわずかな亀裂が生ずる程度で、捻れも少ない。骨体は概ね伸直で、比較的細くきしゃである。橈骨粗面の隆起も強くないが骨

間縫は鋭い。(SX-01)

- ②右 骨体の中央部分(約11cm)。わずかに湾曲する。骨間縫は薄い。(P-15)
- ③右 骨体の中央部分(約12cm)。かなり細い骨体で、骨間縫は薄く、発達も弱い。骨表面はやや脆弱化している。(SX-01)
- ④左 桡骨頭を欠く骨体上半部(約8cm)。桡骨粗面はかなり弱度で、細くきしゃな形状である。(d区)

①と②は同一個体のものと見られる。④は大きさなどで③に似るが、形状にやや相違がみられる。

燃焼による骨の変形・収縮の結果は、その計測値の精度に少なからず誤差を生ずるが、①桡骨の場合、近・遠位端や骨体の形状は比較的、自然の晒骨に近い状態と見なされるので、参考のために主な計測値を付記する。
(表1)

尺 骨：桡骨と同様に多くは細片となるが、接合によ

りほぼ完存する骨もある。計4本の尺骨の存在が推定される。

- ①左 鈎状突起や遠位端を欠くが肘頭を含め骨体はほぼ完存する。ただし変形が著しく、S字状に強く湾曲している。回外筋稜は細く鋭い。骨間縫も発達している。尺骨粗面の一部を残すがさほど顕著ではない。(SX-01)
- ②右 骨体の上半部で、鈎状突起は残るが肘頭や桡骨切痕は欠く。回外筋稜は細くやや鈍である。形状もやや小形といえる。(SX-01)
- ③右 骨体の中央部分(約11cm)が残る。(SX-01)
- ④左 骨体の上半部(11cm)。骨間縫は発達、回外筋稜は極めて薄く鋭い。(d区)
その他、細片の量が多い。

②と④は微妙な相違は見られるが同一の個体であろう。また①と③は相似する形質を具えているが前者に比較すると小形である。

手 骨：舟状骨1個、有鈎骨2、大菱形骨1、小菱形骨1、豆状骨1。第1中手骨1本、基節骨5、中節骨7、末節骨6～。(SX-01)

寛 骨：寛骨臼の小部分がわずかに残る程度である。他に内・外面の剥離した脛骨の細片もみられる。(SX-01)

人腿骨：骨体(左右)の断片がほとんどであるが量は多くない。接合による大形片(約13cm)は

表1 桡骨(左)主要計測値(mm)

1) 桡骨最大長	(200.0)
4) 骨体横径	12.7
4 a) 骨体中央横径	12.3
5) 骨体矢状径	10.0
5 a) 骨体中央矢状径	18.6
5 : 4) 骨体横断示数	78.7

1片のみである。断面からみた緻密質はかなり厚いが、わずかに残る粗線の発達はさほど強度ではない。骨の収縮の度合いからみてもそれほど頑丈でない形態と見受けられる。

(S X-01) (d, f 区)

脛 骨：骨体（左右）の断片のみであり、残量も多くない。各稜の発達の傾向も明瞭でない。

(S X-01) (d, f 区)

腓 骨：外顎部などと骨体の細片が残る。(S X-01)

足 骨：蹠骨1個。中足骨6本、内5本は完存するが湾曲・変形が著しい。(S X-01)

獸 骨

出土区はSB-13、b、c、F-9に限定される。獸骨とするものはすべてニホンシカの角の破碎片であり、わずかに肢骨が混在している。人骨と同様に火焼を被って白色で堅い骨質となる。炭化した黒色の骨片が一部に見られる。角はほとんど3cm内外の大きさの細片に碎かれているが、角の特徴である血管溝や断面の緻密質にみられる厚い外層と微細な海綿状の内層などが観察される。角の角座や骨幹部分、分枝の先端などが識別できる。その他、肋骨片や小管状骨の一部なども残されている。

b区=角の細片のみ20数個。b、c区=角の細片のみ10数個。B・F-9=指骨（基節骨）1本、接合により原形となる。中手（中足？）骨の遠位端の一部2本、手根（足根？）骨1個。なお、以上の獸骨の他に微細な骨片中には人骨の混入も推測されるが明らかでない。

要 約

出土した骨類は人骨および獸骨に分けられる。人骨はすべてが焼骨であり、多くの全身部位の骨が細片として残るなかで、上腕骨、橈骨、尺骨などが比較的原形を留めて残存している。これらは側方のみのもの、左右対象のものなど、形状の対比から少なくも2個体以上の人骨の混在が推測される。しかし、成人人骨である各個体の性別・年齢などの判定はほとんど不可能である。骨の収縮や変形の結果としてみても強壮な形質を具えた骨は見当たらず、むしろかなりきしゃな体格の持ち主の存在も考えられる。さらに焼骨として極めて滑沢・硬質な骨片とともに粗ぞうでやや脆い骨片との相違もみられるのは、火焼の程度や保存環境に若干の相違が勘考されるところである。本人骨を火葬骨とみた場合、残存骨としては長大な骨の部分が少ないなどの傾向が窺われ、全体的な量も少なく、またそれぞれの骨がかなり擾乱している状態は、二次的な移動の結果とも推考されるものである。このような状況については出土遺構の性格と遺骸の埋葬の様態などとの関連について改めて考察を必要とするものであろう。

獸骨とした骨片はほとんどが焼かれたシカの角の断片であり、ほぼ一個所にまとった出土状

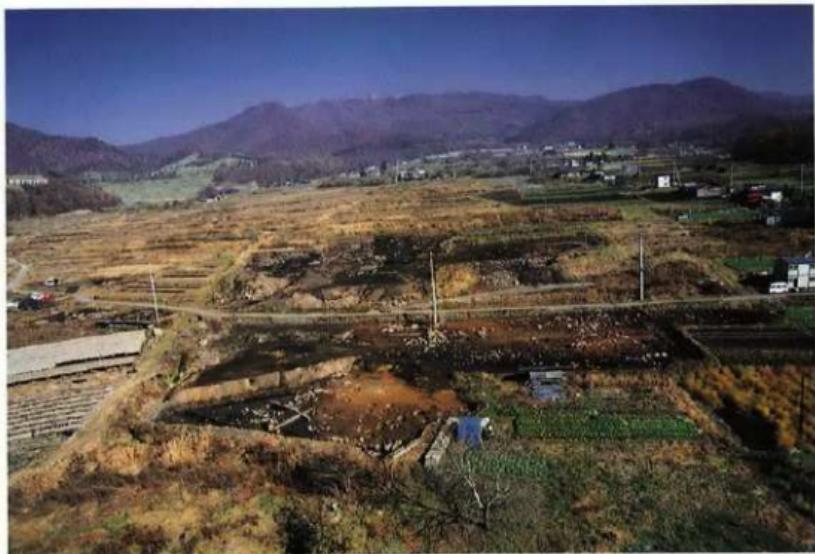
態である。わずかに少量の肢骨が残存するほかは大形獸としての各部の破砕片の検出は見られない。

参考文献

- 小片 保 (1973) 人骨の研究法 考古学ジャーナル 80
池田次郎 (1981) 出土火葬骨について 奈良県史跡天然記念物調査報告第43冊
江藤盛治編 (1991) 人体計測法 人類学講座 別巻1
石川口出志 (1988) 繩文・弥生時代の焼人骨 駿台史学 74号



写 真 図 版



遺跡全景（背景 烏帽子山）



遺跡全景（背景 尾野山）



A・D地点



配石群



S B -03



O・A・B地点



B 地 点



B地点 SB-12周辺



B地点 SB-06周辺



杏形石と碑



A地点 No. 1



A地点 No. 2

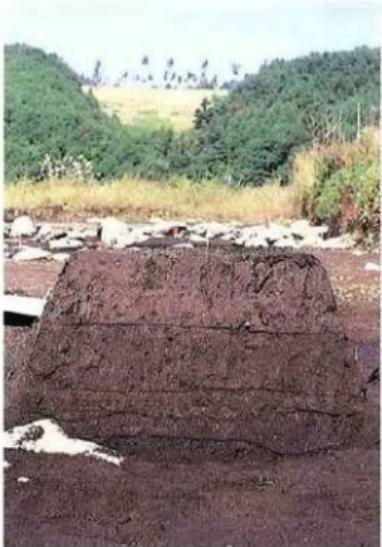


A地点 No. 3



A地点 No. 4

土層断面



A地点 No. 5

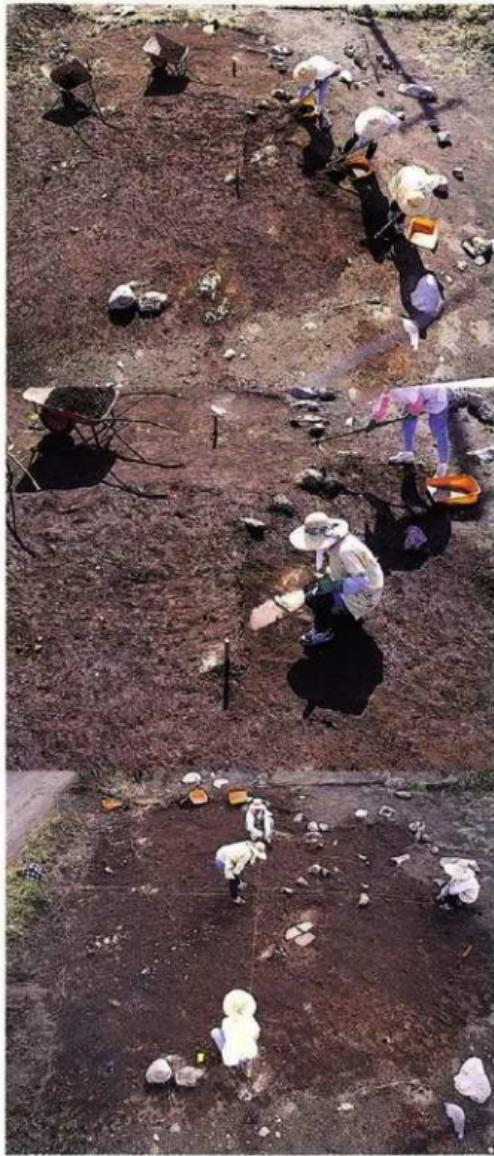


C地点 No. 1



C地点 No. 2

土層断面



遺構検出

敷石発見

セクションベルト設定

遺構（SB-13）掘り開始



遺構（SB-13）掘り



遺構（SB-13）掘り



セクションベルト実測



セクションベルトはずし



ベルトをはずしたSB-13



メッシュを組む



平面実測

炉を掘る





炉のセクション実測



炉の完掘



敷石実測（エレベーション）

敷石と周辺の礫を除去



サブトレンチのセクションを実測

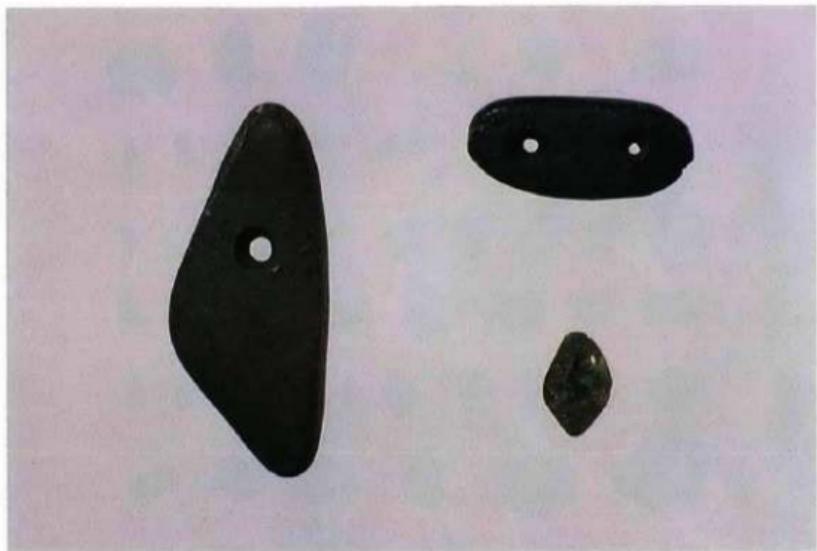


掘り上がり

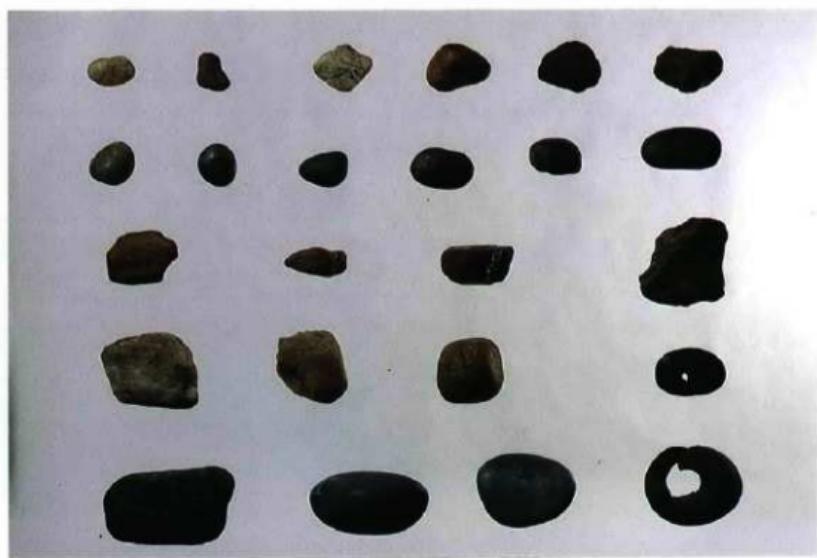




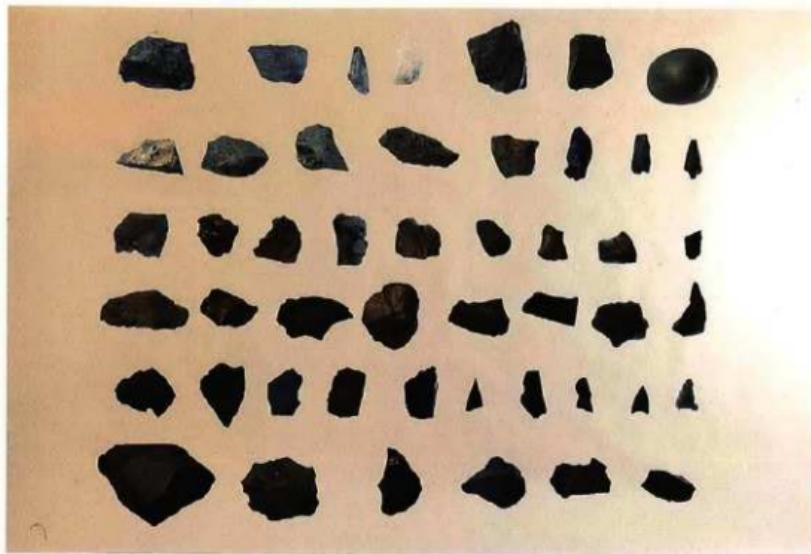
石匙・石錐・石鎌



玉類



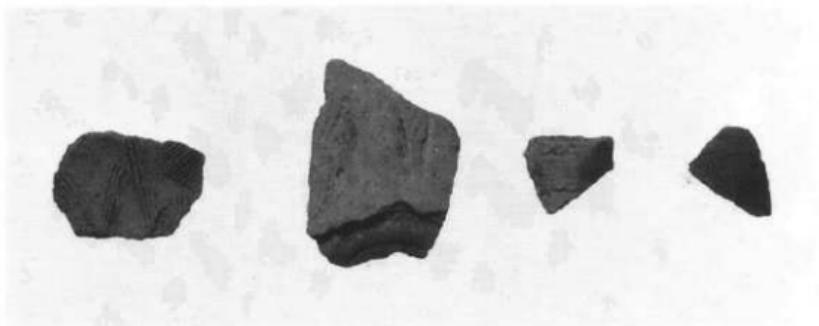
礫



礫・破片



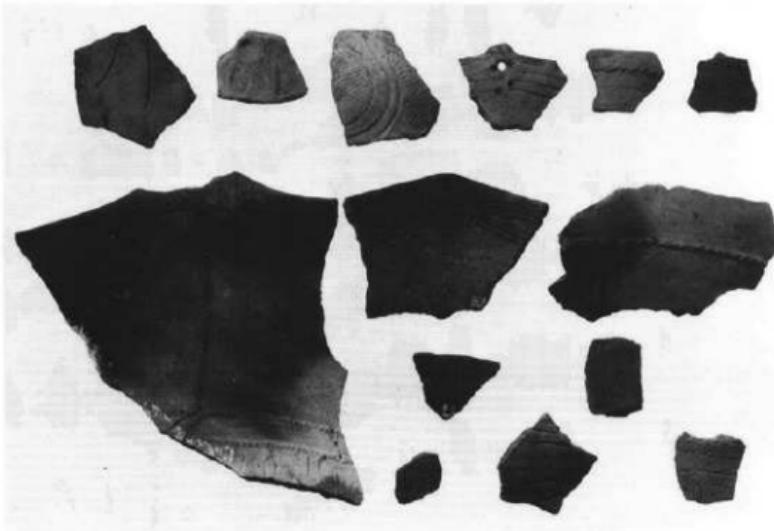
埋甕-2



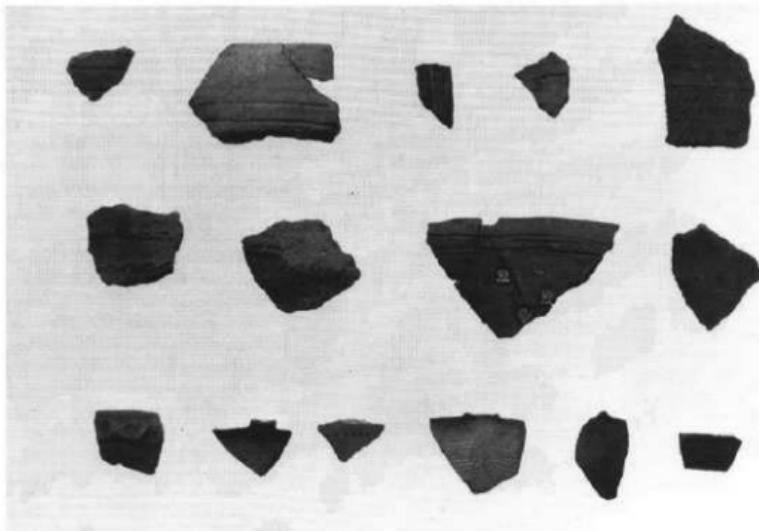
S B - 01 出土土器



S B - 02 出土土器

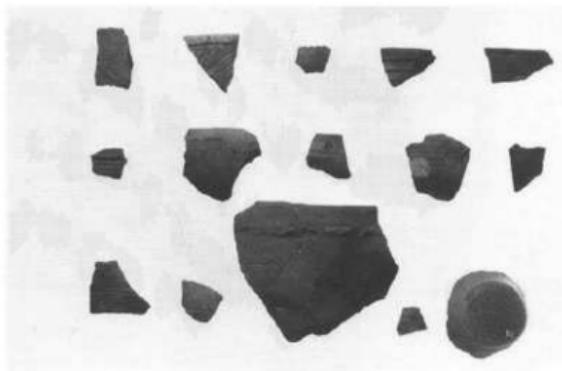


S B - 02 出土土器

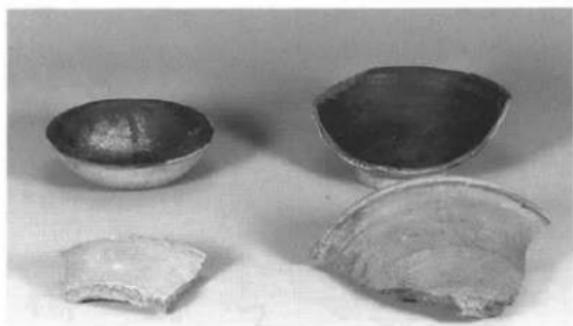


S B - 02 出土土器

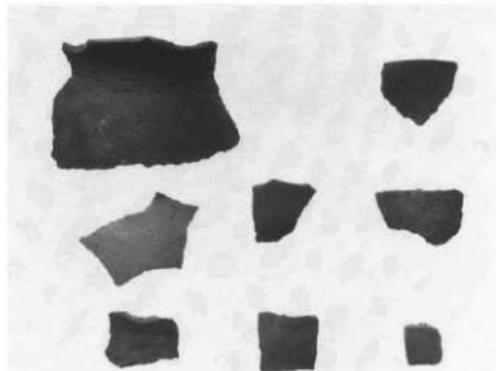
S B - 03 出土土器



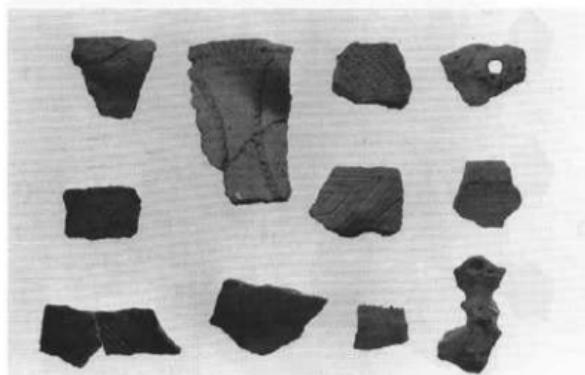
S B - 04 出土土器



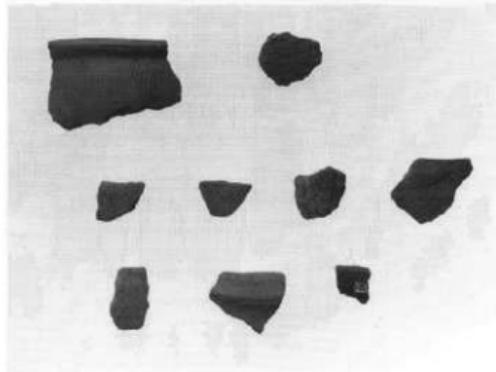
S B - 05 出土土器



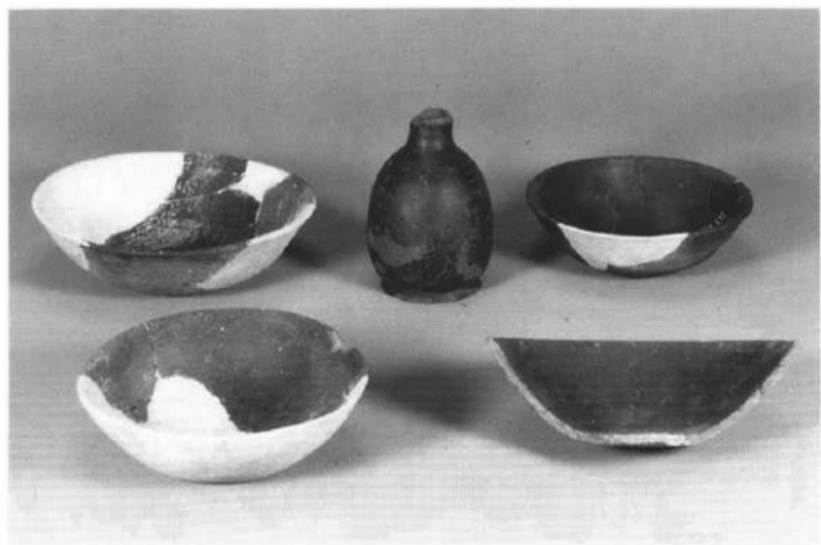
SB-07 出土土器



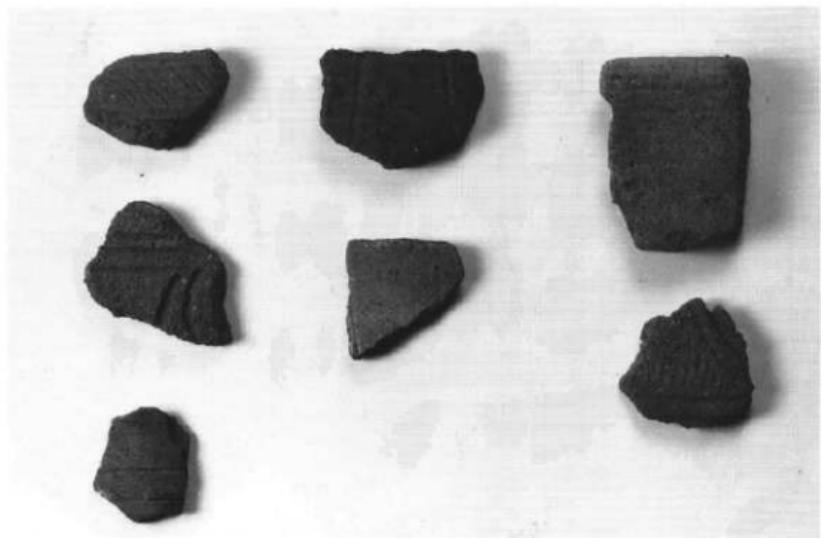
SB-08 出土土器



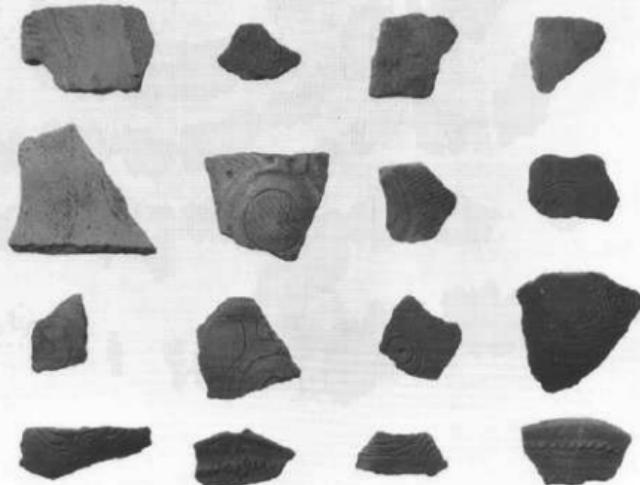
SB-05・09 出土土器



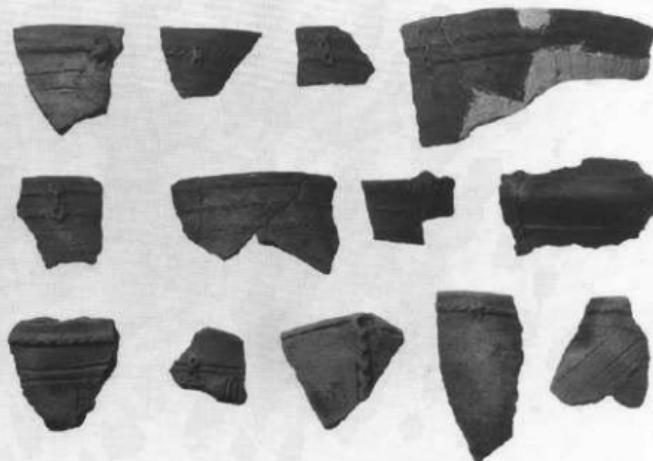
SB-10 出土土器



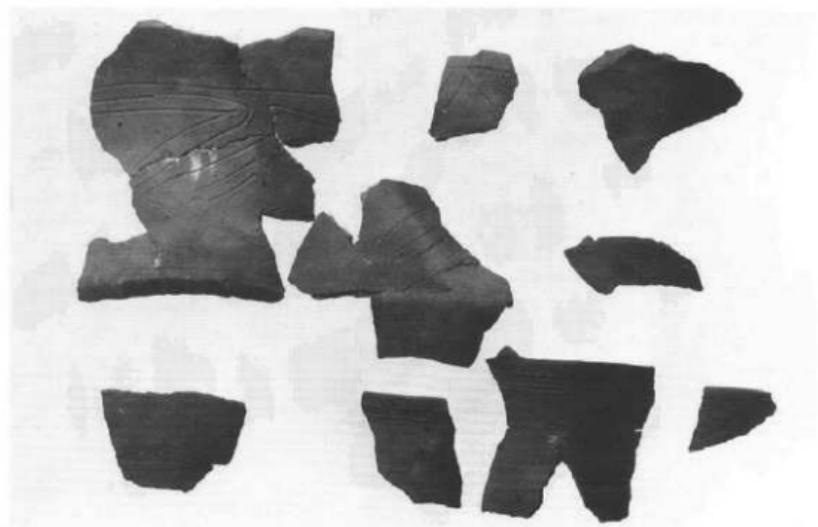
SB-11 出土土器



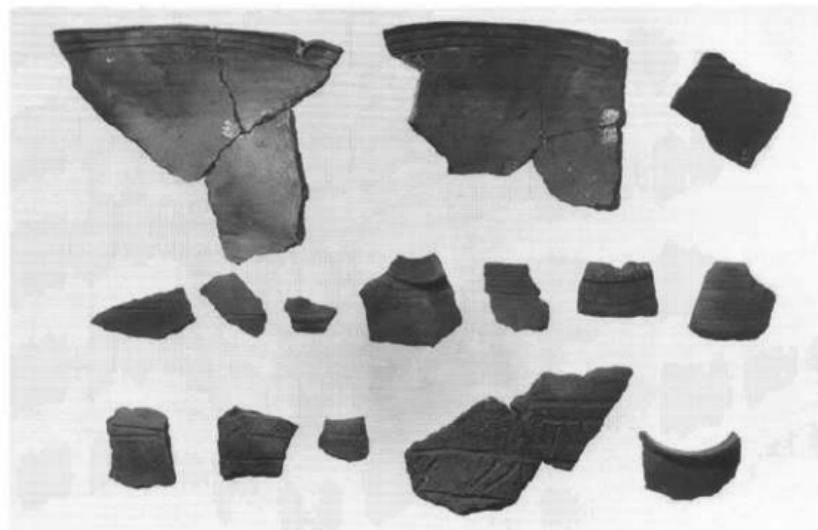
S B - 13 出土土器



S B - 13 出土土器



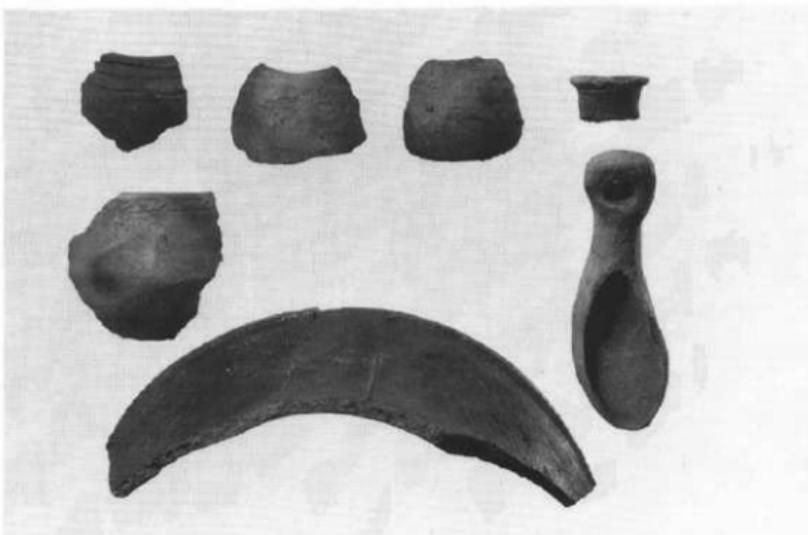
SB-13 出土土器



SB-13 出土土器



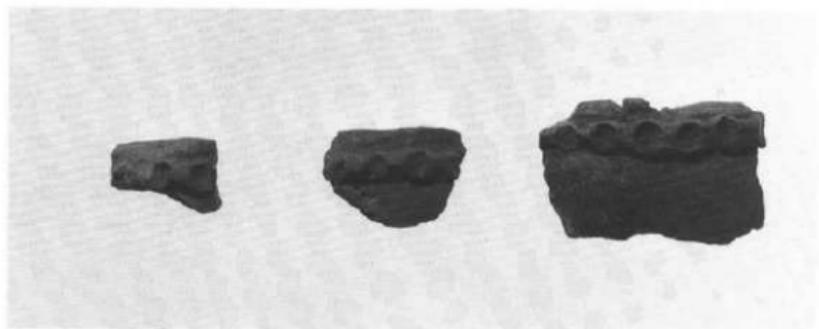
S B - 13 出土土器



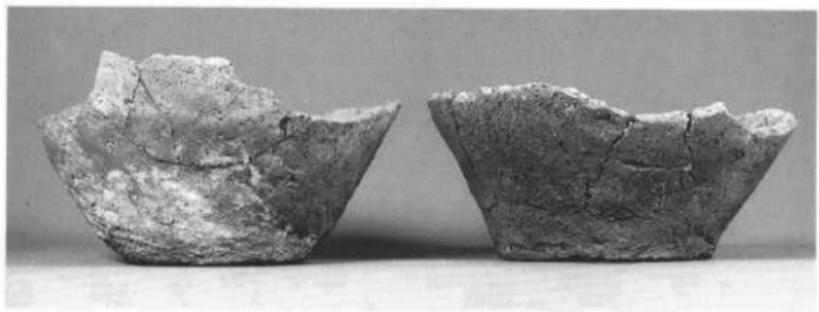
S B - 13 出土土器



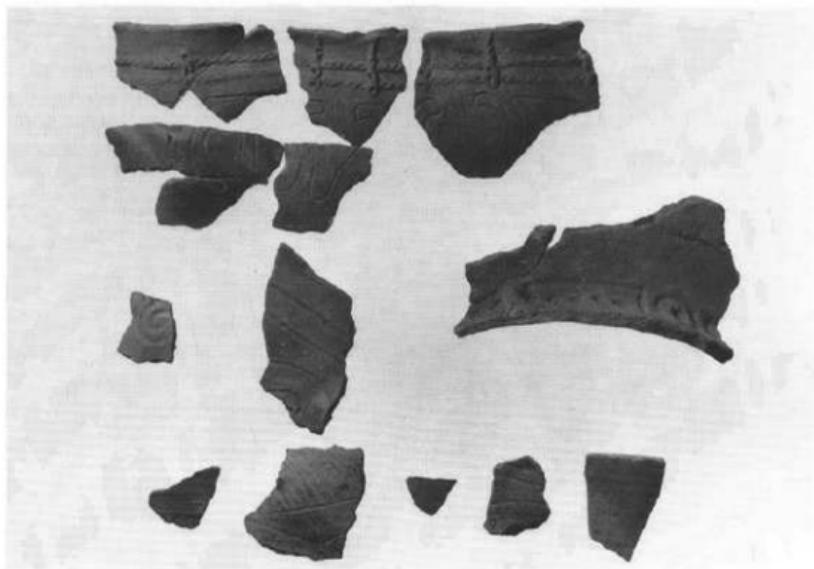
S B - 13 出土土器



S B - 13 Pit - 37 出土土器



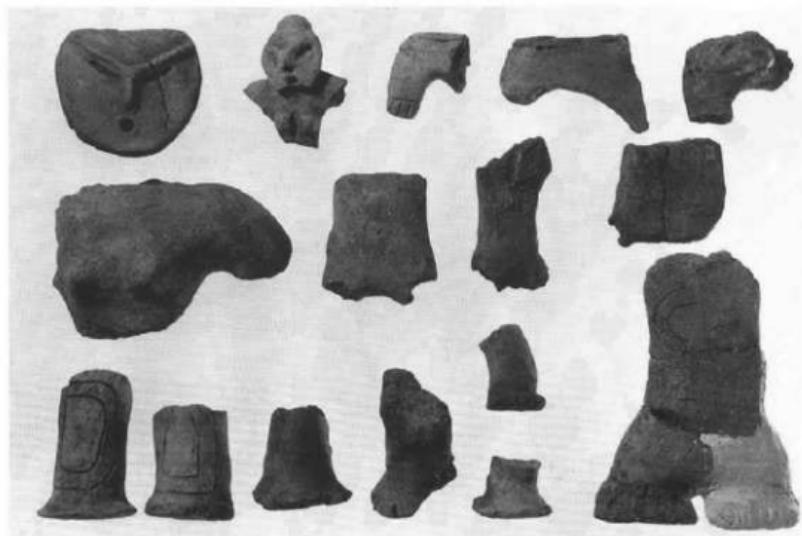
S B - 13 炉内出土土器



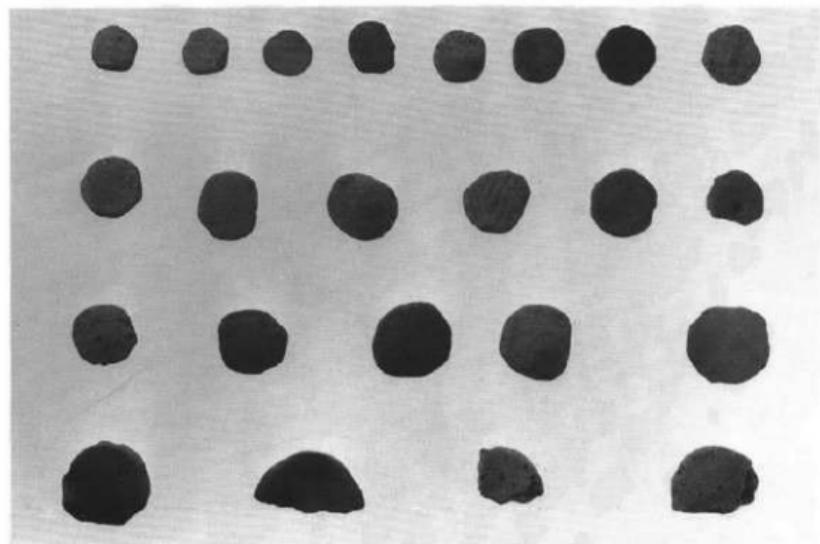
S B - 14 出土土器



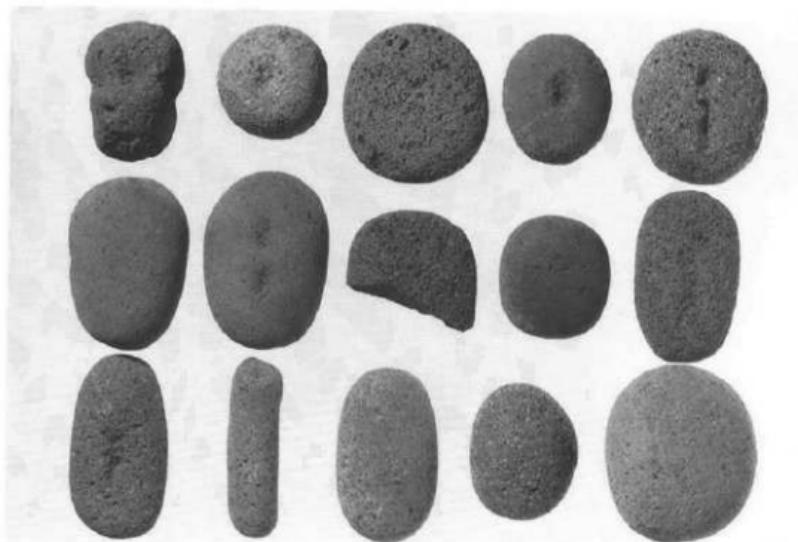
S B - 15 出土土器



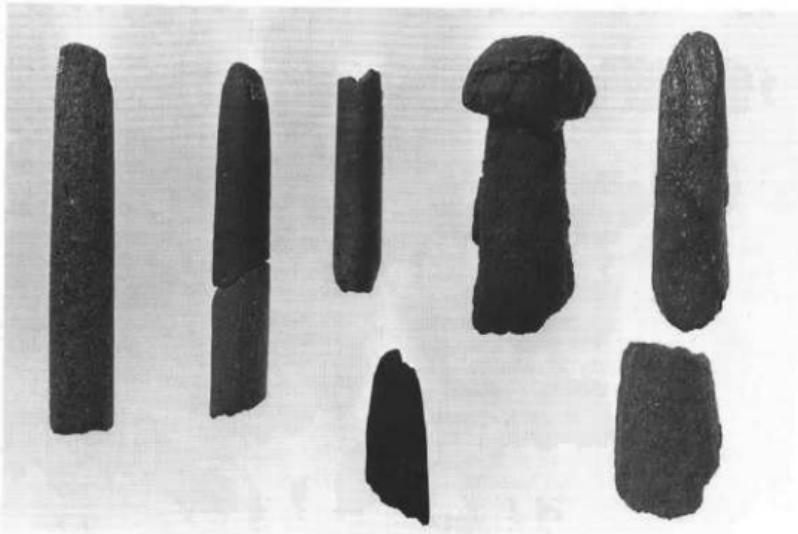
土 偶



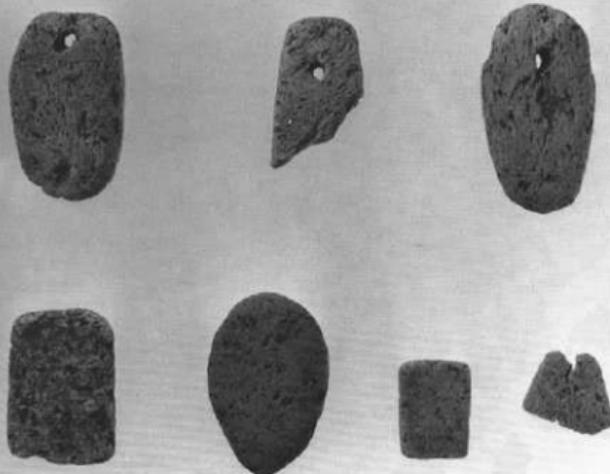
土 器 片 円 盤



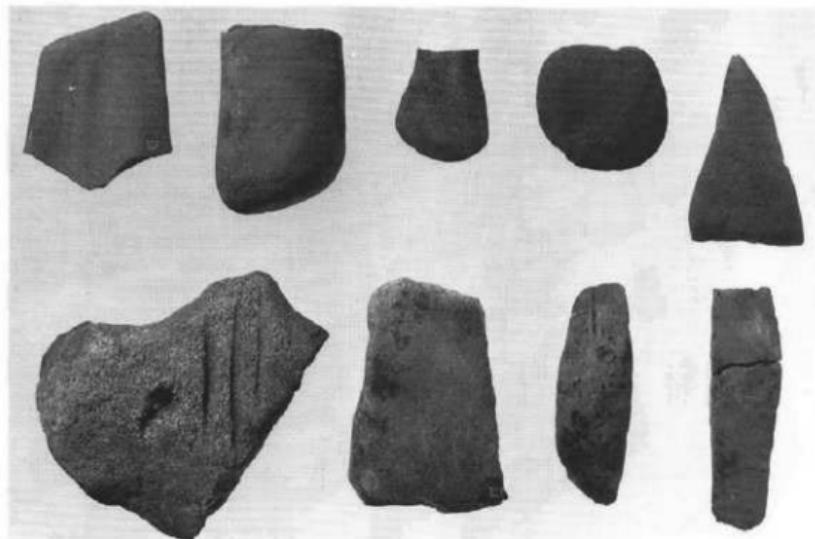
凹 石



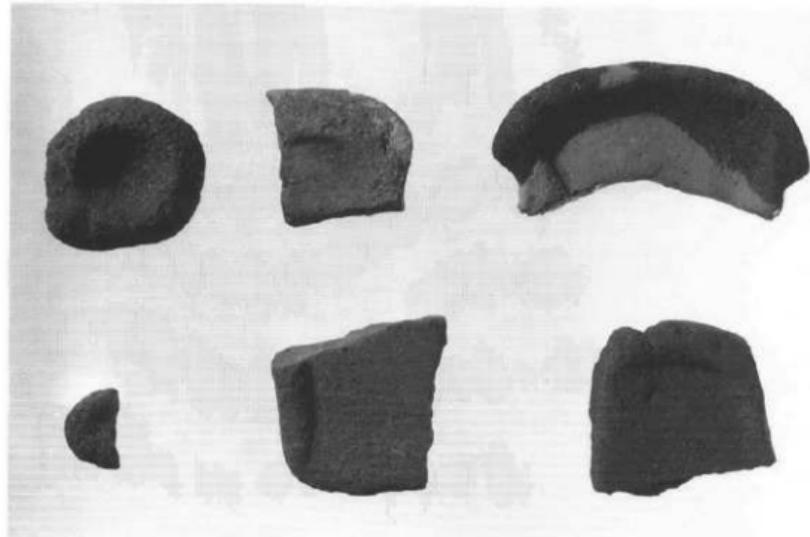
石 棒



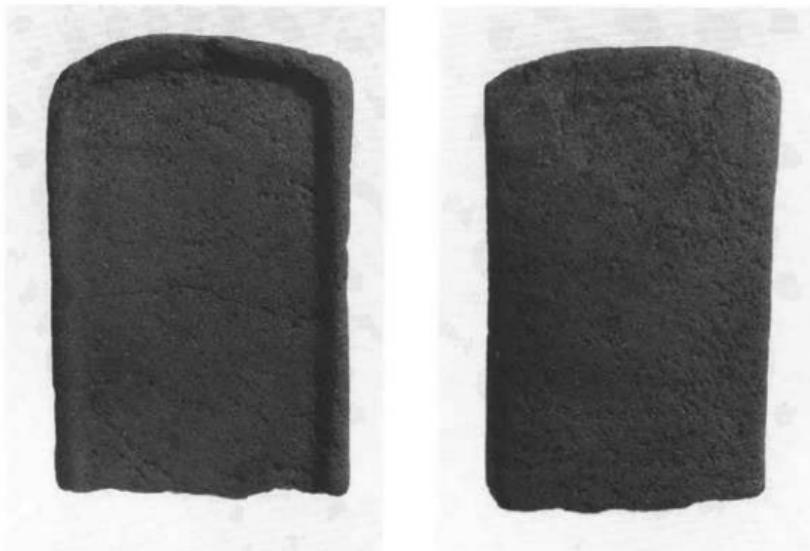
輕石製石器



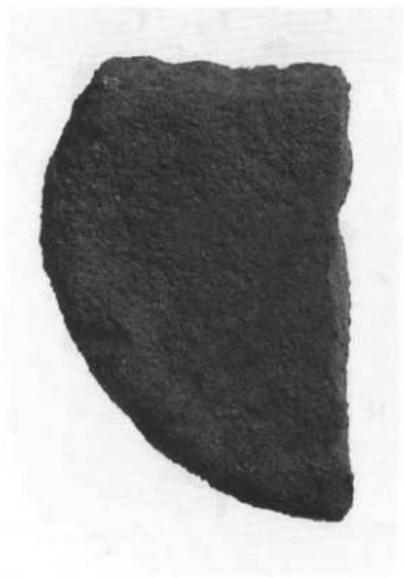
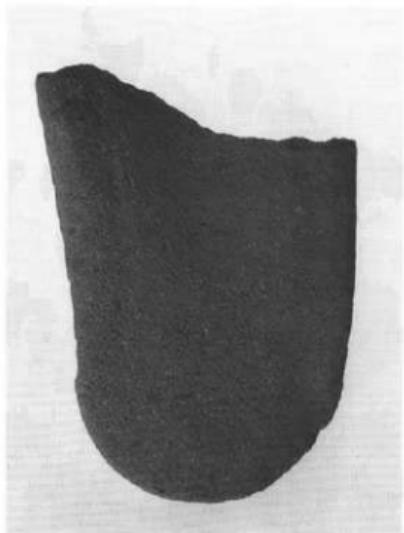
砥石



石皿



有脚の石皿（左表 右裏）



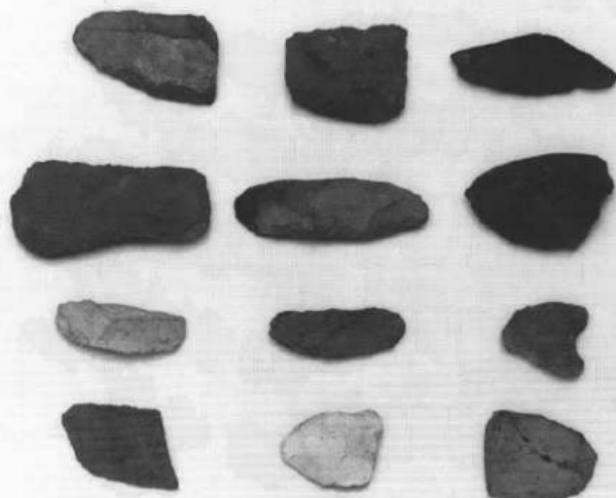
石皿



打製石斧



打製石斧



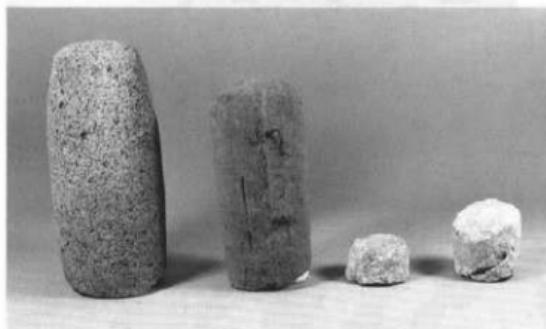
打製石斧・刃器



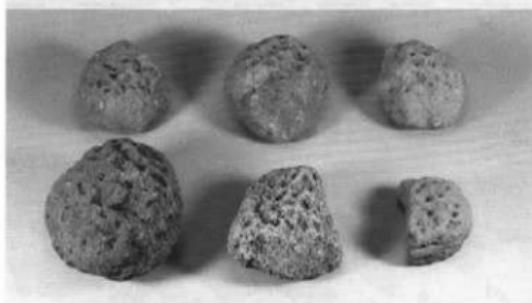
ミニチュア土器



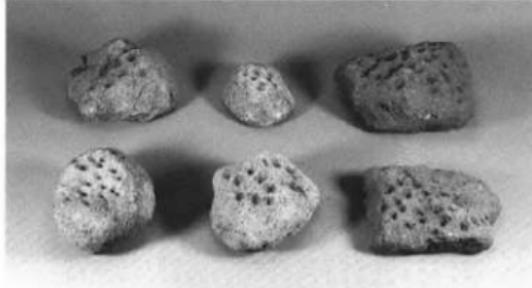
石 棒



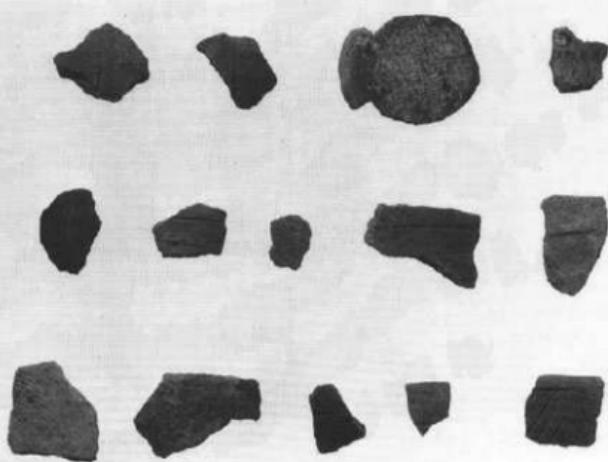
石 棒



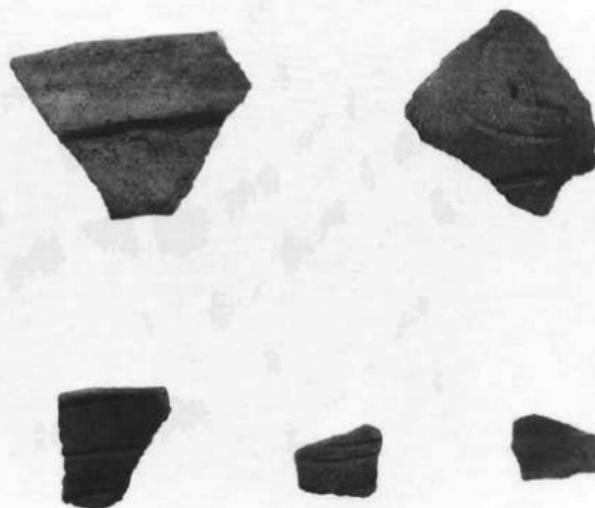
多 孔 石



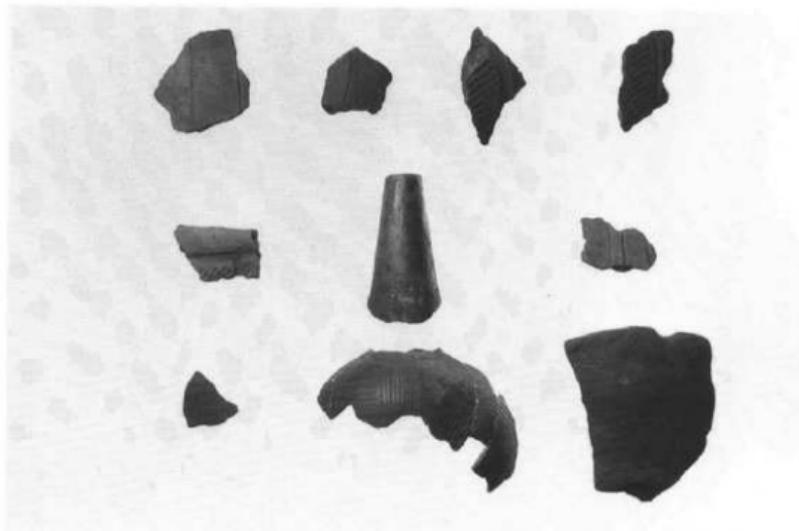
多 孔 石



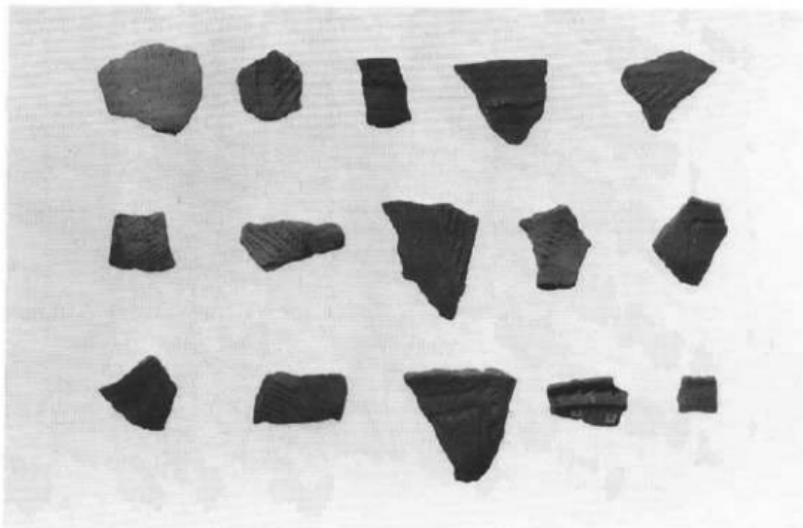
A地点 SK-01・02・11 SX-05・06 出土土器



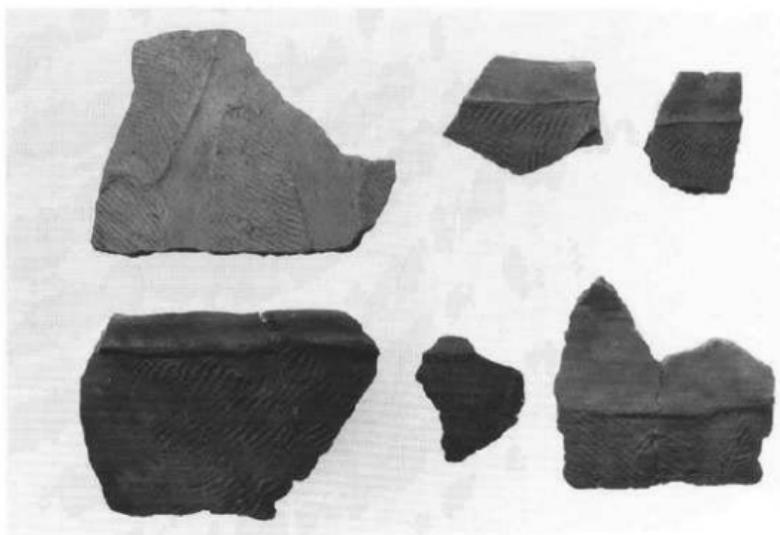
A地点 SX-03・09・13 出土土器



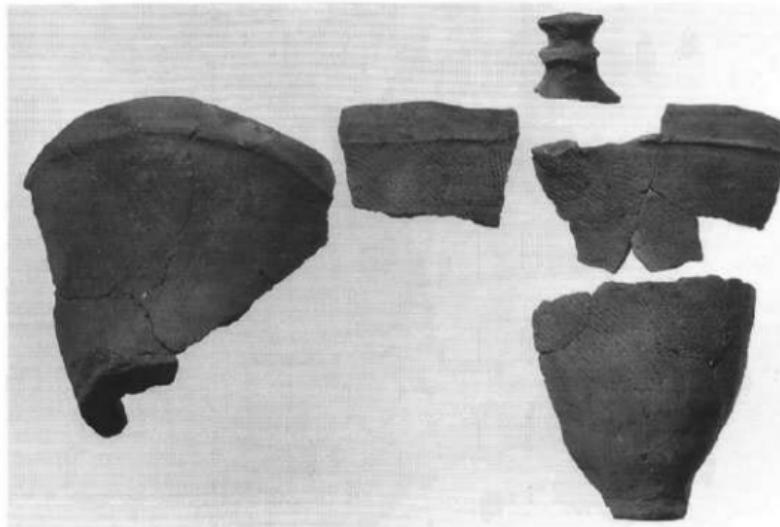
B地点 SK-03・04・05・07 出土土器



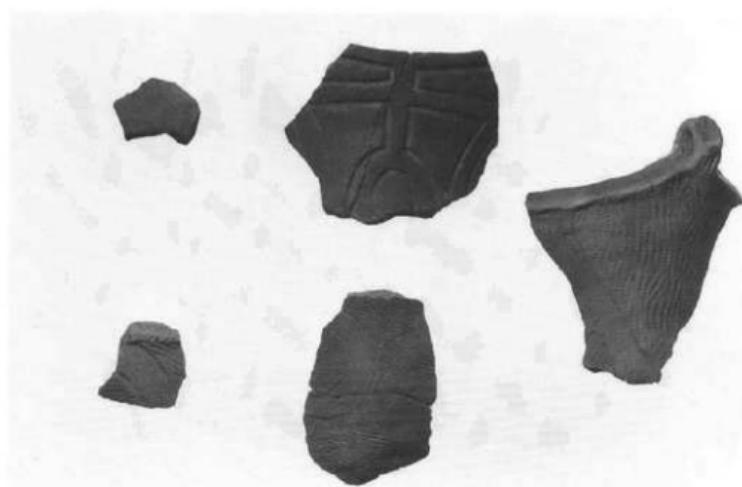
B地点 SK-08・11・15・16 出土土器



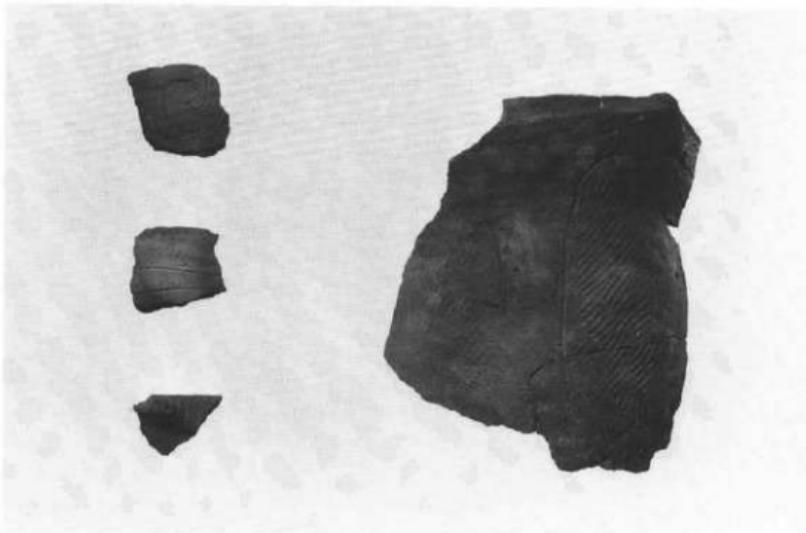
B地点 SK-27 出土土器



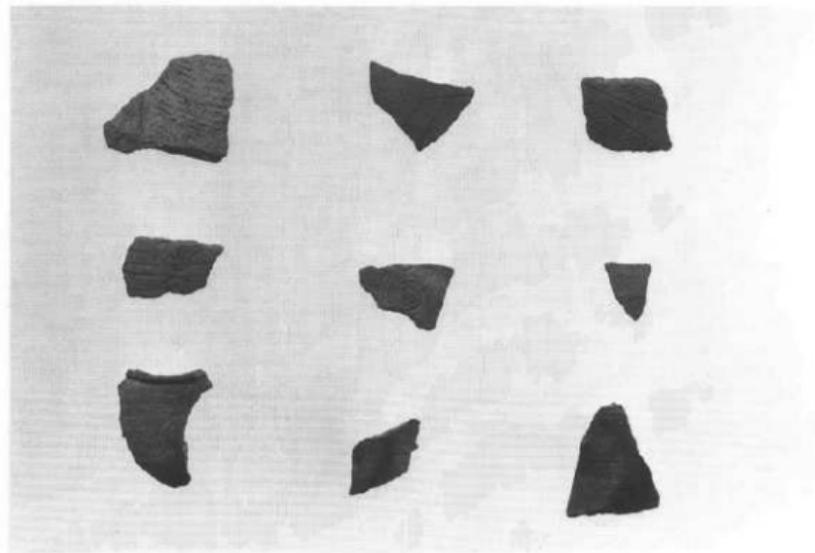
B地点 SK-27 出土土器



B地点 SK-27 出土土器



B地点 SK-33・34・35 出土土器



B地点 SK-36・41・45・47・48 出土土器



O地点 SK-01 出土土器

B地点 SK-41 出土土器



B地点 SK-33 出土土器



A地点 埋甕-1



A地点 伏甕-1



A地点 伏甕-2

B地点
埋壺-2

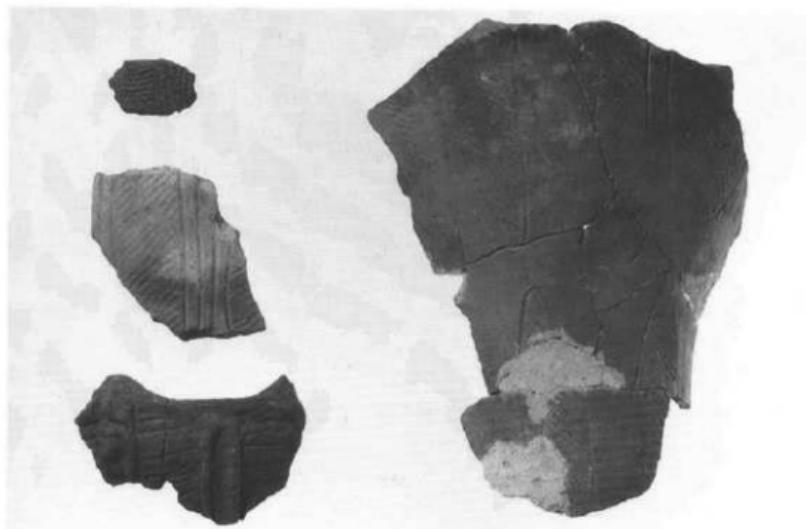


A地点 SX-03 出土土器

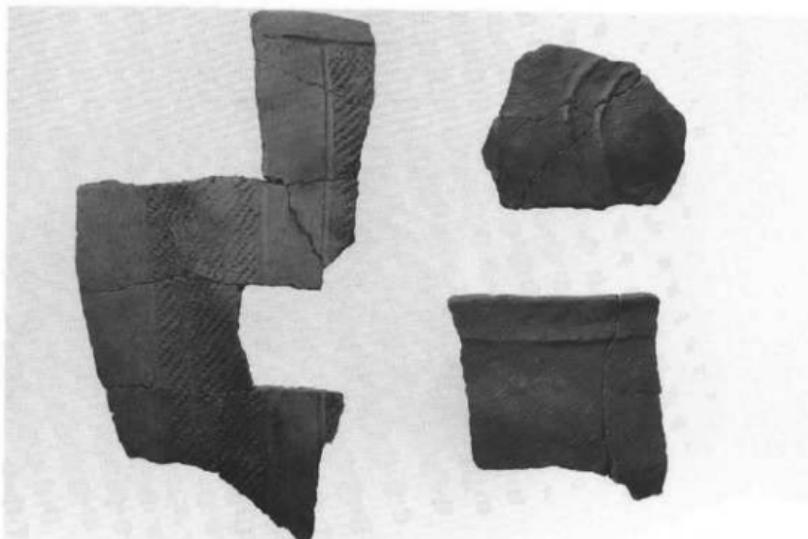


A地点
SX-08 出土土器





遺構外出土土器



遺構外出土土器